真剣で若人に恋しなさい！

ウルフガイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真剣で若人に恋しなさい！

【Ｎコード】
Ｎ７２１６Ｍ

【作者名】
ウルフガイ

【あらすじ】
これは、川神で繰り広げられる王道と邪道を合わせ持つ両極端な物語。
様々な個性を持つ幾人もの若人たちの道が重なりあい、数ある劇は開演の時を待つ。
この川神学園において、彼らはいかなる物語を紡ぐのか。

それら全ての物語が重なる時、彼らは一つの終わりを迎える。
△ＫＯＳ編突入▽

プロローグ？（前書き）

プロローグなのか。

やっぱり悪人度三倍です。

プロローグ？

アメリカにて。

どこかの夜の街を歩く男が一人。

長身痩躯のその男は殺気を撒き散らしながらとある場所へと足を進めていく。

そして固く閉じられた鉄の扉の前で足を止めた。

「ここか……」

端正な顔を禍々しい笑みで歪め、男は歓喜を込めて言う。

そして右足を上げ、扉を思いっきり蹴り飛ばした。

怒号が飛び交う中、男は更なる笑みを浮かべた。

彼らにとっては災難としか言いようが無いだろう。

とある男をリーダーに据えている集団なのだが、相手が悪かった。

一番の不運は、リーダーである男が武術家としてそこそこ有名であ

った事。
まあ、有名でありながら街の若者を従えてグループを作る時点で色々と間違っていると思うが……
その夜はグループがアジトで集会を開いていた。
ようするに全員が集合していた。
そこを誰かが襲撃をかけてきたのだ。

初めはただのバカだと判断していたが、すぐにその考えを改めることになる。

良く考えてみれば、閉じられていた『外向き』に開く鉄の扉を『内側』に片足で蹴り飛ばしたのだ。
まあそれはそれなりに強いものならできる事だが、それだけでも男が十分に強いのはわかるだろう。

襲撃者はただ淡々と若者たちを殴り飛ばしていき、殴り飛ばされたものは壁に叩きつけられて地に伏せて悶えている。
そこでリーダーである男が止めに入った。

「てめえいったい何者だ！　何が目的でこんなことしやがる！」

「はぁ？」

リーダーの男が怒鳴るも、襲撃者は顔を嘲笑の形に歪めて返す。

「ンなの暇つぶしに決まってンだろ？」

「ふざけんじゃねえええ！」

そう言って接近しながら拳を構えるリーダーの男。
それを見ながら襲撃者は言う。

「あァ、そういや元ボクサーだったか？　こんな路地裏で何やってるンだかなァ？　気兼ねなくぶっ潰せるからいいけどよォ？」

「クソッ！」

拳を連続して放つ男に襲撃者は憎悪を溢れさせながら言った。

「俺はスポーツだろうが武術だろうがな、真面目に体を鍛えてきた奴は好きじゃあないんだよ」

「何っ！？」

襲撃者の言葉ではなく、拳を軽く受け止められた事に男は驚愕する。

「とりわけ、それを使って悪事働くようなやつはな……」

「ぐぅ……は、離せぇ！」

男の拳を掴んでいる手に万力のような力を込めて握りこんでいく。

「殺してやりたいくらいに憎んでるんだよ」

「ぎゃあああああああ！」

襲撃者に拳を破壊された男が叫び、無様に地を這う。
それをゴミを見るかのような目で見た襲撃者は思い切り足を振りあげる。

「ふん！」

ズドンという恐ろしい音を立てて蹴りが撃ち込まれ、男が吹き飛んで壁にめり込んだ。
これは死んだか？　と思いながら男は周りに倒れ伏す男たちを見る。

「ヒッ！」

恐怖に声を上げる男たちを見て襲撃者は思う。
殺すほどの価値もないとはこいつらのようなモノを言うのだ。

そう思って彼はその場を去っていった。

彼らにとって不幸だったのはその襲撃者の標的となる男の近くにいた事。
彼らにとって幸運だったのは……その建物の外を見ればわかるだろう。

ある者はあらぬ方向へと手や足を曲げられ。
ある者は頭から膨大な血を流して倒れ。
ある者は背骨をやられてピクリとも動かずにいる。

そんな者達が大勢倒れ伏す光景が路地裏にあった。

彼らにとって幸運だったのはほかでもない。
襲撃者が既に『飽き』を感じていたからに他ならない。

狂気に満ちた襲撃者に襲われた彼らが生き残ったのは、愚かな先駆者たちがいたからに他ならない。

襲撃者の体躯は長身ではあるが細身。
そこまで筋肉がついていないように見えるが、そんなことは全くない。

それ故に襲いかかった者たちは反撃を受け、その仲間たちも逃げ出した時には時遅く、既に攻撃対象となっていた。

襲撃者は夜の街を歩きながら呟く。

「こんなんじゃダメだよなァ……」

憎悪に満ちた瞳を薄く細め、月を眺めながら一人呟く。

「小悪党をやってもなァ……武術なんてもんには関係ねェ、もっと大物をやっちまわねェと……」

考えるのはいいがそれがまとまらない。

それ故に憂さ晴らしでしょうもない武術家を潰して回る。

昨夜は色々とあくどい事をやっていたボクシングのジムを正面から打ち破って全てを叩き潰した。

きっと明日も同じような事をするだろう。

「ククク……今の俺を見たらあいつはなンて言うかねェ……」

脳裏に浮かぶは幼いころの『同類』だった者の姿。

「強くなってるんだろうなァ……毎日毎日戦って、修行なんかして……なんたって川神の血筋だ……」

修行というものは嫌いだ。それが裏切られた時の絶望を俺は〇に見せられた。

武術というものは嫌いだ。それが自分の〇を裏切って何の役にも立たなかった瞬間を見た。

それとも〇が弱かったのか？　いや違う。あの人は強かった。尊敬していた。

だからなおさら許せない。

いや、もうそんなことは関係ないのかもしれない。

〇のように誇り高い存在であるはずの者が汚い手で〇を殺した時点で俺はそれが既に許せなかった。

そしてもう戻れないところまで来てしまっている。

努力した者を努力していない者が叩き潰す事が快感に――いや、そんなことはない、はずだ。

だから今なおこんな事を続けている。

親父ともしばらく会っていない。

こちらの学校に通う間はずっと一人だ。
それが自分に一番合っていた。

たまに昔を思い出すが、それもまたどうでもいい。
今の俺はただヤツラに復讐をするだけだ。

ただただ戦うだけのこの俺が、この手で。

プロローグ？（後書き）

あとがき

主人公は『Ｆａｔｅ』葛木先生みたいなボディィです。

そしてキャラ的には『ケンイチ』のバーサーカーみたいな。

こういうキャラを一度書いてみたかったんです。

第壱話だったり？（前書き）

だがしかし設定上の戦いなのであるまる

第壱話だったり？

２００９／２／１

張りつめた空気がその場を支配していた。

場所はとある無人島。

その場には二人の男女が向かい合っていた。

「大金を出してまで我をこの場に呼び出そうとは、そこまでして戦いたかったのか？」

「そうさな。俺はどうしても戦わなきゃならん奴がいるんでね。後はまぁアレだ。俺が『ホンモノ』の武術家とやってどんだけ戦えるかってのを試すからでもある」

「我との戦いを試金石にするつもりとはな。馬鹿にしてくれるではないか」

「そうでもない。あんたが『ホンモノ』だって認めてるんだからな」

長い髪を風に揺らし、長身痩躯の男と対峙する女の名は九鬼揚羽。

ここ最近は九鬼財閥の職務で忙しかったが、今日は無理矢理ここに引っ張りだされた。

通常ならば叶わなかっただろうが、何故か企業を買収できる程の大

金を出して『戦わせろ』と言ってきた者がいたのだ。
それも組織ぐるみではなく、個人での資金を使って。
それだけの金を出せば、さすがに動かざるを得なかった。
上役の方では、その者がどのような者かを見極めて、可能であれば
その金を手に入れた才を引き込もうと思っていたりしていたが。

そして九鬼揚羽本人が「戦ってみればわかるであろう」とその申し
出を受けた。

威風漂う九鬼揚羽と対峙する男の名は大神宗介。
ジーンズのポケットに手を突っ込んで、相手の方をまっすぐに見据
えている。
彼が彼女をここに呼び込んだのはお互いが全力で戦うためであり、
手近にあった安い島がそれだけだったからだ。
彼が戦おうと思っている相手は自分の知る限りでは、同年代で一番
強い。
間違いなく『ホンモノ』の強者である。
ならば、彼女と戦う前に『ホンモノ』と戦う必要があったのだ。

そのために、自らの能力を生かしてラスベガスで荒稼ぎなんて真似
をした。

まぁそんなことは置いといて。

「我を呼びだすほどなのだ。強いのだろうな？」

「ああ。俺は強いぜ？　間違いなく強い」

そう言ってポケットから右手を出して、左足を少し引いて反身に構える。
ただ、どうにも引っかかる事があった。
故に揚羽は拳を構えつつ相手に尋ねる。

「……どこの流派だ？」

「そんなもんは無いね。そう言った修行は一回もしたこと無いから我流とも言えない」

「貴様、馬鹿にしているのか？」

「いやいや、俺としちゃむしろアンタがデスクワークでなまってないかどうかだけが心配さ」

「そのような事があるはずないだろう。それより貴様は……」

揚羽がもう一度問う前に宗介は抑えていた力を解放した。
そして同時に濃密な殺気を飛ばす。
それを見た揚羽は考えを改めた。

「なるほど。弱いというわけではなさそうだな」

「当然だ。俺は間違いなく強者だぜ？　自分で言うのも何だがな」

「ふはははは！　その力、その殺気、相手にとって不足はない！
この九鬼揚羽、全力を持って応えてやろう！」

「くはははは！　よろしく頼むぜ！　オイ！」

数時間後。南シナ海沖にて一つの島が海に沈んだ。

２００９／３／１

「おいじーさん。どういうこったこれは」

「どうと言われてものう」

川神学院の校長室。
大神宗助はデスクに詰め寄って、部屋の主である川神鉄心に怒鳴っていた。

「俺がすぐにあいつと戦えねえってのはどういうわけだ！」

「というかお主、先月は右腕折れてなかったかの？」

「あんなもん怪我のうちには入らん。すぐ治った」

「つくづく化け物じゃのう……」

「あんたが言うな」

化け物という台詞は、川神鉄心が言うにはちょっとふざけた言葉だ。
なんたって、川神鉄心ほど化け物という呼び名がふさわしい者はそういないからだ。

「で、ダメな理由は？」

「ホントは百代とも戦える相手として入れてやりたいんじゃが」

「だから理由は！」

「お主の父君に止められておる」

「なっ！？」

「嘘じゃ」

「……殺してやろうか」

怒りで殺気を振りまく宗介。
それを見た川神鉄心は笑って言った。

「まぁ、お主も最高の体調で戦いたいじゃろう？」

「そりゃそうだが……」

「それに、お主をこの学園に入学させるように頼まれておるしな。
試験を受けた後でもいいじゃろう」

「は？」

宗介はポカンと口を開けて動きを止めた。
しかしすぐさま起動して後ろを向く。

「ヴィヴィ！　お前聞いてるか！」

「はい～。宗介様のお父様から聞いておりますよ～」

「何で言わなかった！」

「聞かれませんでしたから～」

メイド服をきた女性がおっとりとした雰囲気で微笑みながら言う。
彼女の名はヴィヴィアン・バゼールという。
宗介がいくらか前に軍から引き抜いて秘書に……まぁそんなことは置いといて。

「まぁいい。じじい。しかたないからその試験を受けてやろうじゃないか」

「うむ。まあ今からでは始業式に間に合わんからしばらく遅れて転入する事になるがの」

「おい」

「どの道お主は二年生じゃから百代とは同じクラスにはなれん。別にいいじゃろう」

「ぬぬぬ……」

「その時期に誰かが転入する気がするしの。ちょうどいいんじゃよ」

「気がするってあんた、確信犯だろう」

宗介はかんらかんらと笑う爺を睨みつける。
そして背後でたたずむヴィヴィアンも口を開いた。

「あ、その時は私も入学しますね」

「ああ？　お前何歳だよ」

「私は永遠の１７歳ですよ？」

ニッコリと笑うヴィヴィアンに思わず宗介は視線を逸らした。
強さ云々以前に危険な笑顔だった。

「まぁいい。今日のところは帰ってやるよじじい。またな」

「それでは、宗介様。まいりましょう」

「あーめんどくせー」

溜め息をつきながら宗介とヴィヴィアンは部屋を出て行った。

「むぅ……大神のバカめ。やっかいな子を押し付けおって」

川神鉄心はやれやれと溜め息をつく。
が、すぐに調子を取り戻した。

「まぁ百代のいい試合相手になるじゃろうし。双方にとっていい勉強になるから別にいいじゃろう」

一人部屋の中で笑い声を上げる鉄心であった。

第壱話だったり？（後書き）

あとがき

頑張って書いた。

でも昨日寝てない。

主人公の声は檜山がいいなぁ……。無理か。

ならイメージ的に未来を読むギアスの人で。

第弐話だったり？（前書き）

普段は見てる側からすれば面白い奴なんです。

第弐話だったり？

２００９年　３月下旬

一人の男がゲームセンターで盛大に暴れていた。
無論、暴れるというのは物理的な意味ではない。
稼働中のアーケードゲームであるストⅤ……正式名称は色々とアブナイので言わないが、それを猛烈プレイ中であった。

「フハハハハ！　喰らえ！　死ね！　ぶっ殺す！」

お気に入りのキャラがア○ンだったりするのは本人の性格に合っているからだろうか。
バリバリの攻撃タイプである大神宗介にピッタリというか妙にハマったとか。
今日も今日とて対戦相手をぶっ潰して楽しんでいたりする。

そして新たな挑戦者。
女の子らしいそいつが据わっていようが構いはしない。
大神宗助は今日も男女平等を貫く。

「くっそ～！　なんだこいつ！　強いぞこのっ！」

女の罵声が聞こえて来ようが聞こえないふりをする。
そして彼はゲームセンターを後にした。

駅前通りのゲームセンターを出て仲見世通りに。
すっかり町に馴染んだ風で、宗介は食べ歩きをしながらぶらぶらと周りを見回す。
性格はアレだが、実は宗助は甘い物が結構好きである。
……ただ、外見も結構アレなので、アメリカにいた時は菓子類の専門店には入りにくくて仕方が無かったのだ。
自分の部下としてヴィヴィを雇ったのには店に入るのに誰かと一緒が良かったからとか何とか。

どこかにカチコミをかける勇気はあっても、女子ばかりが集まる店に入る勇気はなかったらしい。

そして団子片手にブラブラと歩いていたら、偶然ヒット。

「あら宗介様。どこに出かけたのかと思っておりましたが、こんなところに」

「俺がどこに出かけようが勝手だろうが」

「はい。でも、宗介様が一人でお出かけになって誰かと問題を起こしてしまう事を考えると……」

「考えると？」

「相手の方が心配で心配で」

「ハッ！　別に殺しまではしねーから大丈夫だよ」

そんなことしたらこの町から逃げなきゃなんね～。
と、何気にヤバいことを考える宗介には前科がある。

この前の骨折治療中に、世界甘い物巡りの旅で行った京都でも問題を起こしているのだ。
……なんで京都に外国の軍隊さんがいたのかは、未だにわからないままだ。

「ヴィヴィはそのまま晩飯の用意でもしとけ」

「もちろんです。でも、7時には帰ってきてくださいね」

「へ～へ～」

宗介は手を振ってメイド服のヴィヴィと別れた。
宗介がこの町に来てから、遠目にメイド服をきた女を見かけることがあったのだが、そいつは金髪じゃなかった。
ヴィヴィは金髪だ。つまり、町中でヴィヴィ以外にメイド服を着る勇気がある奴がいるらしい。
この町も大概おかしい。

その後もブラブラと歩いて宗介は多摩川まで歩いてきた。
そのまま土手をゆっくりと歩く。
宗介が前に川神鉄心に呼び出された時も通った道だ。

春休み中という事もあり、通行人はそんなに多くはない。
視界の隅に昼寝をしている女を見かける事もあるが、今日はそうでもないようだ。

そのまま何事もなく土手の道を通って多馬大橋へ。
この橋は、個性的な生徒が多く通ることから『変態の橋』と呼ばれ

ている。
まぁ、他にもいろいろな事情がありそうで、変な人間を見かける事が多いのも確かである。

宗介は何度かここを通っているが、変な人間を見かけた事は数度ある。
遠目に空を飛んでいく人間を見た事も何度かあるほどだ。
目がいい宗介は、その飛ばされている人間の顔が苦痛にゆがんでたり、色々な場所が曲がってたりする事に気付いたが、特には気にしなかった。
アメリカでは宗助も似たような事をしていたからだ。
もちろん、「飛ばす」側ではあったが。

ガムを噛みながら多馬大橋を渡りきって春休み中の川神学園へ。
ひとっ飛びに門を飛び越え、校舎へ向かう。

そのまま校舎の壁に足の握力でしがみつき、壁を垂直に歩いて登っていく。
そして屋上に設置してある貯水タンクの上に飛び、あたりを見回す。
宗介は高いところからあたりを見回すのが好きである。
はいそこ、馬鹿と何とかは高いところが～とか言わない。

そのまま目を瞑り、自分の感覚を広く広く伸ばしていく。
学園全体に、川神市全体に。

これは一種の技能である。
アメリカで暇だった宗介が、高いところに登ってはあたりを探っていたために身についた技能。
自分以外の強者を感じ取るための網と言ってもいい。
本当に強い人間ならばこれと同じようなことはいくらでもできるだ

ろう。

故に、宗介の伸ばされた感覚に気付いて反応する。

その反応した数を感じて、宗介は笑みを浮かべる。

自分がこの町に帰ってきたのは間違いではなかったと。

飛び切り強い反応もいくつかある。

そのうちの一つはたぶん彼の想像する人物で間違いないだろう。

大神宗介の幼い頃の馴染みであり、日本でもよく知られるあの女…

…川神百代。

故に彼は笑みを深める。その笑みに潜んだ感情はいかなるものか。

はたしてそれを知る者は誰もいない。

きっと……本人すらも。

第弐話だったり？（後書き）

あとがき

普段の宗助はそこまで危険ではありません。
危険になる時もあるというわけです。

危険になった時の態度でどれくらい根本が悪になってるかわかるわけです。
例えで言うなら、無抵抗の人間の腕を笑顔でボキッとやれるくらいです。

ただ、不意打ちはしない人間なのでまだマシです。

第参話だったり？（前書き）

次回あたりで邂逅か……アーコワイコワイ

第参話だったり？

その反応に気付いた物は何人かいた。
ねっとりと絡みつくような、しかし常人にはわからないような、たった一人分の濃厚な気配が街に広がったのだ。
それが誰なのかを知っている川神鉄心は頭を抱えたが、その気配が5秒もしないうちに消えたので見送ることにした。
心のうちでは、約束は守る男だったのう。とか思ってたり。
師範代のルーは鉄心に言われていたため、不安ながらも見送る事に。
そのほか大勢が気付いたが、すぐに消えたその気配をあまり気にすることはなく、注意を向けるにとどめていた。

そして、川神百代はどうしたか。

「っ！？　これは……まさか！」

暇だったので街を歩く女の子達のナンパにいそしんでいた川神百代だが、街に広がる気配を感じるなりそう言って立ち止まった。
その気配はすぐに消えてしまったが、彼女にとってはすぐに消えてしまった事は関係なかった。
その相手が確かな強者であり、自分が現在暇を持て余していて、なにより……遠い昔、幼いころに感じた気配と同じものを感じたからだ。
ずっと昔に仲がよかった、約束を残して自分の前から唐突に消えてしまった気配。
彼女が感じた気配は、まさにそれだったのだ。

「馬鹿な。だってあいつは……」

小さく呟きながら、気配を強く感じた方向へ向かっていく。
その方向は、彼女も通う川神学園のある方向。
何故そこからその気配を感じるのか、どうしてすぐにその気配を消したのか。
思うところはたくさんあるが、そんな事は気にせずに彼女はただ走るのだった。

学園屋上で一人笑みを浮かべる大神宗介。
彼が気配を消してからしばらく経ち、大きな気配がこちらへ向かってきているのを感知していた。、
その気配から懐かしさを感じて、ほんの少しだけ顔が和らぐ。
しかし宗介は自重することにした。

彼は川神鉄心との約束を思い出し、そして人のいない学校を見下ろす。
川神百代と相対し、拳を交わすのはまだ後だ。
彼はそう考えて、学校から去るために動き出した。
宗介は約束は守る男であったし、それを破って戦い始めればすぐにでも川神鉄心が止めに来るだろう。

宗介が川神学園に転入するまで、もう一ヶ月を切っているのだ。
だからこそ彼は、自らの中の欲求を抑えつけてその場を後にした。

大神宗介が学校から去って数分後。
川神百代は川神学園の屋上に、ちょうど宗介が立っていた場所に立っていた。

「確かにここにいたんだな……あいつは」

百代が感じたのは気配の残り香のようなものだ。
その場所から街全体に気配を伸ばし、そしてこの場所で唐突に消えている。
それからの足取りはつかめないが、確かにここにいたという事だけは感じられた。

「……宗介はこの町に来ているのか。ジジイめ、私に教えなかったな」

百代が次に考えるのは自分の祖父。
このような気配が学園から発せられて動かないなら、元より何かしら知っていたということになる。
それを自分に教えないという事にかなり腹が立った。
後で家に帰ったらジジイに問い詰めようと決め、百代はその場から街を眺めた。

――先程までの宗助と同じように。

その顔は笑顔に彩られていた。
期待や思慕の感情で染められた、本当の意味での笑顔。

「約束を守りに来たのなら、まっすぐ私のところに来いというのに……やれやれだな」

見る者が見たらわかっただろうが、彼女の笑顔はまさしく恋する乙女のそれだった。
その笑顔が来るべき戦いに向けてのものなのか。それとも長らく会っていない幼馴染に向けてのものなのかは誰にもわからない。
そんな笑顔を浮かべて、百代はしばし屋上に立ち続けるのだった。

家に帰ってきて早々、宗介はヴィヴィアンに怒られていた。
町中に気配を撒き散らしたのが悪かったようだ。
当然の結果ともいえる。

「なんであんなことしたんですか。もう……目立っちゃっても知りませんよ？」

「別にかまわないし、俺だってことがわかる奴は数人しかいないさ。大丈夫だよ」

「そうですか……ならいいんですけど」

そう言ってヴィヴィアンはキッチンの方へと戻っていく。
宗介が唐突に何かをする事はよくあることなので、彼女も既に慣れているのだ。

川神駅の近くにあるとあるビル。
そこの最上階が大神宗介の家である。
眺めがいいという理由でその場所に住む事にしたのだ。
ちなみに、管理は全てヴィヴィが引き受けている。

「この町には強い人が多いんですから、宗介様も気をつけてくださいね」

「俺より強いのなんてそんなにたくさんいないだろう。どっちかというとお前のが心配だ」

「あらあら。心配してくださるんですか？」

「容姿につられて雑魚に喧嘩売られたら雑魚が死んじまいそうで」

「……そこは素直に私の事を心配してくださいよう」

およよと泣き崩れる振りをするヴィヴィだが、宗介は無視してソファに座り込んだ。

彼が考えるのは川神百代の事だ。

転入さえしてしまえば、手合わせをする事も許される。

ちょうどよく『決闘』というシステムもあるのだ。

その日が来るのが待ち遠しくて仕方がなかった。

幼いころの思い出は薄れてしまってはいるが、確かなモノを宗介の心は覚えていた。

「宗介様。夕食の支度ができましたよ」

「今行く」

宗介は思考を切り上げてソファから立ち上がった。

なにはともあれ腹を満たそう、そんな事を考えて。

「おいジジイ。私に黙っている事があるだろう」

「な、なんのことかわからんな」

「とぼける気か？　今日学校から発せられた気配に気づかなかったとは言わせないぞ」

「む、むぅ……」

「さぁ言え！　あいつが、宗介はこの町に来ているのか！」

「……はぁ。教えてやるからまずはそこに座れ百代」

「そうか。ほら座ったぞ。早く教えろ」

「（面倒なことになったのう）」

～鉄心説明中～

「そうか、あいつが川神学園に……」

「随分と嬉しそうにしとるのう」

「あいつのことだ。きっと強くなったんだろう。戦うのが楽しみでしかたない」

「（……まぁいいわい）性格は大きく変わっておったが、彼が来るのは間違いないから安心せい」

「そうか。それならいいんだ。じゃあなジジイ」

「……転入の日が心配になってきたのう」

主に学園崩壊の危機的な意味で。

そんな考えを頭の隅に押しのけて、川神鉄心は湯呑を傾けた。

第参話だったり？（後書き）

あとがき

主人公のキャラが、めだかボックスを読みまくってる影響か、王様野郎になりそうで怖い。
百代さんはツンデレですよね。というか自分の書いてる二次創作ツンデレバッカリで頭がパンクしそう。

第四話　正義の漢だったり？（前書き）

結構設定が甘いけどおいおい訂正するので許していただきたい。

第四話　正義の漢だったり？

２００９／４月初め

今日はヴィヴィと一緒に町を歩くことにした。
だが、正直暇だ。
アメリカだかイギリスだかフランスだか知らないが、さっさと転入しろと言いたい。
最初は学校に行く考えると嫌だったが、思えばまともに学校行ったためしもないからこの気に勉強するのもいいかもしれない。
だからさっさとあの学校にいけりゃあいいんだが……
別に俺だって年がら年中戦ってなきゃ困るわけじゃあない。
ただここまでのんびり過ぎると死ねるというかなんというか。

「立派なバトルジャンキーですね」

「うるせえ」

しかし暇だ。
学園に殴りこみ仕掛けてもいいが、爺に邪魔されたら萎えるだろう。
全く持って困ったものだ。
しかたなく夜に町をうろついたりなんだりして喧嘩をやらかしたりもしてるが、どうもパッとしない。

「ヴィヴィ、なにか面白そうなことはないのか？」

「そのようなことを言われましても……」

「じゃあ美味い飯屋でも菓子屋でもいい。とりあえずなんか食うぞ」

「……そういえばもうお昼ですね。ちょうどいいですわ。この前美味しそうなお店を見つけたんです」

「よし、案内しろ。俺が許す」

「は～い♪」

なにやらご機嫌のヴィヴィに連れられてひとまず飯屋へ。
正確にはレストランだが、まぁいい。
物を食うところには変わりないだろう。
ヴィヴィがケーキ屋に行くと言うので別れ、俺は和菓子屋に向かう。

長年アメリカという異国の地で過ごしてきた俺であるが、洋菓子よりは和菓子のほうが好きだ。
それは幼い頃に団子やら大福やらばかり食っていたからだろう。
よほど美味いものを食ったのだと思うが、どうにも思い出せない。
ま、美味ければ問題ないので別にいいか。

そんなこんなで和菓子屋に到着。
さて、何を買うか。
……やはり大福にするか。あとおしるこも買うか。
和菓子の中でも餡子を使ったものは特に好きだしな。
後は……飴か。たまにはいいかもしれない。

とりあえず食いたいものを全部選んで、なにやらこちらを観察している店員の若い女に勘定をさせる。

何が目的でこちらを見てるか知らんが、別にあいつみたいに強者であるというわけでもないからいいだろう。
正直言って観察するような目は嫌いだが、店員に文句言って食いたいものが食えなくなるというのは面倒だし。

ああ、さっさと甘いものが食いたい。
とりあえずは……おしるこをとっとと食って繁華街でも行くか。
夜だったら親不孝通りで歩いてりゃ喧嘩売る相手には事欠かないけど、さすがに昼からはまずいだろうしな。
繁華街のゲーセンでも行くかね。前に面白い金髪のガキもいたし。

うん、そうしよう。
あとは……あいつに気付かれないように気は抑えて喧嘩するようにしないとな。

ヴィヴィから受け取った情報どおりに街の奥深くへと分け入っていく。
確か……そう、親不孝通りだったかな。ここらへんの名前は。
掃き溜め、肥溜め、どっちでもいいが、川神の不良たちはここら辺の地域に集中しているようだ。
そんな危険地帯の更に奥。青空闘技場と呼ばれる、ビルが並び立つ中にポッカリと開いた、不良たちのたまり場でもある空間。
強いものが集まってルール無用のバトルをし、その勝敗を賭けの対象としているような場所があるらしい。

あいつは結構いい加減なことがあるので正直怪しいんだが今回は問題なし。

しっかり道順たどって行って見れば、なかなか賑やかな場所に行き着いた。しっかり道順たどって行って見れば、なかなか面白い場所に行き着いた。
しかし、面白い場所だ。
アメリカの裏町にも似た場所があったな。
懐かしさを感じるのはそのせいか。
俺がしばらく戦いを眺めていると、横から誰かが話しかけてきた。

「おいあんた！　暇そうだな！」

「ん？」

そちらを向けば、頭にハチマキをした茶髪のやたらと暑苦しい感じの男がそこにいた。
川神学園の制服をしているということはあそこの生徒なんだろうが、中に着ている白いシャツに大きい黒字で『正義』と書いてあるのは何故なのだろう。
かなり趣味が悪いと思うが。
というか、そんなシャツを着ている奴がこんなところに何故いる？

「なんか見てるだけじゃつまらなそうだったから話しかけたんだよ！　どうだ？　あんたも参加しないか？」

「いや……俺は――」

「遠慮するなって！　俺もここじゃちょっとばかし有名だからさ！　見てるだけよりもやるほうが楽しいぜ？」

こいつは人の話を聞くということを知らないのだろうか。
……ブチノメシテヤロウカ。

「それだよ！」

「あ？」

「そんな目をしたままじゃ外に行って子供を泣かせちまうって！　俺が勝負してやんよ！」

「……いいだろう。ぶち殺してやる」

やたらと馴れ馴れしいことも、俺と戦うにしても、上から目線なのは気に入らない。

目の前の奴がどれだけ強いにしても、あいつより強いなんて事はないはずなのだから。

そんなわけでバトル開始。

……なのだが。

「我が名は一条風太！　親友曰く勝利を呼ぶ男だ！　さあ名乗れ！」

なんと暑苦しい。

目の前に立つ新種の馬鹿は、こちらに指を突きつけてそう叫んだ。

「大神宗介だ」

「なんだ！　元気がないぞっ！」

「うぜぇ……」

思わず脱力するほどに暑苦しい。
まぁ、すぐにぶち殺して黙らせてやる。

「行くぞ！　正義の鉄拳、ジャスティスパーンチ！」

「っなんだと！？」

ただの馬鹿かと思ったら気を飛ばしてきやがった！？
本当に「飛ばした」だけだからそこまで威力は高くないが、使えるということにびっくりだ。
何か武術を習ってるように見えないが……だとすればだ。
元々使える奴だとでもいうのか、この俺と同じように。

「死ね！」

「どわぁ！　危なっ！」

一瞬で接近し、顔面に向かってパンチを放つが、ギリギリであたらなかった。
不自然なほどに相手の体制が崩れて、俺の拳を空振らせたのだ。
何が原因かはわからないが、俺はとりあえず追撃を加えた。

「チッ……はっ！」

「おぶっ」

崩した体勢を直そうとしている奴の腹に、思い切り蹴りをぶちかました。
普通の奴なら肋骨が数本折れているはずだが……

「いってーなこの野郎！　やるじゃねーか！」

そう言って平然と立ち上がってくる限り、怪我をしている様子はなさそうだ。

厄介な奴だ。

無意識で気を使いこなしているらしい。

……気はなるべく使わないつもりでいたが、面倒だからさっさと終わらせよう。

「そこそこ強いみたいだが、あいつに比べりゃまだまだだな」

「へっ！　俺は勝利を呼ぶ男だ。そう簡単には負けないぜ！」

「そうかい。じゃあせいぜい死なないように気をつけろ」

「おぉ？　ぬぉおおお！？」

両足に力を込めて一気に近づき、気を込めた右手を思い切り振りかぶる。

確実に顔面直撃コース。

これはヘタすりゃ死ぬかもな。

「なんの！　ジャスティスガード！」

「ああ！？」

足を滑らせたかのように後ろに倒れ込みながら、顔の前で腕を交差させた。

そして俺の拳を受けて後方に吹っ飛んでいく。

……その場に踏みとどまろうとしてれば腕ごと折れるはずだったんだけどな。

「ぬぉぉおおおおおお！？」

「ま、こんなもんだろう」

腹が減ったな。さっさと戻ってヴィヴィの飯でも食おう。

＝＝＝

「負～け～た～！」

「負けちゃったね～」

「俺の正義の拳が通用しないなんてな！　おい準！　修行するから付き合え！」

「いやいや、お前とやってると理不尽しか感じないから嫌だって――」

「よっしゃ決定だな」

「話を聞け！」

「準もがんばってくださいね。ユキ、二人は忙しいようですからお

やつでも食べましょうか」

「マシュマロ～♪」

「若！　ちょ、風太と修行とか洒落にならないって！　止めてくださいよ！」

「さぁ行くぞ準！　強くなるぞ～！　お～！」

「マシュマロ～♪マシュマロ～♪」

「何だこのカオス！」

第四話　正義の漢だったり？（後書き）

あとがき

和菓子屋のあの子は主人公が結構イケメンだからチェックしてました。
主人公は甘いもの大好き。そして和菓子大好き。

ついでに青空闘技場に登場したのは、実を言うともう一人のオリキャラでもう一人の主人公枠の男です。

ちなみに、一条君の二つ名にはちゃんと理由があります。

追記：ｙｏｕｋｅｙさんごめんなさい。許可貰った旨を書いていませんでした。こちらが全面的に悪いので、後で欠片も残さずに改稿したいと思います。

もう一回追記：というわけで改稿しました。

閑話　正義の漢なのだ（前書き）

もう一人の主人公。
リュウゼツランルートまで大活躍の予定。

閑話　正義の漢なのだ

風間ファミリー。

そう呼ばれる小学生のグループがあった。

仲の良い七人で構成されたグループだ。

封鎖的なグループなようで、人数は設立当初からあまり増えていない。

そんな風間ファミリーに、一人の女の子が話しかけたところから語るとしよう。

風間ファミリーが皆でボールを使って遊んでいる最中、軍師と呼ばれる直江大和がほんの少しだけ皆から離れた。

ボールがたまたまその女の子の方へと転がっていったのだ。

そこへ勇気を出したのだろう。女の子が話しかけた。

「あ、あの。　僕も仲間に入れてくれない？」

「あ――いや、今リーダーがいなくて、また今度にしてくれる？」

大和がそう断ると、その女の子は肩を落として寂しそうに去っていった。

「いくぞー！」

大和がそう言ってみんなにボールをパスして、それでまた遊び始めるはずだったのだが。

なぜだか知らないが、大和とその女の子の会話を聞いていた男の子がいたのである。

何故彼がこの場に現れたかというと、まぁ偶然なのだろうが。それでもそんな会話が聞こえていたあたり、耳はよさそうである。

「おいお前ら！」

「ん？」

声のするほうを風間ファミリーの皆が向くと、その男の子がたっていた。

左手を腰に、右手をの指をこちらに突きつけて彼らの方を睨んでいた。

「女の子一人くらい友達にしてやれよ！」

そうは言ったものの、この時点では大和しかそのことを知らない上に、彼は部外者が口を出すなよとか、そんな感じのことを思っていた。

で、結果彼らはこう思った。

「なんだこのバカは？」

「ああもう、口に出さないようにしてたのに」

直球で川神百代が評価をし、それに思わずツッコミを入れそうになる師岡卓也。

ちなみに他の面々は心の中で思うだけである。

島津岳人は何を言っているか思案中、しかしその答えに辿り着けそうな気配はない。

「うっさいぞこのバカ！　バカっていったほうがバカなんだぞ！」

「なんだと。わたしがバカだっていうのか！」

売り言葉に買い言葉が成立した瞬間である。

「お前らみんな俺がこんじょーをたたきなおしてやるー！」

「よし、とりあえずあのバカを止めるんだ岳人」

「おっし、まかせとけ！」

そう言って岳人は男の子が百代に戦いを挑むという無謀なことをする前に大和の指示で前に出た。
で、普通に体格でも勝ってたから止めようとしたんだが……

「にょわぁ！」

「ぐほっ！」

いきなり男の子がこけて、全速力で走ったまま頭が岳人の鳩尾にヒットした。
早い話が鳩尾に思い切り頭突きが入ったのである。
結果、地面に倒れる岳人。

「おお！　なんかよくわかんないけど倒れてる！」

なぜか自分で驚く男の子。
にしても恐ろしい偶然である。

「よーし！　お前らにこんじょーというものをおしえてやるからな！」

なんとなくで一番体格が良かった岳人を倒したから油断したのか、そのまま風間ファミリーに向かって走る男の子だが、大きな間違いがあった。
川神百代なんてのが残ってることを知らなかったのだ。

思い切り殴られてふっとぶ男の子だが、落ちた場所には偶然ベッドが廃棄されていた。
というかさっきまでなかった気がするのだが。いったいいつ捨てたんだ。

男の子にはほとんどダメージがなかったようですぐに立ち上がり、
またも風間ファミリーに指を突きつけた。
そして大声で叫ぶ。

「これでかったとおもうなよー！　俺はせいぎのししゃなんだからなー！」

呆れるほどにタフで、精神的にもタフな男の子であったらしい。
そうひとしきり叫んだ男の子はその場から猛スピードで去っていった。

残された風間ファミリーは、いったいなんだったんだと思いながら遊びを再開した。
ちなみに、岳人は頭突きがかなり効いたようで３０分位してようやく復活した。

女の子がとぼとぼと寂しそうに歩いていた。
そんな中、彼女を更に辛くさせるようなことが起きた。

「バイ菌だ」

「汚いんだよなぁ……」

「小雪菌だ、こっち来んなよー！」

いじめっ子である同じ学校の小学生が3人。
彼らにたまたま出くわしてしまったのである。

「ボク、僕、は……」

「汚いから喋るなよ～」

言葉のナイフが彼女の心を抉るが、それに彼らは気付かない。
子供とは残酷なものだ。そういった心の機微に気付くことができないのだから。

そこへ一人のバカが……男の子がやってきた。

「おーーーーーーーーーーい！」

「ん？」

いじめっ子の一人が首をかしげた。
声がどんどんと近づいてくるのだ。
そして……

「うりゃー！」

「ぶぐっ！」

いじめっ子の顔面に飛び蹴りが炸裂した。
そして、またも怒っている風な男の子が言った。

「お前ら！　いじめるなんてかっこわるいと思わないのか！」

「だ、誰だお前ー！」

「小雪菌の仲間かー！」

叫ぶ男の子にいじめっ子二人。
だが、いじめっ子のほうはいきなり飛び蹴りを食らって仲間が倒れたので若干ビビリ気味である。

「こんじょーが足りないぞお前らー！　俺が叩きなおしてやる！」

先ほど川神百代に吹き飛ばされた割に無駄に元気な少年は、いじめっ子達に突進した。

そして数分後、いじめっ子達は逃げ去った。
ちなみに、最後に「いじめはもうやらない」と誓わされていたりする。
すごい笑顔で「約束だからな！」と男の子に言われ、物凄い勢いで逃げていった。

そして男の子は横で呆然と立っていた女の子に話しかけた。

「なぁ、大丈夫か！」

「え、うん、大丈夫だよ」

ビックリした感じで答える女の子。
それも当然だろう。いきなりすぎる出来事がいっぺんに起きたのだ。

「ね、ねえ、なんで僕のことを……」

「迷惑かもしれないんだけどさ！　俺と友達になってくれ！」

「え？」

疑問に思っていたことを女の子が口にする前に、男の子が思い切り頭を下げた。

そして、その内容は女の子にとって想像もしていなかったことで。

「実は俺も友達が少なくてさ！　さっきのボールであそんでた奴らみたいに皆であそぶってことはできないかもしれないから嫌かもしれないけど……」

「い、嫌じゃないよ！　でも、本当に僕と友達になってくれるの？」

「もちろんだ！　俺は嘘をついたことは一回もないんだぞ！」

そういって胸を張る少年に女の子は言った。

「すごーい！　あ、僕の名前、小雪だよ」

「小雪だな！　俺の名前は一条風太！　せいぎのししゃだ！」

この日、友情が生まれた。

これは、とあるバイセクシャルとロリコンに出会う少しだけ前の出来事である。

閑話　正義の漢なのだ（後書き）

あとがき

京と一子の台詞がない？
いいじゃないか別に！　あいつらはこの二次創作じゃヒロインじゃないんだよ！

ちなみに小雪もヒロインじゃなかったりします。

ちゃんと言ってるじゃないか。『友達』だって。

第五話　転入で一騒動（前書き）

しかも完全には転入が終わらないという。

第五話　転入で一騒動

４月２４日　金曜日

今日、やっと転入できるんだそうな。
正直言ってそろそろ我慢の限界だった。

「やっとか……やっとなのか……（ビキビキ）」

「宗介様？　ちょっと血管浮き出てますよ～。まずいですって」

「フフ……今日の俺はちょっとテンションおかしいからな」

「（ちょっとじゃなくてだいぶまずいです）」

「なんか言ったか！？」

「いえ！　何も言ってません！」

結構長い間ゆったりと過ごしていたせいで、俺どころかヴィヴィまでだらけてる気がする。
まぁ、だらけてようがなんだろうが作る飯さえうまければそれでいい。

「さあ出陣だ！　いざ行くぞ川神学園！」

「……大丈夫かしら。本当に」

ちなみにヴィヴィは空きができたS組に入るんだとか。
メイド服で登校……まぁあの爺さんがいいって言ってるんだから良いんだろう。
それにヴィヴィが着ているのは普通のメイド服だが、どういう原理かは知らないが袖やスカートの中からいろんなものが出てくるのだ。
まぁいい、川神学園へと向かおう。

学校へ行く途中、橋を渡る際。
いつもよりは早起きしたものの、朝に色々あったせいで遅くなってしまった。
まぁ、メイド服の奴と登校なんていう姿が見られないだけマシか。
そんなに目立ってあいつと遭遇すればそのままバトルに突入できる自信があるからな。

とりあえず、遅刻はしない程度に急いで行こう――

「あ、宗介様……」

「何だ」

「馬が……」

「馬？」

いきなりなんだ。

馬刺しの話か、競馬の話か。というかいきなり馬といわれても何も浮かばんわ！

「すぐそこまで……」

「いったいどういう……ぬぉっ！？」

すぐ横をいきなり白馬に乗った金髪少女が駆け抜けて行った。
俺の目に間違いがなければ女が来ていたのは川神学園の制服だが……

「あ……」

「ええい！　今度は何だ！　象か！　ダチョウか！？」

「いえ、人力車が……」

「人力車だと？」

「ええ、すぐそこに……」

「ついさっき馬が通ったのにそんなのが通るわけ……何ィ！？」

本当に通って行った。
しかも、金ぴかの男が乗った人力車をメイド服の女が引っ張っていった。
意味不明である。
というかあいつら……悉く俺を追い抜いていったな。無視して。
いや、別に無視は良いが、何故か腹が立つ。」

「（今のメイドは……どこかで見覚えが……）」

「おいヴィヴィ！」

「はいっ！」

「ふは、ふはは、ふはははは！　さすが、やっぱりこの町は面白いな！　そう思うだろう！」

「え、えっと？　宗介様？」

「ちょっと頭にキたぞ。追いかけるからしっかりとついてくるがいい！　それが無理なら腕にしがみついていろ！」

「え？　ちょ……」

俺は脚に力を込め、それを開放した。

一瞬の加速を終えて、俺は風になった。

＝＝＝

２－Ｆのクラスでは皆が窓から外を見ていた。

というのも、外にいる馬に乗った転入生を見るためである。

「クリスティアーネ・フリードリヒ！」

高らかにグラウンドの少女が名乗りを上げる。

「ドイツ・リューベックより推参！　この寺子屋で今より世話になる！」

馬に乗り、大きな声でそう告げる金髪の少女に、クラスの全男子が湧いた。

「おおお金髪さん！　可愛くね、マジ可愛くね！？」

「超・当たりなんですけどぉぉぉぉ！！！！！」

一際大きく叫んだのはヨンパチの渾名を持つ福本育郎と、風間ファミリーの一人である島津岳人だ。
そして他のクラスメイトたちも各々の反応を見せる。

「だっはっはっはっ馬かよ！　面白ぇあいつ面白ぇ！」

風間翔一がクリスが馬で登校したことに大爆笑し。

「ぐ、女かよ、まずった！　賭けに負けた」

大串スグルは賭け（転入生の性別を当てる）に負けたことに歯噛みし。

「あ、俺もボロ負けだ。でもそんなの帳消しになるくらいレベル高ぇよ！」

ヨンパチもとい育郎は賭けに負けたことにもかまわずテンション上昇。

「うわ……これはもう完全に負けたわ……でも馬って」

「日本では馬は交通の手段だろう？」

「や、あの、道路とか見ましたよね？」

「自動車は多かった。だが、ＴＶでは馬も走っている」

「それ時代劇だと思うんですけど」

小笠原千花は、その場にいたクリスの父親との会話でとても疲れていた。

まぁ、完全に日本のことを誤解している外国人なんだから仕方ない。

「おお、あれはまさか……」

「？　うわ！！　よりによって例外が……」

クリスの父の発言に顔をグラウンドに向けてみれば、さらに日本を誤解させるような存在が迫っていた。

彼女には日本が誤解されることは何の関係もないのだが、もうやめてほしいという気分になったらしい。

「ここが今日から自分の学び舎か」

クリスは川神学園の校舎を見ながら呟き、そして言った。

「自分の他に馬登校はいないのだろうか？」

そこにツッコミ属性持ちの人がいたら……いや、属性持ちじゃなくてもツッコミをするような発言をするクリス。

だが、ツッコミをしない例外がそこにやってきた。

「フハハ！　転入生が朝から馬で登校とはやるな！」

「おはようございますっ☆」

九鬼英雄と忍足あずみの、２－Ｓ組の主従コンビである。

「それは……ジンリキシャ！」

「うむ。そして我はヒーロー、九鬼英雄である！」

「自分はクリス！　馬上にてご免」

「我が名は九鬼英雄！　いずれ世界を統べる者だ！　この栄光の印、その目に焼き付けるが良い！」

「おお、まるで遠山！」

物凄く時代が間違っている会話が続いてはいるが、ここにツッコミ役はいない。

故に止まることはなかった。
ちなみに、教室にいるクリスの父もまとはずれな発言をしている。
そして英雄とクリスが会話している時にそれは起きた。

「待てこらあああああああああ！」

「ん？」

「なんだこの声は？」

「英雄様危ないっ！」

空から怒声が聞こえてきたかと思えば、何かが空から降ってきた。
土煙が巻き起こる前にかすかに見えたのは二人分の人影である。
突然のハプニングに、従者である忍足あずみは人力車を即座に動かした。元々直撃コースではなかったが、念のためである。
そしてクリスは馬を動かして、何かが落ちた中心地から距離を取った。

クラスのほうでもいったい何が起きたのかと興味津々でそちらを見る。

そして土煙が晴れたところにいたのは、怒った顔をして片手にメイドを掴んだ長身痩躯の男と、疲れた顔をしたメイドの金髪美人だった。
どちらも川神学園の制服を着ているが、どちらも見覚えのない顔だった。
というか、メイド服で登校なんて輩は忍足あずみという人物の他にいないのだが。

「空から通学とは面白いことを考えるな！　だが、もう少し下を見て着地するがいい！」

「今度からは気をつけてくださいねっ☆（次はねーぞ）」

何か黒い事を言ったメイドがいるような気がしたが気のせいだ。
それを聞いた怒っている彼、大神宗介は言った。

「そんなことはどうでもいい！　だが、目の前を猛スピードで突っ走っていかれればひどく迷惑だ！　そちらの方こそ気をつけろ！　そこの金髪娘も！」

「自分のことか？」

「そうだお前だ！　ゆっくりと進む生徒も走って急ぐ生徒もいるが、馬でいきなり走ってこられると雰囲気ぶち壊しだ！　というか空気が嫌だ！　お前だってそうだろ！　富士山を歩いてじっくり登山してる中で、横を馬で走って登ってく奴がいたら嫌だろう！」

「そ、それは確かに……すまなかった」

宗介は物凄く自分勝手というか意味不明な理論を展開してクリスを言い負かしていた。
今まで退屈だったのと、怒りによってテンションがおかしくなっているのだ。
そもそも普通に学校に行く道を登山道と比べる時点でおかしいことに気付くべきだろう。
……日本文化に詳しいようで色々と間違えているクリスにそんなことを言うのは酷かもしれないが。

そしてメイド組も色々と考えていた。
表面上は笑顔を保ってはいるが、頭の中はしっかりはっきり動いている。

「（やっぱりこのメイドは女王蜂……何故メイド？）」

「（このメイド……よく見てみれば暗殺者だった八咫烏……何故メイド？）」

そして同じようなことを考えていたりした。
そしてその主はまたも名乗りを上げる。宗介の方もテンションが低くなってだんだんと普段の彼に戻ってきていたのでちょうど良い頃合だろう。

「我が名は九鬼英雄！　ヒーローである！」

「俺は大神宗介。例えるなら……あれだな、Ｂａｄｇｕｙ？」

「おぉ、自ら悪人を名乗るか！　面白い！」

「アメリカでの生活が長くてな……まぁいいや。教室行こうぜクリスとやら。冷めちまったし」

「む？　大神殿も同じクラスなのか？」

「そうなんだよ。とにかく行こう、ここにいてもしょうがないだろう。じゃあなヴィヴィ、お前も頑張れよ～」

「あ、はい、わかりました～」

「よし、我らも行くぞ浜千鳥！」

「……馬からは降りて来い」

教室から注意が飛んでようやく馬を降りるが、その様子に担任である小島梅子ですら頭を抱えるのだった。

彼らはやっと教室へと向かうことになった。

だが、更なる波乱が待っているのを彼ら（主に２－Ｆクラスの面々）は知らない。

第五話　転入で一騒動（後書き）

あとがき

マジコイを再プレイ中、人間力測定があったので気になってジム行って握力測ってきた。

昔はアイアンクローもできた俺、現在の握力は平均４３……

パソコンをやり続けるとここまで落ちるのか。

パソコンを操作できるだけの力があればいいとは言えないな。さすがに。

閑話　正義の漢なのだ　二話目（前書き）

今度は板垣一家との出会い編まで飛んだ。

閑話　正義の漢なのだ　二話目

一条風太が葵冬馬や井上準と知り合って、前からの友達である小雪……榊原小雪と遊ぶようになって数年がたった。
どういう趣向なのか知らないが、風太が正義と書かれたシャツを着るようになったのもその頃からである。
井上準がハゲ……もといスキンヘッドになったのもその頃だったりする。
年中、冬でもかまわずに半袖のTシャツ姿な彼を見ていると、見ているだけで寒くなってくると言われるのは既に毎年恒例である。
それでも子供の頃から一度も病気になったことがないのだが、井上準はそれを初めて聞いた時こう言った。

「お前やっぱり馬鹿だろ」

「なんだと！　馬鹿って言うほうが馬鹿なんだ！」

「馬鹿は風邪を引かないって言いますけどね」

「フータはお馬鹿さんなの？」

「俺は馬鹿じゃない！　絶対！」

「じゃあ俺と若はもう宿題は手伝わないぞ」

「……やっぱり俺は馬鹿でいいぜ」

「大丈夫です、そんなに落ち込まなくても手伝ってあげますよ。準のは冗談ですから」

「おお！　なんだ、安心したぜ」

こんなやりとりがあっても冗談だとわかっているから楽しいのである。

そんな毎日を４人で楽しく過ごす日々。

色々と大変なこともあったがとても楽しく過ごしていた。

ちなみに川神学園入学の際には……

「がんばってください。私も準もユキもＳ組に入るんです。あとは風太だけですよ」

「うがあああああ！　勉強は嫌いだあああああああ！」

「そんなの皆嫌いに決まってるだろ？　だから終われば幼女と戯れることができるとかそんなことでも考えてがんばれ！」

「俺はロリコンじゃねえ！」

「フーター。マシュマロあげるからがんばって～♪」

「食い物に釣られるわけでもないんだぜ……」

一波乱というか、かなりの騒動があったもののなんとかＳ組に入ったという。

ちなみに現在でも、テスト前には葵冬馬という家庭教師の下で勉強

漬けの日々だという。
そんな彼らのとある一日。

青空闘技場に一条風太とその友人達が行くようになってしばらく。
彼らが皆でそこに行くと、なんだか知らない４人組がいた。一人は寝ているが。

元々、街を走り回って遊ぶところや面白いところを発見するのが大好きな一条風太が青空闘技場を発見し、面白そうだからという理由で皆を引っ張ってきたのだ。
もちろん葵冬馬は戦わずに見ているだけだが、小雪や準はトレーニングにはなるという理由で参加していた。
そして風太は皆を誘っただけあって、かなりの頻度で参加していたりした。

そんな風太がしばらく勉強あらなんやらでしばらく行かなかった間に、彼が今までに見たことのない連中が結構増えていた。
その中でも彼の目には、その４人組が妙に目立って見えた。
風太には妙に勘が冴え渡る時があるが、その時もそうだったのだろう。

「俺ちょっと行ってくる！」

「ちょ、おま！　いきなりなんだ！」

「いいえ準、風太が行きたいといっているのだからいいじゃないですか。それに、あの人たちの戦力を測るのにもちょうどいいでしょうしね」

「僕も行くー」

「こらこら待ちなさい。若が風太に任せたんだから黙って観戦しよう。な？」

「ぶ～ぶ～」

「ほらユキ、風太が頑張りますよ。一緒に見ましょう」

「は～い」

後ろの声をそのままに、彼は闘技場に乗り込んですぐに勝負を挑んだ。

「よっしゃー！　次は俺が相手だぜ！」

「ああ？　正義だぁ？　悪趣味なもん着やがって」

「俺のポリシーを馬鹿にするなよこんちくしょう！　ロン毛！」

「貴様……いい度胸じゃねえか。せいぜい楽しませろよ！」

ロン毛の男……板垣竜平がそう言って風太へ殴りかかった。

その拳は恐ろしい速度で風太の顔面へと襲い掛かり、そしてしっかりと受け止められた。

「ほう……案外やるじゃねえか」

「はっはっは！　お前こそいいパンチ持ってるじゃないか！　俺もいくぜっ！」

そう言って腕を掴みながら風太が竜平へとパンチを放つ。
そのパンチはうまく顔面にヒット。ちょうど腕を放したので顔をのけぞらして竜平が後ずさる。

「ぐっ！　やるじゃねえか！」

「へへっ！　お前に根性を叩き込んでやるぜ！」

お互いに相手を褒めて、そのまま拳の応酬が続く。
二人とも笑顔で、相手の顔や腹を殴り合っている。なにやら友情のようなものが発生したらしい。
二人とも結構いい感じの体格（風太はそれ程でもないが、竜平は確実に）だから暑苦しいことこの上ないが。

そして最終的に勝ったのは……

「どりゃあ！　必殺！　ジャスティスアッパー！」

「ぐぼッ……ガッ……ッ！」

思い切りいい感じに風太のアッパーが顎へと入って、竜平が吹き飛ばされてノックアウトされた。
そして吹き飛ばされた竜平に近づいて風太が言う。

「いい根性だったぜ！　でも、今日は俺の勝ちだ！」

そう言って手を差し伸べた。笑顔で。

意識が朦朧としながらも声をかけようとしていた竜平は、風太の後ろに迫っていたものに注意しようとしたが……既に遅かった。

「チャー・シュー・メーン！」

「のぼがっ！」

若干頭を下げて手を差し伸べていたせいで、後ろから参戦してきた板垣天使のゴルフクラブが頭に直撃した。

しかも側頭部に思いっきりガツンという音と共に。

いい感じでまとまってたのに、これはないだろうといった感じである。

普段なら「ざまあみろ」とでも言いそうな竜平であるが、正面から負けを認めて倒れた後だったので、さすがに嫌な気分だった。

しかし、しかしだ。

風太のタフさもいい加減におかしなものだった。

「ぎゃ～～～！　いて～～～！」

そんなことを言いながら地面をごろごろ転がる風太。

……普通に元気そうに見えるのは、きっと気のせいであると信じたい。

その後、風太は転がりながら「とうっ！」という掛け声と共にジャンプして立ち上がろうとして、着地失敗してこけた。

そしてこけた位置に立ったまま寝ていたのは板垣辰子。

そのまま顔面が板垣辰子の胸部へと埋まった。

一瞬の沈黙後、盛大に混乱している風太が叫び声と共に飛び退った。

「ごっ、ごか、いや違う、わざとではない！」

そう叫んで手をぶんぶん振る。

顔を紅潮させて口をパクパクしながら「うがーーー！」と叫んで走り去った。

それを見た板垣一家の長女である板垣亜巳が一言。

「いったいなんだったんだあれ？」

「ふあああぁぁぁ～。あれ？　もう朝？」

そして胸部に頭突きもどきを食らったせいか、やっと板垣辰子が目を覚ます。

普段はかなり眠りが深い彼女だが、今日はたまたま浅かったようだ。

「ああ辰子、まだ寝てて良いよ。」

「そうなの？　じゃあもう一眠りするね。ＺｚＺ……」

「ほらリュウ、あんたもさっさと起きな」

「わかってるよ。……よっと」

アッパーのダメージも立ち上がれるくらいには回復したらしい竜平が立ち上がる。

ただ、まだちょっと痛そうではあるが。

「にしてもあいつの名前を聞きそびれたな……すごくいい奴だったんだが」

「頭を打ったらすごくゴロゴロ転がってて面白かったぜ」

少し惜しそうに言う竜平に、さぞ楽しそうに語る天使。
回りを気にせず眠る辰子に、彼らを見守る亜巳。
そして彼らに話しかける人物がいた。

「彼の名前なら教えてあげますよ」

「ああ？　誰だお前？」

「葵冬馬といいます。それより、さっき戦った相手のことが気になるんですよね？」

目の前に現れた葵冬馬を見て、若干声を荒げる竜平。
こんな場所に冬馬のような弱そうな奴が何のようだという感じだ。

「さっきの彼は一条風太といって私の友達なんですよ」

「へぇ。お前はアイツの友達なのか」

「ええ。だからちょっとお話しませんか？」

そんなちょっとだけ物騒な会話がされる中、すぐ後ろにいた準と小雪はこんな会話をしてたとか。

「というか俺はあいつにまともな羞恥心があったことに驚いた」

「昔は平気で僕とお風呂はいってたもんね～」

「（それどころか一時期ホモなんじゃないかと疑ってたが、違うみたいだな。疑ってすまん）」

「（さっきのフータ、なんかかわいかったな～。僕も後でやってみよ～）」

心の中はどちらもとんでもないことを考えていたりする。

板垣一家と仲良くなった一件である。

その後、一条風太は板垣一家のとある人物に惚れる（ホモではない）のだが……

それはまた別の話。

閑話　正義の漢なのだ　二話目（後書き）

あとがき

彼はめっちゃタフです。

そしてタフなのにも理由があったりします。

第六話　質問タイム（前書き）

どういった情報が伝えられていたか。
今回は退屈だが……次回が楽しみだ。

第六話　質問タイム

クリスと宗介がグラウンドから教室に来るまでの間も、教室はかなり湧いていた。
それもこれも、宗介が原因ではあるが。

「あいつ空から降ってきたぞ。面白ぇ！　クリスと同じくらい面白ぇじゃねえか！」

「いや、でもあの文句は意味不明だったでしょ」

「確かにモロの言うとおり、通学路と登山道を一緒にするのは間違ってる」

「そんなことはいいじゃねえか！　自己主張がはっきりしてるってことだろ？」

「いやいやキャップ、それもおかしいって」

「さっきいた転入生のメイドさんも可愛かったな！　すげえ金髪美人だったぜ！　望遠レンズを用意しておけばよかった！」

「空から落ちてくるとかどう考えてもおかしいだろ。まずそれを考えろよ。だいたいメイド女を片手で抱えてる部分はスルーすんのか、不自然だろうが」

「あ、あの人、ちょっと前からお店のほうに顔出してる人だ」

「ちょっとチカりーん、それフラグ立ってるじゃん、狙うの？　狙っちゃうの？」

「確かにイケメンだったけど、なんか雰囲気がね～」

「にしても賭けは大当たりだったわねー」

「まぁ、ドイツから来る転入生が女だってわかれば、必然的に男女一組から割り振られるのは男になるんだ。ワン子のは偶然だけど」

ちなみに賭けとはこんな感じのものである。

＝＝＝

――数日前のＨＲにて。

問題児を集めたとされている２－Ｆ。

しかしながら担任である小島梅子の存在によって、ＨＲ前から物凄く静かな空間となっている。

そんな中で小島梅子からクラスの皆へとお知らせがあった。

「さて。面白いニュースを諸君に伝えよう。今週の金曜に川神市の姉妹都市であるドイツのリューベックから転校生が来ることになっ

た」

ざわっ……！

「静粛に！」

生徒達がそのことを聞いて色めき立つが、小島先生が鞭で床をパシーンという音と共に叩き、そのざわめきを沈めた。

「質問は挙手をして行うように」

そう小島先生が言うやいなや、皆が手を上げて質問し始める。

「女子ですか？美人ですか？胸とかありますか？」

「男子ですか？イケメンとかお金持ちですか？」

「男はロコツよねー」

「女子だって同じようなもんじゃねーかよ」

「どちらなのでしょうか、小島先生？」

見た目小学生のクラス委員長、甘粕真与が改めて尋ねる。

「ひ・み・つ、なんてな」

ざわっ……！

「それともう一つ、転入生は一人ではない。更に隣のＳ組にも一人

来るとのことだ」

それを聞いて、師岡卓也は手を上げて質問した。

「なんでそっちはおまけみたいに言うんですか？」

「うむ、学長が言うには『わしが無理矢理入れたようなもんじゃからおまけでいい』と聞いている」

続いて、小笠原千花が手を上げて質問する。

「その人はどこから来るんですか？」

「アメリカのニューヨークからだそうだ。こちらは男女一組だと聞いている」

「男女一組？」

「そうだ、Ｓ組に片方が入ると聞いている」

それを聴いた瞬間に猛スピードで福本育郎が手を上げた。

「先生！　女子はどっちに転入するんですか！」

「ひ・み・つ、だ。わかったな。それでは金曜を楽しみにな。ＨＲを終わりとする」

ざわざわっ……！

その後、休み時間。

「ったくあの先生は時々謎の冗談を言うから怖いぜ」

「表情変わらないから余計にねー」

「おいおい。時代は転入生の話題だろ！」

「こういうのってギャルゲーだと美人だよー」

「すっげぇボインの姉ちゃんだったらどうするよ！俺そーだったら絶対女にして揉みまくるぜ！」

ヨンパチこと福本育郎が大声で女子が引くようなことを言う。ヨンパチというあだ名の由来を知ればわかるが、とんでもなくエロい男である。無論、変態的な意味で。

「何あのチビ、マジキモ……」

「さかってるサルとか動物園帰って欲しいんですけどー。アタイが身の危険感じるんですけどー」

女子からの人気は壊滅的にないが。

「死んでもお前にだけはやらねーよ。お前こそ山に帰れヤマンバが！」

「アタイのことヤマンバとかいうヤツ、マスカラで目玉染め上げたいんですけどー！」

こんなやり取りも２－Ｆでは日常茶飯事である。
まぁ、さすがに問題児を集めたクラスなだけはある。

そして翌日の昼休み。

「おーい皆聞いてくれー！　転入生のことだけど、ドイツから来る奴のほうは性別がわからなくて謎に包まれてるだろ？　どうせなら男か女か賭けないか？　賭け札作ってきたんだ！」

風間翔一が賭けの親となり、皆に勧めたことによって盛り上がったのだ。

「ついでに転入する組み合わせの方も賭けるぞ～。男と女か、それとも同姓二人が来るのか」

……まぁ、かなり変則的ではあったが。

＝＝＝

グラウンドからやってきたクリスによって、黒板にクリスティアーネと書かれる。

「クリスティアーネだ。あらためてよろしく！」

凛とした声と立ち振る舞いに男達は見惚れていた。期待していた以上の美少女だったから当然かもしれない。
追って宗介も黒板へと名前を書いた。

「大神宗介だ。よろしくと言っておこう」

ずっと左手をポケットに入れたままだが、何故か様になっている。
というかやたらとかっこよかった。一部女子は彼に釘付けだ。
まぁ、例えるとするなら悪いからかっこいいという感じだろうが。
顔に浮かべる笑みが型にはまっていた。

「よし、何か質問があれば挙手していけ」

「はいはい！」

「では島津。品位を持ってな」

「オッスオッス！えっと、くりすてぃあーね？」

「自分としてはクリスと呼ばれることを希望する」

「クリス。彼氏はいたりすんのかな？」

「そんなものいないに決まっているだろうガッ！！！」

クリスの父親の怒号に、教室が静まり返った。
ちなみに横で突っ立っている宗介はうるさそうに顔を顰めていた。
現在は完全に両手がポケットの中だ。

「父様のおっしゃる通りだ」

「そ、そーすか……」

「クリスにちょっかいを出すものは軍が殲滅する」

「GUN？」

「（そーいや京都で軍とやりあった気がするが……まさかな）」

「父様は任務に私情を持ち出さない軍人だ」

「今めっさ持ち込んでたでしょうが！」

ヨンパチが思い切りツッコミを入れるが、みんなも大体そんな気分だ。

思ったことといえば……この人、親バカなんだな。とかそんなかんじだろう。

そんな会話を宗介が話半分に聞いていると、聞き捨てならない単語が出てきた。

「ここに来る前に、京都にも観光で1度寄ったのだ」

「……マジかよ」

「なんだ大神、何か言ったか？」

「いいえ、なんでもありません先生」

内心どんな偶然だと驚いている彼だが、京都に軍がいた時点で何かあったんだろうと諦めてはいた。

こんな形で答え合わせできるとは思わなかったが。
周りはクリスのちょっとばかし抜けている（間違っている）発言へのツッコミで、彼の独り言には近くの小島先生しか気付かなかった。

「おーい！　なんで空から落ちてきたんだ？」

そんな中、キャップこと風間翔一が宗介へと質問した。
宗介はなるべく簡潔に答えることにした。

「ちょっと怒ってたからな。クリスや金ぴかに追いつくには、道を無視して飛ぶほうが早いと思ったんだ。それだけだ」

「確かに道を無視できるんだからその方が早いよな」

「いやいやいや！　まず飛ぶって発想がおかしいから！」

何故か納得しているキャップと、そんな答えを返した宗介にモロこと師岡卓也がツッコミを入れた。
さっきからクラスメイトにツッコミをいれたりクリスにツッコミを入れたり今度は宗介にと忙しいもんである。

「なんでアメリカからの留学なのに和名なの？」

「元々この町に住んでたんだよ。バカな親父にアメリカへ引っ張られてたんだよ」

「さっきのメイドは誰なんだ？　そしてできれば紹介してくれ！」

「紹介なんぞいくらでもしてやる。それから後は知らん」

「お前いい奴だな！」

普通の質問にも欲望丸出しな質問にもきっちり対応した。というかそれでいいのか？
秘書兼メイドが聞いたら泣くぞ。たぶん。

まぁその後も色々な質問があったが割愛する。
そして小島先生がクリスの父へと話しかけた。

「父君。そろそろ……」

「わかった。皆、娘をよろしく頼む」

「あの馬も回収していってもらいます」

馬の回収もしっかりやっていってもらうあたり、小島先生もしっかりしている。
そして、クリスの父は一礼して教室を出て……すぐに戻ってきた。

「クリス、何かあれば戦闘機で駆けつけるからな」

そんな一言を残して去っていった。親バカというレベルで表していいのか疑問である。
クリスに手を出すことが、死と同等レベルに危険だと知って悲嘆するクラスの男子達。
アホかこいつらと思いつつ、クリスになんら興味がない宗介や既に現実を捨てている大串スグルが可哀相なものを見る目で見る中、ワン子こと川神一子の眼がギラリと光った。

「はーい質問！　二人は何か武道をやってるのかしら？」

「フェンシングを小さい頃よりずっと」

そう答えたクリスの次に、宗介へと関心が集まった。
ほんの少しだけ間が空いて、彼は質問へと答えた。

「……特に何も。ただ、素手喧嘩（ステゴロ）でなら負けたことはないな」

ここでアメリカのマフィアの半分は俺が壊滅させた、とか言わないところ謙虚である。
それよりか、武道なんて当に捨てたなんていう空気をぶち壊すような発言をしなかったことに安堵である。

「ＹＥＳ！！　梅先生提案！」

そして、転入生二人が質問に答えるやいなや、ワン子が身軽に立ち上がった。

「転入生を“歓迎”してあげたいと思いまーす」

その発言を聞いて、クラスが“歓迎”の意味を悟って騒然とする。

「ふふっ、血気盛んだな川神。だがそれは面白い」

小島先生は既に悟って、クリスと宗介に告げた。

「クリス、大神、そこのポニーテールがお前達の腕前を見たいそうだ」

「！　――なるほど。新入りの歓迎か」

「へぇ……」

「川神学園には、決闘って言う儀式があるの。決闘の意志を伝え、自分のワッペンを机に置く」

そう言って自分のワッペンを取り出すワン子。

そこへクリスが声を上げた。

「しかし、自分と大神を相手に一度に決闘をするのはこちらが武士道精神に反している。どうするのだ？」

「いや、問題ないさ。俺は遠慮しとくよ。女とやるのは趣味じゃないし、なによりかなわないだろうからな。全力を出せないなんてつまらないだろ？」

「ん～。確かにそうね。あんたは今度！　クリス！　戦闘で勝負よ！」

そういってビシッと指を突きつける。

それに答えてクリスもワッペンを取り出してワン子に返事を返した。

「わかった。受けて立つ！」

そうしてクリスがワン子のワッペンの上に自分のものを重ねる。

「おおっ、すげえ！　受理したぞ！」

「いいねえ、キッパリしてて気持ちがいいや！」

そんなクリスにクラスの生徒達が湧く。

既に宗介は枠の外だ。

そんなクラスの騒ぎ声の中、小さく、本当に小さく呟かれた声は誰の耳にも届かなかった。

「――お前みたいな雑魚が、俺にかなうわけがないだろう？」

＝＝＝

おまけ

「こんにちはＳ組の皆さん！　ヴィヴィアン・バゼールです！　よろしく！」

「ふはははは！　あずみ！　お前と同じメイドだぞ！」

「そうですね英雄様！　クラスメイトとして仲良くしましょうねヴィヴィアンさん！（このクソ女サバ読みやがって……）」

「こちらこそ転入生ですから！　よろしくお願いしますね！（女王蜂……サバ読んで生徒とか。口調がわざとらしいんだよ……）」

一皮めくれば真っ黒だが、その笑顔の裏に誰一人気付いてないのが救いだろう。
もし知ってしまえば、メイドに対するイメージが１８０度変わること間違いないしである。

「……あと２０年若ければな」

そんな中、どこぞのハゲがそんなことを呟いたとか。

第六話　質問タイム（後書き）

あとがき

滅茶苦茶猫かぶってるようで微妙にかぶってない宗介君。

次回――動乱っ！

感想でもありましたが、ワン子が決闘を宗介にも挑もうとしたのは、ただ単に強さを知ろうとしたためです。
そして、ほとんどの人が【本当に】空を飛んできたとは思ってません。屋根を跳び伝ってきたと想像してます。

第七話　バトルタイム（前書き）

HEAVEN OR HELL?

DUEL 1

LET'S ROCK

第七話　バトルタイム

クリスと、やたら元気な女子が決闘することになった。
正直言ってあんまり興味はないが、一応見ておくことにする。
どうせ暇なんだから、退屈しのぎにはなるだろう。

ところでこの元気な女子の名前は川神というらしい、果たしてどれだけの実力なのか。
……ただ俺の記憶ではガキの頃、川神院にはあいつ一人しかいなかったはずなんだが。
弱いということはないだろうが、やるからにはそれなりのものを期待したい。

「待て、肉体を使用する決闘の場合は職員会での了承が必要だ」

「……面倒なこって（ボソッ」

「何か言ったか大神？」

「いいえ何も」

俺はニッコリ笑顔を作って返答した。
まったく、あのじいさんに許可取っといてよかったぜ。
というかこれで駄目とか言いやがったらマジで殺す。

俺がそんなことを考えていたら、唐突に扉を開けて川神鉄心が姿を現した。

「ほっほっ。小島先生。話は聞かせてもらったぞい」

この地獄耳め。
じじいなんだからボケちまえばいいものを。

「学長。いつの間に……」

「いいよワシの特権で了承する。今すぐやんなさい。ワシが責任持って見届けよう」

その一言と共にクラス中が大騒ぎとなった。

「新入生歓迎なんてものは勢いが大事じゃからな」

そんな事を川神鉄心が言う中、俺に声をかけてくる奴が一人いた。

「大神は戦わないみたいだけど、やっぱ誰かと戦った方が盛り上がると思うぜ。転入生なのに一人だけ戦わないなんてつまんないだろ？」

キャップと呼ばれていた風間翔一だった。
やたら馴れ馴れしいが、嫌な感じがしないのはこの男の能力だろうか。

「空から落ちてくるくらいだから強いと思って気になっちまってさー」

「というかキャップ、大半はそれが理由でしょ」

笑いながら言うから毒気が抜ける。というかため息しか出てこないのは何故だろう。

というか今の俺はまずあいつと戦わんことには満足できん。
町で喧嘩売ってきた雑魚どもを倒したのは暇つぶしだ。まずはあいつと戦わなければ。

「ほっほっほ。安心せい。こやつの戦う相手はもう決まっておるよ」

「ん？　そうなのか？　誰と戦うんだ？」

「そのときまで楽しみにな」

ニヤリと笑って返しておく。エンターテイメントは大好きなんだよな。だいたいアメリカのせいだろう。
俺はクリスと川神妹（？）が睨みあいながらグラウンドへ向かうのを黙って見ることにした。

「皆で見届けるぞ。グラウンドへ移動しろ」

小島先生がそう言って皆をグラウンドへ誘導する。
……ま、風間が決闘トトカルチョなんかやってるが、俺の目的はそっちじゃない。
すぐに川神……じじいの元へと移動する。

「おいじいさん。ちょうどよく決闘するタイミングを取ってくれてありがとな」

「ほっほっ。約束は守るもんじゃろう？」

「全くだな。でなきゃ元気玉でも使ってやるところだ」

一応漫画のパクリだが、まぁできないこともないしな。

かわかみ波のほうも大概ふざけてると思うが。

『ただ今から、第一グラウンドで決闘を行います。決闘内容は武器有りの戦闘です。見学希望者は――――』

そんな中でアナウンスが響く。

俺はちょっとした質問をじじいにすることにした。

「これって見学可能なんだな。やっぱり」

「そうじゃよ。まぁ、本人の希望があれば見学不可にもできるがの。おぬしはどうしたいんじゃ？」

「俺はずっとアメリカにいたからエンターテイメント大好きなんだ。だいたいだな、人に見られたからって困るような技術も何も持っちゃいないよ」

「周りに被害が行かないようにしてくれればいいんじゃがのう」

「ま、さすがに大勢の歓声交じりじゃ命を賭けた『真剣勝負』はできないからな。腹八分目にしとくさ」

「頼むぞい」

その後俺は、『決闘に手出しはしないこと』を条件に『周りに甚大な被害は出さない・生徒達に危険を及ばせない』を了承した。

ちなみに、仕掛けるタイミングも全部俺任せだ。

くははは。今から楽しみだぜ。

さて、俺はグラウンドに移動した。
というか朝飯用の弁当売ってるのは何なんだ。
……とりあえず一個買っとくか。戦う前にエネルギー補給しとこう。

さてさて、川神一子だったな（じじいに聞いた）。
血は引いてなくとも川神の名を名乗るんだ。つまらないものを見せるなよ？

「これより川神学園伝統、決闘の儀を執り行う！　2人とも、前へ出て名乗りを上げるが良い！」

川神鉄心の決闘を告げる声と共に、決闘を行う二人が名乗りを上げた。

「2年F組　川神一子！」

「今日より2年F組！　クリスティアーネ・フリードリヒ！」

どちらにも応援が何人も付き、物凄い盛り上がりようだ。
そしてじじいが決闘においての注意事項を説明し、両者が頷いて、
そして……

「いざ尋常に、はじめいっ！！！！！」

「勝負っ！」

「いっけぇぇぇぇーーー！！！」

開始の合図と共に、二人が同時に動いた。

初手からの攻防は川神一子が優勢。

リーチの長さと薙刀という武器に押されている感じか。

ま、日本を知っていようが、実際に薙刀持った相手と戦うことはなかっただろうしな。

「あんなんじゃただ振り回してるのとかわんねーな」

しばらくしてリーチの長さや攻撃手段を覚えられれば、クリスが攻撃に移るだろう。

レイピアの方が短い分小回りもきくのだから、攻撃した直後あたりを狙えばいいだけだろう。

俺の場合は薙刀を掴んで振り回して終わりだろうが。

「やーっ！！」

「！！迅いっ……」

「いい突きだな。速度は申し分なしか」

かなりの速度の突きを放ったクリスによって、川神一子の攻撃の手が止まった。

そして互いに次がフィニッシュ宣言をして、川神一子が――面倒な、あいつはもう犬ころでいい。犬ころが薙刀をクルクルと高速回転させ始めた。

これが犬ころの必勝の構えであるようだ。

対するクリスは、攻撃の瞬間を見極めてカウンターをとる体制。

で、結果は……

「川神流――山崩し！」

犬ころが放った攻撃は頭上から脚へと流れてそこを狙うのだが。

「ふ！」

「避け…！？」

「セェイ！」

それを上手く回避したクリスの突きが犬ころの肩に炸裂していた。

「～～～っっっっ！！！」

そしてじじいが決着を告げた。

「それまで！　勝者クリス！」

さて……次は俺の番だな。

せいぜい感動的な演出にしてやろう。

全生徒の度肝を抜くような、な。

＝＝＝

「あれ？　ところであいつはどこいったんだ？」
２－Ｆのみんなでクリスを認めたところでキャップが言った。
そして川神百代が弟分である直江大和に話しかける。
「誰だ？」
「姉さん。いや、もう一人の転入生。名前は大神――ちょっと姉さん？」
転入生の苗字を聞いた時点で既に百代は走り出していた。
そしてすぐに川神鉄心に詰め寄った。
「おいじじい。あいつが今日来るなんて聞いてないぞ。いきなりすぎるだろう！」
「ほっほっ。サプライズじゃよ。それに、できるだけ面白い再会にしたいといわれておるからのう」
「何……っ！？」
突然に会話を中断して振り返る百代。
すぐに手を前に出して、飛んできた「何か」を掴み取った。
「これは……ワッペン？」
自分が掴んだ物を見て、それがワッペンだと気付いた瞬間、グラウ

ンド中に男の声が響き渡った。

「川神百代！」

「む！？」

「なんだ今の？　モモ先輩の名前を呼び捨てってどんな命知らずだ？」

「っておいあれ！　校舎の上に誰かいるぞ」

「なんでそんなところに……うわ、マジでいるぞ！」

「というか落ちるぞ！　危険だ！」

いつの間にそんなところにいたのか、左手はポケットに入れたままの宗介が、校舎の屋上のふちに立っていた。
宗介は、いつも以上の凄まじい悪人顔で笑みを浮かべていた。

「今ここでこの俺、大神宗介が川神百代に決闘を申し込む！」

そう言って右手を眼下の川神百代に突きつける宗介。
そんな中、したのグラウンドではさまざまな会話が交わされていた。

「見ないと思ったらあんなところにいたのか」

「というか、何でモモ先輩に決闘申し込んでるの？」

「命知らず？」

「でもよ、あいつさっきは武道の経験がないとか言ってなかったか？」

「それなのにお姉さまと戦おうなんて甘すぎるわよ！」

「おお、戦う相手ってのはモモ先輩のことだったのか」

「あれ？　キャップは何か知ってるの？」

「おお、さっき学長に聞いた」

「……学長が許可するって事は強いのかな？」

ざわざわとグラウンドが騒がしくなる中、決闘を申し込まれた川神百代は笑みを浮かべていた。
そしてそんな笑顔のまま、校舎の上に立つ宗介へと大音声で返事を返す。

「いいだろう！　その決闘！　受けて立つ！」

その返事に、周りの生徒達がいっそう盛り上がった。

「おおっ！　モモ先輩が決闘するのを見られるぞ！」

「やった。超ラッキー！」

「賭けは……結果が見えてるからな。挑戦者の大神ってのが何秒で倒されるか賭けるぞ～」

「俺5秒くらいで」

とんでもなく失礼な会話が交わされてたりするが、宗介の耳には入っていない。
その理由は……

「はーはっはっはっはっは！　それでこそ百代だ！　昔と全く変わっていない！　とうっ！」

外野が凄まじく騒がしい中、笑いながら屋上からジャンプしてグラウンド中央に着地した。
かなりの距離を跳んだことにまたも外野が沸く。

「宗介……印象はずいぶん変わったが、弱くはなってないようで安心したぞ」

「それは俺の台詞だ。このような場所にいて満足できるとはとても思えんがな」

「しかしこのような場所でいいのか？　もちろん周りに人がいるからといって手は抜かないが」

「無論だ。だがじじいから言われているからな。ホンモノの真剣勝負はまた今度だ。場所はじじいに用意させることになってる。今日は再会を喜ぼうじゃないか。なァ？」

歓声が渦巻く中で、二人だけに聞こえる程度の声量で会話をする百代と宗介。
そこへ川神鉄心が決闘の合図をするために近づいてくる。

「これより川神学園伝統、決闘の儀を執り行う！　２人とも、前へ

出て名乗りを上げるが良い！」

その声を聞いてすぐ、宗介が一歩前に出て名乗りを上げた。

「今日より2年F組、大神宗介！」

「新入りー！　がんばれよー！」

「あれ？　キャップ、モモ先輩応援しないの？」

「両方するさ。でも、大穴狙いで１０分以上は立ってられるって賭けちまったからな」

「無謀すぎ」

「そりゃないだろー。いつもみたいにすぐにやられちまうって」

「金はさっきの賭けでゲットしたしな。学長ともなんか知り合いみたいだから大穴狙いなんだよ」

「姉さんと１０分も戦ってられたら奇跡だと思うけどね」

続いて決闘を挑まれた百代が名乗りを上げる。

「３年F組！　川神百代！」

「モモせんぱーい！」

「がんばってくださいモモ先輩ー！」

「おお、すごい歓声だな」

「もちろんよ！　お姉さまは有名人なんだから！」

「これでは不公平だ。自分は同じ転入生の大神を応援したほうがいいんだろうか」

「そんなもの好きなほうを応援すればいいのよ！　お姉さまー！」

同情半分、面白半分で宗介を応援する生徒。
いつもどおりに百代が相手を倒すことを望んで百代を応援する生徒。
彼らの歓声が一旦途切れたところで、川神鉄心の声がその場に響き渡った。

「いざ尋常に、はじめいっ！！！！！」

途端に二人の姿が掻き消えて、ちょうど中間地点で激突した。
その衝撃によって周りに砂埃が舞い上がる。
両手を真正面から組み合わせたまま二人は笑う。

「ふはははは。宗介、やっぱりお前は強い！　期待以上だ！」

「それは良かったな。だがまだまだ本気じゃないんだ。ギアをあげていくぞ！」

弾ける様に二人同時に飛び退り、次の瞬間にはまた相手へと突貫する。

周りの生徒が驚愕するが、二人にはそのようなものは目に入らない。

彼らは既に二人だけの闘争の世界へと入り込んでいた。

まだ決闘は始まったばかりだ。

＝＝＝

「おお、あれって前に戦った奴だ。ここの生徒だったのか」

「いや風太、お前な。まずそいつが『川神百代』に挑戦してることに驚けよ」

「うるさいぞハゲ」

「そーだぞハゲー♪」

「お前ら……」

「そうですねぇ……準はどちらが勝つと思いますか？」

「そりゃモモ先輩だろ」

「まぁ普通はそう思いますよね。風太はどう思います？」

「んーと……わからん！」

「いやわからんってお前……」

「何故ですか？」

「あいつな。なんか底が見えないっていうか、雰囲気がヤバげだったというか……ユキもそう思わないか？」

「わかんなーい。でもー怖い感じはするよー」

「見た目悪者っぽいのは俺でもわかるぞ」

「そうじゃないんだけどな～」

「……風太とユキがそう言うなら、たぶんそうなんでしょうね。二人とも勘がいいですから」

「おいおい若、あの転入生がモモ先輩に勝つってのかよ」

「いえ、そこまでは……とにかく今は結果を見ましょう。少し楽しみですね。後であのメイドさんにも話を聞いてみましょうか」

第七話　バトルタイム（後書き）

あとがき

バトル開始でござる。
超必殺・元気玉！とか、抹殺奥義・デスクロー！とかは出ません。
パロディ技は大量に出る可能性が……いや、どうなんだろう。
まともに戦わせるか……前座ということで遊ばせるか……
迷いどころです。

ちなみにこの場所で『ホンモノの真剣勝負』をやれば、生徒が危険です。
ですので川神鉄心に場所を用意するように要求しました。

第八話　ゴールデンタイム（技説明追加（前書き）

ＨＥＡＶＥＮ　ＯＲ　ＨＥＬＬ？

ＤＵＥＬ　２

ＬＥＴ'Ｓ　ＲＯＣＫ

第八話　ゴールデンタイム（技説明追加

川神百代と大神宗介の決闘開始より3分。
周りの生徒達は、グラウンドの中央で繰り広げられる戦いに驚愕していた。

彼らが驚愕している理由はいくつかあるが、一番大きい理由はおそらくこういったものだろう。

「モモ先輩相手にまだ立ってる……！？」

「というか普通に戦ってる！？」

「マジかよ……何者だあいつ！？」

そしてある程度の武術の心得があり、実力も併せ持つものは、百代を相手にまだ立っていることだけではなく、戦闘中の宗介の異様さにも驚愕する。

「あいつすげーな！　あのモモ先輩と戦えてるぜ。大穴に賭けといてよかったってもんだな！」

「つーかよ。あいつ武道の心得は無いとか言ってなかったか？」

「それは確かみたいだよ。構えとか突きや蹴りも全部素人っぽい」

「確かにそうみたいね……全部は見えないくらい早いけど」

「そんなにすごいの？　全然見えないけど……動きは素人なんだよ

ね？」

「そんなのが姉さん相手に戦えてるのか……とんでもないな」

「両者共に素晴らしい腕前だ。川神百代が強いのは知っていたが、このような強い者が野に隠れているとは。日本に来てよかった。しかし、大神は武道の心得が無いは言っていたが、それなのにこれだけの強さとは……」

大神宗介の戦い方は、自分の才能から生まれた能力に頼って本能のままに戦うタイプだ。

型となる武術を習得していない故に、その場その場で即応して攻撃を繰り出す。

本来そのような攻撃では動きに無駄が多すぎて川神百代のような強者には通用しないだろう。

それを可能にしているのは彼の並外れた強さである。

圧倒的な才能から来る強さがあるからこそ、彼は川神百代と戦えているのである。

＝＝＝

地を思い切り蹴って百代へ突貫する。

移動した後には砂色の旋風が残り、俺は拳を構えて向かってくる百代へと拳打をデタラメに打ち込みながら交差した。

擦れ違いざまに互いの攻撃を防御しつつ、そのまま横合いへと飛び退る。

すぐさま地面を蹴って自分の背中側にいる百代へと横回転しながら飛んでいき、迫りながら百代が放ってきた右足の上段回し蹴りを一気に体勢を低くしてかわす。
俺はその回転を利用した左の下段回し蹴りを百代の足首に叩き込んだ。
そこで一瞬バランスを崩した百代のアキレス腱あたりに今度は右の下段回し蹴りを叩き込む。

この連携には百代の体重では足りなかったようで、奴はひっくり返りそうになった。
普通の人間だったらそこから両手をついて転倒を免れるだろうが、奴は違った。
追撃に移ろうと前がかりになっていた俺に、片手で地面を叩いて体を跳ね上げ、そのままアッパーカットの要領で拳を思い切り振り上げた。
俺はカウンター気味になったその攻撃を、ギリギリ両腕を交差して防御するのがやっとだった。

「ぐぉっ！？」

「ふはははは！　そらそら行くぞ！」

上半身をのけぞらせながら吹き飛んだ俺に、体勢を立て直した百代が襲い掛かってくる。
重心を低くしたままでロケットのように突き進んできて、空気を叩き割るような音と共に右フック、左フック、滅茶苦茶な威力の左右の連打を次々と放ってくる。
それら全てが俺の体へと炸裂した。
一発一発に込められた力は尋常ではない。百代の身体全体から生み出された力だけではなく、加えられたひねりによって力が増大して

いる。
インパクトした衝撃で更に身体が後ろに飛ばされるが、俺は左足を地面にめり込ませる勢いで強く地面を蹴った。

「ウラァ！」

「グ――ハッ！？」

上半身を百代の攻撃で仰け反らせつつ、オーバーヘッドキックの要領で後ろへと一回転しながら百代の顎に変則的な飛び膝蹴りをぶちかました。
おもいきり顎に攻撃が直撃したために百代の攻撃の手が止まった。
さすがにダメージは大きいようなので、すぐさま戦闘の構えを取れるような状態ではない。
それでも百代なら3秒もしないうちに復帰して向かってくるだろう。

「シャア鳴鳴鳴ッ……！」

隙を見逃さずに百代の腹部にダダダンと連続で拳を叩き込んだ後、思い切り空中へと蹴り上げる。
同時に飛び上がり、空中で蹴り下ろし、蹴り上げて、蹴って蹴って蹴って蹴りまくる。
狙うのは顔面、鳩尾、間接といった急所のみ。

「羅羅羅羅羅羅羅ァァッ！」

しかし当然、俺が攻撃している最中でも百代は瞬時に状況に対応して反撃してくる。
俺が腰・膝の回転をガンガン早くして連打のスピードを上げている中、俺が繰り出した左ハイキックに対応して百代も左のハイキック

を放ってきた。
互いの脛と脛が衝突し、俺達は何度目かの攻防を終えてその衝撃に弾け飛んだ。

そしてまた、ある程度離れた場所へと同時に降り立つ。

「やっぱお前最高だ。真剣（マジ）に最高だぜ。俺はそう思うがお前はどう思うんだ、百代ちゃんよぅ？」

「私も同じ気持ちだよ宗介。やっぱりお前は強い、最高の気分だ。だがどうしたんだ？　まるで武術の色がないじゃないか」

「んなことはどうでもいいだろうが。強いってことが重要なんだ。それだけで十分すぎるほど十分だろう！」

「ふっ。それもそうだな。行くぞっ！」

百代がそう言って飛び掛ってくるのと同時、俺もまた地を蹴った。
拳打と蹴撃が交差し、ガガッという連続した打撃音が響く。
そうして俺はこの素晴らしき決闘という名の逢瀬を楽しむのだった。

＝＝＝

「キャップ、もう決闘が始まって十分以上経ったぞ」

「おお！　大穴だったから倍率すげーぞ。みんなでなんか食べに行

くか」

「というかキャップくらいしかこんな大穴に賭けないよね。こんなの誰も予想できないだろうし」

「姉さんも楽しそうだし、大神には一応感謝しないとな」

「うぅー。お姉さまのあんな楽しそうな顔は初めてだわ」

「ワン子が嫉妬してる」

「そんなのしてないわよー！」

「お！　二人が離れてなんか話してるぞ。そろそろ決着じゃないか？」

「！　……大神の右足に力が集まってる」

「お姉さまも何か技を出すみたいよ！」

「おお。大神の脚が光っている。いったいどのような技が出るのだろうか」

＝＝＝

十回を軽く越える交差を終えて、俺と百代は向かい合った。

既に戦いは千日手の様相を呈してきていたからちょうどいいといえばちょうどいいのかもしれない。
真剣勝負ならまた心構えも何もかもが違うんだろうが、決闘とはいえこの場は学校。本気で乱打戦を行うわけにも行かない。
ついでにいえば、そんなつまらない幕引きではなく、せっかくの再開なのだからド派手に締めたいというのもある。

百代がどう思っているのかは知らないが、考えることは同じなようだ。

「これでは埒が明かないなぁ宗介ー。ここまで私と戦える奴なんて本当に久しぶりだよ」

「それはこっちのセリフだ百代。前に九鬼揚羽に挑戦してきたが、お前のほうがよっぽど底が深い」

「揚羽さんと戦ってきたのか？　この浮気者め。それよりそろそろ決着をつけよう。名残惜しいが、最後に一度くらい全力を出してもじじいも文句は言わないだろう」

「ったく。やっぱり考えることは同じだな。本当に最高だぜお前は。……俺が惚れるのも無理ねーよなホント」

「……宗介、こんな時に何を――」

「つーか地味に愛の告白みたいなことをやってみたわけだが。まぁいいだろ？　答えは要らないさ。とにかくこれで最後だ！」

俺は両手を下ろし、左手をポケットにいれて腰を落とした。
そしてそのまま右脚に力を込めていく。

ただただ、とにかく力を一点に集結させ、体中に満ち満ちている気を右脚に圧縮させていく。
そして、身体の内からドバッと溢れ出る大量の気が右脚に宿って、それを淡い黄金色に輝かせていく。

「それは……？」

「面白ぇだろ？　技名はまんま黄金脚だ。ま、適当に力を込めたらできたってな」

「……ふっ、面白い。見かけだけではないだろうな？」

「当然だろうが！　行くぞ！」

地を踏みしめて拳を構える百代に向かって、左足で地を蹴って一瞬で肉薄する。
そして左足でギャリッと地面を削るように捻りつつ、淡い黄金に輝く右脚を回転蹴りのようにして思い切り百代に叩きつける。

「ダアアアリャアアアァァァァッ！」

その掛け声に対応するかのように、百代が俺の繰り出した蹴りへ向かって自らの拳を叩きつける。

「川神流、無双正拳突き！」

次の瞬間、放たれた必殺の一撃が俺の右脚と真正面から激突した。
ほんの一瞬の拮抗の後、俺と百代はなかば爆発音のような衝撃の音と共に弾き飛んだ。
そして生徒達や校舎にぶつかる前に、俺をじじいがキャッチ、百代

の方をジャージを着た教師がキャッチした。
威力的には互角だったらしい。というかなんなんだこのじじいは。

「ここまで！　この勝負引き分けじゃ！」

「ああ！？　このじじい今――」

「十分楽しんだじゃろ？　また今度にしなさい」

「……チッ。わかったよ。場所は用意してくれるんだろ？　そん時は邪魔すんなよ？」

「もちろんじゃよ」

決闘の終了を宣言するじじいに文句を言うが、小声で窘められて仕方なく了承する。
まぁ、一応大技のぶつけ合いで終わったわけだしな。
納得しておくか。
じじいから離れて周りを見回してみれば、生徒達のもの凄い大歓声が飛び交っていた。
川神百代と引き分けたってのはそれだけ大きなことらしい。
ま、俺はいつもどおりに俺であればいいだけだ。

＝＝＝

決闘が終了して周りが湧きに湧いている中。

川神百代と引き分けた大神宗介へと、２年Ｆ組の生徒が一気に群がった。

「お前すっげーなぁ。モモ先輩と引き分けるとかマジですごいぜ」

「っていうかお姉さまとなんか話してたけど知り合い？　知り合いなの？」

「姉さんの知り合いで、風間ファミリーの誰も知らない人物……そんなのがいたのか」

「お前何の武術も習ってないとか嘘だろ？　ありえないって。いや本当」

「このバカ。動きは素人っぽかったから本当だって言ったはず」

「でも京、モモ先輩と引き分けるとか何かやってるとしか考えられないだろ？」

「それは確かにね。全くの素人だとしても身体能力がおかしすぎるでしょ」

「チカりん、あいつ超当たりじゃね？　モモ先輩と引き分けとか超ありえないって」

「ホントにねー。ちょっと狙ってみるかな～。（エレガンテクアットロ程じゃないにしても十分イケメンだし）」

というか質問だけではなくただ単に群がって横にいる奴と話している連中までいる。

いい加減イライラした宗介がそこで大声を上げる。

「お前ら一気に喋るな！　わけわからん！」

「そう言うなよ。皆お前を認めてるってことだぞ。それより私にさっきの言葉をきちんと説明しろ」

「黙れ近寄るな耳に息がかかるんだよぶん殴るぞコンニャロウ」

「はっはっは。やれるものならやってみるがいい」

「ラァッ！」

「ふっ！　こんなのじゃ当たらないぞ～」

宗介は後ろからがっちり組んで顔を寄せてくる百代に裏拳を放つが、それをガシッと受け止められた。

若干の手加減をしたのが裏目に出たようだ。

そんな中。空気が読めないというかお気楽な性格で行動力のある風間翔一が宗介に話しかけた。

「なぁ大神、モモ先輩とは知り合いなのか？　さっきから仲がいいみたいだしよ」

「そうよ！　なんでお姉さまと知り合いなの！」

それに続いて川神一子まで宗介に詰め寄り、他のものまで興味深げに宗介を見始めた。

裏拳をしたまま百代に掴まれていた手を振り払い、宗介はその質問に答えた。

「教室でも言ってたと思うが、俺は元々この川神市の生まれだ」

「そういえばそんなこと言ってたね。決闘のインパクトで結構忘れてたけど」

「おお。よく覚えてたな影薄そうな奴」

「僕は別に影薄くなんて無いからね！？」

「まぁあれだ。百代とは昔の馴染みで、つい最近に越してきてじじいから連絡がいってたのさ。そんで決闘を取り付けたと」

「スルーされたよ……」

「大丈夫だよモロ。モブよりはずっと影が濃いよ」

「比べるものが地味に酷いよ！？」

なんか漫才のようなものが繰り広げられたが無視しよう。

そんなこんなで皆でワイワイやっていると、委員長の甘粕真与が騒ぐ皆に向けて言った。

「それでは皆さん、速やかに教室に帰りましょう」

思った以上に長く続いたグラウンドでの決闘はこうして幕を下ろした。

教室に戻ると一部の男子がうなだれていたが、宗介は指示されたとおりに自分の席に着くことにした。
すると数人の生徒が寄ってくる。
なんだかんだで結構興味を持たれているようだ。
宗介は自分から親しくなろうとはしないが、一応質問されれば答えることはするからかもしれない。

そんなこんなで一日が過ぎ去っていく。

途中、宗介とクラスメイトとの間でどのような会話がされたのかは定かではない。
とある和菓子屋の娘とか、世話焼きの委員長とか、ゲーセンで見かけた事がある奴には話しかけられてはいたようだ。

そして帰りのＨＲも近づいた頃――
クラス内で発生した犬とクリの喧嘩をスルーし、窓の外を見る宗介。
彼が暇そうにしている中、担任である小島梅子が教室へやってきた。

「待たせたな、ＨＲをはじめるとしよう。まずクリスの事だが、彼女の面倒は風間達に任せる」

「え？　俺達？　いースけど」

「？　……何で？」

「クリスは島津寮に入るからだ」

どうやらクリスは島津岳人の家がやっている島津寮に入るらしく、温泉が出るとの情報にも非常に喜んでいた。
そしてその案内が、その寮に住んでいる風間達に任されたというわけだ。

「次に大神の案内についてだが――」

「いや、俺には別にそんなもんは……」

「既に自分がやると名乗り出たものがいるらしくてな。学長からする必要は無いと説明されている」

「……はぁ？」

「では、これで帰りのＨＲを終わる」

そして宗介が疑問を浮かべたままで帰りのＨＲは終わってしまった。

そして放課後。

何かを察知した宗介が窓から外に飛び出したのと、川神百代が教室の扉を開いて駆け込んできたのは同時だったとか。

＝＝＝

放課後。
クリスの案内を任された大和が、廊下の張り紙などについて紹介していた時。

「おおう、美人だナァ。まぁ俺には射程外だが」

「ほー」

「準は相変わらずの趣味ですね、ははは」

「さすが自他共に認めるロリコンだな。さすが準だ！」

「もう１０年早く出会いたかった。惜しいな」

「ほーほー」

「……フクロウっすか？」

「あたり～」

「えっと……１０年も引いたら何歳だ？　小学何年生？」

「風太、君は細かいことは気にしてはいけませんよ」

「そうなのか？」

「ええ、そうです」

「よしわかった。ユキ、一緒にこの張り紙の“大食い競争”ってやつに行こうぜー！」

「いっぱい食べられるの～？」

「しかもタダだ！　むしろお金もらえる！」

「うん、いくー」

「おいお前ら、ほどほどにしとけよ？　前も文句言われただろ？」

「心配要りませんよ準、風太なら負けることは無いでしょうからね。文句を言っても負け犬の遠吠えです」

大和とクリスの傍らを、物凄く個性的な生徒達が通り過ぎていったとか何とか。

第八話　ゴールデンタイム（技説明追加（後書き）

あとがき

とりあえずＶＳ百代戦。第一回目はこんなところ。

技の名前は少林サッカーから持ってきてたりとかそんなことはない。
戦闘描写、どうだろう。細かすぎたりなんて事は無いだろうが、わかりにくくなって無いだろうか。

ところでちょっと前の後書きでジム行った時、作者はベンチプレスＭＡＸ６０キロくらいでした。
段々と、運動をしてきた貯蓄が無くなってきた気がする。
どんどん落ちる身体能力……これ、どんくらいで最低レベルまで落ち込むだろう。

技名：黄金脚
備考：最後に使った技。格ゲーで言うなら、ＢＡＳＡＲＡの一撃準備みたいな感じ。
説明：体内より発せられる気を一時的に増幅させ、増大した分の気を全て右脚に凝縮させる。
余りにも過多に凝縮された気が光り輝き、右脚の強度を対戦車用の徹甲弾を跳ね返すレベルまで上昇させる。
優れた身体能力でもって『黄金脚』を敵へとインパクトさせれば、その瞬間に凝縮されていたされた気が炸裂し、防御の上から相手を打倒するだろう。
威力レベル：本気の百代が放つ『川神流・無双正拳突き』と同等

技名：空中連続蹴り

備考：本文中では表記されず。格ゲーで言うならエリアルレイブとか。

説明：相手を空中に蹴り上げると同時に自らも飛び上がり、空中にいる相手の急所へと蹴りを連続して放つ。

蹴りの種類はその時の状況次第でいくらでも変わる。

第九話　ちょっとした思い出話　前編（前書き）

意外と黒いヴィヴィさんは危ない人です。
声をかける際は気をつけましょう。

第九話　ちょっとした思い出話　前編

――宗介が窓から飛び出したすぐ後。

「くっ！　窓が開いてるということは逃げたな宗介！」

2年F組の扉をスパーンと開け放って川神百代が姿を現した。
しかもどこから逃げたかまでをしっかり把握している。

「あ、お姉さま！　あいつといったいどういう関係なのか教えてー！」

そして一目散に窓へと向かう百代へと、よっぽど気になっていたらしいワン子が近寄りながら急いで質問した。
それに対する答えはものすごく簡潔だった。

「昔の知り合いだ！」

「いや姉さん、それはもう知ってるから」

遠くのほうから思わずツッコミを入れる大和。
それを聞き流して百代は窓の枠に脚をかける。そしてこう言った。

「後で話ーす！　心配するなー！」

そんなことを言いながら、窓の外へと思い切りジャンプして消えていった。

どうやら学園から猛スピードで離れていく宗介を発見したらしい。
教室に残った大和たち風間ファミリーは後で話すという言葉に納得の色を示した。
今日は金曜集会がある日。そこで説明するということだろう。
彼らはそう考えて自分達のしようとしていたことに戻るのだった。

さて、ところ変わって宗介が走る街中では。
街中といっても屋根の上を物凄い速度で跳ね回っているのだが、彼もまた後ろから近づいてくる気配を感じていた。

「くっ、百代め。完全に追い回し続ける気か」

互いに互いの気配がわかるほどの強さである彼ら。
そんな彼らが全速力で追いかけっこをすれば、その強大な気配を隠せるはずが無かった。
ちょっとだけ考えて、宗介はすぐに結論に至った。

おそらくこの追いかけっこは俺が諦めるまで続くだろうと。

そして宗介は基本的にそこまで気の長い方ではなかった。
というか、逃げるときに見つかった時点で詰んでいたのでやる気をなくしたと言うべきか。

川神駅前のの路地に降り立って、そのまま歩き始める。
……宗介はさっさと諦めていつも通りに菓子でも食って帰ろうと思ったのである。
そしてすぐさま百代が後ろから追いかけてきた。

「宗介ー！　私を置いていくなんてつれないぞー」

「……おい、なんで追いかけてくるんだ」

「そりゃあお前の家を把握するために決まってるだろ～？　で、どの辺なんだ？」

「教えるわけないだろ」

「じゃあいいさ。その代わり、帰るまで付き纏うからな」

「マジかよ……」

「ああ。マジだ」

肩を落としながら歩く宗介と、それに付き纏って笑う百代。
もしもこれが普通に笑いあって歩いてたりしていたのであればデートにも見えるが、今の彼らを見る限りそれはない。百代の風評や川神駅前の商店街であることも手伝って、宗介が百代にたかられてるようにしか見えないだろう。

「……まぁいい。何言っても無駄だろうしな」

「わかってるじゃないか。あそこの店で飲み物でも奢ってくれ」

諦めの言葉を宗介が口にし、それを聞いた百代は近くのファミレスへと腕を引っ張る。
それを聞き、額に青筋を浮かべてピクピクさせながら宗介が静かに言った。

「おい、何故俺がお前に奢らなきゃならない」

「んー？　お前は女に奢らせるのかー？」

「……仕方あるまい」

「よーし、それでいい」

終始がっくりと肩を落としたまま、宗介はファミレスへと入っていった。

＝＝＝

――親不孝通りにて

「今日はなるべく早めに帰ろうと思ったんですけど失敗でしたかねー」

「何ごちゃごちゃ言ってやがる！」

「大人しくしてれば悪いようにはしねえよ。ちょっとこっちに来な」

「な、なあ、すげえいい女だな。なぁ」

「へっへっへ。今日は当たりだ。楽しめそうだぜ」

「俺も、俺もやるぜ。胸が大きい女は好きなんだ」

親不孝通りの一角にあるホテルに帰ろうとしていたメイドが一人、不良五人組に囲まれていた。

ここ最近、治安が悪くなってきているこの通りで、メイド服を着た金髪美女はかなり目立つものだったのだ。

が、そのメイドはただのメイドではない。

ヴィヴィアン・バゼールは、元暗殺者……いや、元忍者と言うべきか。大神宗介の父である大神隼人が息子のお目付け役として引き抜いた実力者である。一時は海外でも『八咫烏』という異名を持つジャパニーズ忍者、暗殺者として一部に知られていた。

「……もう大失敗って感じですね。はぁ――ったくマジふざけんじゃねーよ」

そんな彼女が今、キレて口調が昔に戻っていた。

既に場所は狭い路地。

満足に動けないような場所であり、見つかりにくい場所であり、見つけてもらいにくい場所だ。

路地から出て暴れれば目立つだろうが、ここでならそうでもない。

「何言ってやがる、さっさと服を……」

「いやいや、やっぱここはせっかくメイド服なんだからそのままだろ」

「くくく。外国人じゃん、おら、怯えろよ」

ナイフを突きつけ、行為を強要しようとする男達は気付いていない。

目の前の女が爆弾であり、既に自分達がその爆破スイッチを押してしまっていることを。

「Ｋｉｌｌ　Ｔｈｅｍ　Ａｌｌ！」

瞬間、ヴィヴィが腕を振ったと同時に五人の男が全員ひっくり返った。

そしてもう一度腕を振ると同時、袖の中から5本のナイフが飛び出して、彼らの手をコンクリートの地面へと縫いつけた。

「ぎゃあああああああ！」

「いでえええええええ！」

「ぐあああああああああ！」

思い思いの叫び声をあげてのたうつ不良たち。

近くにいた一人のナイフを思い切り踏みつけてヴィヴィが言う。

「命は取らないでおいてやるが、次からは相手を考えるんだな？」

殺気を込めて不良を睨みつけ、ガクガクと頷く不良を見ると彼女は路地を去っていった。

後には、助けを呼ぶ男達だけが残ったという。

「あれって確かＳクラスに転入してきたメイドだよな？　……ったく、物騒にも程があるだろうが」

遠くから様子を伺っていた代行業者の若者がいたとかなんとか。

＝＝＝

――風間ファミリーの秘密基地、金曜集会にて

「おー。遅くなったー」

「あれ姉さん、遅かったね」

キャップ以外が全員揃った秘密基地へと、遅い到着となった百代へと大和が声をかけた。
それに百代が上機嫌そうに答えを返す。

「宗介にファミレスで色々と奢ってもらった後、家についていったら金髪メイドがいてなー。お茶をご馳走になってきた」

「マジか！？　そういやあいつ来た時にメイド連れてたよな。くっ！　あいつに名前聞いとけばよかったぜ」

舌打ちして反応するガクト。
宗介にメイドの名前を聞くのを忘れていたらしい。宗介が紹介位し

てやるぞと言ってたのを聞いていたのに……という悔恨がよぎったとかなんとか。
正直他のメンバーはどうでもよさそうに見てるが。

「まぁまぁガクト。島津寮にもクリスがきたでしょ？」

「おいおいモロ、同じ金髪ならメイドの方がいいだろー？　それに、クリスよりもあのメイドのほうが年上で好みだった！」

「その台詞、後でそのままクリスに伝えとこうか？」

「ちょ、おい大和！　俺はただ好みを言っただけだって！」

迂闊な事を言ったせいで慌てる岳人に大和の追い討ちが次々と入った。
そんな中、外のほうから原付の音が聞こえてきた。

「この音は、キャップか」

「ああ。間違いないな。この楽天的な“気”は」

そう大和と百代が反応すると、すぐにその本人が現れた。

「ウィース！」

だだだだっ！

「お、駆け寄ってくるとは俺になついてるなワン子」

「待ってたわよ、晩ご飯！」

「あーそっちね。全員揃ってるようだし……始めるか。ほれ！　今日のあまり分だ。量多いぜーフフン」

そう言ってキャップがどんっと置いた荷物の中には、バイトでの収穫物である“寿司”がごっそり入っていた。

キャップの号令で皆の食事が始まって、途中でワン子が百代へと質問をした。

「ねぇお姉さま。結局、大神とはどんな知り合いなの？」

「そういえば姉さん、後では話すって言ってたね」

「おーそう言えば。モモ先輩とあいつ、ヤケに仲が良かったしな。教えてくれよ」

ずっと聞きたかったらしいワン子が質問し、大和が単純に疑問から、キャップが好奇心から百代へと問う。

そんな仲間の質問に、笑顔を浮かべながら百代が口を開いた。

「そうだな。あいつは大和達と知り合う前の馴染みでな……」

＝＝＝

――百代、小学3年生の頃。

風間ファミリー加入の2年前。

「モモ！　ちょっとこっちに来なさい！」

「なんだじじい。呼んだかー？」

百代が川神鉄心に呼ばれて川神院の道場までくれば、そこには自分と同じくらいの少年がいた。
強い意志を秘めた瞳が、現れた百代をじっと見ていた。

「おいじじい、誰だこいつ」

「こいつとか言うな。女の癖に」

「なんだと？」

百代がじじいに話しかけた途端、少年が百代を怒らせるような発言をして、実際ちょっと怒らせた。

「おいお前」

「なんだ」

「ちょっと飛んでみるか」

「やってみろよ」

真正面から向き合って、小学生がするには物騒な会話をする二人。
今のところじじいは構うつもりはないらしい。
そしてついに百代が手を出した。

「はっ！」

手を掴んで、背負い投げの要領で思い切りぶん投げた。
小学生が小学生をぶん投げるという、普通じゃ見られない事が起こっていた。

しかし――

「まだまだ甘いぜー！」

「な！？」

思い切り横に飛んでいくように投げたつもりだが、なぜだか放物線を描くようにして飛んだ少年が、まるで猫のようにスタッと着地したのだ。

「お前、強いな」

「お前こそ女の癖にやるな」

そう言ってお互いに近づいて、今にも喧嘩が勃発と言うところで、そんな二人を川神鉄心が持ち上げた。
そして少し離れた場所に立たせて向かい合わせる。

「こらこら、いきなり喧嘩するのはやめんか」

「じじい、こいつが私をバカにしたんだぞ。それに、こいつは強いから大丈夫だ」

「俺の方が強いけどなー」

「なんだとー！」

「二人とも静かにせんか！」

頭の上から鉄心に怒鳴られて黙り込む二人。

「モモ、この子は今日からしばらく川神院が面倒を見る。仲良くするんじゃ」

「ふーん。強いのは確かそうだしな」

「お前よりもな」

「私のほうが強いに決まってるだろう」

「違うな。俺だ」

「私だ」

「俺だ」

「やめんか！　……宗介君、君もモモと仲良くするように」

争いあう二人をまたも一声で止め、今度は少年――宗介へと語りかける。

それを聞いた宗介は不機嫌そうに言った。

「えー」

「そんな嫌そうにしなくても私だって嫌だぞ」

「お互いにお互いを高めあえる実力を持っているんじゃ。仲良くしなさい」

「「……」」

それを聞いて、じっと相手を見つめあう百代と宗介。

しばらくそのままにしていたが、顔を横に向けながら宗介が手を差し出した。

「仕方ねーな。お前は女にしては強い奴だから仲良くしてやるよ！」

それを聞いて、百代も手を差し出した。

「それはこっちのセリフだ。お前は男にしては骨があるから仲良くしてやる！」

互いにそっぽを向きながら、握手をする二人。

それを見た川神鉄心は、自分の孫に多少暴力的だけどまともな友達ができたことに笑顔になった。

＝＝＝

おまけ

「しょっぱなから喧嘩か……モモ先輩もだけど大神の奴も面白いな～」

「お姉さまと実力を認め合って握手……羨ましいわ」

「怒って人を投げ飛ばすモモ先輩もモモ先輩だけど、それでちゃんと着地する大神くんも大神くんだよね」

「あいつもご愁傷様だな。モモ先輩に嫌われるとかついてねぇぜ」

「……今は仲がいいっぽいんだから嫌われたわけじゃないと思うけど」

「（姉さんが暴力的だったの、その頃からだったんだな）」

思い出話を話された風間ファミリーはこんな感想を抱いたとか。

第九話　ちょっとした思い出話　前編（後書き）

あとがき

過去編、前編。

ちなみに、正義の漢である風太君はしばらく出ません。

俺、川神通信を見てはじめて岳人のほうがまゆっちよりも腕相撲強いって知ったよ。
あと百代、あんまり頭良くないんだな。わかってたけど。百代＞一子＝岳人って始めて知ったよ。何気に下層組じゃねえか。

感想をくれたらうれしいですので、何気ないことでもドシドシ送ってください。

第十話　ちょっとした昔話だな　後編（前書き）

決闘する日、決定！

第十話　ちょっとした昔話だな　後編

――百代が小学3年の頃　川神院にて

「おい宗介」

「なんだ百代」

「今、私のとこから玉子焼きとっただろ」

「取ったがどうした」

「……私もいただく！」

「あ！　こんにゃろ！」

「モモも宗介君も、黙って食事くらいしてくれんかのう」

「まぁまぁ、子供は元気がある方がいいですからネ」

「ちょっと元気すぎると言うか、血の気が多すぎる気もするじゃが、まぁこれくらいなら大丈夫かのう」

宗介が川神院に来て数週間。
宗介と百代の仲は……まぁ、よくなったというか。
遠慮をしない程度に、ふざけあう程度の仲にはなっていた。
今も朝食のおかずを互いにかっぱらったりして諍いを起こしている

が、別に仲が悪いからそうなっているわけではない。
喧嘩するほど仲がいいとも言うが……まぁそういうことなんだろう。

そして飯を食った後、百代と宗介は川神院の修行僧達に混じって鍛錬を始める。
川神鉄心の監督の下に、互いに口げんかしながらもノルマをこなしていく。
普段は少し時間がたてば学校に行くのだが、今日は休日だったのでそれがずっと続いた。

「よーし百代！　海まで競争だ！」

「ふん。私に勝てると思っているのか？」

「あったり前だろー？　俺は最強になる男だぜー。ルーさんも釈迦堂さんも鉄心のじいさんも、俺が強くなって倒してやるんだ」

「ふ～ん。じゃあ私はその後でお前を倒す。そうすれば一気に私が最強だ」

「あ！　お前ずるいぞ！」

「ずるくないぞ。その時にお前が勝てばいいじゃないか。勝つのは私だけどな」

「いいや、その頃には俺は最強だからな。お前にだって負けないぜ」

「私だってその頃には最強だ」

「む～。まぁいい。とりあえず今は海まで競争だ！　ゴー！」

「フライングだぞ宗介ー！」

宗介と百代が仲良く突っ走っていった後。
それを見ていた川神鉄心と、師範代であるルー・イーが話していた。

「二人とも仲がよさそうでなによりですネ」

「そうじゃのう。モモも気を許しておるようじゃし、彼もここに馴染んでおるようじゃ」

「このまま彼にここにいて貰えれば安心できるのですが……彼を預かるのはあと1年半ですからネ」

「ふむ……ままならんのう」

――百代が小学4年になってしばらく経った頃

学校から走って帰りながら、百代と宗介は話し合っていた。

「俺はもうすぐ外国に行って世界を知るんだぜ！　羨ましいだろー！」

「ふん！　遊びまわって弱くなるに決まってる！」

「そんなことないぞ！」

「いいや、お前のことだ。遊ぶのに夢中になるに決まってる！」

「なにをー！」

いつも通りに口喧嘩をしながら、猛スピードで道を走り抜けていく二人。

そんな中一気にスピードを上げた宗介が百代よりも先に立って振り返り、立ち止まって言った。

「おい百代！」

「なんだ宗介！」

「俺はもっと強くなって帰ってきてやるからな！　俺が帰ってきたときにお前も強くなってないと許さないぞ」

「お前に言われる必要なんてないな！　私は強くなるんだから心配なんかいらん。お前こそ、次に会ったときにつまらなかったら承知しないからな！」

「望むところだぜ！」

日が暮れる中、川神院への帰り道でそう言って笑いあう二人。

彼らにとっての強さとは、子供ながらに身近に強い人物がいたからこそわかる大事なものだ。

それと同時に自分が必ずそうなってやるという夢であり、今でさえ強い彼ら自身の誇りでもある。

そして目の前にいるのは、同年代で自分と同じほどの強さを持つ認め合ったライバルだ。
だからこそ、今の二人にとっては強くなることを誓った言葉が大事なものとなった。

「よーし、帰って組手やるぞ組手！」

「今のところ私が勝ち越してるからな」

「俺だ！　昨日のは引き分けじゃなくて俺が勝ってた！」

子供心に深く残った誓いの後、彼らはまた笑って口喧嘩をしつつ、川神院への道を走り始めた。

宗介はこの1ヵ月後、親に連れられて海外へと旅立った。

＝＝＝

――親不孝通りのとあるホテル。

「……で、兄貴が死んで、俺もちょっと死にかけて、お前が来たと。後はお前も知ってるだろ？」

「そうですね～。調べは入れてたんですけど、宗介様はそんな可愛

い子供だったんですか」

「ぶっ殺すぞてめえ」

「はい。自重しまーす」

食後に茶を飲みながら、俺はヴィヴィにちょっとした昔話をしていた。

なんでそうなったかと言えば、ファミレスで奢らされた後に百代のやつが俺の家まで来て、お菓子やら茶やらを散々食った後にヴィヴィにセクハラして帰ってったのが原因である。

それで夜、暇になったからと言われてちょっとした昔話をしていたのだ。

別に話したくないことというわけではないし。

「あの時よりも俺は強くなった。あいつと戦うのが楽しみでしょうがないな」

「……もう戦う日は決めてあるんですよね？」

「ああ、5月1日だ。あっちもじじいが伝えておくと言っていた。次こそは決着をつける」

そう言って笑顔を浮かべる宗介にヴィヴィが問いかける。

「勝ち目はあるんですか？　川神百代と言えば……」

「そんなもん知ったこっちゃないな。勝つのは俺だ」

「……はぁ。言うと思いました」

ため息をついて、菓子の乗ったお盆を宗介の前に置くヴィヴィ。
数年程付き合っているので、それくらいの予測はできるようになったようだ。

「それまで……とりあえず明日はどうしますか？」

「そうだな～。あいつら……風間ファミリーだっけ？　ほとんど島津寮にいるんだよな？」

「そうですね。転入生のクリスさんもそうですよ」

「……あそこ行けば暇つぶしにはなる、か？」

「私は知りません」

「まぁいいか。ゲーセン行ってもいいけど昨日も行ったしな。とりあえず場所調べといてくれ」

「はぁ……わかりました。明日までに調べておきます」

ヴィヴィはため息をつきながら立ち上がってキッチンに向かっていく。
宗介はどこか上機嫌で菓子を食いながら、窓の外を眺めていた。

＝＝＝

「へ～。それでモモ先輩、あいつと決闘するのか」

「そうだ。久しぶりに本気で戦える相手だからな。今から楽しみで仕方ない」

話を聞いて興味深そうに言うキャップに、いい笑顔でそう言ってみせる百代。

そんな中、こっそりと隅で話す二人組みがいたりいなかったり。

「これ、ギャルゲーなら確実にフラグ立ってるよね」

「マジか？　あのモモ先輩に？　ないない」

「そうだモロ。あの姉さんに限ってそれはないね」

「あはは。それもそうだね」

そしてちょっと考え込む者が一名。

「う～ん。あいつそんなにお姉さまと仲が良かったのね。今度ちょっと話してみよっと」

そしてどうでもいい者が一名。

「……（読書中）」

今日もフリーダムな者が多い風間ファミリーだった。

「それにしてもあいつが来たのはちょうどよかったな。今度からあいつに色々奢ってもらおう」

「いや、さすがにそれは迷惑だと思うけど」

「いいんだモロロ。あいつはそれくらいじゃ文句言わないからな」

「（……意外と苦労人なんだなぁ。ゲーセンで見たってスグルが言ってたし、今度話してみようかな）」

＝＝＝

――親不孝通りのとあるホテル

「今、無性に嫌な気配を感じた」

「どうしたんですか？」

「いや、誰かに財布の中身を吸い取られていくようなそんな気配が……」

「いやに具体的ですね」

「むぅ……まぁいい。明日遊ぶために今日は寝るぞ！」

＝＝＝

――夜のとあるゲーセン

「うりゃー！　くらえ１３連コンボ！」

「くっそー！　また負けたー！」

ツインテールの娘とハチマキの漢が格闘ゲームに興じていた。
しかも大声出しながら滅茶苦茶のめりこんでいる。
で、そんなことをしてれば自然に目に付くわけでして。

「てめえらさっきから目障りなんだよぉ！」

「調子乗りやがって……あぁ！？」

「だいたい何時間そこにいるんだてめえらは！」

彼らは何人もの不良に囲まれていた。
そしてやっとゲームの決着がついたらしく、周りを見回す二人。

「また俺の勝ちだーって、ん？　なんだお前ら？」

「くっ！　次は絶対に～って、ん？　なんだお前ら？」

首をかしげながらのん気に周りを見回す二人に、ついに不良たちがキレた。

「てめえら……おい！　こいつらやっちまえ！」

「「「「おう！」」」」

不運なその不良たちは、その二人に襲い掛かってしまった。
まだ片方が板垣一家の一人だと知ってれば、この災厄は避けられただろうに……

そして数分後。

「チャーシューメーン！」

「ぎゃあああああ！」

「はっはー！　正義は勝つんだぜ！　超・サッカーキーック！」

「ぐふっ！」

倒れ伏した不良たちの頭をゴルフクラブで殴り飛ばすツインテールの板垣天使と、思いっきり頭を蹴り飛ばすハチマキ漢の一条風太。彼ら二人によって、不良たちは一瞬で叩きのめされていた。初めに露骨に絡んできた不良が悪いとはいえ、ちょっとばかりやりすぎな気がしないでもない。

そんな中、時計を見ながら天使が風太に言った。

「つーか風太さ、こんな夜までこっちにいるなんて珍しいな。なんかあったのか？」

「ん？　……あ！　もうこんな時間じゃんか！　天～、なんで教えてくれなかったんだよ～！」

「そんなのお前が悪いだろ！　……まぁいいや。明日は学校休みだろ？　だから明日も一緒に遊ぼうな。な？」

「そうだな～。明日も暇だからな。じゃ、また明日な～！」

「お、おう！　また明日！　……さて、リュウもそこらへんにいるだろうしな。あいつも行っちまったからそろそろ帰るか」

今日もちょっぴり危険な親不孝通りだった。

「いや！　ちょっとどころじゃないよな!?　風太！　お前何やってきたんだおい!?」

「正義の執行だ」

「風太は相変わらずですねぇ」

「いえー。じゃすてぃーす！」

「……風太、頼むからもう問題起こすなよ?　ただでさえS組にいられるのギリギリなんだからな」

「大丈夫大丈夫！　全然心配要らないって！」

「……そこが心配だっつーのに」

第十話　ちょっとした昔話だな　後編（後書き）

あとがき

宗介は実はツンデレだったのです。

あと、アレ？って思った方。
そうです。子供の頃はまともに宗介は修行とかしてました。
どうしてこうなったかもそのうち語られます。

ちなみにブレイブルーに作者がハマッったので、ちょっとアレな技も出るかもしれません。

勉強したり小説書いたりエロゲやったりするとムラムラするから困る。
でもアレだ。ヌいたら眠くなるしな。皆も気をつけよう。

第十一話　余計なお世話（前書き）

私は悩んでいる。どの程度まで時間をふっ飛ばしていいのかと。
現在、４月２５日だから、決闘までの５日分くらい書くことあんまないんだよな～。
適当に潰すしかないのかね。

第十一話　余計なお世話

4月25日　土曜日

――島津寮にて

「……ここが島津寮か」

にしては、中から感じる気配が少ないと言うか……
俺がせっかく来てやったというのに誰もいないとか、そんなオチはあるのだろうか。

「一応、一人はいるみたいだな」

――ちょっと壁登って確かめてみるか。
俺は脚にちょっとだけ力を込めて、壁の上へと飛び上がった。
で、変な奴を見つけた。

「……クリスさん、いませんでした。外に遊びに出かけたんでしょうかね？」

「昨日転入してもう友達（ダチ）できたのかな～」

「異国で初日で友達作り……凄い技術（ワザ）です」

「それなのにウチのまゆっちと来たら……」

「うわあああああああ！！！」

独り言ブツブツ言ってるというか、人形と漫才してるというか。
まぁ個性的な奴なんだろう。

「おーい！　そこの一人で騒いでる奴！」

「はひゃいっ！？」

「愉快な声上げるなお前」

まぁ別にいいけど。
手に刀を持ってることよりも、やたら面白い反応のほうが気になるくらいだ。
とりあえずここにいる奴らのことでも聞いてみるか。

「なぁお前、ここに住んでる奴らどこ行ったか知ってるか？」

「い、いえ！　知りません！」

「いや、そんな強く言わなくてもいいぜ？」

「すいませんすいません！」

「別に謝ることもないけどな」

腰の低い奴だな、おい。

別に俺の知ったことじゃないけどな。

「おいおーい。まゆっち、壁の上に立ってる変な人がこっち見てるぞ～」

「ま、松風。そんな風なこと言っては駄目ですよ」

「……メチャクチャ聞こえてるわけだが」

「ほ、ほら松風。あの人が怒ってますよ。謝ってください」

「ごめんごめーん。もう変だなんて言わないぜ～」

「怒る気無くすわこれ」

謝ってるのか馬鹿にしてるのか、というか気が弱いのか気が大きいのか全くわからん。

あれか？　自分の世界に入り込む……内弁慶だったか？　それとも何か違うな。

まぁいい。それよりも問題は目の前のこいつが持ってるモノのことだ。

「それはアレか？　武器か何かか？」

「え、　はい。刀です。国から許可はもらって……」

「――へぇ、そうなのか。……面白い」

「あれー。なんか不穏な空気だぞまゆっちー」

国から許可もらうって事はそれだけ強いって事だよな？
雰囲気としちゃそれほど強そうには感じないが……どうなんだろうか。

「お前、名前はなんて言うんだ？」

「黛由紀江と――」

「俺は大神宗介だ。ちょっとばかし暇つぶしに付き合ってくれないか？　今日は暇でな」

「はいっ！？」

目の前の女が素っ頓狂な声を上げるのが面白いので、俺はしばらく観察することにした。
……やっぱり強くは見えないんだけどな～。
ちょっとちょっかいかけてみるか？

「おいそこの」

「あ、な、なんでしょうか！？」

声をかけるなり睨みつけ（？）て来たので、とりあえず一声かけて思い切り石を投げつける。

「避けるか打ち返すか、とりあえず防いでみろ」

「え？」

「シッ！」

思い切り振りかぶる投げ方ではなく、短距離に高速で石を投げられるように突き出すようにして発射する。
まぁ、軽く銃弾とかレベルのスピードは出たと思うが。

「っ！　はぁっ！」

「おぉ。やっぱやるな」

「い、い、いきなり何するんですか！」

「先制攻撃って奴かー？　宣戦布告なのかー？」

さすがに怒ったと言うか、慌てた様子でこっちに言ってくる。
しかし、あの速度で投げた石を真っ二つとはかなりやるな。
まぁ、素手の勝負じゃないから専門外だけど。

「面白いもの見たぜ。運がよければまた会おう」

さ～て。あいつらがいないって事は当てが外れたな……ゲーセン行くか。仕方ない。

「あ……行ってしまいました」

「まゆっち～。ここで引き止めれば友達できたんじゃないの？」

「はっ！　そういえば共に名前を名乗りあったのに……」

「こういう所でガツンと行かないからだめなんだぜー」

「はい松風。私、次はがんばります！」

＝＝＝

――ゲームセンター

「――理不尽だ」

俺は久しぶりにビキビキ来ていた。
結構最近あったかもしれないが、まぁ細かいことはどうでもいい。
格ゲーの台に座った俺は、思い切りぶん殴りそうになる腕をなんとか抑えた。

知らない相手が２Ｐ側の台に座ったのはよかった。
まぁまぁ手強かったけど、そんなに強くなかったしな。
３回くらいキャラ変えて挑戦してきたけど。
そして「くっそー！　こいつ強い！　おい風太！　お前もやれ！」とかいう対戦相手だったらしい女の声がして、対戦相手が変わったらしい。
その後「よっし！　任せとけ！」とかいうやたらと気合の入った声がして、対戦相手が交代した。

……のだが、そいつがかなり極悪なプレイヤーだった。

バグ技が連発して飛び出してくる。

さらには俺が何回もｎ択を迫っても確実に反撃してくる。しかも偶然振ったとしか思えない攻撃でだ。

普通に動きを見る限りじゃ物凄い初心者っぽい動きなんだが……弱い振りなのか、それとも運が極端にいいのか。

つまり早い話が、対戦相手が男の方に変わってからは負け続きと言うわけだ。

まぁ、当り散らすのもなんだから帰ろう。

しかしここまで負けるとは。このゲームは結構やりこんでる自信があったんだがな……

まぁいい。帰ろう。

――そのゲーム台の反対側

俺は天に言われてそいつと戦って、見事に勝利を手にした。

「どーだ。正義は勝つのだ」

ちなみに使ってるキャラはバリバリの主人公キャラである。

というか、俺はどの格闘ゲームでも主人公キャラしか使わないんだけど。

一番かっこいいのが主人公なんだからか仕方ないよな。

……ま、まぁ脇役でも正義を掲げているキャラなら喜んで使うけど。

「やっぱ風太はすげーなー。相手のジョインジョイントキィがやってきた撹乱するやつさ、勘で当てたんだろ？」

「ああ。俺の勘はだいたい当たるからな」

天の言うとおり、相手の動きは物凄く早かった。天が負けたのはその速度についていけなかったからだろう。
でも俺は勘に任せてとにかく攻撃した。
まぁそれが面白いように相手の攻撃直前にヒットするヒットする。
そんな感じで俺は勝利したのだ。

「すげーよなー。前に亜巳姉たちと一緒にポーカーやったとき、ロイヤルストレートフラッシュとかそろえてたじゃん」

「まーな！　俺は正義だからな。勝利の女神に愛されてるんだって冬馬が言ってたぜ！」

「ウチは風太のデタラメさを知ってるからなー。なんか納得できる。神経衰弱は未だにトラウマだし。リュウなんか本当に神経が衰弱したって言ってたよ」

「お～。それは大変だったな……って相手いなくなったぞ。天もバトルしようぜ」

「おーし！　今度こそ勝ってやるからなー！」

俺が誘うと天があっち側に座りに行ったので、俺もコインを投入す

ることにした。
ふふふ……いくら挑戦しても俺には勝てないということを教えてやるぜ！

＝＝＝

帰り道、俺は河原に寄っていった。
別に俺がロマンチストというわけじゃないが、良い景色というものはそれなりに好きだ。
故に、河原で菓子でも食いながら少し夕暮れを見ようと思ったのだが。
どうやら先客がいたようだ。

茜色に染まる河原に、ちっこい女の姿と背の高い男の姿があった。

「こんなところで何をしているんだ？」

「ん？　ああ、転入生の大神だったな。なんでもねえよ。お前こそ何してやがる」

「ただ河原での眺めを見に来ただけだ。少し前から気に入ってるてな」

「おお～。大神は意外とロマンチックなのね！」

「アホか犬。全く違うわ」

「クリと同じ言い方しないでよ！」

クリスもこいつに犬と言う呼び名をつけたらしい。
まぁ妥当だろう。犬に犬と言って何が悪い。

「犬は……その様子を見るにトレーニングでもしていたのか？」

「そうよ！　それでタっちゃんがドリンクを持ってきてくれたの。
今から再開するところだったのよ」

「……トレーニングね。まぁいい。他の奴らはどこに行った？」

「ここで遊んでたけどもう皆帰ったわよ。お姉さまは川神院で百人
組手！」

「そうかい。雑魚をプチプチッと潰して経験地稼ぎってワケか。そ
りゃ楽しそうだ」

……にしても運が悪いな俺も。
暇つぶしできればいいや程度だったし、真面目に探せば見つかった
だろうけどさ。
あの刀娘が面白かったから満足するか。

「それじゃーあたしはもう1セットダッシュやるからー！」

「おう、がんばれよ一子」

にしても元気がいい犬だ。
今も確か……源忠勝だったな。こいつに送られて河原を猛スピード
で駆け回っている。

……これもみな努力の賜物、か。なんともやるせない。

「そういえば大神」

「ん？　なんだタッちゃんとやら？」

「ふざけんなテメェ。今度そんな呼び方しやがったらぶっ殺すぞ」

ちょっとふざけてみれば思いのほか怒った感じだった。

ふむ、女に言われるのは構わんが男からは嫌か。まぁ当然の事だろうが、反応がメチャ早いことにビックリだ。

「くはは、悪かったな。それでなんだ忠勝？」

「てめえんとこのメイドが路地で不良に絡まれてたぞ」

「それで？」

「怪我人五人で救急車呼ぶ騒ぎだ。あんなところをメイドがうろついてたらそうなるってわかんだろ。少しは自重するように言っとけ」

「それは悪かったな。だが、ヴィヴィにちょっかいかけるほうが悪い。棘のある花かどうか見極め切れなかったあいつらの自業自得だな」

というか針に棘のある魚とかの類だと思うがな、俺は。

もしくは食虫植物とかそんな感じの。

……命が無事だっただけそいつらはマシだろう。

「……ま、確かにあいつらはこれに懲りて真面目にやるようになる

だろうがな。一応、お前んとこのメイドが警察のお世話になる前の忠告だ」

「それはありがとう忠勝。恩に着ると言っておく」

「てめえが素直に礼を言っても胡散臭いんだよ」

「そうだな、それは確かに適格だ。俺自身そう思うくらいだからな」

おかげで偶の良心を働かしてもじいさんに腰を抜かされるほどだ。3ヶ月前に一回やったきりそんなボランティアじみたことしてないがな。

「さて、俺は帰るか。どうせ忠勝はここで犬の訓練でも見てるんだろ？」

「俺はここで寝てるだけだ。バイトまでな」

「そうか。ま、確かに無駄な努力は見るだけ無駄かも知れないな」

「……ちょっと待て、今お前――」

俺がそう言うと、こちらを睨みつけて近づいてきた。どうやら怒ったらしい。

「いや、あの犬に伸び代があまり見えなくてな。だいたい、身体に合わないことを無理にやっても意味がないと思うのは本当のことだろ？」

「だからってお前な、あいつは目標があって努力してるんだろうが。

そういう事言うのはやめろってんだよ」

「気を悪くしたなら謝るって。ただ、俺がそういうの嫌いなだけだからな。それじゃあ俺は帰る。また会おう」

「あ、おいテメェッ！」

「ちょっとゲーセンでイライラしてたから言っただけだ。本気にするなよ」

俺が後ろを向いて帰り始めるなり追いかけて来ようとする忠勝にそう言葉を残し、俺は地面を蹴って跳びあがった。

やれやれ。目をつぶっていても勝てるような奴に、俺は何を熱くなっているのか。

帰って飯食って寝よう。

……あ、あとヴィヴィに注意しとかないとな。

ヤるならヤるで見つからないようにしろと言っとこう。あっちじゃそこらへんルール無用だったけど、こっちじゃそうでもないからな。

第十一話　余計なお世話（後書き）

あとがき

主人公を嫌いにならないでください。
元からこういう子でしたし、理由もあるですから。

さてさて、今後にご期待ですなククク。

タッちゃんとか気色悪いこと言っとけば、いきなり名前呼びしてもへんに思われない不思議。

第十二話　２－Ｓ（前書き）

ほとんど２－Ｓの話だからだよ！
ネタが出なかったんだよ！

第十二話　２－Ｓ

４月２７日　月曜日。

「伝達事項だ。今週は第一回進路希望調査」

との事らしい。

まぁ転入してきたばっかだがそういうのはあるんだろうな。はぁ。

昨日は日曜日だってのに何も面白いことないし。

「各自、連休開けに希望進路を提出してもらう。５月にはそれをモトに個別に進路指導だ。どんな夢でも自由に書くがいい」

にしても進路、か。

そんなもん特に考えたこともなかったなぁ。

強い奴倒すこと、いっぱい戦うこと、じじいや百代を倒す事。そんなんばっかりか。

まぁ進路ってワケじゃないかね、これは。

どっちかというと目標か、それとも夢か。

その後の担任の小島梅子の話は聞き流す。

ま、学校の窓ガラスが誰に割られようと知ったこっちゃないしな。

「大神くんはなんか進路希望あるの？」

「くん付けは珍しいな……大神もしくは宗介でいいぞ陰薄いの」

「影薄くはないから！　前も言ったよね同じこと！」

「そうだったな、師岡だったか」

皆が進路希望調査のことで話し合っていたせいか、俺にも話が振られてきた。

影薄い奴……もとい師岡卓也だったか。俺に話しかけるとは奇特な奴だ。

「特に進路希望はないな。アメリカじゃラスベガスが一番面白かったが」

「いや、ギャンブルは職業じゃないでしょ」

「つーかあのメイドはなんなんだよ」

「秘書だ」

師岡に加えてゴツい身体の島津までこちらに話しかけてきた。

メイドが気になるのか？　あれが美人だからか？　俺は全く興味ないが。

「おいおーい。あんな完璧なメイドさんが秘書？　俺が写真撮影しに行ったらニッコリ笑って最高の被写体だったぜ？　完璧なメイドだろ！」

「マジか！？　その写真見せろヨンパチ！」

「あのメイド……ヴィヴィアンさんだっけ？」

「そうだ。ヴィヴィアン・バゼールで間違いないぞ」

「意外と面白い人なの？」

「……いや、さすがにそんな奴だったとは記憶していないぞ」

というか何してるんだあのバカメイド。

福本育郎……通称ヨンパチだったか。ヨンパチに写真撮影されて笑顔を向ける……？

何を考えているんだろうか、ヴィヴィは。

「そうだ！　大神、この前にメイドを紹介してくれるって言ってただろ？」

「ああ、ヴィヴィのだな。何から紹介すればいいんだ？」

「名前はもう調べたからいいぜ。名前はヴィヴィアン・バゼール。金髪のメイド美人で、見るからに巨乳だった」

「そういえばもう撮影してるんだったね」

「ぬおおお！（写真を見ながら）　これは遠目から見ても美人だったが笑顔だともっといい！　大神！　俺にもヴィヴィアンさんの連絡先を教えてくれ！」

なんかやたらと暑苦しく島津が詰め寄ってきた。
鼻息荒くして寄るな。気持ち悪い。

「……ああ、それじゃあ携帯電話の番号とメルアドでも渡しといてやる。ま、後は勝手にしろよ」

「お前最高だ！」

「俺にも頼むぜ！」

押しかけてきた島津とヨンパチにヴィヴィの連絡先を教えてやった。
……いきなり電話とかメールしても嫌われるとは思うが、知ったこっちゃない。
それくらいは自分で判断するだろう。

「師岡もいるか？」

「僕はいいよ。というかそれって許可もらってるの？」

「俺の独断だ」

「なおさら悪い気になってきたよ。遠慮しとく」

「賢明な判断だと思うぞ」

正直言ってあのヴィヴィと親密になったとして、長持ちしないだろう。
あいつ色々と危ないしな。そもそも接触方法が電話じゃ無理だと思うが。

「大神君、クリスのこと避けてない？　なんかあったの？」

クラス内でのちょっとした口喧嘩を鎮圧したクリスを観察した後、近くにいた小笠原千花にそう聞かれた。

別に避けてるわけじゃあないが、他人にはそう見えるらしい。

「ただ、複雑と言うか単純明快というか、説明しがたい事があってな」

「なになに？　面白い話？　昔の男女関係とか？」

「……何をそこまで食いつく」

別にかまわんが。

「ここにクリスが来る前に、京都で観光していたと言っていただろう」

「そういえばそう言ってたわね。それがどうかしたの？　大神君も京都にいたとか？」

「よくわかったな。そのとおりだ」

「それ本当!?　すごい偶然の再会じゃない！」

「別に顔を合わせたわけじゃないんだがな。ドイツ軍の連中といざこざがあっただけで」

「……え？」

今まですごく話しに食いついていた小笠原がビシッと固まった。

「俺は甘いものが好きだから京都の和菓子巡りをしていたんだ」

「あ～、うん。よくうちのお店にも買いに来るもんね」

「それでなぜかドイツ軍と鉢合わせしてな。そいつらがやたらと騒がしかったから腹が立ってつい……」

「ついって……何したの？」

「いや、言わないでおこう。一般人は聞かないほうがいい」

俺はそういって机に突っ伏した。

「ちょ、そういうのが一番気になるって！」

いやいやさすがに言えないだろう。

調子に乗ってドイツ軍を清水の舞台から投げ落としたとは。

にしても、あの犬はまたトレーニングか。

視界の端に空気椅子をしている小さい姿が入ってきた。

……はぁ。クラスが騒がしくなってきた。このまま寝よう。

＝＝＝

２－Ｓとは。
成績優秀者の中で、名門への進学を希望する人間達で結成された得心クラスである。

「ふんふんふーん、ふふん♪」

「ううむ。やはり肌に不純物がない娘はいいな」

「Ｚｚｚ……Ｚｚｚ……」

その中でも特に異彩を放つ３人組がいた。
鼻歌を歌って何かを作っているのは真っ白な印象を抱かせる美少女、榊原小雪。
幼女の写真を見ているハゲは井上準。
そして完全に爆睡状態で幸せそうな寝顔をしているのは一条風太。

「準、風太～」

「なんだ。俺は今小さい女の子の写真を慈愛の目で見つめているんだが。野に咲く花を見るように」

「Ｚｚｚ……Ｚｚｚ……」

「紙芝居、できた」

「お、新作完成か」

「おー。榊原小雪第２３作目」

「Ｚｚｚ……Ｚｚｚ……」

自分の紙芝居ができて、それを見せようというのに目を覚まさない風太に小雪は少しだけ怒った。
というかむっと来た。そして行動を起こした。

「む～」

「まぁまぁユキ、風太は昨日もツインテール娘に引っ張られて忙しくてだな……って何するつもりだ？」

「てーい！」

「ぐわばっ！」

「おぉい！　思いっきり爪先踏んづけるとかえげつないぞ！？」

「えへへ～」

「褒めてない！　風太、大丈夫か？」

小雪の鍛えられている脚が思いっきり寝ている風太の脚を踏んづけて、叫びを上げて風太が机から転げ落ちた。
それを心配した準が倒れた風太に駆け寄る。

「夢で……リンゴ怪人に追っかけられた」

「っておい。どんな夢だ。というか脚は大丈夫なのか？」

「脚？　……ってなんじゃこりゃ！？　靴が潰れてる！　俺がつっかけただけで寝てたからバチがあたったのか！？」

「心配して損したよ」

なんともないらしい風太に安心して立ち上がる準。
そして小雪の紙芝居ができたことを風太にも説明して、榊原小雪第２３作目の紙芝居が始まった。

「はじまりはじまり～」

「いぇー！　待ってたぜ！」

やたらと盛り上がる風太。
製作途中の段階から気になってたらしく、見れることができてご機嫌らしい。

「タイトルは“俺、天才君”」

「なんか鼻につくタイトルだな」

「偉い奴の話か？」

「あるところに、地主がいました。彼の趣味はハワイでカジキの一本釣りです」

「設定まで鼻につくな」

「ハワイでカジキって一本釣りできるのか！？　行ってみたいな～」

「彼には子供がいました。名前は璃依哉」

「最近、痛い名前をつける親が多いからな」

「たしかにそんな名前の奴見たこと無いな～。あ、でも天……」

「風太、一応黙っとけ」

「そうだな。なんか言ってはいけない気がする」

「りいや君は頭が良く、あだ名も天才君です。村長さんが先物相場で失敗した時も天才君が適切なアドバイスを出して乗り切りました」

「ほう、そいつは確かに天才君だ」

「頭がいいのか。……羨ましいな～」

「村長さんが、37歳の妾を作ったことが奥さんにバレても、見事奥さんをクールダウンさせました」

「妾の年齢がリアルだな」

「妾……うん、わかるぞ。意味くらいは冬馬と勉強したからな。うん（↑わかってない）」

「村長さんが同姓である男の味に目覚めた時も、自分は狙われないように工夫しました」

「つーか村長さんロクな人間じゃないな」

「男に目覚める……？　ああ！　冬馬のことか？」

「若とそんなのと一緒にするんじゃありません！」

「おぉう！？……ビックリした。そうだな。リュウみたいな奴のことだな、うん。なんか男がどうとか言ってたし」

「ここから本編。天才君は、人気はあるし仲間もいますが、本気の彼と互角に話せる人はいません。そういう意味で一人です」

「うーん。なんか可哀相な奴なんだな」

「寂しいので他の天才と呼ばれる人に会いました。話してみると相手はそこまで天才ではありません。天才君は、他の自称天才達にも会いました。でも誰も彼ほど天才ではありません」

「強者ゆえの孤独って奴だな！　本で読んだぜ！」

「それとはまた違うが……まぁいっか」

「周囲の人間は誰も彼の孤独を分かってくれません。孤独の果てに――天才君は狂ってしまいました。ＴＨＥ・ＥＮＤ」

「終わりかよ！　つか暗い！　底なしに暗いぜ……」

「さすがユキ！　斬新な紙芝居だぜ」

「斬新とかいうレベルじゃねーぞ!?　つか地主は？　金持ってるだろ」

あまりにもあまりな終わり方に、アホな事を言う風太にツッコミを入れた準が小雪に質問する。
それにあっけらかんと小雪が答えた。

「痴情のもつれで刺されて逝きました」

「いつもながら救いがねぇ……」

「それが、現実」

「世知辛いねぇ」

「俺はそんなのには縛られないぜ！　なんたって俺は正義の味方だからな」

「……お前さんはずっとそのままでいてくれよ。見てるだけで面白いからな」

そんな中、教室の向こうからなにやら騒がしい音が聞こえてくる。

「……お、この騒がしさお隣さんの２－Ｆか」

「またあの低レベルクラスか。目障りじゃ。高貴な血筋の此方が、指導する必要があるのじゃ」

２－Ｓのクラスは隣の２－Ｆのクラスの騒がしさを嫌っている。その筆頭ともいえる人物の一人がこの和服を着た女子生徒だ。

「高貴と言えば、この不死川心じゃ」

「そして正義と言えば！　この一条風太だ！」

「お主は毎回毎回……！　一々此方の言葉に便乗するでない！」

「だってああ言われたら言わなきゃだめだろ？　というか言いたくなるって」

自分の言葉に便乗されて言葉を言われて怒る不死川と、全く気にしてない一条風太。

正直言えば、彼女や他の一部のクラスメイトにとって一条風太が何故このクラスにいるのかは疑問である。

だが実際にＳ落ちしていない以上は存在を認めざるを得ないのであ

り、この明るい性格も個性であると納得しているのだ。
それでもイライラするものはイライラするのだろうが。

「ああ言えばこう言う……ここは一度高貴なる此方が指導を――」

「まぁまぁ喧嘩するなって。お、うちのクラスの騒がしいのも来たみたいだぜ」

「げっ！！　……あ、ごほん。許せ。選ばれた人間である此方が下品な発言を……」

不死川が自分の発言をごまかそうとしているところで、教室の扉が豪快に開いた。
そしてそこから金ぴかの生徒、九鬼英雄とそのメイドである忍足あずみがやってきた。

「フハハハ！　皆のものおはよう。九鬼英雄である」

「おはようございまーすっ☆」

「さぁ我に挨拶をする権利をやったぞ庶民共」

そう言い放つ英雄に、２－Ｓの生徒達が次々と挨拶をしていく。

「おっはー♪」

「はいはい、おはよさん」

「おはよーーーーう！」

「（財力はともかく家柄は此方の方が上じゃ）」

「うむ。今日も精一杯生きているようだな庶民共」

満足げに頷く英雄。そして不死川の目がはれぼったいことに気付いてあずみに対処させるるなど、意外とというかかなり優しい一面を見せる。

そんな中で準が、あずみが取り出した蒸しタオルにつっこみを入れた。

「つーかなんで蒸しタオルなんて持ってるんだよ」

「メイドのたしなみですっ☆」

昨今は、その言葉一つで摩訶不思議現象が解決されるご時世らしい。全く持って不可解極まりない。

そして英雄が川神一子を見るために２－Ｆへと行ってしまい、そこにはあずみが残ってしまった。

「まずい、英雄だけ行きやがった。という事は」

その目の前で、自分のミスのために自分ではずした腕を嵌め直し、明らかに違う雰囲気となったあずみがいた。

「やれやれ。ミスすると腕一本。メイドもつらい。おい、ハゲ！何こそこそしてんだ！」

「いや、別に俺はコソコソなんてしてない……」

「あたいは腹減ってんだ。焼きそばパン買ってこい」

「く、主人がいなくなった瞬間に本性を出しやがって」

「なんか言ったかゴラ。タマすりつぶすぞ！」

英雄がいなくなった途端に態度が豹変するメイド、忍足あずみ。

準はそれを知っているがゆえに逃げようとして、逆に捕まったようだ。

南無。ハゲだけに。

「行くよ。代金くれよ」

「つけとけハゲ」

「いつ払ってくれるんすか？　たまってるんですが」

「知るか。アタイ怒らせると耳からコーラ飲ませるぜ」

「ひでぇ扱いだ、まったく……行くよ行きますよ」

ブツブツと愚痴りながら、準は焼きそばパンを買うために教室から出て行った。

それと入れ替わりに、一人の女生徒が教室へと入ってきた。

「ユキ。お前は肩揉んでくれや」

「あらあら。主人がいなくなれば随分と横暴なんですね。あずみさん」

「あぁ？　黙ってろよ猫被りやがって。てめえの年齢バラしてやろ

うか？」

「ウフフ……ぶっ殺しますわよ？」

「やってみろよ。その時死ぬのはてめえだけどな」

文句も言わずに肩を揉んでいたユキがいつの間にかその場を去り、英雄に挨拶したあとでまた寝ていた風太の後ろへと隠れた。

メイドにあるまじき黒いオーラがぶつかりあい、周囲へと撒き散らされていた。

というかよくこんな中で眠っていられるものである。

そんな中、焼きそばパンを買ってきた準が帰ってきた。

「オラ、買ってきたぞメイド……ってぬぉわ！　なんだこの空気！　すごい黒い！」

「おい、買ってきたんならさっさと渡せやハゲ」

「そうですよ。お使いしたならさっさと渡したらどうですか？　何もしませんから」

「こんな空間の中に足を踏み入れろと！？」

知らないうちにメイド二人に敵意を向けられて驚く準。

誰だっていつの間にか敵意を向けられていればビックリするから仕方ない。

そこへ、今の彼にとっての救世主となる人物が帰ってきた。

「フハハハ！　英雄の帰還なり！！　拍手で迎えろ」

「（パチパチパチ）お帰りなさいませ英雄様☆」

あずみが普段どおりの猫を被った事によって、それに対するヴィヴィも場が白けたのか敵意を収めた。
おかげで一瞬でいつもどおりの空気へと戻ったのだ。

「やれやれ。英雄が帰ってきたおかげで助かったぜ」

心底そう思う準であった。
ちなみに後々彼はこう語る。

「メイドなんてもんはな。幻想だ。どいつもこいつも黒いのばっかりだ。ただ、幼女がメイドをやるんなら話は別だ。それは清らかなる心を持った本当の天使だ」

更に深いロリコンの道へとはまり込んだらしい。

第十二話　２－Ｓ（後書き）

あとがき

いつのまにやら１０万ヒット。
嬉しい事この上ないな。全く。

どうでもいいが、原作マジコイのアフターストーリー。
やってて殺意の波動に目覚めそうなんだが大丈夫か？

大丈夫じゃない、問題だ。

第十三話　譲れないモノ　前編（前書き）

皆にもあるよな、譲れないモノってのがさ。

俺か？　もちろん俺にもあるぜ？

コレまでの人生で一度も三食欠かしたことがない事とかな。

第十三話　譲れないモノ　前編

４月２８日　火曜日

朝登校していると、遠くから笛の音がした。
陸上部でもいるんだろうか。いや、それなら連続してピッピッという感じか。

にしても、朝からヴィヴィが不機嫌だったのには驚いた。
携帯電話の番号を勝手にあいつらに教えたのがまずかったんだろうか。
アメリカ人はガタイがいい奴が好きだと聞いた覚えがあるが、節操無さ過ぎだったりしたんだろう。たぶん。
おかげで心なしか、今日の朝飲んだほうじ茶が不味かった気がする。

今日も俺が家を出る前に飛び出してったし、得体の知れない女が怒ってるときには触れないほうがいいもんだな。
一緒に登校しなくて大正解だぜ。
不機嫌なメイドを侍らして歩くとか面倒だしな。色々とさ。

で、変態の橋とやらのたもとにつくと。

「兄者！　あれが川神百代じゃけぇのぉ！」

「ウム。噂にたがわず美しい。満点で合格だな」

なんとも気色の悪い事を言っているバカ二人がいた。
関わるのも面倒なのでスルーしようとした俺の耳に、聞き捨てなら無いセリフが聞こえてきた。

「道場の世継ぎを作るために強い嫁を探している」

「川神百代。お前俺達と来い。妻になるけんのぉ」

……なんともムシャクシャする言葉だが、俺がぶちのめしても場がこじれるので我慢しよう。
なんか、視界の端っこのほうでギャースカ騒いでるアホがいるような気がするけど。

「おい準！　俺を止めるな！　あんな不埒な発言をする奴はとっちめてやる！」

「おいおいおい風太、あれはモモ先輩の相手だから、お前が出て行って問題こじらせるなよ」

「そうですよ風太。あんまり邪魔しちゃいけません」

「でもだなー！」

「聞いてくれないなら仕方ありません。ユキ、風太を止めてください」

「りょうかーい♪」

ああ、今ちょうど白い女の物凄い蹴りが騒いでるアホの腹部に直撃した。
思わず蹲った所をハゲの男が抱えあげて連れて行った。
この場に集まった観客が道を開けるということは、そこそこ有名人なんだろうか。

しばらく目を離していると、バカ二人の相手は百代ではなく筋肉バカっぽい島津と、素手のクリスが応対していた。
島津はバカ兄弟のでっかいほうの攻撃を受け止めて、ボディブローを食らわせた。
クリスはなにやら身体的特徴を挙げられてキレたらしく、バカ兄弟の弟の方を瞬殺していた。
その後に、まだ立っていたバカ（兄）を島津がラリアットでぶっ倒した。
風間ファミリー、やっぱりそこそこ強いらしい。
島津は力押ししただけっぽいけどな。
あと、土曜日に見かけた刀娘があいつらと一緒にいた。
どうやら風間ファミリーに入ったらしい。

なんか変人率が上がってる気がするな。見てて面白い連中だ。
さて、観客も散らばり始めたところで学校に向かうか。

＝＝＝

休み時間、クラスの連中が和気藹々としているのを眺めていた時のこと。

「大神は誰かと話したりしないのか？」

「俺は別にそういうのどうでもいいしなー。面白そうなら首突っ込むけど。というか誰だお前」

「直江大和だ。よろしく」

いかにも知恵が回るといった感じのクラスメイトが話しかけてきた。
その後ろには無口そうな女子も佇んでいる。
そっちの方はこっちに全く興味なさそうだが。

「よろしくされる覚えはねーけどな。で、なんか用か？」

「いや、大神は姉さんと知り合いだったんだろ？　一応仲良くしとこうと思って」

「姉さん？」

俺が首をかしげると、横にいた女子が口を開いた。
全く話さないような奴かと思えばそうでもないのか。

「モモ先輩のことだよ」

「あ～？　確かあいつには兄弟なんかいない気がしたが」

「俺は舎弟なんだよ」

「舎弟……？」

とどのつまり、目の前のコイツは百代の子分と言うことか。
あいつはそこまで頭がよくないからな。知恵の回る奴を子分にするのはいい判断だろう。

「そうか。あいつの舎弟か。面白いな。ところでお前は誰だ、無口女」

「……椎名　京」

「そうか。不機嫌そうだから苗字で呼んでやるぞ、椎名」

「大和、こいつムカつく」

「初めからこういう奴だってわかってただろ？」

「……大和がそう言うなら」

まぁいい。一応仲良くしておこうって考えなら、こっちも一応仲良くしといてやろう。
百代の舎弟とやらなら、尚更な。
……ふむ。

「そうか大和、椎名とやらはお前の女なのか」

「バッ！　なんでそんな――」

「俺の耳は地獄耳だ」

頼んでも無いのに俺に対してクラスの女の情報を漏らしまくる、ヨンパチという奴がいただけの話だが。
よっぽどヴィヴィの携帯の番号をくれてやったことが嬉しかったらしい。
どうせ何の活用もできんだろうから、そのうち持ってるって事だけを自慢してそうな気がするが。
で、そのヨンパチが椎名　京は直江大和の女であるとか言っていた。
まぁ、目の前の状況を見れば一発でわかるというものだが。

「大和、私たちは転入生が一目でわかるほど愛し合ってるね」

「そんなことしてない。大神の目が疲れてたんだ」

「もう、朝もあんなに激しかったのに」

「ただベッドの上からお前を押し退けただけだ」

思いっきり接近しようとする椎名に、なんとか逃れようとする大和。
なかなか面白い奴らだと思った。

＝＝＝

昼休み。
バカなロリコンと百代のラジオを聴きながら窓の外を眺めていれば、ヨンパチが騒動の種を持ってきた。
なんか面白そうだったので、屋上に見物に行く奴らについていくことにする。

「良く来たのじゃ！　その度胸は褒めてやる」

なんか着物を着たやたらと偉そうな娘がいた。
周りに聞けばどうやら、賭けをやってて負けたので仕返しに来たらしい。

「闘うのは此方ではないのじゃ。葵君、頼んだぞ。ぶったおすのじゃ！」

「葵……葵冬馬か！」

あの偉そうな娘に勝ったらしい大和が、葵という名前に反応した。
そして出てきたのは、いかにもな感じのイケメンな優男。
出てきた途端にさっきの偉そうな着物娘を抱きしめているし、これも大和と同じく頭脳を使うっぽい感じの男だが……気色悪いと言うか、得体が知れないと言うか。
この葵冬馬という男、周りの女子達がキャーキャー騒ぎ出すほどには人気らしい。
……というか、大人気だなオイ。
しかもアメリカにもいたガチムチ系の奴らとは違うが、男でも食っちまいそうな発言してるし。
あ～、マジで気分悪い。

「きちんと決着をつけよう。放課後またここで」

「はい喜んで。闘ってくださりありがとうございます。時刻と場所を決める……デートにもとれて素敵です」

……茶が飲みたい。思いっきり渋い茶が飲みたい。

この変態め。

今だけはこいつらを応援してやってもいいかもな。

変態がムカつくから。

――放課後。

屋上にはかなりの数の野次馬がゾロゾロと集まっていた。

葵冬馬の後ろにはかなりの女子が集まって黄色い歓声を上げている。

対する大和の後ろには男子が大勢、どうやら葵冬馬という人気者が敗北するのが見たいようだ。

嫉妬か……醜いなぁオイ。

というか、あっち側の観客に見覚えのある白い女生徒とハゲとハチマキが見えるが……

「今、陸上部の奴らがタイムはかってるだろ？　あの最後の組に走る奴ら４人の中で、誰が一着になるか賭けないか？」

「なるほど簡易的な競馬ですね。これは面白そうだ」

大和はなかなか興味深い賭けで勝負をするようだ。

そして葵冬馬の方もそれを受けた。

こんな種目で決闘とか、尋常な勝負をするって事はだ。大抵が八百

長とかあるものなんだが……
最初からこうすると決めていたんでなければ根回しは無理だろうな。
この場合、勝負の内容を決めた大和のほうが圧倒的に有利なんだろうが……
どうやら相手のほうが一枚上手だったようだ。

大和が勝つと賭けたロン毛の奴のスピードが急に落ちて、葵冬馬が賭けたイガグリ頭の奴が先にゴールした。

「なん……だと？」

あの大和の愕然とした顔を見るに、何かしら仕込んであったんだろう。
しかしそれが負けたんであれば……おそらくは葵冬馬も仕込みを行っていたんだろう。
だから大人しく勝負を受けた、か。

「危ない危ない。ひやっとしましたよ。私の勝ちですね」

何にせよ、この勝負を自信満々に受けた大和の株は急降下か。
クラスメイトの厳しい視線を受けるがいい。

「それでは私たちはこれで――」

そして葵冬馬が、後ろにいたハゲやら白娘やらハチマキやらと帰ろうとしたときにそれは起こった。

「待てよ」

「ん？」

「大和を倒すなんてやるじゃねーか。俺とも遊んでくれよ」

それに待ったをかけたのは風間翔一……風間ファミリーのリーダーだっけか。

確かキャップと呼ばれていた。バンダナの奴だな。覚えやすい。

今度はその風間が決闘を持ちかけた。

「俺と大和は友達なんでな。仇討ちだ」

「私が出てきたのもクラスメートの仇討ちが目的。ならばもう一度相手しましょうか」

葵冬馬のほうも乗り気のようだ。

しかし、風間のほうは頭が割るそうだし葵冬馬の方は運動はできなさそうだ。

これでは決闘として成り立たせるのは難しいと思うが……

「待った！　若が2度も闘うことはねぇよ。俺がやるぜ。昼休みの怪我は何とか治ったしな」

「おい準～。キツイなら俺がやるぞー！」

「お前はそこで若と一緒に見物でもしてな。偶にはかっこつけさせろよ」

「わかったー。でも負けたら罰ゲームだからな」

そこで葵冬馬と仲がいいらしいハゲが相手を変わった。

そのハゲをハチマキ男が心配する声もするが、変わる気は無いらしい。
種目はこの屋上から校門までの競争だ。どっちも足に自身があるらしい。
……昔は競争やったっけなぁ。今じゃあ一っ飛びなのが悲しい。

そして競争開始。
ハゲがスタートと同時に走り出したのを風間はただ眺めていた。
それに対して皆がどうしたんだと思う中、奴は誰もが想像しなかった手段を取った。

屋上から飛び降りたのだ。

そして一番高い木に飛び移った。
さすがに、直に着地する程優れた身体能力を持ってるわけじゃないようだ。

ここまですれば風間の勝利は確実だろう。
無駄にかっこつけたハゲ。なんともいえないかっこ悪さだ。

そしてそのまま風間が差をつけたままゴールした。

「あ。準の奴負けやがったよ。どうするユキー。罰ゲーム」

「えぇっとー。準の机の中の写真を紙吹雪にしましょうー」

「おー。そりゃいいな。でもさすがに可哀想だな。あの頭にオイル塗って光らせるとかどうだ？」

「ピカピカだねー」

なんかえげつない会話が聞こえた気がするが、まぁいい。

風間はゴールしたあとそのまま学校の外へと去っていった。

話を聞く限りではそのままバイトに行ったようだ。

風のような奴、か。

確かにそうだな。

風、風か。うん……何か引っかかるがまぁいいか。

面白いもんも見たし帰りますかね。

＝＝＝

――夜の河原にて。

「てやぁぁー！　フィニーッシュ！」

ピッ！（ストップウォッチを止める音）

「おっとぉ。タイムがついに落ちてきたぞ」

そこには未だにトレーニングを続けるワン子と、それの相手をしてやる岳人の姿があった。

「はぁっはぁっはぁっ我ながらスタミナ不足ねぇ」

「いーほうだろ、欲張るなよ、ワン子のくせに」

「まだまだぁ。強靭な足腰を身に……ん？」

トレーニングが一段落し、休憩に移ろうとしたところでワン子が何かに気付いた。
河原に自分達以外に人がいることに。

「フハハハハハ！　休憩中ならば都合がいい！　あずみ！　ここで車を止めよ！」

「はっ、かしこまりました英雄様ぁぁぁ！」

そこにいたのは九鬼英雄とそのメイドの忍足あずみ。
ワン子が苦手とする人物である。
英雄の方がそのことに気付いてるのかどうかは知らないが、彼はワン子のことが大好きらしいが。

「我が愛しの一子殿！　元気そうで何より！」

「あはは、まぁねぇ」

「ちなみに我も元気だ！　見よこの栄光の印！」

「そ、ソレは良かったね」

「夢にむかい努力する姿、相変わらず輝いている。流れる汗は、ダイヤモンドよりも美しい！」

「え～と……」

「我と交際してくれ。交換日記から申し込む！」

とにかく押し押しでワン子に気持ちを伝える英雄。
交換日記からという部分を聞くと、彼が本当に気が強いのか実は気が弱いのかわからないような気になってくる。
いや、まず間違っても気が弱いことなんてありえないのだが。
純情とでも言えばいいんだろうか。

「……それは、ごめん」

「そうか。ではまた日を改めて申し込もう」

彼が交際を申し込み、ワン子が断る。
こういったやりとりは既に幾度も繰り返されているが、彼は諦めていない。
おそらく彼は彼女が振り向いてくれるまで諦めないだろう。
それが九鬼英雄という男である。

「何か鍛錬に必要な物資があれば我が九鬼財閥の力を結集させて、なんでも調達してご覧にいれるが？」

「お気持ちだけ、もらっておくね。ははは」

「ワン子。トレーニング残ってるなら続けちまえ」

「う、うん。それじゃ九鬼クン、アタシ悪いけど」

「ああ。我にかまわず続けてくれ。もう口は挟まない」

「うん……」

英雄がなおもワン子に話しかける中、彼女は岳人にトレーニングの再開を勧められて話を打ち切った。

ワン子がそう言えば、あっさりと引き下がる英雄。

嫌いになりきれない理由には、こう言った素直な部分が彼にあるからかもしれない。

「――よし！　ダッシュ再開！」

そしてワン子はさっきのように、トレーニングを再開させた。

「練習スイッチに切り替えたな」

「あの集中力の高さも一子殿の長所だな」

「なんだよ九鬼帰らないのかよコラ」

「フハハハ、折角なので目に焼き付けておく」

河原でワン子のトレーニングを見守る男二人が会話をする。

そんな中、岳人が疑問を解消しようと英雄に話しかけた。

「……しっかしわからねーな」

「何がだ庶民。質問することを許可してやろう」

「お前なんて死ぬほど金持ってるんだし。大抵のねーちゃんは食い放題じゃねーのか。なんでワン子なのよ？」

岳人は、英雄がワン子にベタ惚れなことを疑問に思っていたらしい。確かに多くのものは疑問に思うだろうことだ。
九鬼財閥の御曹司である九鬼英雄が、何故庶民たる川神一子に惚れているのか。

「夢に向かう、ひたむきさだな。見よあの懸命な横顔。人間は美しい。そう思える」

「へぇー」

「初めは、我も応援しているだけだったのだがな。応援しているうちに目に焼きついてしまってな」

それが彼の、川神一子に恋をした理由。
辛い過去をもつ英雄だからこそ、ワン子の努力して夢を目指す姿を好きになったのだろう。

「ふーん。じゃあ今度は――」

「あれ？　お前ら何してるんだ？　こんなところで」

しかし、そういったひたむきさを忘れてしまい、逆に嫌悪してしま

うようになった人間もいるのだ。

夜の河原に現れたのは、メイドを引き連れた大神宗介だった。

第十三話　譲れないモノ　前編（後書き）
あとがき
次がブラックだな……
皆のもの、覚悟はいいか？
俺はできてる。

第十四話　譲れないモノ　後編（前書き）

書いてる途中で熱くなりすぎたｏｒｚ
読める代物だろうか。

第十四話　譲れないモノ　後編

「あれ？　お前ら何してるんだ？　こんなところで」

夜の河原へと、ゲーセン帰りの大神宗介が現れた。
今日はメイドを一緒に連れての寄り道だったらしい。
メイド相手に格闘ゲームで鬱憤を晴らすとは微妙に情けない気がしないでもない。
まぁ、ゲームセンター内ではかなり目立ったんじゃないだろうか。

河原で話し合っていた九鬼英雄と島津岳人に近寄ったのは宗介一人だ。
メイドのヴィヴィの方は少し離れた場所で様子を見ている。

「おお、貴様は確かＦクラスに入ってきた転入生だったな」

「大神じゃねえか。後ろにはメイドさんもいるしよ。どうしたんだ？」

「俺は暇つぶしに駅のほうで遊んでただけだ。こっちにきたのはまぁ……ちょっとした寄り道だな」

目を細めて眠そうにそう言う宗介。
それを聞いて英雄が納得したように口を開いた。

「見物とは一子殿の鍛錬のことか？　それならばしかたあるまい。
あれほどに美しく価値のあるものは無いからな！」

腕を組んだままで、未だに鍛錬を続ける川神一子を見ながら言う英雄。
横では、そこまで言うかというような感じで島津が微妙に呆れているが気付いた様子は無い。
そして英雄が口を開くまで待った所で、宗介が口を開いた。

「才能の限界に気付いてないみたいだしなー。見てて可哀想だよな？」

それを聞いて、英雄と岳人の顔色が変わった。

「貴様――」

「おい大神、いくらお前でもそういうこと言うなら――あれ？　おい九鬼、どうした？」

「一子殿を侮辱したな貴様あああああ！」

突然にブルブル震えだした九鬼に、宗介へと忠告しようとしていた岳人がそちらを向いた。
その途端、ぶち切れた九鬼が憤怒の形相を浮かべて宗介へと殴りかかった。

「よっと。そんなに頭くることかよおい」

その拳を避けながら宗介が言った。
それを聞いてすぐさま体勢を整えた英雄が、自分の従者を呼ぶため

に声を張り上げた。

「貴様は絶対に許しておけん！　あずみっ！」

＝＝＝

「はいっ！　英雄様――っく！」

いつものように元気良く返事をした忍足あずみはすぐに英雄の下に向かおうとして、視界の端から飛来するモノを察知してとっさに飛び退った。

「針か……」

「あら、よく避けましたね（当たれば数分は動けない毒が塗ってあったんですが……さすがは女王蜂。この暗闇の中で避けるとは）」

「てめぇ、邪魔する気か？」

本性を現して、自分へと針を飛ばしてきたヴィヴィアンを睨みつけるあずみ。

ヴィヴィは内心避けられたことに驚きながら、自分の内を見せない微笑み鉄仮面で応対した。

「少々、思うところがありまして。邪魔してほしくないんです」

「なら……押し通るまでだ！」

小太刀を二刀構えた忍足あずみが、無防備に構えるヴィヴィへと突進した。

横へ逃げればあずみは英雄の下へと走っていくだろう。だから彼女は真正面から迎え撃った。

金属がぶつかり合う音がして、火花を散らしながら互いに後退したあずみが持っていたのは小太刀二刀。対するヴィヴィが構えるのは刃渡り５０ｃｍ近くはあるマシェット（マシェット）が二本。それが暗闇で見えにくいように刃の部分が黒く塗られている。

二振りの小太刀と二振りの山刀が絡み合うように激突して、夜の闇に火花を散らした。

「チッ！　暗殺者の癖にやたらと強い……年食ってるのは伊達じゃねーな八咫烏！」

「年を食ってるのはお互い様でしょう女王蜂。それに私は暗殺稼業はとっくに引退しましたので。初めから暗殺者だったわけでもないですし」

「そんなことはどうでもいい！　英雄様がアタイを呼んでるんだ！どけ！」

「どくことはできません。もしも行きたいのなら……」

「押し通る！」

ヴィヴィの言葉を遮って、再び二刀を構えたあずみがヴィヴィへと飛び掛った。

＝＝＝

「チィッ！　あずみは来れぬか！　あずみを止めるとはあのメイドもやるな！」

「オヤジがこっちに回してくれた秘書でな。甲賀卍谷の忍者とか言ってたっけかな？」

「貴様！　とぼけた振りをしても我は貴様を許しておらんぞ！」

余裕の表情で自分のメイドの説明をする宗介に、英雄が吼える。
それに対して宗介が辟易した感じに口を開く。

「なんだよ。俺はあの犬が頑張ってるのを評価しただけだろ～？」

「あの姿を可哀想だと！？　ふざけるな！　あの姿を見て貴様は何も感じぬのか！」

「そうだぜ大神。あいつはずっと前から頑張って強くなったんだ。それは可哀相なことなんかじゃないだろう」

ふざけたような顔をして言う宗介に、大真面目な顔で英雄と岳人の二人が言う。
英雄は完全に怒り、岳人も言葉の節々に怒気がにじみ出ている。

「武術ってのは才能が全てだ。強いか弱いかなんてのは初めっから

決まってる。あの犬には決定的に才能が無い。俺は真実を言ってるだけだぜ？　嘘はそんなにつかない主義なんだ」

一向に気にしない様子でそんなことを言う宗介についに二人が切れた。

「一子殿の夢を愚弄するな！」

「いい加減にしろてめえ！」

英雄と岳人の拳がまっすぐに宗介へと向かう。
それを宗介はいとも簡単に掴み取った。
そのまま宗介は二人に問いかける。

「おいおい、俺に殴りかかることはねえだろう。無駄なもんは無駄って割り切って教えてやったほうがいいだろうが」

「黙れ！　一子殿は努力の果てに必ずや夢を叶える！　それを侮辱するでないわ！」

「お前が何考えて言ってるかはわからねえけどな。鍛えて無駄って事はないもんだぜ。見ろよ俺様のこの鍛え上げられた肉体を！」

「そんなもんは武道の才能の内の一つでしかないな。ボディービルダーに武道の才能がいるかどうかみたいなもんだ」

確かにボディビルダーが必ずしも強いわけではない。
実際、筋肉が多いからと言って強いわけではないし、運動神経があるからといって武道の才能があるわけでもない。
武道の才能はそれらとは違う、もっと別の何かなのだ。

「努力なんてのは馬鹿がやることなのさ。そんで、才能が無い奴は有る奴には追いつけない。だから皆さっさと諦めて自分の才能とやらを見つけるんだろうが。で、俺が見る限りあの犬には才能が無い」

「ふざけるな！　貴様は一子殿のあの姿を見てもそう思うのか！　あれほどに努力する一子殿が夢を叶えられぬと、そう言うのか！」

「だいたい転入してきたばっかのお前はワン子の昔を知らないだろう！　昔はすんげー泣き虫だったけどな。今じゃあそうとは思えないくらいに強くなってんだよ！　それが無駄なわけねえだろうが！」

宗介に掴まれている腕が全く動かないため、もう片方の手を動かして殴りかかる二人。

それを避けることもせずに身体で受ける宗介。

英雄に岳人、十分に鍛えられている二人の拳を同時に受けても、宗介は微動だにしなかった。

平然と笑って身体で受け止め、すぐに口を開く。

「効かねぇな」

「かってぇ！　なんだよオイクッキー殴った時よりも硬いじゃねーか！」

「俺に攻撃効かせたかったらな、武道四天王レベルじゃなきゃ無理だぜ？」

「馬鹿な……このような男が姉上と同格だと言うのか！」

「実は前に闘ってるしな～」

「そういえばつい3ヶ月ほど前に姉上に挑戦したものがいたと聞いたが……」

「あ、それ俺だ」

あっけらかんという宗介に驚愕の表情を浮かべる英雄。
しかしそれをすぐに怒りの表情へと変える。
既に英雄と岳人の拳は宗介に解放されて一定の距離を取っている。

「ならば貴様とて努力の意味は知っているはずだ！　姉上と同等に闘えるほどに鍛え上げたのなら、一子殿の努力が無意味ではないと貴様が一番わかっているはずであろう！」

宗介へと英雄がそう語りかける。
それは自分の姉が努力をしてきたことを知っているからこそ言える言葉だ。
そして一度夢を潰えさせ、他の道で努力することを知った彼自身の経験からの言葉でもある。

「俺様もそう思うぜ九鬼。ワン子は今まで頑張ってきたんだ。いくら女の紹介してもらったからってな、仲間を馬鹿にされたら許さねぇ。努力が無駄だって言う意見も間違ってると思うしな！」

ついで岳人もそう言って九鬼と並んで宗介の方を見る。
しかし宗介は顔に浮かんだ笑みを消さずに平然と言う。

「俺が強いのは俺が武道において天才だからだ。努力なんか知らん」

更に続けて言ってみせる。

「あの犬は昔から頑張っていると言ってたな。でもな、それだけ長期間の努力をして決闘でクリスに負けてたぜ？　多少良い勝負はしていたけどな、お嬢様のクリスと川神院にいた犬。鍛錬の密度も犬のほうが上だったはずだ。才能の差以外に、それでどうして負けたと思うんだ？」

「そのような事などどうでもよいわ！　一子殿が今も努力し、夢に邁進しているという事実が重要なのだ！　だいたい一子殿なら多少の負けなど自らの経験として更なる輝きを放つようになるに違いあるまい！　貴様はその努力を侮辱したのだ！」

「……ったく、こりゃ言い合っても平行線かね。どうしたもんか」

聞く耳持たず。
どちらも他の面から見れば正しい意見ではある故に決着はつかない。
そんな時だ。
噂をすれば何とやら、鍛錬を終えて近くまで来ていたワン子が声を聞きつけてやってきた。

「ねー、どうしたの二人とも？」

「ちょうどいいところに来たな」

「おいワン子、どうして空気呼んでスルーしないんだよ」

「一子殿！　この大神という男は邪悪だ。貴方が穢れてしまう！　すぐに鍛錬に戻ってくれ！」

「え？　え？」

頭の上に疑問を浮かべて、全く状況を把握できていないワン子。
そんなワン子に優しげに宗介が語りかけた。

「よう川神妹？　俺が明々後日に百代と決闘するのは知ってるよな？」

「ええ！　お姉さまに教えてもらったわ！」

「今はちょいと暇なんでな、お前の腕を見てやろうと思う。どうだ？　やるか？」

「なんか上から言う感じが嫌だけど……別にいいわよ！　でもちょっと疲れてるのよね」

「いいからいいから！　単なる暇つぶしだと思ってよ。なぁ？」

顔に笑顔を浮かべながらワン子へとそう言い募る宗介。
ワン子も転入日の決闘は見ていたし、自分の姉と親しそうな人物だったと言うことで、軽い手合わせみたいなものだと判断してすぐに了承してしまった。

「いかん一子殿！　その男は――」

「心配しないでクキ君、ちょっと疲れてるけど全然大丈夫だし」

「我が言いたいのはそういうことではなく！」

英雄の言葉は一向に聞かれる事はなかった。
ワン子自身、強い人と戦うのは自分に得があると思っているから邪魔はしない。

「おいおいワン子聞いてくれ。そいつちょっとばかし――」

「まぁ待て。せっかく集中しようとしてんだから邪魔してやんなよ」

岳人が忠告しようとするも宗介に遮られる。
見れば確かに、ワン子は疲れた身体でも十分に動けるように精神集中している最中だった。
ワン子が決めたのなら仕方ないと岳人は引き下がった。
それでも納得してなさそうな男二人に宗介は言った。

「心配すんなって。別に俺だって弱い者虐めする趣味があるわけじゃないからな」

「貴様……一子殿を傷つけてみろ。タダではおかぬぞ！」

「手合わせなのにそんなこと言うのか？　そりゃ失礼ってもんだ」

「ぬぅ……！」

英雄が悔しさに歯軋りする中、ワン子の準備が終わって宗介と対峙する。
ワン子が構えているのに対し、宗介は全くの無防備に構えて拳も上げずに話しかける。

「俺が強いのはわかってるだろ？　今できる全力って奴でかかってこいよ。俺は武道四天王レベルはあると思ってな」

「本当に隙だらけなのになんで当てられる気がしないのかしら……でも気迫じゃ負けないわ！　はあぁっ！」

声を上げ、拳を構えたワン子が飛び掛ってくる。
疲れているためにいつものスピードは出せないが、自分の姉とあそこまで戦っていた相手と戦えることに心は熱く燃えていた。
よってキレは多少あるものの、スピード系のワン子の持ち味があまり生かせない状態。
故にだろうか、それらは宗介にかすることすらなく避けられていく。

「よっ、ほっ、ととっ、犬！　そんなんじゃ当たらねぇぞ！」

「くぅっ！　さすがに強いわね！」

腕をポケットに入れたまま、余裕綽々と言った感じで避ける宗介。
ワン子は相手がそこまでの余裕を見せることに若干の焦りを覚えた。
そして相手との体格差を利用して更に近づいて拳を放つ。

「やあぁっ！」

「おおっと、あともうちょっとだったな～」

拳に注意をそらせておいて右の回し蹴りを放つが、それすらも楽々と避けられる。
そして再度攻め込もうとした所で、ポケットに入れたままの宗介の手がブレたような感じがした。
そこまで気付いたところでワン子は唐突に地面に倒れた。
グラグラして、上手く立ち上がれない。
ワン子はその症状から、自分が頭へと攻撃をもらったことを理解した。

「今……何したの？」

「簡単簡単、ただポケットから右手をスポーンと抜いてだな。そのままお前の顎の先端に当ててすぐにポケットに戻した。たまにスリがやってる事のモノマネだな。スるんじゃなくて叩き込むんだけど」

あまりにも速い、速すぎる腕の動きだった。

「一子殿ぉっ！　ご無事ですかっ！」

「おい九鬼落ち着け。怪我はしてねーだろ」

暴走寸前の九鬼を押さえる岳人。

今のところは何もしていない宗介と、決闘していたワン子の邪魔をするつもりはないらしい。

しばらくして、仰向けに横になったワン子へと宗介が言った。

「どう思った？」

「え？　何が？」

「自分じゃとてもかなわないとか、そう少しでも思わなかったか？」

「今はね。でもそのうちリベンジするわ」

「……ポジティブ思考め」

一旦ため息をついてもう一度ワン子へと問いかける。

「それじゃあ俺と闘ってどう思った？」

「さすがに強いわね。お姉さまと決闘してたからわかってたけど」

「俺は百代と同じくらい強いぞ。今のだって全然本気じゃない。それでもいつか、努力していれば倒せると思うのか？」

「当然よ！　アタシは川神院師範代になってお姉さまと並ぶくらい強くなってみせるんだから！」

叶えるのがとても難しい己の夢を、平然と言ってみせるワン子。
ワン子の心の中が何を思っているかはわからないが、表面上は確かに笑顔だった。
笑顔で誇らしげに、自分の夢を語っていた。

「どうせ無理だと諦めたらどうだ？　お前は百代の戦いを見て、あそこまで強くなれると思ったことがあるのか？」

「当然！　諦めたらそこで試合終了よ！　だからアタシはがんばるの！　いつか絶対にお姉さまと同じくらい強くなるんだから！」

その夢を叶えることがいかに難しいか知った上で抱いた夢。
彼女にとってそれは、自分のためでもあり姉のためでもある。

「今のお前の実力じゃ、正直足元にも及ばないと思うけどな。そんな遥か遠くにあるような夢が叶うと？」

「その夢を実現させるために努力してるの！　アタシは初めは弱かったけど、ここまで強くなれたんだから！」

屈託なく言うワン子に、だんだんと宗介はイライラしてきた。
思えばあの百代とずっと一緒にいたのだ。それくらいの刺激はとっ

くになれているのだろう。
だが、直接に圧倒されて手も足も出ないというのはあまり無い経験であり、確実にワン子にも思うところがあったというのは確かなのだろうが。

「努力なんぞ無駄だ。いつかは必ず壁にぶつかって頭打ちだ。才能の壁と言うものがそこにはある。所詮この世は才能が全てだ」

「そんなの知らないわ！　だいたい才能がないなんてわかんないし、このままがんばれば大丈夫だって信じてるもの！」

宗介の言わんとしている事がわかってきたのか、ワン子もだんだんと熱くなってきた。
何かムキになっている様子の宗介も声を荒げ始める。

「がんばれば夢は必ず叶う。そんなのは嘘だ。努力なんてもんで全てが叶うほど簡単な世界じゃねぇ」

「努力してがんばってここまで強くなれたんだもの！　努力することに意味はあるわ！　そしてアタシは絶対に夢を叶えるの！」

「叶う事のない夢と知っていてもなお足掻くなんてくだらないだろうが」

「初めからそんなこと思ってたら最初から成功しないもの！　絶対にアタシはお姉さまみたくなるの！　そのためにも今は努力努力よ！」

「……チッ！」

イライラを募らせながら宗介が舌打ちをする。
その様子を見て黙ってみていた二人が口を開く。

「さすが一子殿だ。言葉に全く動じておられぬ」

「そりゃあ誰かに何か言われたくらいじゃワン子は諦めねえよ」

そして三人の見ている前で宗介が不機嫌そうな顔を更に歪める。
そして、理解できないと思いつつも宗介が再び口を開く。

「まぁいい、努力じゃ絶対に越えられない壁があるってのがわかるさ。俺と百代の戦いを見ればな」

「大神と闘ってもお姉さまは絶対に負けないわ！」

「そんなもんやらんとわからんだろうに。もちろん勝つのは俺だが」

「お姉さまはちゃんと努力もしてるもの！　ルー師範代も言ってたわ！　才能の上にあぐらをかいてたら意味が無いって！」

「……そうかい。俺は夜も遅いから失礼するぜ」

「あ、ちょっと！」

一子が声をかけようとするも、その一瞬で宗介の姿は消えていた。
文字通り跳んで行ったらしい。

それと同時に今までずっとあずみを妨害し続けていたヴィヴィの妨

害が止まり、あずみが英雄のそばに急行した。
遅くなったことを謝罪するあずみだが、ヴィヴィも強いということを看破していた英雄はそこまで責める事をしなかった。
そして夜にふさわしい静寂がその場を支配する。
そんな中、何故かその場に残っていたヴィヴィが英雄へと頭を下げた。

「九鬼様、先ほどは宗介様が申し訳ありませんでした」

「なぜ貴様が謝る。あの男が直に我の前に来て謝るべきだろう」

「それは今は難しいですね。またいずれということでお願いします」

「いくら同じSクラスと言えどさすがに許さんぞメイド」

全く怒りを納める様子がない英雄。
それも当然だろう。彼は好きな人を侮辱されて黙っているような人間ではない。

「いいのクキ君、これはアタシの問題だしね。手合わせもやったし。今度闘うときは強くなってアタシが勝ってみせるわ！」

だがワン子が口を挟んだことで意見を変えた。

「しかし一子殿の夢を応援するものとしては……いや、これ以上は無粋！　ここは一子殿に免じて許すが、次は無いと思え！」

「ありがとうございます」

「だが大神のことは許しておらんぞ。いずれ必ず謝罪させろ。行く

ぞあずみ！」

「はいっ☆　英雄様っ！　（次は覚悟しとけ八咫烏）」

そうして九鬼英雄と忍足あずみは去っていった。

残った岳人とワン子にヴィヴィが話しかける。

「5月1日の夜に行われる川神百代と宗介様の試合、おそらく見に来られるのでしょうね」

「もちろんよ！」

「見に行けるんならな。キャップ達も行くって言うだろうし。夜なんだろ？」

「はい。鉄心様に許可はもらいました。皆様見てみたいと思うと、そう予測していましたので」

「それならたぶん皆来れるな」

「わかりました。ですが一子さんは覚悟しておいてください。あなたは川神百代の本気を見ることができるでしょう。その時にあなたが何を思うかはわかりませんので」

「そんなの心配いらないわよ！　今更今更！」

「そうですか……では、また会いましょう」

夜の邂逅はこれで終わる。

この邂逅に意味はあったのか、それとも無かったのか。

幾人もの願いと策謀が埋もれる決闘が、いよいよ近づいていた。

第十四話　譲れないモノ　後編（後書き）

あとがき

昨日はクリスとまゆっちの誕生日だった！　おめでとう！
本当はもっと速く仕上がるはずだったのに……すまん！

つーかなんで俺は先にリュウゼツランルートのプロット書いてるんだよ。
確かに燃えるけど、まだまだまだまだ先じゃねーか！

関係ありませんがおそらく、百代や宗介の歯や顎は「バキ」のピクル並みに頑丈です。
だから勝負で顔面などにヒットされても絶対に折れたり抜けたりしません。
加えて百代には『瞬間回復』があり、宗介はヒットする寸前で無意識に防御力を強化します。
だから絶対に折れません。ええ。

第十五話　真剣で勝負だ！　前編（前書き）

ところで、現在この作品の宗介君も参加しているコラボ作品がｙｏｕｋｅｙさんによって執筆中です。
タイトルは「真剣で私に恋しなさい！！　コラボレーション企画『川神聖杯戦争』」です。
一日おきの更新ですので一度拝見してみては？

第十五話　真剣で勝負だ！　前編

「いよいよじゃの……結界の準備は大丈夫かの？」

「ええ。周囲に被害が及ばぬように、川神院の修行僧が総出で結界を張っていますからネ」

「念のためワシも手伝うからの、モモと宗介君の決闘が終わるまでは持つじゃろう」

「それは頼もしい。しかし私はモモと宗介君のほうが心配です」

「確かにのう……二人とも不安定じゃが、大きな力を持っておる。モモの精神の均衡は危ういところであるし」

「宗介君に至っては、既に纏う気があの釈迦堂の禍々しい気に似通い始めていル」

「本来ならそのような二人に戦いなどさせるべきではないのじゃろうが……」

「もはやこの問題は本人でしか解決できないからネ。若い二人の可能性に期待しましょう」

5月1日　21：00

――川神院内　闘技場

すっかり日が暮れて、あたりはもうすっかり暗くなっていた。
そんな夜でも川神院では多くの修行僧が結界を張るために待機し、
今回の決闘の見届け人である風間ファミリーが集まっていた。
今日ここに来る前に行った金曜集会で友情を深め、今日はより一層
に仲が良さそうだ。

「見物してもいいなんて珍しいね」

「姉さんが言うには、学長が許可を出してくれたってさ」

「ふ～ん……でも今回もモモ先輩が勝つでしょ？」

「当たり前じゃない！　お姉さまが負けるわけ無いわ！」

「ワン子の言うとおりだぜ。大神も偉そうに言ってた分、負けたら
かっこ悪いだろうな」

「ん？　岳人は大神と何かあったのか？」

「まぁ別にいいじゃねーかクリス！　学校のときは引き分けてたか
らな。どうなるか楽しみだぜ！」

「キャップさんは相変わらずなんですね……」「それよりまゆっち
ー。あのモモ先輩と戦う相手がどれだけ強いのか気にしよーぜー」
百代を除いた各メンバーが会話をしながら試合が始まるのを待つ。
そしてしばらくすれば、決闘の場となる川神院の中に設置された闘

技場に川神百代と大神宗介、そして審判を勤める川神鉄心が現れた。

「西方！　川神百代！」

「ああ！」

「東方！　大神宗介！」

「おう！」

両者共に元気良く返事をしたところで、宗介が百代に話しかけた。

「応援が多くて羨ましいね。友達か？」

「ああ。私の大切な友人達だ」

「おぉっと、自慢されちまったよ」

「お前にも美人のメイドが来ているじゃないか」

百代が風間ファミリーの少し後ろにいるヴィヴィのほうに目をやって宗介に言う。

「あれはそういうのじゃない。親父が勝手につけてきたんだ。飯やら何やらと重宝はしてるけどな。女とかそういうのとしては見ないさ。だいたいあいつ、かなり年上だぜ？」

「そうかー。だが女性に年のことでとやかく言うのは感心しないぞ～」

宗介と百代の間では決闘前だというのに和やかな会話が交わされる。
しかしそれでも、身にまとう雰囲気は研ぎ澄まされて戦いの準備が整っている。

少し離れた観客席では、風間ファミリーの武士娘４人が話し合っていた。

「こうして見れば、大神も確かに強いのだとわかるな」

「うん。モモ先輩と同じくらいかはわからないけど、すごく強いよ」

「お姉さまがんばってー！　……あれ？　まゆっちはどうしたの？」

「いえあの、大神という方の雰囲気が少し変かな、と……」「あいつが身体から放出してる気がなんか歪んでるって事だぜ～」

まゆっちこと黛由紀江は宗介から感じる違和感に気付き始めていた。
そしてもちろん対面する百代もそれに気付く。
だがそれは口には出さない。彼女自身、思考が釈迦堂のものに近いが故に。今から戦う相手が強いのならばそれで由と考える。

「宗介、お前は楽しませてくれるんだろうな？　最近は弱い相手ばかりで困ってたんだ」

「当然！　俺も退屈してたんだ。昔みたいに喧嘩できる女がいなくて全力も出せないからな！」

「揚羽さんと戦ったんだろう？　今の私は揚羽さんよりも強いぞ。本気で来い！」

「それは俺のセリフだ！　俺だって島が沈みさえしなけりゃ勝ってたんだよ！　だから手加減は一切無用！」

「それならいい！　私を満足させてくれ！」

「ＨＡ！　満足しすぎて逝っちまうなよォ？」

気持ちが高揚させた百代が、周りを圧倒するほどの気を更に増大させる。

宗介もそれに応えて凶暴な笑みを浮かべ、百代にも負けないほどの巨大な気を身にまとう。

そして、川神鉄心によって決闘の火蓋が切られた。

「いざ尋常に……はじめいっ！！！」

その声と共に闘技場を中心とした結界が張られる。

そして百代と宗介が、同時に相手へと向かって超スピードで飛び掛った。

「行くぞっ！」

「ウラァァアアアアア！」

真正面に放った百代の右拳と宗介の左拳が激突し、百代は衝撃で右拳を弾かれて少し仰け反る。初撃に込めたパワーは宗介のほうが上

だったようだ。
それによってできた隙に宗介が一瞬でデタラメに数千もの拳撃を叩き込む。

「ラァラァラァラァラァラァ……ッ！」

「甘い！　ただの連打など通用しないぞ！」

それを百代が鉄壁の守りで全てを防御する。
しかし連打を続ける中でギラリと宗介の目が光った。

「てめぇこそ甘ぇ！」

「ぐっ！」

拳撃による連打の中のたった一撃、異常に気を込めた手刀が百代の守りを打ち破った。
それを受け切れなかった百代の脇腹から血が噴き出した。

「ハァハハハハッ！　ガンガンにギアを上げろよ百代！　そんなんじゃ足りないぞぉ！」

「想定以上だ……やはりお前はいいぞ宗介！　血が騒ぐぞ！」

一旦距離を取って挑発をする宗介に、百代は戦意を更に高めていく。
既に脇腹に受けた傷は瞬間回復し、血も止まっている。

「川神流・致死蛍！」

百代の腕から気弾が放たれて宗介に飛んでくる。

常人なら防ぐことも交わすことも叶わぬその攻撃を、宗介は顔に笑顔を浮かべたままで迎撃する。

「いい球だな！　ホォォォォムランッ！」

気を込めた左腕で思い切り弾き飛ばした。
弾かれた気弾が結界にぶつかって揺れるが、鉄心がサポートする結界は割れない。
そして当然、闘う二人がそんな気遣いをするわけも無い。

「隙ありだぞ宗介！」

意弾を放ってすぐに移動を始めていた百代が、宗介の背後から拳撃を加えようとする。

「読めてたぜ百代！　お前なら隙を見逃すはずが――」

「その通りだ！」

一瞬で振り返って百代の拳を受け止めた宗介を、続けて繰り出していた蹴りによって上空に吹き飛ばす。
そしてそのまま上空の宗介へと追撃を行う。

「グ、ハ……ハ、ハハハ、ハハハハハハ！」

「行くぞ宗介！　川神流・星殺し！」

極太の気のレーザーが宗介へと撃ち放たれ、宗介を飲み込みつつ上空の雲に穴を開ける。
宇宙まで飛んでいくほどの攻撃を受けて宗介は無事なのか、それは

すぐに判明した。

「がああああああぁぁぁっ……！」

百代が放つ星殺しのレーザーが内側から膨れ上がり、弾ける様にして打ち消された。

そしてそこにいるのは百代に向かって獰猛な笑みを向ける、服などは焦げていてもほぼ無傷の宗介。

どうやら星殺しでもほとんどダメージは無かったらしい。

「ＫｕｕＫｕＫｕＨａＨａＨａＨａ！　ほんのちょっぴり痛かったけど全然効かないぜ百代！」

「どうやらそのようだな。予想通りで嬉しいぞ宗介！」

「予想通り？　じゃあその予想の上をいってやる！　行くぞぉぉぉおおおおおお！！！」

叫び上げるなり空中でグルグルと……更にスピードを上げてギュンギュン回り始める宗介。

更には僅か五秒で紫電をバチバチと放ち始めた。

「おいおい。どこのアニメだ」

「お前が言うなよ百代！　喰らエェェェェェィ！　ラァァイトニングマックスピィィィィン！」

暴風と紫電を纏った宗介が高速回転をしながら百代へと突撃してきた。

試しに気弾を放ってみるが、カキィンと弾かれてまったく効果が無

い。

「ちっ！　さすがに避け――」

「られるとでも思ってたのかあああああああ！」

「ぐあああああああああっ！」

当たる寸前で一気に横っ飛びして避けようとした百代に、突然に急加速をした宗介が飛び込んだ。
途端にその場で爆発が起こり、あたりが土煙に包まれる。
果たして無事に避けられたのか直撃してしまったのか――

＝＝＝

――観客席

「うひゃー！　なんだよあのドリル！　かっけー！」

「おいおいキャップ、そんなことよりモモ先輩の心配しろよ」

「まぁ、ある意味信頼の印だよね。モモ先輩なら負ける気がしないっていうか。でも確かにさっきのドリルはすごかったなぁ……」

「さっきのドリルアタック（？）も姉さんが避けようとしてたみたいだから凄い技なんだろうけど……結局姉さんは避けれたのか？」

風間ファミリーの男陣が観客席から試合の様子を見て盛大に騒ぐ。
といっても、彼らの場所までは害が及ぶほどの影響は結界で遮られるようになっているのだが。
気も結構遮断されてるので、土煙が発生した今の中の様子を細かく探るには彼らでは無理なのである。
もっとも、横にいる武士娘四人には中の様子が十分にわかっているようだが。

「大丈夫だよ大和。モモ先輩、ギリギリで避けたみたい」

「ああ。しかし二人とも凄まじいな。まさしく天変地異じゃないか」

「そうですね。本当に凄いです」「つーかドリルってなんだよドリルってー」

「お姉さまとあそこまで……ううん。ちゃんとお姉さまの戦いを見て勉強しなくちゃ！」

そして審判である鉄心とルーも話し合っていた。
実際の戦いを見て、思うところがあったようだ。

「独創的じゃのう」

「それよりも、彼の気から感じる禍々しさを気にするべきだと思います」

「言われんでもわかっとる。むぅ……ここまでとは思わんかったか

らのう」

「彼は既に気の量では百代をも上回っていル。あくまで気の量だけは、ですけどネ」

「うむ。それに荒削りであるとはいえ気の使い方も熟知しているしのう」

「あの気の質はかつての釈迦堂にそっくりだ。こうして百代とぶつかることで、色々と学んでくれるとよいのですガ……」

「それは百代にも言えることじゃな。どちらかがどちらかの間違いに気付けばあるいは、と踏んでいるんじゃが……上手くいってくれんかのう」

「そうですネ。しかしここは、黙って彼らを見守るしかありません」

＝＝＝

――闘技場

宗介のドリル攻撃を、百代は紙一重で交わしていた。
避けるために防御に回したその腕の肉が削り取られてはいたが、すぐさま瞬間回復で治癒していた。

しかし自分が完全に防御に回っても避けきれずに血を流したことに、それだけの力を持つ相手と今戦っていることに、ついに百代のスイッチが完全に入った。

「あはははは！　ここまで楽しいのは揚羽さん以来だぞ！」

闘技場を覆い尽くす程の大きな気を、宗介を真正面から見据えながら纏う。

そして未だに煙が舞う中を、宗介に向かって突撃した。

同じく巨大な気を纏う宗介と拳の応酬をしながら百代は満面の笑みを浮かべる。

「楽しいなぁ宗介！　お前もそう思うだろう！」

百代が超スピードで動きつつ、信じられない体勢からも目にも止まらぬ拳を繰り出していく。

「ＦｕＨａａａａ！　やっぱお前は最高だ！　胸が躍るぜ高鳴るぜぇぇぇ！」

宗介もそれに臆することなく、むしろ歓喜すらして、尋常ならざる百代の力と拮抗している。むしろどんどん速さと力を上げていっているように見える。

互いに笑顔のままの戦いがいつまで続くのか。

数分だったのか数十分だったのか。

それは定かではないが、突然に笑うのをやめて距離を取った。

「宗介！　まだ本気を出し切ってないだろう！　私とやるなら手加減なんてするんじゃない！」

自分を相手に手加減されていたことに対する怒りと、他の何かの感情が混ざった叫び。
それに対して宗介も応えた。

「お前だって川神流の奥義をほとんど使ってないだろう！　お互い様だ！」

そう言って余裕ありげに笑う。実に楽しそうに。
その笑顔を見て百代が反応した。

「――なら本気を出させてやる」

「Ｋｕ……始めからそうしろよ！」

「ああ！　今からそうする！」

言うやいなや、一瞬で宗介へと接近する百代。
それに対して何故か動かない宗介。その場から動かずに、自分へと向けられる攻撃のみに意識を向けていた。

「川神流・無双正拳突き！」

その攻撃は過たず、まっすぐに宗介の腹へと突き刺さった。
それに対して宗介は――

第十五話　真剣で勝負だ！　前編（後書き）

あとがき

このバトル、三部にわけて書こうか二部に分けて書こうか凄い悩む。

瞬間回復……疲労も傷も回復させるとかマジチート。ふざけんな。

オートエリクサー×∞みたいなもんだぞチクショウ。

良く見たらカラカル・ゲイルっていうマジコイの脇役って、クリスレベルに強いんだよな。

素手のクリスには勝てるけど、武器ありのクリスとは４：６くらいで負けてるみたいだけど。

第十六話　真剣で勝負だ！　中編（前書き）

ちょっと短いけど気にするな。
あとがきに前回の技の簡単な説明があります。

第十六話　真剣で勝負だ！　中編

百代が放った川神流・無双正拳突きを、宗介は真正面から腹に受けた。
それを見た者の大勢は、これで決着がついたと思った。
本気の百代が放つ無双正拳突きは、そう思わせるだけの威力と威圧感があったからだ。
しかし、一部の者はあることに気付いていた。

「ぬ……これは……！？」

「いけナイ！　これは危険すぎル！」

「凄い……ここまでの力を秘めているなんて……」「ありえねぇ……底が見えないぜコイツ」

始めに気付いたのは横から見ていた鉄心、ルー師範代、黛由紀江の三名。
未だに百代の拳を受けたままの宗介の周りの空気が歪み始めた。
その空気に飲み込まれていた状況の百代は、ずっと相対していたために察知が遅れ、それに気付いて腕を引くよりも早くに宗介によって腕を掴み取られた。

「Ｖｅｒｙサイコーなパワーだぜ百代ォォォ！　だが甘い甘い甘い甘ＥＥＥＥＥＥＥＥＥ！」

笑う宗介が纏う、禍々しさと荒々しさを半々に含むありえないほどの巨大な気。
百代の圧倒的な気を丸ごと飲み込む程の、宗介の身体の内から湧き出てくる底の知れない獰猛な気。
そのまま百代の腕を掴んだままぶんぶんと振り回して、何度も地面へと叩きつける。

「さすがに効くっ……ぐぁっ！」

「フハハＨａＨａ！　吹っ飛べウラァッ！」

「ガッあッ……！」

なんとかして宗介の手から逃れようとする百代だが、いくら抵抗しても宗介の手から逃れることはできない。
そうして猛スピードで何度も地面に叩きつけられ、さすがの百代も苦悶の声を漏らす。
そこで一際強く地面へと百代を叩き付けた宗介が、先ほど百代にやられたことをやり返すかのように、思い切り力を込めて上空へと蹴り上げた。
そうして蹴り上げられた百代の脇腹からボキゴキという骨が折れて砕ける音がした。
口の端から血を零す百代へと更なる追撃を宗介がかけていく。

「Ｒａａａａａａ！　Ｕｒａａａａａａａａ！　ＨｙａａａａＨａＨａＨａＨａＨａ！」

宗介は叫び声を上げながら、手がいくつもあるように見えるほどのスピードで上空へと無数の突きを放つ。

一度突きを放つたびに気弾が飛んでいくために、大量の気弾が上空の百代へと殺到していく。
それに対抗するために百代も川神流の奥義を使う。

「川神流・大爆発！」

そういった途端に百代が爆発を起こし、自らに迫ってきていた気弾を全て吹き飛ばした。
本来なら自爆技であるこの技だが、瞬間回復がある百代には関係ない。
同時に、宗介に折られた肋骨すらも回復して、眼下にいるはずの宗介へと顔を向ける。
しかしその場には既に宗介の姿は無く――

「甘い！　お前ならここで追撃に来ると思っていた！」

「おぉう！　受け止めるとはやるじゃねえか！」

背後から迫っていた宗介の拳を、両手を使ってがっしりと掴んで止めた。
パワーでは宗介の方が上回ると判断した百代が、片手で防いで逆に押し切られることを考慮したのだ。
そして両手で宗介の拳を掴んだまま、百代が奥義を発動させる。

「喰らえ宗介！　川神流・炙り肉！」

宗介の腕を掴んだままの両腕が紅蓮の炎に包まれて、宗介を焼き焦がそうとする。
しかしそれを意にも介さずに宗介が口を開く。

「――で？　俺を舐めてるのか百代？　こんな小手先の技が通じるとでも――」

「無論思ってないさ！　本命を喰らえ！　川神流・大蠍撃ち！」

「お前が技を囮に――グッ！」

百代が『炙り肉』を使ったことに油断して拳を大きく振りかぶっていた宗介。
その為に、至近距離から放たれた『大蠍撃ち』を油断していたボディにもらってダメージを受ける。
迷わず急所へと突き刺さったその一撃の攻撃力が、宗介の尋常ならざる気による防御力を僅かに上回った。
宗介はそのまま百代が放った追撃の蹴りで吹っ飛んで地面へ激突した。
その途端、爆発したような音がした。

「ほーら！　これでトドメだ！」

すぐさま落下した宗介を追いかけて、大きく脚を振り上げた百代が落下してくる。
スカートだったから中身が見えるとかはともかく。
恐ろしい程の力を込めた踵落としが、地面へとめり込んでいる宗介に直撃した。
ズッドオオオオオオォゥンという音がして、闘技場の土台が砕けて宙に舞った。

それを見た風間ファミリーの面々は、『やりすぎじゃね？』とか、

『これは死んだだろ』と思った。
この被害を最小限に留めた結界を張っている修行僧達は、『これほどの力はもう抑えきれぬ』と思った。
そして川神鉄心とルー師範代はこう思った。『これで終わってくれ』と、『これ以上は両者にとって危険だ』と。
これで決着がついていればそう思うことも無かっただろう。
だが実力者たる彼らは、百代が踵落としで開けた大穴から漏れ出てくる得体の知れない雰囲気を感じ取っていた。

それはすなわち、以下のことを指し示す。
実際に受ければ師範代クラスの人間でも確実にノックアウトするだろう今の百代の攻撃を受けても、未だに宗介が戦うだけの余力を存分に残しているということを。

次の瞬間、とんでもなく巨大な光が穴から放出され、耳が馬鹿になるくらいの轟音が響き渡った。
その場にいた者達の目は、一切の例外なく視界が白一色に染め上げられた。
結界を圧迫するような、近くにある者全てを吹き飛ばすような、そんな『力』が穴から溢れ出ている。

「言ったはずだあああああ！　勝つのは俺だとォォォォォ！」

巨大な光が荒々しい巨大な竜巻へと変化し、それが収縮する。
そうして消えた光の中心から、先ほどまでより更に力強い気を纏った宗介が現れた。

「っ！　お前は……限界というものがないのか？」

さすがの百代も、そう問いかけずにはいられなかった。
全く理不尽なほどに宗介から感じる気は大きく、その底知れぬ気の量と動きの端々から滲み出る素人臭さは明らかに矛盾していた。

「ククククハハハァ！　昔からそうだったろう？　俺とお前はライバルだった。お前が強けりゃ俺が強いのは当たり前だろうが！」

「……そうだな。そうだった。お前との勝負はいつだって楽しかった」

「結局は全部引き分けだったけどなァ！　だがそれもここまでだ！　お前と戦うだけでこれほどまでに胸が騒ぐ！　今日こそは俺が勝つぞ百代！　もっと俺を楽しませてくれェェェエエエエエエ！」

宗介は漆黒の瞳を見開いて、歯を剥き出しにして心底嬉しそうに声を上げる。
嬉々として笑い声を高らかに上げ続ける。
その顔に浮かぶ感情は正しく狂喜。
それを見た百代は、身体が霞むほどのスピードで接近する宗介に拳を構えつつ顔を歪めた。

＝＝＝

「……いかんのう。あそこまでとは完全に予想外だったんじゃが」

「正直言って驚きですヨ。あの百代すら圧倒するほどの気の量。こうも見せ付けられればさすがに思うものがありますネ」

「モモに負けを教えられればとも思っていたが、これは宗介君のほうが根が深いかもしれんのう……」

「そうですネ。持っている力がこれほどのものである以上、それに溺れてしまえば戦いのみに生きるようになってしまう。それだけはさせてはいけない」

狂喜の表情を浮かべる宗介に、鉄心とルーが深刻な表情で話し合う。事前に情報をもらってから宗介と百代の決闘を許可したのだがこれほどの力を持っているとは予想外だったのだ。

「……しかし、彼が全力を出してくれたのは百代にとっては良い事じゃったな」

「ええ。自分より力が強いと察知したみたいですからネ。あの百代が完全に防御に回っています」

目の前の闘技場（既に足場は崩壊しているが）で繰り広げられる戦闘に目をやりながら意見を交わす。

そこでは百代以上の速さと力を持つ宗介が攻撃を加え続け、なんとかギリギリで動きについていけているといった感じの百代がいた。

一撃受けるだけで骨までヒビが入る宗介の打撃を瞬間回復で治しながら、何度も弾き飛ばされながら時たま反撃に移っている。

いつもは一方的に『攻め』の姿勢である百代が、今は完全に『受け』へと回っていた。

「いい経験じゃな。それに、戦いの喜びに飲み込まれておらん。宗

介君が先に飲み込まれて踏みとどまったようじゃ」

「ええ。これならバ……百代に勝ちの目が出てきましたネ」

「うむ……何しろ、彼の父に受け取った情報が正しいのであれば――」

＝＝＝

宗介が叫びながら、防御に回って攻撃の手が明らかに減った百代へと殴りかかる。

「どうしたどうしたァ！　縮こまってるんじゃ俺には勝てねぇぞ！」

「ぐっ……それを言うなら私を倒してから言うがいい！」

そういった百代が、宗介の攻撃を左手を犠牲にして防ぎながら右ストレートを繰り出した。

それが宗介の顔面へと吸い込まれていき――

「いい度胸だな！　だが甘すぎるぜＥＥＥＥＥ！」

「！」

そのまま宗介の顔を突き抜けた。

違う。これは宗介ではない。残像だ。

それに気付いた百代はなんとか振り返って防御しようとし……

「がはっ！」

宗介のドロップキックが背中へと突き刺さり、百代は横へと吹き飛ばされてしまった。
それでもなんとか空中で体勢を取り直して地面へと着地する。

「ＨｙｙｙｙｙｙａＨａＨａＨａＨａ！　続いていくぞォォォォォォッ！」

「迎え撃つ！　はあああああっ！」

百代は気合を入れる声をあげ、体中に力を込めて迫り来る宗介を迎え撃った。
一発一発が必殺の威力を持つ宗介の拳を、全力を込めた拳で迎撃していく。
デタラメに放たれる拳や蹴りで身体を破壊されるが、瞬間回復でなんとか保たせていると言った感じだ。

「Ｋｕｋｅｋｅｋｅｋｅ……どうした！　もっと！　もっとだ！」

「もっと……なんだ？」

「こうして戦いでしか自分の全てを表現できない俺たちだ！　全力で触れ合うことをどれだけ待ち望んでいたか！」

「私もそうだ。待ち望んでいた。でも宗介、お前はなぜそこまで……」

激しく拳を交わしながら、百代が宗介の違和感を問う。
こうして闘ってみれば、昔と明らかに変質している友人の姿に疑問を覚えていたから。

「俺はお前に勝つためだけにここまできた！　お前のことを思うと胸が高鳴る！　俺みたいな奴は胸に溢れる感情を抑え付けることなんかできやしないのさ！　だからどこまでも突っ走るだけだ！　俺はお前のことが……グッ！」

攻撃を更に激しくしていながらも、高らかに叫びを上げる中。
突然に声を詰まらせた宗介が思い切り飛び退った。

「チィッ！」

そうして飛び退った先で、額を拭って舌打ちをした。
しかし額を拭った後からも、絶えることは無く汗が吹き出し続けていく。
それは正に異常と言うべき状態だった。
例え熱病に掛かったとしてもここまで汗はかかないだろうし、身体が熱で赤くなることもないだろう。

「熱いなクソ……だがその程度で止まるわけに行くかァ！」

宗介は苦笑いを浮かべ、息を荒くしながらも、先ほどと変わらぬ量の気を纏って百代へと突撃した。

第十六話　真剣で勝負だ！　中編（後書き）

あとがき

今回はちょっと短いけど、結構詰め込めたと思います。
結局、3部に分けることになりました。
だからここは短くても勘弁してください。
全力を長時間出すと危ないってのは色々なキャラがやってますよね。
DBでもそんなんあったし。

意見・感想はいつでも受け付けていますので、ぜひ書いてもらえると嬉しいです。

技説明

『ライトニングマックスピン』
超高速回転によって、いかなる攻撃も弾き飛ばす。
さらにその突撃速度は百代でも完全に避けきれないほど。
防御をしようとも、防御の上から削り取る恐ろしい性能。

百代のように電気耐性を持つ者以外が受ければ、放つ紫電によって『追加効果：感電』がつく。

第十七話　真剣で勝負だ！　後編（前書き）

おっと、私の感情が滲み出すぎたようだ。

第十七話　真剣で勝負だ！　後編

――観客席にて。

戦いの様子を見ていた風間ファミリーの面々は、その変化に戸惑っていた。
いち早く気がついたのはリーダーの風間翔一だ。

「なんかよー。あいつ様子がおかしくないか？」

「え？　さっきと変わらずにモモ先輩を押し捲ってるじゃん」

「そうだぜキャップ。少なくとも俺様にはそんなに変わってないように見えるな」

「んー、なんとなく調子悪そうな感じするんだけどなー」

ほとんど勘でそう言い当てた彼の言葉に、未だに動きがそんなに変わっていない宗介を見ていたほかのメンバーは首を傾げた。
しかし、そう言われて注目してみれば確かにおかしなところがあることに気付く。
とんでもない速度で移動するためにほとんどわからないが、かろうじて黛由紀江こまゆっちが気付いた。

「すごく汗をかいてます。体も真っ赤になって……」

「ん……本当だ。全然見えないけど、赤くはなってるっぽいね」

それに続いて、目の良さはメンバー内でもかなりいい方である京が

それに気付く。
彼女達の言うとおり、宗介の様子はだいぶおかしかった。
目の前で戦っている百代はとっくに気付いているだろう。
しかしそれでも、他の者達では察知できないほどのスピードで戦い続けている。

様子はおかしくても、戦闘能力自体は落ちていないようだった。
そう、今はまだ――

そして一人の少女は、目の前で繰り広げられる戦いに圧倒される。
果たして自分はあそこまで行くことができるのか。
目の前で戦う片方が言ってきたように登りつくことはできないのか。
その答えはまだ彼女は出すことはできない。
ただ目の前の戦いから、そこから得られるものを吸収するのみ。

＝＝＝

「ラアアアアアアアアアアアアアアアアアア……！」

黒く輝く脚を構えて、宗介が百代に攻撃を仕掛ける。
ギュッと回転を加えた、見るものを悉く畏怖させる迫力と威力を兼ね備えた、たとえ戦艦でも真っ二つにへし折るだろう右の回し蹴り。
それを百代は己の左腕と左足で防御しながら、同時に右の中段蹴りを繰り出して宗介の腹にぶち当てる。

「グッ！　はぁっ！」

「ごぶっ……！」

渾身の力を込めた百代の一撃が、カウンター気味に宗介にヒットする。

その為に攻撃の衝撃が通り、呻きを上げた宗介の体勢が若干崩れる。

しかし攻撃を受けて後ずさったのは百代のみで、宗介はその場に踏みとどまった。

百代はすぐさま瞬間回復によって復活した左腕や左足を使って攻撃を仕掛けていく。

「そらそらそらそらっ！　どうした宗介！　調子が悪そうに見えるぞっ！」

「うるせえ！　ディィッ……熱いなクソッ……！」

瞬間回復のおかげで調子の落ちることのない百代に比べ、宗介の様子は明らかにおかしかった。

未だに戦闘のほうは宗介が有利に行っているのは変わらない。しかし、だんだんと百代の動きに対する反応が遅くなり始めている。

息も荒く、全身から汗が噴き出し、目の焦点も若干あっていない。

宗介自身もそれに気がついている。

しかし、百代に勝つためには、圧倒するためには、今の彼にはフルパワーをするしか手段がないのだ。

服の中が汗だらけになってすごく不快だ。

身体が重く、節々が痛んで気分が悪い。

百代の攻撃はもうほとんど通用しない。外部の痛みはもう感じなくなっている。

それだけの苦難を乗り越えてでも、勝たなければならないと宗介は強く思っていた。

「シャアアアアアアアァァァッ！」

速く。とにかく速く。
攻撃の手を緩めることなく、百代へと手刀を放ち続ける。
しかし守りに回っている百代は、一向に倒れることはない。
いくら致命傷を与えようとも、すぐさまそれが瞬間回復していく。
埒が明かないと見て、無理矢理百代を蹴り飛ばして距離を離す。

「キリが……ない！　スパイラルシュータァァァァァッ！」

「川神流・かわかみ波！」

距離が離れた百代へと、気合を込めて右手を突き出し螺旋状に進む極太のレーザーを放つ。
それに対して百代がかわかみ波を放ってそれを相殺する。
一向に決着がつかない対決は、いよいよ最終局面を迎える。

＝＝＝

――観客席

「やはり、彼は全力での状態が長続きしないようですネ。」

「うむ。情報の通りじゃの」

ルーの言葉に鉄心が頷いた。
彼らは大神隼人――宗介の父から宗介のことを教えられていた。
『大神宗介が全力を出せる時間は限られている』ということを。それの原因がとある事故にあり、もう治せないということも。
だからこそ、こうなるのではないかと言うことも若干だが予想していた。

「これは、結果は見えたかのう……」

「……そう、ですネ」

浮かない顔で話しあう二人。
彼らの視線の先にいる宗介は、今や蝋燭に灯った火の最後の輝きだ。
既に目も焦点も合っていないらしく、攻撃を何度もはずしている。
それに反して百代は、瞬間回復によって怪我も疲労も癒えるため、動き事態はあまり変わっていなかった。ただ、受けから攻めへとだんだんとシフトチェンジし始めている。

「野獣のようというよりハ……むしろ、意地になっている子供ですかネ」

「子供と言うには強すぎる気もするがのう」

「ほんの例えですヨ。傷を負って尚も諦めの悪い獣を言い換えてもいい」

「うむ。それが妥当じゃな」

彼らが向ける視線には、さまざまな感情が入り混じっている。
その感情の中に哀れみがあるのは、きっと仕方のないことなのだろ

う。
己の知る子供だった少年の心が捻じ曲がって、今再び目の前に現れると言うのは、きっと辛いことなのだ。

「今のモモは、あまり楽しそうではないのう……」

「はい……ですが、きっと上手く回ってくれることを信じていまス。百代は強敵との戦いで自分の弱さに気付いタ。そして彼とて、百代と同じく強いのですからネ」

「うむ。彼の昔を知っているだけに信じられる」

「はい。ワタシも早く、あの二人が昔のように遊んでいるのを見たいですヨ」

＝＝＝

呼吸が乱れる。抑えようとしても抑えられない。
高熱の次に襲い掛かる『寒気』に震えてしまう歯を、奥歯を強く噛みあわせて意識をしっかりと保つ。
身体の内側から襲い来る温度変化の波は、さすがに辛いものなのだ。
俺はまだ限界じゃない……はずだ。
身体がまだ動くのなら、意識がまだあるのなら。俺は闘って、そして勝つ。
この戦いにだけは絶対に勝たなければならない。

「オォッ……！」

内側から襲い掛かってくる体中の痛みに耐えて、百代の頭へと突きを放つ。

頭が痛い、目が霞む、そんな言い訳はいくらでもできる。

むやみやたらと暴れまわる心臓を押さえつけ、歯を食いしばって全力の拳をぶつけてやった。

「ぐっ……！　だが甘い！　この程度で倒せると思うな！」

「しぶとすぎなんだよテメェは……ッ！」

しかしその拳を顔面で……いや、額で受け止めて百代が言った。

いくら瞬間回復があろうと、頭蓋骨をやれば勝てると思ったが甘かったか。

クソ……さすが百代だ。だが負けてたまるか！

「……チックショーめ。身体が重いぜ」

「どうした。もうバテたのか？」

「ハッ！　俺の心配なんか支してんじゃねえ！」

「そうか？　顔色が悪いように見えるが……」

「黙れ！　今は敵だろうが！　隙をつくことでも考えてろ！」

もうとっくに百代は俺がヤバイことに気付いてる。

子供の頃はこんな欠陥は無かったから理由には気付いてないだろうが……大丈夫だ。

俺は目を瞬かせて、朦朧とし始める視界を取り戻す。
クッソ……こんなんは使いたくなかったんだが。

「喰らえや百代ォ！」

「ッ！？　これはっ！」

「ＳＨＡＤＯＷ！　ＫＮＮＮＮＮＮＮＮＩＦＥ！」

身体をまだちゃんと認識できるうちに勝負を決める！
俺はそう決めて、右手に自分が制御できる限界量の気を込める。
そうしてできたのは、禍々しい黒く輝きを持つ凄まじい殺傷性を秘めた手刀。
だんだんと、自分と言う存在が身体から剥離していくような感覚が自分を襲う。
いくら動かそうとしても、鉛のように重く、石膏のようにもろく感じる。実際そんなことは無いはずなのに、自分の身体を自分のように感じられないことはさすがに辛い。
それでも俺は絶対に勝つ。
勝たなければ。

「いい加減に……死ね！」

「なっ！？」

左手でもって回避できないように百代の肩を掴む。
そして絶対に離さずに、百代の心臓に手刀を突き出す。
確実に倒すには、確実に殺す手段を取るしか――

「ぐあああああっ！」

「ッはずした！？」

クソ、ここにきて体の不調が……心臓のある位置につくはずだったのを下にずらされた！

まだだ。機会は逃したが、まだ身体は動く！

次こそは確実に……ッ！？

「抜けねぇだとォ！？」

「……ひどいじゃないか。死ねだなんて」

「チッ、抜けないようにしたか」

「ああ。もう逃がさない。そろそろ決着をつけよう」

「ハ！　そんなもん……」

当たり前の、ことだろうが。

朦朧とする視界の中で、目の前の百代が右の拳を構えた。

右腕は……刺さったまま抜けない。

ならば左腕で倒すしかない。

まだだ、まだ……俺は……

「お前がいくら強くなろうとも俺はァァァァァ！」

「いい加減に、もう、眠れ……！」

何故だ。何故そうも楽しくなさそうな顔をしている。

俺は強くなった。確実にあのころよりも強く。

なのに何故だ。何故勝っていない……何故楽しくない！

「禁じ手・富士砕きぃぃぃ！！」

「ぐうぇッ……！」

腹部の辺りを、強烈な衝撃が貫いた。

だが、今の俺は痛みなんて感じない。そのまま左手をお前の顔に……！

「まだ左手が残っているぞ！　宗介！」

「チィッ！　ゼヤアアアアアアアッ！」

「川神流！　無双正拳突きィッ！」

百代の左の正拳突きが俺の胸へと入った。

俺の拳は……顔を僅かにそれて頭の横の何もない空間を貫いただけだった。

目が……もう、ほとんど見えない。

そのまま俺は吹き飛ばされて地面へ転がった。

まだちゃんと聞こえる耳が、百代がゆっくりと近寄ってくる音を捉えた。

舐めているのか……？　舐められてたまるか……！　こいつにだけは絶対に……！

「まだだァ……まだ俺は負けちゃいない！」

「負けを認めないのか。そこは昔と変わらないんだな」

「当たり前だ……俺は覚えてるぜ。強くなって帰ってくるってなァ……」

「ああ。そうだな」

なんだその声はなんだこの感じる視線はなんだこの気持ちはっ！
ふざけるなふざけるなふざけるなっ！
身体が動かない。動きさえすれば、絶対にまだ闘えるのに！　俺の身体はどこに行っちまったんだ！

「俺は強く……ゲホッ！　強く！　強くなったんだ！　お前よりも強く……っ！」

「……そうだな。でも、今のお前と戦うのは駄目だ。なんかな、楽しくないんだよ」

「強いのと闘うのが楽しいんじゃなかったのか！　そうだろうが！」

「じゃあ聞くが、宗介。お前は楽しかったのか？　今の戦いが」

「……ッ！　ああ！　そうだ！　そうじゃなきゃならない！　俺はお前との戦いを……！」

「……うん、やっぱりな。今のお前は駄目だ」

何が駄目だ。
俺に教えろ。
そうでなければ、到底納得なんかできるかァ……！

「昔のお前なら、きっとわかるんだろうな」

「昔？　俺は今のほうがずっと強いだろうが！」

「そうだな。でも、昔のほうが強かったものもある。私もお前を見て気付けただけだ。だからお前だってすぐ気付けるさ」

「わけわかんねェよ……全く……」

本当に……理解不能だ。
ただ俺が弱かっただけだと断じてくれればどれだけマシか。
畜生が。こんなところで意識が……

「クソ……百代、強くなったな……結局、負けか……」

そう、なんとかそれだけ言って、俺は倒れた。
薄れゆく意識の中でじじいの勝者宣言が聞こえた。

「そこまで！　勝者！　西方、川神百代！」

ああ、俺の、負けなんだな。

いったい、俺の、何が駄目だってんだ。教えろよ。なぁ。

第十七話　真剣で勝負だ！　後編（後書き）

あとがき

感情だけで突っ走った回とも言えますが、どうでしょう。
というか、この三部全部さ、マジコイのＢＧＭ『武士』を聞きながら執筆したんですよね。アレを聞きながらだと更に燃えるかもしれない。ぜひお勧めする。

ご意見・ご感想をお待ちしております！　気軽に書いていってね！

技説明
『スパイラルシュート』
螺旋の極太レーザーをぶっ放す技。
隕石だって破壊できます。

『ＳＨＡＤＯＷ　ＫＮＩＦＥ』
気を極限まで高めた黒い手刀。
いかなるものをも貫き、切り裂き、蹂躙する。

第十八話　余情と寂寞（前書き）

過去をやると馬鹿みたいに長くなりそうなので、要点だけまとめて想像できるようにしたよ！

第十八話　余情と寂寞

少年はいつも一人だった。

唯一の心を許せる友達と離れ、友達を作ることができなかった。

それは彼が強いから。

彼をお山の対象にしようと寄る者はいても、それは友達ではない。

そんな彼でも心を許せる人物はいた。

彼の兄だ。

だがしかし、その兄に弟ほどの才能が無く、心が未熟だったがゆえに、彼は歪んでいくことになる。

それだけが原因ではないとはいえ、確かにそれが始まりだった。

純粋すぎるその少年には、信頼する兄から受けた言葉の毒は重すぎて、心の奥底にまで沈殿することになったのだから。

＝＝＝

決闘が終わり、観客席にいる風間ファミリーの元へと川神百代が帰ってきた。
体のあちこちが血の色に染まっているその様に、皆が一斉に駆け寄ってくる。

「お姉さま！　お腹から血が！」

「ちょっと姉さんそれ！」

「ああー、心配ないぞ。もう治ってるからな」

「相変わらずデタラメだね、モモ先輩」

「というか、さっきまでお腹を貫通されてたのにもう治ってるとか、改めて凄すぎだよね」

心配する妹と弟分に対して、心配してくれることを喜びながら気軽に返す。
そして京とモロが、そんな百代のデタラメ加減に、若干呆れて苦笑しながら口を開く。
着ていた服や肌には血が残ってはいるものの、腕を貫通させられてぽっかりと穴が開いた怪我自体は綺麗さっぱり消えているのだ。
瞬間回復は相変わらずチートだった。

「つーかモモ先輩、あいつは大丈夫なのかよ。なんかヤバい倒れ方だったけどさ」

キャップがそう言って、修行僧たちに川神院内へと運ばれていく宗介の方を見る。

確かにキャップらの目から見れば、今の戦いはかなり壮絶なものだっただろう。
最終的に倒れた宗介が、百代のメチャクチャ凄そうな正拳突きを二発も受けて倒れたのもそれに拍車をかけている。

「それに関しては問題ないだろう。あいつなら死ぬほどの怪我じゃないはずだし、倒れたのも私の攻撃が直接の原因と言うわけではなさそうだしな」

「ん？　そいつはどういうことだ？　モモ先輩にぶん殴られたから倒れたんだろ？」

運ばれていく宗介を眺めながら、目を細めつつ百代が言う。
しかし百代に殴られたことが直接の原因ではないと聞いて、岳人がそのことに首を傾げた。
確かにそうだろう。他者から見れば宗介は百代の攻撃によって沈んだように見える。
だが、実際にはそれは間接的な原因でしかない。

「なんというかな。私の攻撃で倒れたというか……感覚的にはダメージを入れられた感じが全然しなかったんだよな」

「確かに。自分には、大神は攻撃を受けても一向にひるんでいなかったように見えた。……まぁ、最後の攻防くらいしか見えなかったが」

「はい。大神さんは最後まで巨大な気を減らすことなく放出し続けていました。勝敗が決まる直前に、一気にそれが消えてしまいましたけど……」

「おお。クリスもまゆまゆもわかったのか～？　やるじゃないか！」

「正直言うと、ほとんど見えなかったのだが。二人とも強すぎるぞ」

「い、いえ。私なんかとてもお二人には……！」「先輩達マジで強すぎだぜ～？」

宗介が単純なダメージで倒れたというわけではないと気付いたものもいたようだ。

しかし、実際に何が原因で倒れたのかと言われれば……

「わからんな。病気とかになるような奴でもなかったはずだが……」

「あいつ努力なんかしねーとか言ってたからスタミナ切れなんじゃねーの？」

「あれはそういうレベルじゃなかった。もっと何か別の深刻なものだ」

「……確かに、そうですね。様子はおかしく見えても、感じる気自体は減少していませんでしたし」

一向に理由がわからずに首をかしげる百代。

何度考えても、倒れた理由がわからなかった。

己が宗介を倒したのは確かであっても、宗介の心が昔と違って弱かったというただそれだけの理由では無いはずなのだ。

確かに宗介は、百代が今まで闘ってきた中でも一番強い相手だったのだから。

そこで百代は、自分達から少し離れた所に立っている者を見つけて

声をかけた。
先ほどからずっと風間ファミリーの後ろに、存在を空気のように薄くして立っていた者だ。
それもメイド服で。当然百代なんかにはそんな陰行が意味を為すわけも無いのだが。

「なぁそこのメイド、ヴィヴィだったか？　ちょっと話があるんだが」

「はい？　なんでしょう？」

ニッコリと微笑みながら百代の方を向くヴィヴィ。
さっきまで完全に意識の外に立たれていたために、他の皆は驚いてるが問題ない。

「あいつ、明らかに体に何かあるだろう。何があったか知ってるんじゃないか？」

「そうですねぇ……どうしましょうか？」

「私が聞いてるんだぞ。大人しく話せ」

「ちょっと姉さん、さすがに――」

「いえ、始めから話すつもりですけどね」

「紛らわしいわ！」

マイペースなヴィヴィに若干振り回されるが、それを見ても場の空気が和むことは無い。

百代が若干ピリピリした空気を発しているためだ。
余程気にしている、ということだろう。

「じっくり聞かせてもらうぞ。時間はあるしな」

「ええ。でも場所は移しましょうか？　そちらの方々はどうしますか？」

そう言って風間ファミリーのほうを指差すヴィヴィ。
ヴィヴィにそういわれたので、百代がキャップに向かって話しかける。

「どうするキャップ？」

「あいつモモ先輩の友達なんだろ？　正直気になるけどさ。俺達が聞くことでもないさ。クラスメイトだからそのうち自分で聞くぜ。それにさ、あいつも勝手に話されてちゃ怒るんじゃないか？」

「いえ、別に隠しておくべきことでもないですよ？」

「いやいや、本人の承諾は取ろうよ。そこはさ」

即決で応えるキャップ。それに軽く応えるヴィヴィにモロが小さくツッコミを入れた。
そして次にヴィヴィがワン子の方を向いて口を開く。

「どうも宗介様が迷惑をかけてしまったようですしね。あなたもここが家ですし、聞いていったらどうですか？」

「あ……」

「？」

いきなり話しかけられたことに驚いたワン子がちょっとだけ驚くが、岳人以外は気付いていない。

といってもその反応は微々たるものだったので、気付いた岳人もそれほど気にはしなかったが。

「それでは、場所を移しましょうか」

「ああ。じじいに言って部屋を借りるぞ。みんなもおやすみなー」

「おう。じゃあなー」

こうして皆は帰っていき、百代たちは川神院の中へと入っていった。

＝＝＝

少年が兄と対決を行った日。

5歳も年下の弟と対峙する兄の心境はいかばかりか。

努力してきた日数も、積み重ねてきた思いも、ずっと長い兄。

兄として弟に勝つべきと望んだこの戦いはしかし弟の勝ちという形で終わってしまった。

その時に兄が言った言葉が弟を苦しめることになる。

弟を褒めるのではなく、才能の差があることを妬み、思わず言ってしまった負け惜しみ。

それでも少年は兄を慕っていたので、少年はその言葉をそのまま受け取った。

そして少年はそれから修行を一切しなかったが、それでも負けることは無く。

兄の劣等感は積み重ねられ、弟に対する言動はひどくなる一方だった。

そんな時期がしばらく続いた後、とある事件に彼らは巻き込まれる。

＝＝＝

「さてさて、何からお話しましょうか」

「とりあえず言え。あいつの調子の悪さについてだ」

川神院の中のとある部屋につくなり、ヴィヴィを対面に据えて百代が話しかける。

その横ではワン子が微妙にいずらそうに座っている。

しかし、自分の姉とあそこまで戦える奴が、なんであそこまで自分につっかかってきたのかも気になるために黙って聞いている。

「まぁとりあえず言うとですね、怪我の後遺症です」

「怪我だと!?」

「え!?　あいつ怪我してたの!?」

「まぁ、ずっと前のことなんですけどね」

「……おい。ビックリしたじゃないか」

「いえいえ、さすがに宗介様でも怪我をしたままで百代さんとは戦いませんよ」

ちょっと早とちりしてしまった二人にヴィヴィが笑顔で訂正を入れた。

大変紛らわしい言い方に百代が若干怒るが、それすらもニコニコと応対する。

さすがは年長者である。学年は百代が上だが。

「数年前ですかね。私も宗介様に始めてあった時、宗介様が病院のベッドの上でしたから」

「……何があった?」

「まぁ、テロに巻き込まれて死にかけたといいますか。お兄さんの方は死んでしまったみたいですけど」

「えっ……あいつ兄弟がいたの？」

宗介に兄弟がいた事に驚くワン子。
それに対して、未だ笑顔のままのヴィヴィが丁寧に答える。

「そうですよ。大神直介という名前で、才能は宗介様ほど無かったんですけどね」

「話には聞いていたが……それより宗介だ。いくら数年前とはいえ、生半可な怪我ではあいつは死にかけたりなんてしないだろう。いったい何があった？　今まで後遺症が残るような怪我なんて事が……」

百代にそう聞かれ、今までのふざけた空気を一新するかのように真面目な顔をしたヴィヴィがその問いに答えた。

「５０口径の重機関銃の弾がこめかみを抉り、７．６２ミリのライフル用マグナム弾が心臓に二発です。他にも体中を蜂の巣にもされましたが……むしろ、何故死ななかったのかが不思議なほどの大怪我です」

「……私はそういうのには詳しくないが、さすがにヤバいってのはわかるぞ」

「普通の人間なら3回死んでお釣りがきます。程度はわかりましたか？」

「……ああ。だが、後遺症についてまだ聞いてないぞ」

普通の人間ならば、頭に重機関銃の弾が当たれば強い衝撃を受けて脳浮腫を起こすだろう。心臓の位置にライフル弾が当たれば、確実

に死に至るだろう。
だがしかし、こめかみは抉れても頭蓋骨を砕くことは無く、めり込みはしても心臓を貫くことは無く。
宗介は結局死にいたるということは無かったのだと言う。
だがそれでも脳に重機関銃の衝撃は伝わり、銃弾が心臓に与えたダメージは大きいもので。

「その事件の後、脳と心臓に甚大なダメージを受けた影響で、宗介様の持つ膨大な気への耐久力が全体的に下がっていたのです」

「それにしては十分に使いこなしていたと思うんだが……」

「はい。本気さえ出さなければ大して問題はありません。ですが、全力で長時間戦い続けるのは非常に危険なんです。あなたたちもさっきの試合で見たでしょう？　宗介様が全力を出すことに、宗介様の心臓と脳が耐え切ることができないのです」

武術家としては確実に致命的な弱点であろうそれ。
確実に、百代との戦いで負けた一因でもあるそれ。
それを聞いて、百代もワン子も納得して頷いた。
だが、まだ聞くべきことはある。

「それじゃあヴィヴィ、どうして宗介があそこまで歪んでしまったのかを教えてもらうぞ」

「私には詳しいことは言えませんね。後から知った情報でしか知らないんですが……」

「別にそれでいいぞ。教えろ」

「わかりました。それでは……」

百代に請われてヴィヴィは宗介に起きた出来事を語りだした。
事件の起きた後で雇われたヴィヴィは、宗介の過去も彼の父から聞いたものに過ぎない。
それに、その父ですらずっとその場にいたわけではない。

しかし、大まかであってもその過去が伝わるということは大きい出来事のはずだ。

百代たちはヴィヴィの語る宗介の過去に耳を傾けた。

＝＝＝

少年は大きくなった。

しかしその心根は昔と大きく変わっている。

兄が弟に対してかけた言葉の呪縛は解かれぬまま。

怪我の後遺症によって自分の限界をを越えるということもできず。

溢れんばかりの才能、全力を発揮できない鬱屈さ、兄が残した呪縛も、全てがストレスになっていました。

そして努力をせずとも少年は決して負けることなく。

自分が努力をすることなく、他者の努力と関係なく得られていく勝利が、少年の心を歪ませていきました。

そんな状況を案じた少年の父である大神隼人が、川神鉄心と談判して互いの利益となるとして川神学園に少年を転入させた。

川神百代の精神は危うく、大神宗介の心は壊れかけていると。

上手くぶつけて、二人に気付かせるしかないと。

そして、少年は川神学園へとやってきた。

第十八話　余情と寂寞（後書き）

あとがき

実は宗介は凄く可哀相な奴で、兄が最悪だったのさ！
いやまぁ、お兄さんも可哀相なんだけどね。
……ちょっち薄いのは勘弁してくれ。

バイトのシフトが６：００～１０：００と１４：００～２０：００になったよ！
パソコンをやる時間がねえぞチクショウ！

武道四天王＋宗介の強さというものを考えてみた。

まず、技術について。

鉄乙女＞九鬼揚羽≧川神百代＞黛由紀江＞＞＞大神宗介

理由……乙女さんは百代の攻撃を見事に受け流してたしね。揚羽と百代は年齢的にもちょっと九鬼が上ということで。まゆっちはみんなに未熟と言われてるから仕方ない。
我らが宗介君は言わずもがな。

次に、気（パワー）について。

大神宗介＞＞川神百代＞＞九鬼揚羽＞鉄乙女≧黛由紀江

理由……揚羽の決戦奥義と富士砕きが激突したとき、まゆっちのフォローがあっても相殺という形に落ち着いた。ということからですね。乙女さんと揚羽がこの順番なのは、単に『乙女さんがテクニックキャラなら揚羽はパワーキャラじゃね？』という考えからです。乙女さん、百代に突撃したときに星殺し相手に押し負けてるしね。我らが宗介は元から百代よりパワーが上と言う設定でしたので。

総合戦闘力について。

川神百代（瞬間回復あり）＞大神宗介（本気）＞＞＞大神宗介≧川神百代（瞬間回復なし）＞九鬼揚羽＝鉄乙女＞黛由紀江

理由……百代は乙女さんが参戦する前、揚羽とまゆっちを瞬間回復を使うまでもなく捕まえました。もうその時点でパネェんですが。九鬼さんと鉄乙女さんは情報が少なすぎるので多分同じくらい。まゆっちは皆に未熟と（ｒｙ

で、我らが宗介君ですが。こんくらいです。本気と本気じゃないのとでは天と地ほども差があります。川神大戦の時の四天王の対決はかなり当てにならないんだよね。百代は自軍が負けるよりも先に委員長を捕まえなきゃいけないから焦るし他の三人は委員長を守らなきゃいけない。

まぁ『百代（瞬間回復あり）　揚羽＋乙女＋まゆっち』なのは多分あってるんじゃないかと。最終的に勝つのは百代なんだろうけどな。持久戦すれば確実に勝てるし。瞬間回復で怪我も疲労も完全回復可能。

……むしろ誰が勝てるんだと。
ワンターンキルするにはあいつは強すぎるぞ！

第十九話　ココロ揺れる（前書き）

超展開の嵐……難産でした。

ここからが腕の見せ所だぜ……

第十九話　ココロ揺れる

目が覚めると、見覚えのない天井を見上げていた。

横を向けば、朝の日差しが戸の隙間から漏れ出している。

既に一日が経っていたか。

体を起こして昨日の事を思い出す。

俺が敗者であいつが勝者か。

クソッ。やってられねぇ。

なんで俺が襤褸雑巾みたいに。

なんで体がアホみたいに重かったんだ。

もう、今はなんともないというのに。

最後に受けた二撃。

おそらくアレの衝撃で内臓がいくつか破裂していたはずだ。

痛覚を切っていたその時はダメージには感じなかったが、確かに衝撃で内臓がやられていた。

しかし一晩寝た今はもう治っている。

自分の体ながら、つくづく耐久性以外はふざけた性能だ。

……外から修行僧どもの声が聞こえるな。

これから、どうするかね。

気にしまいと笑おうとして、できなかった。

やっぱり俺にとってそれだけ大きな出来事だったんだろう。

とにかく外に出よう。

部屋の中は辛気臭くていけない。

……ああ、今日もいい天気だ。

やたら晴れ晴れとした空が、今はやたらに鬱陶しい。

やっぱり夕日のほうが儚げでいいな。

春の日差しはちょっと明るすぎる。

＝＝＝

この世には実に悪臭が多い。
この親不孝通りからする匂いもそれに近いものだろう。
とにかく嫌悪感を感じる匂い。匂いと言う言葉で表せなければ、勘とか気分とかそんなんでもいい。
宗介はそんな親不孝通りを一人で歩いていた。

服には、昨日の決闘で百代の腹を刺したときに付着しただろう血がついている。
その上から革ジャンをひっかけて隠してはいるが、時折チラチラと見えてしまっている。
そんな格好でふらついているものだから、宗介は相当に目立ってしまっていた。

周りの柄の悪い人物達から不躾な視線が当てられているが、宗介の視界には一切入っていない。
宗介の視界にはそんな不純物は一切入っていない。
道端にある石ころに一々目を向けるはずが無いように。

そんな宗介がいったい何を見ているのか。
何を考えてこんなところを歩いているのか。
実のところ、彼は何も見ていないし何も考えてはいない。
自らの内に深く入り込んで思考を続けながら、ただただ歩く。
何故負けたのか。
何故楽しくなかったのか。
いったい何が足りなかったのか。
昔の自分が持っていて、失くしたものは何なのか。

いくら考えても答えは出ない。

川神院から飛び出して、そのままま っすぐ進んでここまで来ていた。
ただそれでも、人を近づかせないだけの『何か』を発しているのはさすがだろう。
それは畏怖を抱かせる力であり、不気味ささえ感じる目の光の無さだ。

だがそれでも。
逆にそういったものに引き寄せられる者はいる。

「あんた、血の匂いがするねぇ？」

「……邪魔だ。俺にかまわないでくれ」

目の前に現れて歩みを止める女に対し、宗介が口を開いた。
自らの前に立つ怪しげな雰囲気を持つ女に対して、一切目を向けていない。
気が立っているわけではなく落ち込んでいる状態ではあるが、邪魔をするものには容赦しないのは変わっていない。
女が前に立ち続けている間にも、宗介の発している殺気が大きくなっていく。

「あっはっは。あんたも相当ヤバい感じがするねぇ？　どうだい？　ちょっと遊んでいかないかい？」

「生憎と興味がない。俺の邪魔をするな」

「つまらないねぇ……おっと」

もう一度女が口を開こうとすると、目の前から宗介の姿が消える。
若干驚きつつも、気配をたどればすぐそこの建物の上に宗介の姿が

あった。

それを確認し、板垣亜巳はゆっくりと携帯電話を取り出した。
建物の上をゆっくりと去っていく宗介を見上げながら、とある人物に電話をかけた。
彼女の記憶では、そいつは今日辰子と一緒に買い物に行っていたはずだ。
駅前なので場所も近い。
それに、そいつが宗介に興味を持っていたとも記憶している。

「ああ、風太かい？　ちょっとこっちで面白い奴を見つけてね。前にあんたを青空闘技場で倒してた奴だよ。そうそうそいつ。今たまたま見つけたのさ。ありゃ負け犬って感じだったけどね。ん？　場所？　場所は――」

＝＝＝

宗介はダンッと地を蹴って、建物の壁をダダダッと駆け上って建物の上に達した。
そのまま歩いていき、屋根伝いに隣の建物へと飛び移る。
宗介は全力を出すことなく、ゆっくりと建物の上を移動していく。
少し考えればわかることだ。
普通に道を歩いていれば邪魔なんてものは際限なくある。
かといってまだまだ明るい時分で、どこかに立ち止まるという気分にもならない。

あたたかな春の日差しがじかに当たる建物の上。
そんな場所を歩いていても、何も陽気な気分になどなりしない。
逆に、陰鬱な気持ちが増しただけだった。

嗚呼、糞忌々しい。

いくら考えても答えは出ないし、気分も晴れない。
そんな気持ちに囚われたままで、宗介は他の何も考えられなかった。
一人で考え続けても、結局思考がループして意味がないと気付いても、彼は孤独の中で考え続ける。
それ以外の選択肢は今まで考えたことがないから。

そんな中、またも宗介の前に誰かが現れた。
今度は男のようだった。

「おいおい！　なんか暗そうな奴発見だぜぃ！」

「……邪魔だ。どけ」

「やなこった！　俺をまぐれとはいえ倒したような奴がそんな辛気臭い顔してるのを見たらほっておけないんだぜ！」

やたらと大きな声で言葉を発する男がそんなことを言う。
そして全くその場からどく気配がない。
宗介は無視を決め込んで横を通り抜けることにした。
が、無視して横に跳んで行こうとした所で腕を掴まれた。

「待てよ！　俺はどけよと言われてはいそうですかと答えるような奴でもなければ、勝手にスルーされて黙ってられるような奴でもないぜ」

「手を離せ」

さすがに宗介も男へと目を向けて怒りの声を上げる。
そして右腕を掴まれたまま、左腕で思い切り殴りかかった。
気を込めていない全く本気ではない一撃とはいえ、そこらの不良なら確実にワンパンチで倒す一撃。
しかし男はそれをしっかりと受け止めた。

「駄目だな。ぜんぜん駄目だ」

「駄目……？　何様のつもりだお前？」

「俺は俺様だ。他の誰でも無――」

「死ね」

「おっと！　……へっ！　まだまだだぜ！」

今度は気を込めたそこそこ強めの右回し蹴り。
当たれば鉄骨だろうと曲げてしまうだろうその一撃を、男は宗介に接近して左腕と左足を踏みしめてしっかりと防御した。
笑って見せる余裕さえある。
そこで宗介は相手の事を思い出した。
全く気にはしていないし興味も無かったが、しばらく前に戦った覚えがある。

「……テメェ、こんなに強かったか？」

「違うな。お前が弱いのさ！　お前、なんか迷ってるだろ？」

「ちょっとした考え事だ。テメェが口を出すことじゃない」

「そりゃそーだよな。俺がお前の問題に口突っ込んでいいわけないさ」

前に戦った時と今の相手の力の違いに若干驚き、ついで怒りも覚える。

そして相手が宗介のことを弱いと言いながら、ビシッと指を差してきたことで更に怒りを高める。

ただ、迷いと言う言葉に対して思うところがあったのも確かなのだ。

だからこそ宗介はこんなところをうろついているのだから。

「だがな！　俺を倒した奴が見苦しい姿をしてんじゃねえよ！」

「んなもん当たるわけ……ッ！？」

完全に見切ったはずの攻撃が、不自然なほどに射程が伸びて宗介の顔にヒットした。

もちろん、いくら気を抜いていたとはいえダメージなどほとんど通っていない。

ただ、雑魚だと認識している相手に不意をつかれたのは、今の彼にとっては少しだけショックであった。

「どうだ！　当たっただろう！」

「だからなんだってんだよ。いい加減にしないと殺すぞ」

「お前が誰かに負けたってのはわかるぜ。そんで落ち込んでるらしいこともな」

「……余計なお世話だ」

ズバリ真実を言われて、ほんの少しだけ返答が遅れる宗介。
畳み掛けるように目の前の男は言葉を発し続ける。

「だからってな。一回負けたからって諦めんなよ！　次で勝てるようにがんばればいいじゃねーか！　一回負けたくらいで暗くなって迷ってるんじゃ駄目だって言ってんだ！」

「うるさいんだよ。黙れ！」

「黙らないぜ！　お前強いんだろ？　強いんなら尚更だ！　負けた相手に勝てるように強くなろうと努力してみろよ！　そんなじゃあよ……全然つまらねえだろうが！」

「黙れ！　いい加減に消えうせろ！」

「ぬがあああああぁぁぁぁぁ……」

いい加減に怒りを露にした宗介の一撃がヒットし、男は空を飛んで川の方向へと飛んでいった。
それだけの攻撃をしたにもかかわらず、宗介の拳には男の骨が折れたような感触は伝わってこなかった。
宗介の本気の攻撃を受けても答えた感じが無いと言うのは、さすがにタフにも程がある。
しかし、宗介はそんなことは頭の片隅にも置いていない。

「余計なことを……クソッ！」

八つ当たりに近くの建物の壁を殴って砕く。
今、宗介はムシャクシャしてしょうがなかった。
一度頭に血が上り、それが冷めてしまえば冷静な頭に戻るものだ。
そんな宗介の頭の中はまた思考の渦になってしまっている。
男に言われた事が、昨日の最後に百代に言われた事が、頭の中を何度もグルグルとかき回していく。
そして、自分が本当に何をしたいのかすらも定まらない。

勝利を得たかったのは確かだ。
でも、戦っていて楽しくなかったのは？
あいつと戦って勝つことを目的にしてきた俺は何をしていた？
既に、何を考えていいのかすらも定まらない。

宗介はまた、ふらふらと歩みを進めていく。

ボチャーーーン！

「ゲホッ！　ゲホッ！　いってーなチクショウ！」

川から上がってきた男がそう言った。
そのままブルブルと犬のように体を振って、水を飛ばしてから立ち上がる。

「よしっ！　これで大丈夫だな。ちっと腹と腕が痛いけど大丈夫だ

ろう。買い物に戻んなきゃな～」

そんなことを言って、一条風太は駅前商店街の方向に向かって歩き始めた。

ふと、立ち止まって空を眺める。

「やっぱあいつ強いなぁ……俺もがんばってみっかな～。あいつに言った手前、負けてられないよな」

＝＝＝

町をひたすらうろついて、結局答えは出ないままに宗介は河原までやってきた。

「……」

どう考えても、何度考えても、結局――

「……チッ」

いや、既に答えは出ているのかも？

それすらも漠然としないままで綺麗な夕焼けを見つめる。

「確か、ここで見る夕焼けが好きになったのは――」

あの頃か、と心の中でそっと呟く。

子供の頃に、ただただひたむきにがんばろうとしていた自分。
自分と同じくらい強いライバルという、大切な相手を見つけて努力していた時期。
そんなこともあったと、そう思いを馳せる。
そうやってぼうっと夕焼けを見つめていたからだろう。
宗介は近づいてくる人物に気付かなかった。

河原で夕日を眺めている宗介を、ワン子と百代が見つけたのだ。
実を言えば彼女達は、突如として川神院から姿を消した宗介を、もし見つけたら確保するようにとも言われている。
そしてワン子は宗介に話しかけるために近づいていき、百代は「じじいに報告する」と言ってその場を去った。
それには、ほんの少しだけ顔を合わせにくいという理由も入っているのかもしれないが。

「こんなところで何してるのよ。突然いなくなったからビックリしたじゃない」

「……あ？　あぁ、犬か。ほっとけよ。俺はてめえ以下の負け犬さ」

卑屈になっている宗介の言い方が頭にきたのか、怒ったワン子が宗介へと詰め寄った。

「何が負け犬よ！　あんなに強いんだからそれを誇ればいいでしょ！」

「うるせえ。負けは負けだ。あいつに負けたんじゃ何の意味も無い」

自身を遥かに越える強さを持つ宗介が、たった一度の敗北でこんなことを言い出したのを怒るワン子。

自分に対してはあれだけ自身満々に語ったにも関わらず、そんな発言をする宗介に怒りを覚えていたのだ。

「あんたの昔のことは聞いたけど、そんなに簡単に諦めてるんじゃないわよ！　ちょっと人に言われたからって自分の夢を諦めるの！」

「黙れ！　貴様に何がわかる！　……俺は負けたんだ。どうしても負けちゃならねえ奴にな。そして、俺はもうあいつに勝てない」

「あ、んたっ！？　お姉さまがあんなに期待してるのに！　あんたはそれを裏切るの！？　がんばろうともしていないのに！」

「俺はがんばったさ。自分にできる範囲でな。それで……いいだろうが」

自身でも納得がいかないかのように、不機嫌な顔で言い捨てて黙り込む宗介。

ワン子もまったく納得できていない。

自分の自慢の姉が認めている奴が、こんな腹の立つことを言う事が許せなかった

「そんなに才能があるのにどうして努力しようとしないのよ！　ちゃんと修行すればいいじゃない！」

「うるせえよ犬。黙ってろ」

「努力をしなかったから負けたんでしょ！　それがわかってるならもっと努力しなさいよ！」

「ハッ！　わかってんだよ。今まで散々努力する奴らを嘲笑ってき

たような、そんな俺が今更努力しようなんて、みっともなさ過ぎて笑えてくる位だってのは！」

「だったら……」

「大体な！　俺の体は欠陥品なんだよ！　そんなんでどうしろって言うんだよ！　ああ！？」

ワン子に何度も言い募られ、本心が垣間見える発言をする宗介。
百代を失望させているかもしれないと思わせるワン子の発言も、宗介の心に響いていた。
尚も激昂したままで宗介が言う。

「無理して鍛えようと思っても、それが必要だってわかった頃にはできなくなってるたぁ、笑えねえよなぁ？」

自重するように笑い、ワン子から視線をはずして再び夕日に体を向ける。
そんな宗介に、怒りを若干納めたワン子が問いかける。

「それでもあんたはお姉さまに勝ちたいんじゃないの？」

「ああそうさ！　それでも俺は勝ちたかった！　かつてこれ程までに勝利にこだわったことはない！　俺は……勝ちたいんだ！　そして……」

「そして？」

「そして……そうだな。俺は、俺がこの世でタダ一人認めた女に、認めてもらいたかっただけなのかもしれないな」

「……え～っと」

予想だにしていなかった宗介の答えにワン子は固まる。
今の宗介はかなりおっぴろげていた。
話し続けるうちに、そうやって全部ぶちまけて楽になろうと思ったのかもしれない。
そんな宗介にはワン子は何も声をかけられない。

言うだけ言って、何を言えばいいのかわからなくなっていた。
ワン子とて、気持ちで話し続けていただけなのだから。

「君はそれで本当に良いのですカ？」

そこへ、唐突に現れた人物がいた。

「あ！　師範代！」

「……あんたは何でここにいるんだ？　ルー師範代」

今日に限って自分へと話しかけてくる人物がやけに多いと思いながら、宗介はルー師範へと問いかけた。
それに対して、相変わらずのジャージ姿のルー師範が答える。

「たまたまだヨ。君のことを心配して見ていたのは確かだけどネ。話は全て聞かせてもらったヨ」

「ククッ……あんたまで俺を笑いに来たのか？」

「それは違う。ワタシは君に期待しているのだからネ」

「期待？　この俺にかよ。笑えない冗談だな。全く――」

宗介は笑う。

あれほど無様な姿を晒した自分に、いったいどんな期待をするのだと。

「君が勝利して百代に敗北を教え、そうして彼女を解き放つのではないかと期待しているのですからネ」

だからこそ、ルー師範のその言葉を聞いた宗介は本当に驚いた。

唖然とした表情を浮かべ、すぐに額に青筋を浮かべる。

「ハッハッハ。なかなか面白い言い回しだなオイ。馬鹿にしてんならキレるぞ？」

「嘘ではないヨ。これは川神鉄心の言葉でもあるのだからネ。君は若いし、諦めるにはまだ早い」

「だからなんだってんだよ。勝てる目があるってのか？　俺の体はもうこれ以上強くならねぇんだぞ？」

怒ったまま、疑いを抱きながら宗介が言う。

彼の体については、彼自身が一番よくわかっている。

たとえ無限に力を引き出すことができようとも、それを維持するた

めの体が既に失われていることを。
それでも、絶対に負けまいと戦い続けてきたのは彼なのだから。

「モチロンです。ワタシは君がここで百代と一緒に修行していたのを覚えていますヨ」

「……そうかい。だから？」

「気は、力は、大きければ良いという訳ではない。研ぎ澄まし、使いこなさなければ真価は発揮されないヨ。そんなことも忘れてしまったのかナ？」

「んなことは……知ってるさ」

「ならもう一度、がんばってみようとは思わないカ？」

宗介へと近づいてきたルー師範が、そう言って手を差し出してくる。
それをじっと見て、しばらく固まっている宗介。
まだ、迷いは残っているのだ。
本当に強くなれるのか。
これで努力して負けたのなら、俺はどうなるのか。
しかしその答えは、今出ることは絶対にない。
結局宗介は差し出された手を取らなかった

「……まだ、答えは出せない」

「そうカ」

ただ、前までと違う点もある。

「一晩くれ。ちょっと考えてみる」

「……ウム！　宗介君にとっては凄く大きいことだからネ。じっくり考えるといいヨ」

そう言って、自ら差し出した手を引くルー師範。

宗介はそれに対して、自虐ではない、普段彼が浮かべるような笑みを浮かべてその場を去っていく。

「あ、ちょっとどこ行くのよー！」

「帰るんだよ。何にせよ、こんなところで泣き言を言ってても始まらないしな」

「修行の連絡はどうしますか？　もちろん、するのならですけどネ」

「決まったら電話するさ。……もちろんアンタが面倒見てくれるんだろ？　努力で師範代になったルーさんよ？」

「言い出しっぺはワタシだからネ。当然だヨ」

「フッ……ならいいさ。じゃあな」

少しはいつもどおりの調子を取り戻した宗介は、笑みを浮かべて去っていく。

そんな去っていく宗介へと、ルー師範が声をかけた。

「修行をするというなら、修行の場所も用意する準備があるからネ

！　必ず連絡するように！」

宗介はそれに片腕をあげて返事をし、そのまま家へと帰っていった。

「師範代、あの……」

「一子が彼と話してくれて助かったヨ。いつもどおりなら絶対に話なら聞いてくれなかっただろうからネ」

「なんか納得いかないけど……あいつ、来るかしら？」

「それはわからないナ。決めるのは宗介君自身だ。さぁ一子、明日は旅行なんだろウ？　川神院までダッシュだヨ！」

「はいっ！」

＝＝＝

帰ってきた宗介にいつもどおりにヴィヴィがお帰りなさいませと言い。

帰ってきても一言も喋らない宗介に、しっかりと栄養のある食事を用意して。

心配しながら、宗介の邪魔にならないようにただ待ち続ける。

己の主が答えを出す時を、一人の従者はひたすらに待ち続ける。

ヴィヴィが見たのは、彼女が始めてみる主の姿だ。

居間にあるテーブルなどをすべてどかし、中央に正座して自らを研ぎ澄ませている。

微動だにしないその姿には、一振りの刀を連想させられる。

奇しくもその姿は、数年前の川神院にいた頃に酷似していた。

遥か昔のことを思い出し、慣れないことをして己を探求しているのだ。

そうして、日が変わって3時間ほどが経った頃。

「決めたぞ。ヴィヴィ」

「はい。宗介様」

唐突に目を開いた宗介が、近くにヴィヴィがいるだろうと確信して告げる。

そうすれば、背景に同化するほど気配を薄くしていたヴィヴィがすぐさま応答した。

「俺は、昔はただ強くなりたかった。夢を叶えたかった」

「……」

「今までいろいろあって……自分の夢に正直になるのを忘れちまってたのかもな」

「……」

「とりあえず俺は、心奪われたあの戦いの場に戻るために、くだらない考えは捨てることにする」

「はい」

「そんで強くなって、百代にリベンジだ」

「はい！」

「ルー師範に電話だ！　準備だヴィヴィ！」

「わかりましたっ！」

ところで現在深夜の３時。

電話をするには非常識な時間である。

第十九話　ココロ揺れる（後書き）

あとがき

キャップはマシンガン、岳人はバズーカ、大和はマグナム、モロは水鉄砲。
これなーんだ？
そして我らが宗介は……大口径ライフルかな？

第二章では風太君を結構主体に行きたいと思ってます。

ただ問題は……『川神大戦』も書きたいし、『リュウゼツランルート』も書きたい。
あれって日にち被ってたっけ？被ってたナァ……

もしくは第二章までを共通ルートにして、第三章以降はルート別にするとか……悩むなぁ……

第二十話　あしたのために　前編（前書き）

待たせたな！（大塚明夫風に）

第二十話　あしたのために　前編

朝の川神院……ではなく、休み中の川神学園。

「よく来たネ。宗介君」

「俺が俺であるために、だ。強くなれなかったら承知しねえぞ」

「ハハハ。大丈夫だヨ。男子は三日で変われる。ちゃんと色々と考えてあるからネ」

深夜三時の電話にもかかわらず電話の応答をしたルー師範は、宗介を川神学園へと呼び出していた。
それに宗介は大人しく従い、ヴィヴィを引き連れて川神学園へとやってきたのだ。

「さて、そろそろ時間だから行こうカ」

「どこにだよ。まぁ始めからなんで学園（ここ）に呼ばれたのかはわからなかったが」

「宗介君の場合心の鍛錬が必要だからネ。そういう時は山篭りに限るヨ」

「山か……まぁ、今の俺にはちょうどいいかもな」

真面目な顔でサラッと言うルー師範に、宗介が顔を歪めつつも頷いた。
何時間も考えとおして自分の未熟さも少しは認めている、ということだろう。

「それじゃあ出発しようカ。もう百代も箱根へ向かっただろうしネ」

「ハッ！　あいつが帰ってくる前に俺は強さを取り戻す……で、どこの山だ？」

「富士山だヨ。さぁ、ダッシュで向かおう！」

「……まさか走って行く気か？」

「もちろんだヨ。気での強化は最低限、一時間以内に到着できるように工夫して使うようにネ」

いったいどれだけの距離があるのか。遠く離れた富士山まで走って行かせる気らしい。
ルー師範も、たった三日では身体能力が上昇することが無いことはわかっている。
彼の弱点である長時間での全力戦闘ができないと言う点がなくなることも無い。
だから彼も色々と考えているのだ。
そして懐からストップウォッチを取り出したルー師範が口を開いた。

「さぁ、修行スタートだヨー！」

「やったらぁクソがぁ！」

ルー師範に指し示された方向に向かって宗介は走り出した。

＝＝＝

箱根へ向かう電車内にて。
旅行へ向かう風間ファミリーの姿がそこにはあった。
電車内でも普段どおりに振る舞い、女子大生をナンパする百代に一子が声をかける。

「お姉さま、あいつのことはいいの？　昨日は気にしてたのに」

「あいつ？」

「大神のこと。昨日の夜は様子が変だったのに」

自分が感じる違和感を百代に告げる一子。
彼女は川神院へと戻った後、百代の雰囲気が微妙に違うことに気付いていた。
それが普段よりも浮ついていたというか、決闘の後よりも嬉しそうだったというか。

「ああ、あいつのことか……さぁな」

「さぁなって……」

「あいつが自分で立ち上がる気にならないとどうしようもない。そ

れに、性格もわかってるしな。手助けしたところで突っぱねるだけだ」

「あ～。それは確かに。お姉さまに負けたんだものね」

「だからあいつがまた挑戦してきて、今度こそ本当に気合を入れて望んできたら、しっかりと相手しなきゃならないな。あいつくらい強い奴なんてそうそう身近にいないし。今から楽しみだよ」

「ふ～ん……」

ワン子はそう言ってすぐに元の席へと戻っていった。
百代もすぐにナンパした女子大生達の席へと戻っていく。

百代とて宗介のことを気にしていないわけではない。
だが、宗介が自分で問題を解決して何とかすると言う確信があった。
勘という不確かなものではあるが、その考えは正しいと感じていたのだ。

そして実際、もう少し先だろうと思われていた宗介との決闘は、思いのほか早く行われることとなる。

＝＝＝

富士山の山頂、火口にて。

「到着、思ったより早かったネ」

「こんなもん鍛錬にならねえだろ。さっさとやるぞ」

「少しは落ち着こうカ。何をやるかまだ言っていないだろウ？」

「……わかったよ」

一時間を若干切る速さで富士山の山頂までやってきた宗介。
ちなみに、ヴィヴィは後から遅れて電車で来るのだとか。
宗介は汗を若干かきながら、ルー師範に言い募るがすぐにやめる。
ルー師範が努力によって強くなったことは宗介も知っているし、その実力が確かなものであると言うことは子供の頃から知っているからだ。
だからこそ、自分より鍛錬ということに詳しいルー師範を信用している。
それから二人は山頂から少し外れたところまで移動し、宗介が口を開いた。

「で、まず何をしろって？」

「そうだネ。とりあえずは組手をやってみようカ。気の使用は無しでネ」

「そんなんで強くなれるのか？　三日でやるって言っただろ？」

「もちろんだヨ。今の宗介に足りないものは基本と自己能力の把握。それをもう一度確認しようと思ウ」

「……そういうことなら仕方ねーやな」

肩を竦めて拳を構え、既に拳を構えているルー師範に相対する。
簡単に拳を構えて、無造作に立つだけの構えだ。
しかしそれを見てルー師範が口を開く。

「宗介君、ワタシと同じ構えをするようニ」

「それも鍛錬の一つか？」

「ウム。宗介君は幼い頃は百代と一緒に川神院で修行していただろウ？　それを思いだすんダ」

「懐かしいことを言ってくれるぜ……これでいいんだな？」

「おぉ、様になってるじゃないカ」

自分と同じ構えを取る宗介を見て、ルー師範が声を上げる。
じっとルー師範の動きを観察し、その一挙手一投足を見逃すことが無いように観察しながら構えを取る。
かなり集中を高めている宗介を見て、ルー師範が口を開く。

「それじゃあ行くヨ……昔を思い出すんダ」

「基礎……ね。久しぶりすぎるぜ」

「はぁっ！」

「るぁっ！」

ルー師範が鋭い拳を繰り出し、一拍遅れて宗介も鏡写しのように同じ拳を繰り出す。

続いて蹴り、手刀、肘打ちと次々と攻撃を繰り返していく。

それを何度も何度も繰り返し、スピードを上げて行っていく。

動きを洗練するべく、延々と行う。

そうしているうちに昔を思い出した宗介の顔は、嬉しそうな笑顔へと変わっていた。

まるで子供の頃、川神院にいた頃のように――

＝＝＝

さて、しばらく遅れてヴィヴィがついたのはお昼ごろ。

ルー師範に指し示された場所まで移動してみれば、そこでは二人がまだ組手を行っていた。

しかしヴィヴィに気がついたルー師範が待ったをかけて宗介を止めた。

「そろそろ時間も時間だネ。休憩しよウ」

「んなもんいらねえよ！」

「休憩することもまた修行だヨ」

「お昼ごはんを作ってきたので食べましょう。あなたもどうぞ、ルー師範」

「ありがたくいただくヨ」

「ピクニックに着てるんじゃねえんだぞ……」

呆れた顔で二人を見る宗介だが、二人は既に食事を始めようとしている。

それを見て肩を落とすと、彼もヴィヴィが広げたシートの上に腰を下ろしてヴィヴィ製の弁当を食べ始める。

「で、もう組手はいいだろ？」

「確かに、組手はもう十分かもしれないね。明日は気の使用有りでやろうカ」

「そーじゃないだろ。次は何だって聞いてるんだ。明日じゃなくてな！」

「もちろん決まってるヨ。宗介君、もう体の動かし方やダメージを通すコツは思い出したんだろウ？　なら次はその気を研ぎ澄まして使いこなす修行ダ」

真面目な顔で言うルー師範に、宗介も顔を引き締めて真剣に言われ

た事を考える。

幼い頃に習ったことは忘れ、今までの戦いを全て感覚でやってきた。
ただ己の本能に任せて戦うに任せていた。
しかし、それでは勝てなかった。
だからこそこうやって鍛錬を始めた。
幸いルー師範との鍛錬を行ったおかげで、昔に習ったことは思い出した。
思い出そうとしなかっただけで、体は覚えていてくれたと言うことだろう。

そして次にするべきことは、長く怠っていた気の鍛錬。
体の強化にしても放出での攻撃にしても、一切の無駄なく使えるようにしなくてはならない。
宗介の体が過剰な気に耐えられない以上はそれは必須事項だ。
肌一枚の所で薄く強化しつつ、その効果は最大限に。
どこまでも効率良く、真に使いこなせるようにならなければ問題は解決しないのだ。

「で、どうしろと？」

「そうだナ……とりあえず、あの時の全力は出せるカ？」

「出してどうさせる気だ」

「出した力を体の中心に集中させるんダ。始めは限界以上にやろうとせずにできる範囲から……」

そこまで言ったところで、宗介が実行に移した。
思い切り気を放出して、それをそのまま一気に吸収していくが――

「どわっ！」

「言った傍から無理しないようニ！」

さすがにいきなり上手く行くはずも無く失敗。
その余波と反動で宗介がふらつき、それに対してルー師範が注意を促す。
その衝撃でまだ片付けてなかった弁当とシートが吹き飛んでいき、それをヴィヴィが腕から何かを飛ばして回収する。

「話しは最後まで聞くようニ！　強くなりたいならネ！」

「……わかったよ！　で、どうすりゃいい？　今度はちゃんと聞くさ」

「ただでさえ時間は無いのだからネ。三日で強くなるなんて無茶をやるからには、それ相応の努力もしてもらうヨ」

「んなこた百も承知だよ！」

「なればヨシ！　さあ行くゾ！」

「応！」

そして彼らは火口へと向かっていった。
だが何故火口なのか。
気になったヴィヴィはルー師範に問いかけた。

「視界から邪魔なもの一切を排除しテ、自分だけに集中するためだ

ヨ」

「熱いだけだと思いますが……」

「気である程度強化すればその暑さの遮断もできるからネ。例え薄くても熱さを感じない密度にまで高めることも課題の一つだヨ」

「はぁ……そうなんですか」

火口の中へと宗介を送り込んだルー師範はそう答えた。
おそらく、一人で瞑想を行いながらアドバイスどおりに鍛錬しているということだろう。

「宗介様は、本当に三日で強くなれますか？」

「私は彼次第だと思うヨ」

「……」

「彼は本当に素晴らしい素質を持っているからネ。本当ならもっと時間をかけて弱点克服も完全にしたいけど、それを彼自身が望まなければネ」

「宗介様の体を治すことができるんですか！？」

ルー師範が言った言葉に、猛烈な勢いで食いつくヴィヴィ。
よほど宗介のことを大切に思っているのだろう。

「年単位の時間は必要だけどネ。きっと治ル」

「そう……ですか……」

肩を落としてほぅと息をつく。
それは安心から出た溜め息だとよくわかるモノだ。
そんなヴィヴィを見ながらルー師範は語る。

「今の宗介君が百代に勝つのなら、その長所を余すところ無く使いこなさなければいけナイ。これからの三日で一体どこまで強くなることができるのカ……楽しみでならないヨ」

＝＝＝

――夜。

誰かと電話するヴィヴィの姿があった。

「はい、こちら――」

『――加減に――馬鹿息子め――』

「はい？　え、まさか、本当に――」

『私も――聞くことが――いっしょに――』

「奥様まで――しかし――」

『――に協力――だけだ――ＯＫ？』

「了解しました――それでは」

電話を切って彼女はため息をつき、そして呟いた。

「宗介様のご両親が動かれるなんて……どう説明しましょうか……」

第二十話　あしたのために　前編（後書き）

あとがき

長々と修行するのもどうかと思うのだ。
そんなことやってると本編が進まないしね。
ほら、最強の弟子ケンイチだって短期修行やってた時期あっただろ？

シェア小説も書いてるので、もし良ければ読んでください。
タイトルは、「真剣で私に恋しなさい！！Ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｔｏｒｙ～Ｆｌｉｇｈｔ　ｔｏ　ｆｒｅｅｄｏｍ～」ってヤツです。

まぁ暇なときによろしく。

第二十一話　あしたのために　中編（前書き）

さてさてどうなることやら。

第二十一話　あしたのために　中編

翌日、修行二日目。

早起きしてルー師範と共に鍛錬をする宗介。
昨日はどうやら野宿したらしい。まだ五月なのだから寒いだろうに。
しかし、そういったことは彼らにとっては全く関係ないようだ。
ヴィヴィは昨夜遅くに姿を消して、山を降りていった。
置き手紙にあったとおりなら、食料の調達ということらしい。

今日は空気の薄い富士の頂で、ルー師範と一緒に瞑想中だ。
それと同時に気を練るための訓練も行っている。
今までずっと酷使してきた気を薄く身に纏い、使いこなすべく研磨していく。
感覚を鋭く張り巡らせて、朝の日差しや冷たい空気を感じながら心を無としていく。

そんな中、不意に目を開いたルー師範が石を投げた。
その途端に宗介の周りに漂う雰囲気が一瞬で吹き飛んだ。
カッと、鷹のように鋭い目つきで閉じていた眼を見開いた。
そして座禅を組んだままの体勢で、右手を眼にも止まらぬ速さで動かして石を打ち落とした。

「ウム、入りは十分なようネ」

「当然だろ？　あんな場所で精神集中なんてやらせやがって……まぁ、そのおかげでサマになった気がするけどさ」

「無駄を削ぎ落とすには心の鍛錬は欠かせないモノだからネ。それをすぐに済ませるから少しの無茶は仕方ないヨ。まァ……」

「俺にとっちゃ別に無茶ってワケじゃないけどな」

そう言って瞑想をやめて立ち上がり笑顔を見せる。
しっかりと自分に対する自信を取り戻している笑顔だった。
それを見て安心したルー師範が次の指示を出す。

「それじゃあ次は本格的に強化方法の改善に行こうカ」

「ッシ。それを待ってたぜ」

「まぁ、基本は変わらないんだけどネ」

「オイ」

あっけらかんと言うルー師範に、宗介が思わずツッコミを入れる。
その神速のツッコミを上手くいなしたルー師範は笑顔で宗介に語りかける。

「なるべく小さク、密度を濃くできるようニ――」

「わかってるよ。力の全てを一点に、全体にかける負担は最小限かつ効果は最大限に。だろ？」

「そうダ。わかっているなら言うべきことはないネ。それじゃあ、昨日と同じくまずは組手だヨ」

腰を落として構えを取るルー師範に対し、宗介もまた拳を構えた。

「やっぱ感覚掴むなら戦った方がいいってワケだな」

「そうだネ。今日は気の使用もアリで、工夫して使うように努力してくださイ」

「上等だぜ！」

今日仕掛けるのは宗介から。

無駄を削ぎ落とした動きで回し蹴りを放つ。

それを状態を逸らしたことで避けたルー師範も反撃の蹴りを放ち、宗介がそれを右手で受け止める。

元から動きも早くパワーもある宗介だが、動きの無駄がなくなったことで一つ一つの動作が更に早くなっていた。

教えているルー師範も驚きの上達速度である。

このまま強くなることができるなら、もしかしたら――

そうルー師範も思わずにはいられないほどに。

そしてそれはヴィヴィが帰ってくるまで……

思わぬ人物の到来に宗介が驚くまで続くことになる。

＝＝＝

「げっ！」

「なんだ宗介、久しぶりに会った親に対して『げっ！』とは。ひどいじゃないか」

「そうよ。母さんだって忙しいところを急いできたのに」

「来るんじゃねーよふざけんな！　邪魔だから帰れ！」

怒って地面に思い切り蹴りを入れれば、蜘蛛の巣状のヒビが地面に広がった。
それを見て、やれやれと肩をすくめて首を振りながら近づく一組の男女。
無精髭を生やしたがっしりとした体格の短髪の男と、白いワンピースを着た垂れ目の女性。
彼らの名前は大神隼人と大神真稀子。
あんまり似てはいないが、れっきとした宗介の両親である。

「黙れこのバカ息子が！　聞いたぞ。お前負けたんだってな～」

「チッ……関係ないだろクソ親父は！」

「そんなこと言っちゃ駄目よ宗ちゃん」

「アンタもちゃん付けしてんじゃねえよ！」

「そんな……母さんに向かってアンタだなんて……」

宗介の言葉に目元を押さえる真稀子。
ただあまりにもわざとらし過ぎる仕草なので、宗介はうんざりした顔をしている。

「久しぶりだネ隼人、やっぱり子供が心配になったのカ？」

「そんなとこだよルー。まぁ、そっちは俺よりもマキの方が役に立てるんだろうけどよ」

「そういえば奥さんは……そうだったネ」

その横では知り合いらしい隼人とルー師範が話していた。
どうやら宗介の訓練の一助となるべくここへ来たようだ。
しかしどうしてここにいるとわかったのか。

「鉄心さんに聞いたら教えてくれてな。ま、まだ時間はあるようだからよかったぜ」

「うム。二人が手伝ってくれるなら鍛錬もはかどるヨ」

笑って握手をする二人。
そんな二人の横では笑顔のヴィヴィが佇んでいる。
その視線の先には宗介を追い回す真稀子の姿があった。

「久しぶりに会ったんだからハグさせてよ～。照れてるの～？」

「照れるか！　俺はもうガキじゃねえ！　んなことされて喜ぶわけねぇだろうが！」

「照れ隠しなんかいらないのよ～。お母さんに甘えなさ～い♪」

「人の話を聞けチクショウ！　というか鍛錬の邪魔しにきたのか！」

そんなことを怒鳴った宗介だが、一向に自分の母がとまる様子を見せないのを見てマジでキレそうになった。

拳を握り締め、額に青筋を浮かべて振り返ろうとする。

が、しかし。

「まぁまぁ待て宗介。久しぶりに会った息子とスキンシップを取りたいだけなんだ」

「黙れクソ親父。さんざんほっといたのはそっちだろうが」

「お前が顔を合わせたくないって言ったんだろうが。それともなにか？　本当は会いたかったとか――」

「んなわけあるか！」

「うぉっと！？」

思い切りぶん殴ろうとした宗介の拳を、隼人は紙一重で回避した。

そしてそのまま自らの妻の下まで跳び下がる。

「嫌われたもんだぜ……なぁマキ？」

「うぅ……せっかくお手伝いに来てあげたのに」

「邪魔ばっかりじゃねえか！」

せっかく真面目にやろうとしているのをぶち壊されて、宗介の気分

は最悪だった。
しかも彼の両親は目の前でわざとらしく慰め合っている。
まぁおかげで本当いい加減にビキビキ来ていた。

「だいたいどう手伝うってんだよ。親父は強いけどそこまでじゃねえだろが」

「ハッハッハ。まぁそうだな」

「んなら邪魔しないでさっさと――」

「とりあえず我流川神流奥義、影砕き！」

「――あ？」

宗介が口を開いてる最中に、隼人が地面に伸びている宗介の影をぶったたいた。
するとどうだろう。
地面に映る影が崩壊した。
ガラスが砕け散るかのように、粉微塵になって消えていく。
そしてその影響は影の主である宗介にも及んだ。

「ぐっ！　体が！？」

「ハッハッハ。父さんが色々とやってたのを知ってるだろう？　ただ単に世界を旅してたわけじゃあないのだよ！」

「胡散臭いな……つーか頑張れば動けそうだぜ？」

「何ィッ！？　忍術とか魔術とか呪術とか色々混ぜた必殺技だぞ！

？」

「まぁ、胡散臭いというのは確かだネ」

「ルーまでんなこと言いやがって！」

文句を言う隼人の前で、宗介の体は非常にゆっくりと動こうとしていた。

しかし、ぶっ壊れている影が復活し始めているところを見れば、そんなに長くはこの技の効果も持たないだろう。

だがその間に、宗介の目の前に母の真稀子が立っていた。

しかも、何故かその手にバットを持って。

「このバットは私が代打で逆転満塁サヨナラホームランを打ったときのバットでね。とっても縁起がいいの」

「だからなんなんだよ！　知らんわ！」

「あなたが一番強かった頃を『呼び出して』あげるわ宗ちゃん。私、言霊って大得意なの」

「だから――なんでバットを振りかぶってるんだよ！」

宗介の目の前で、思いっきりバットを振りかぶる真稀子。

その狙いは……宗介の頭。

「さあ！　行ってらっしゃい！」

「待てコラァ！　色々と納得できねぇぞ！」

「お返りホームラーーーーン！」

パッカアアアアアン！

フルスイングしたバットが宗介の頭に当たって、絶対になるはずのない音が鳴った。
それと同時に何とか動こうとしていた宗介が、いきなり意識を失ってグッタリとなる。
それを受け止めた真稀子を見ながら、ルー師範が驚嘆の表情で口を開いた。

「おぉ……真稀子殿の技は久しぶりに見るネ」

「結構デタラメだからなー。努力していろいろやってる俺と違ってよ」

「それでも昔は川神院の準師範代になれたじゃないカ」

「昔だろ？　それにそうなる前にドンだけ努力したと思ってるんだ。マキ譲りの才能があってアイツもさぞ幸運だろうよ」

「そうだネ……才能に溢れているのは幸運だヨ」

ヴィヴィの敷いたシートの上に横たえられる宗介を見ながらルー師範と隼人が言う。

二人ともそこまで天才的な才能は無かったが、努力の果てに強くなったのだ。
思うところも色々あるだろう。

さっきのバットをヴィヴィに預け、宗介の横に座る真稀子。
さっきバットを持っていたときと違い、とても穏やかな顔で自らのこの頭を撫でる。
宗介が意識を失っているからこそできることだろう。
それを傍らで見るヴィヴィも、微かな笑顔を浮かべて宗介を見ている。

「宗介様……目を覚ます時には過去を乗り越えていると、ヴィヴィは信じております」

＝＝＝

瞑った目蓋越しに光を感じて目を開ける。
あんの両親ども、やるならやるでバットなんか使うなと言いたい。
強制的にやるのは無しだろうよ。

場所は……いつかの川神院か。
子供の頃、よく寝泊りしていた部屋に良く似ている。
部屋の戸を開けて外に出れば、大きな庭が広がっている。
ここは、百代と戦った闘技場を準備した場所か。

その庭の中央に、一人の子供が立っている。

仁王立ちでこちらに背を向けている黒髪の子供。
川神院の道着を着ている。
顔を確認しなくてもわかる。

アイツは……あのガキは、俺だ。

そう考えたところで、そのガキがこっちを向いた。
不敵な笑みを浮かべてこちらを見ている。

「とりあえず勝負だ。そうだろ？　弱くなった俺」

「ああ。もちろんだ。ガキだった頃の俺」

わざわざ言葉で語り合う必要も無し。
真正面から拳を構えてただひたすらに戦うのみ。

さすがは俺だ。
そこらへんもわかっているらしい。

真正面から地面を蹴れば、ガキの俺も同じ事をしていた。
そのまま互いに左回し蹴りを放って相殺させる。

惚れた女が待ってるんだ。
なにより負けっぱなしなのは嫌だからな。

第二十一話　あしたのために　中編（後書き）

あとがき

さあ後半に続くぜ！

短いけど許せよな！

第二十二話　あしたのために　後編（前書き）

修行編閉幕！

強く、強く、強くなるんだ！

第二十二話　あしたのために　後編

殴る。
蹴る。
避ける。
受ける。
かわす。
防ぐ。
走る。
跳ぶ。
回転。
交差。
再び拳で殴りあう。
目の前にいるのは昔の俺だ。
背も低く、リーチも短いが、それでも俺より強い力を持っているのは確かなのだ。
気を込められる力の量が違うから、一撃一撃の威力は相手の方が高いのだ。
それも当然。
相手は俺が自分の体を壊す前の、いくら気を使っても耐えられる体を持っているのだから。

しかし今の俺にあって相手に無いものもある。
腕の長さ、足の長さ、体の大きさ、気の総量、それくらいか。
技術については対して変わらないだろう。
俺は停滞していたそれを取り戻しただけで、相手はそれを手に入れた頃の俺なのだから。
経験についてもそれを問うのは意味の無いことだ。
コイツは俺で、俺はコイツだ。

今までやってきたことは全て同じく共有しているのだから。

「どうしたどうした！　そんなんじゃ俺は倒せないぜ！」

「ウザッてぇ奴だな昔の自分！　……って自覚させやがったなクソが！」

百烈千弾礫のごとく、拳の雨を相手へと降らせていく。
しかし相手の防御を抜くことはできない。
攻撃に回せば一撃必殺、防御に回せば難攻不落。
自慢するわけじゃないし自嘲するわけでもないが、自分の才能が恐ろしいな。

「反撃開始！」

「ぬぉっ！？」

一声上げて、俺の拳を弾いた相手。
ビリビリとしびれるほどに強力な力と流れるような動きと共に、俺の体が右方向へと流される。
大きな隙を見せた俺に、強大な気を待とう相手が拳を構えた。

「川神流奥義――」

「チィッ！」

「無双正拳突――避けた！？」

川神流の奥義を使ってきた相手の拳を、体を捻りつつジャンプして避ける。

そのまま宙返りしつつ蹴りを放つが……

「甘い！」

片手一本で安々と防がれる。

少なくともそんな軽く済むシロモノじゃあなかったはずなんだがな。

今の蹴りはよぉ……

「なら――」

「遅いぜ！　征ッ！」

「な、ぐガッ！？」

蹴った足を掴まれたまま、相手に更なる追撃を行おうとしたところでぶち落とされた。

踵落としを、力を逃がせられない体勢の俺の腹に思いっきり食らわせてきたのだ。

百代にも踵落としは喰らったし、アイツの方が足も長い分遠心力も加わったろう。

だが、込められている気の量は桁違いだ。

本気のアイツが弱いわけじゃない。

ただ、百代と戦ったときの俺が限界を超えても８０％くらいしか気を出せなかったとしてだ。

目の前のこいつは、出力１００％でも全く体に限界が来ないのだ。

「ぐあああああああ！　アアッ！」

「うわ……っと！」

腹へとめり込む相手の蹴りに我慢しながら、相手の顔へと左の拳を放つが避けられた。
……苦し紛れの一発じゃダメかっ！
俺はそのまま地面へと叩きつけられる。
受身はギリギリ取ることができたが、ダメージは大きい。
対して相手はダメージはほとんど無し。
体中を常に大量の気で強化しているのだからそれも仕方ないか。

だがしかしだ。
せっかくあのおせっかいな母が用意してくれた機会。
ただ無駄にする、というのは俺のやる事じゃねーよな。

（とは言ったものの……どうするか）

相手の攻撃は確実にこっちの防御を抜いてくる。
なら当たらなければいい――って至難の業だろうし。

「ま、通用するまで色々試すしかないか」

痛む腹を無視して、跳ね起きながら拳を構える。
そして俺は、同じく拳を構える相手（オレ）に向かって疾駆した。

『見せ』の攻撃を繰り出し、『本命』の攻撃を隠す。
相手の攻撃にカウンターをあわせる。
小細工だろうと使わなければ勝てなどしない。
真正面からパワー比べに持ち込んでも勝てはしないのだ。

「あれ？　どうしたんだ～？　そんな戦い方でいいのか～？」

「うるせえよ。テメェに負けるよりはマシだ」

感覚を研ぎ澄まし、相手の攻撃を観察し、絶対に逃がさないように足を運ぶ。
常に一定の距離間隔を保って、ひたすらに攻撃を避け続ける。
攻撃のために力を割り振らず、体を速く動かすためだけに集中して使う。

気の総量は相手よりも体が成長している俺が勝っている。
足りないのはそれを扱う体。
だからこそ工夫して、最低限の負荷で最大限の効力を発揮しなければ勝機はない。

体の内の尋常ではない量の気を循環させる。
大量に溢れ出る力を、蛇口を絞るようにしてギリギリまで調整する。
只々愚直なまでの気による肉体強化を、体内と体表の両方で行う。
追い詰められているからこその冷静さで、自らの力を意識して支配して使役する。
冷え込みそうな心はホットで、熱く滾りそうな脳はクールに。

「今の俺にできることを……全力で行くぜっ！」

「弱くなってるのにか？　甘～い甘いぜっ！」

更に激しくなる拳の連打。
それに一切当たることなく、相手の拳を次々と空振らせていく。
空気を切り裂く拳の音、近くで感じる軽い息遣い、目線の動き、全身で感じる「力」の圧力。
研ぎ澄まされた感覚を更に使いこなすべく、相手の全体を見て攻撃

を眼で捉え続ける。
体を無駄なく動かし続け、気を無駄なく張り巡らせて、ただひたすらに――

「くっそー！　当たんねー！」

「当たらねえよ。当たるわけねえだろ」

「でも攻撃しないと俺には勝てないぜ！　避けてるだけじゃな！」

「じゃあ……攻撃してやろうじゃねえか！」

放たれた左のハイキックをスウェーでかわし、すぐさま相手に肉薄する。
そしてそのまま、全体のスピードを緩めぬままで右ストレートを放つ。
しかし避けられる。

「そんな真っ向からの攻撃なんてな～」

「遅すぎだ、バーカ」

「なっ！？　ぬぐっ……」

俺はかわされたストレートをすぐさま引き戻して相手の側面へと移動した。
そのまま死角から左のローキックを放つ。
体に負担がかからない程度の力しか込めてはいないが、速さが加わればそこそこの威力はある。

「この……っ！」

「攻撃する暇なんざ与えねぇ！」

攻撃、攻撃、攻撃、攻撃。

相手の攻撃には軌道を逸らすように攻撃を当てて難なくかわし、防御のない箇所に攻撃を当て続ける。

体にかける負担を最小限にするべく攻撃に当たらずに、相手がかわせない程の速度で攻撃を続ける。

ただただ速く。絶対的な一つの強みとして使いこなすべく。

（とはいえ……このままじゃ倒せないか）

過去の自分であるコイツを倒す。

自分以上の攻撃力と防御力を持つコイツを倒すにはどうすればいいのか。

現在、勝っているのは体の大きさと速度と気の総量のみ。

「くっ！　でもこんな攻撃いつまで続けても倒せねーぞ！」

（んなこたわかってるよウルセェ）

今は攻撃を続けるしかない。

ただただ速度を求めるだけではなく、重心の移動や体の各部位を同時に動かして速度を上げる。

相手の動きの初動を見て、その行動を完了させる前にこちらの行動を完了させる。

刹那のタイミングで、相手よりも一瞬遅く行動を開始して一瞬速く行動を終了させる。

体の異なる位置で異なる動作を一斉に開始して、全てを同時に終了させる。

ただそれだけの事だが、その圧倒的に難易度の高いことをやってのければ飛躍的に速度は上がるのだ。

「もう少し……速く！　もっと……速くだ！」

「くっそ……なんだこれ！？」

自分の感覚がずれたのかと思って声を上げる相手に、更なる速さで接近する。
相手のテンポを崩し、自分のできる最高速で踏み込む。

「なんでこんななんでもない攻撃が……」

「基本が大切ってことだよ。ついでに言えば、それだけじゃなくて工夫も色々やってるんだけどな」

一瞬たりとも、相手に予測させることを良しとせずに動き続ける。
人はどんな動作を行う時にでも予測を行う。
軽いだろうと持ち上げたものが馬鹿みたいに重かった時、階段を降りている時にそこにあるはずの段差が無かった時、動かないと思っていた車が急発進をした時。
そういった些細な事であっても、人は呆気なくバランスを崩す。
ならばそう。戦う者ならばどんな者でも行うだろう「間合いの予測」「速さの予測」「威力の予測」「タイミングの予測」など。
それらを一切読むことができなくなって、予測を当てることが一切できなくなればどうなるか。

（いる場所が違う！？　速過ぎる！　攻撃が……）

「そぉらそらそら！　この程度で終わりじゃねえだろうが！」

「なんで……間合いを読み間違えた！？」

相手の目にはギリギリ止まるが、絶対に補足できない異常な速さで動き回る。

なまじ見える分、動きを予測できない逆に相手は決して自分について来れないのだ。

思い切り振りかぶり、途中からの加速で回避不可となった凄まじく豪快なパンチを鳩尾へと喰らわせる。

続いて相手の周囲を旋回しながら拳や蹴りの連打を見舞う。

構えた両手は体よりやや前で、若干の前傾姿勢を保ちながら攻撃を続ける。

「でもこんくらいで負けるかぁ！　ウラウラウラウラァッ！」

「そうこなくっちゃなァ！」

予測を捨て、滅多矢鱈に攻撃を打ち込んでくる。

元から当たらない軌道の攻撃もあるが、俺ですら出せない出力を容易に出せると言うのはそれだけで脅威だ。

拳を構えたままで相手の側面に回りこむが、相手の体が霞むほどの勢いでスピンし、後ろ回し蹴りを叩き込まれた。

「ぬっ！　ぐあっ！」

「そこだっ！　くらえええええええええ！」

防御を薄くしていたせいでダメージが深く通り、体がくの字に折れ曲がる。
そこに更なる追撃がかかる。
最初の数発を避けることはできても、残りの攻撃をダメージのせいで体を動かし続けられずに喰らってしまう。

（クッソ……身体がうまく動かねぇ……）

最初に無理をしたツケがきたか。
それともぶっつけ本番で、頭に思い描いた動きを実行したからか。
なんにしろ、ここを乗り切れなければ俺の負けだ。
負けてたまるか！
負けてたまるか！
自分の中の気持ちを表に出して、ただそのためだけに拳を打つ。
最後は――構えは無しで手は横に。

習った構えでもなく、自分で考えた喧嘩スタイルでもなく。

何も構えずに、ただ一本の硬き柱のように、ただそこにある稲穂のように。

矛盾した堅さと柔軟さを保ち、爪先を立たせず、踵を浮かせず、まっすぐに立つ。

ほら、そうすれば――

そうだ。もう一歩先への道が――

＝＝＝

ちょうど拳が届くだけの距離で対峙する。
小さき俺は拳を構え、いつどこから攻撃されても反撃できる基本の構え。
それゆえに隙も無い。
対する俺はただ立つのみ。

「それでいいのかよ」

「ああ。これだからいいんだ」

最後の問答。
俺の中の力は既にギリギリ。
気は有り余っているものの、それを使役するだけの力が身体には残っていない。
故にこの攻防が最後。

「んじゃあ行くぜ」

「ああ……そらっ！」

拳を構えた相手が一歩踏み出した瞬間。

相手の鳩尾へと俺の蹴りが突き刺さった。

「がっ……！！？？」

「いける……！」

思わず口から漏れ出る言葉。
眼をぎらつかせた相手の拳が更に俺へと迫り来る。

「まだだっ！　俺はまだまだ終わっちゃいない！」

それでもまだ向かってくる相手の拳を一瞬だけ体を傾けて避ける。
そして更に踏み込んで追撃の右拳。
自分でも驚くほどの異常な速度で相手へとそれが突き刺さった。

「なんで……」

「あぁ？」

「どうしてそこまで速く……構えも無しで……」

理解できないという顔だ。
だがそれも仕方ないだろう。
俺も、たぶんこうやって自分自身と戦うとかいう有り得ない事が起きなかったら、ここまで辿り着く事はできなかっただろう。
一気に飛躍させることが出来たのは、初めて本当の意味で自分をギリギリまで追い込んだからだ。
だからこそ、ここまで辿り着く事が出来た。

「あれだ。人間境地に行き着くとだな。わざわざ構えてなんかいない方が自由に動けるからかえって早く動けるって状態になるわけだ。今、まさにそれに達してるんだよ。おかげさんでな」

「マジか……？」

「ああ。大マジさ」

今なら、今の俺なら本当に、誰にも負ける気がしない。

「そろそろ終わりにしようぜ」

「いいぜ！　越えられるものなら、倒せるものなら倒してみろ！」

吼える相手に瞬時に近づき、しっかりと拳が届く位置に立つ。

構えは無し。

相手を見据えて、拳は体の側面に。

最後に生かすのは、相手より自分が勝っている気の総量。

感覚を鋭敏に研ぎ澄まして、五感を最大限に発揮させて、感じる場所へとただ打つのみ！

「千気殺……ッ！！！」

――さーすが俺。弱くなっても『強い』まんまじゃねーか。その調子でな……

昔の俺を打倒して、周りが白く変わりながら消えていく最中、そんな声が聞こえた気がした。

＝＝＝

目が覚めた。
周りを見回せば、遠くの山の狭間から太陽の光が差し込んで見える。

「おう。起きたか」

「親父！？」

声をかけられてそちらに目を向ければ、そこにはあぐらをかいた親父の姿。
その後ろの方には、瞑想を行うルー師範の姿。

「そーだよ親父だよ。随分長くかかったもんだな」

「……今はいつだ？」

「俺が来てから2日目……まぁお前にとっては3日目の朝か」

時間はもうほとんど無いってことか。
……そういえば、あのやかましい母はどこに行った？

「んで宗介……勝てるんだろうな？」

「当然だ。ところで……」

「母さんなら疲れて寝てる。さっきまで起きてたんだけどな……お前、やたらと長引かせやがったからしゃーねぇよ」

そう言って指差す場所を見れば、そこにはぐっすりと眠る母の姿があった。

大量の毛布に包まれて、安らかな笑顔で眠りについている。その脇でヴィヴィが母の様子を見ているようだ。

テントくらい……と思ったが、この母の事だ。周りに結界でも張ってるんだろう。

「こんだけ親に迷惑かけたんだ。百代ちゃんに勝って、しっかり自分のものにしろよ。じゃねえと許さねぇぞ？」

「うっせーんだよクソ親父！　んな事わかってる。だから、迷惑ついでにもう一回手伝ってもらうぜ？」

「いいぜ。何でも言ってみろよ」

ゆっくりと立ち上がって、俺に向かって笑顔でそう言う親父。

俺の親父だけあってさすがにかっけーじゃねえか。

「ルー師範と一緒に、新しい技の実験台になってくれ」

「任しとけ！　付け焼刃な技であの百代ちゃんには通用しねぇだろうしな。おいルー！　お前も来いよ、宗介の最後の鍛錬だ！」

「む。やっと起きたのカ。こちらも準備はできてるヨ」

瞑想を解いたルー師範が、親父の呼びかけにこたえてすぐさま近づ

いてきた。
親父もルー師範も、既に戦う準備は万全のようだ。
さぁ。最後の仕上げと行くか。

「じゃあ行くぜ親父にルー師範！　この技を完成させて俺は百代に勝つ！　待ってろよ百代ォ！！！」

俺は気合の一声を上げて、鍛錬を行う開けた場所へと向かうのだった。

第二十二話　あしたのために　後編（後書き）

あとがき

修行終わったーーー！

物凄く疲れましたハイ。

どう収拾をつけようかと考えた結果こうなりました。

さーて。これで宗介は百代に勝つことができるのか・・・

最後の技の説明が少ないのは、フラグという奴ではない。たぶん。

また次回かその次で説明します。

『お返りホームラン（正式名称：刻逆の術）』

本来は、全く同じ存在を精神世界でぶつけ合わせる事で自滅を図る『相滅の術』である。
それを陰陽師大神真稀子（旧名賀茂真稀子）がアレンジを加え、自己の過去存在と精神世界で邂逅する術に変えた。
その精神世界と過去存在を維持するのは術者の側であり、被術者の力が損なわれることは無い。
被術者の力が大きければ大きいほど、術者にかかる負担は大きくなる。

『我流川神流奥義・影砕き』

影を破壊してその形を固定化することで、相手の体を動くことができないようにさせる。

一応、力技で無理矢理動くことも可能である。

影を破壊する際は、自分の影を介するか・直に相手の影に触れるかが条件として必要である。

「？？？？」……極限まで無駄を無くし、負担を少なくした身体強化技。

「千気殺」……攻撃技。詳細不明。

「？？？」……構えの無い構え。自由かつ最速に動作を行う。

第二十三話　お前と向かい合って　前編（前書き）

クライマックスでございます。

第二十三話　お前と向かい合って　前編

「なぁじじい」

「なんじゃモモ」

「これはつまり、そういうことなのか？」

箱根旅行から帰ってくるなり、百代は鉄心に話しかけた。
その手に一通の手紙を――果たし状と思しきものを持ちながら。

「ま、そういうことじゃ」

「……こんなに早く挑んで来ても結果は変わらないだろうに。結局アイツは――」

「それは早とちりというものだヨ、百代」

早々と結論を出してしまう百代に、その場にいたルー師範が声をかけた。
宗介が書いた果たし状を百代に渡したのはルー師範だし、修行を共にしたのも彼だ。
だからこそ声をかけずにはいられなかった。

「男子三日会わざれば刮目して見よと言うだろウ？」

「――師範代がそう言うならそうかもしれないが……」

「そう言わずに黙って明日を待たんかモモ。宗介君が男を見せよう

というんじゃからのぅ」

からからと笑顔で笑う鉄心と、やけに満足げな顔をしたルー師範。
そんな二人を見ていると、だんだんと百代も信じていいのではないかと思えてきた。

「まぁ、宗介の事だ。きっと強くなっている。三日というのは短すぎる気もするが」

「うむうむ。そうじゃよ。モモの事をアレほどまでに思っておる男は他におらんよ」

「はぁ？　何言ってるんだじじい？」

「彼は百代が好きじゃからのぅ。負けたままというのは男として嫌なんじゃろう」

鉄心はそんなことを無責任に言い放ってからからと笑い続ける。
頭の上にハテナを浮かべたままだった百代も、若干動揺しつつもなんとか反論する。

「確かにアイツは学校で決闘した時に私に惚れたなどと言っていたが――」

「まぁ、今のは冗談じゃが」

「おいじじい！　ハメたな！」

「ほっほっほ。これなら確かに脈アリじゃな」

様々な思惑?が渦巻く中、夜は更けていく――

5月6日　水曜日　川神院の道場内

「ほっほっほ。見違えるようじゃな。お主も父としても鼻が高いじゃろう?」

「いやー。これでダメダメだったら丸一日修行に付き合った俺やマキの身にもなれってヤツですよ」

道場の隅で、中央に立つ二人を眺めて笑う川神鉄心と大神隼人。
両者とも、決闘で戦う二人の保護者として喜びが隠せないようでいた。

「……さて、お主の息子が3日でどれだけ変われたのかを見せてもらうぞ」

「望むところですよ。アイツは色々と無くしてた物を取り戻しただけじゃなく、色々と新しく得た物もあったみたいですからね」

「ほほぅ。それは楽しみじゃのう」

「ま、俺たち保護者は黙って見ましょうや。結局、あいつらの問題なわけだし」

「そうじゃのう」

ほっほっほ、わっはっはと笑い声を上げる二人の前でルー師範がじっと二人を見つめる。
彼が共に修行した宗介は確かにずっと強くなった。
だが百代も宗介と戦った事で、身近に自分と同じ強さを持つ同年代の者がいないという心の問題を解決している。
宗介も心の問題を解決して忘れていたことを思い出して強くなったが、百代の心の問題も解決しているのなら……

そこでルー師範は頭を軽く振って、頭の中からそんな考えを振り払った。
それを考えるのは無粋なことだと思ったのだ。
そして審判を勤めるべく、宗介と百代の立つ道場の中心へと歩み寄った。

＝＝＝

宗介は百代と道場の中央で向き合っていた。
まっすぐと百代を見る宗介には、勝たねばならないという気負いは既に無い。
真っ向から自分の全てをぶつけ、そして自分を認めさせる。
そんな気持ちが渦巻いていた。

勝利にこだわるのも、必死になるのも変わっていない。
しかし、勝利しなくてはならないのではなく。自分が勝つと信じ、負けたとしてもその負けを次の勝利で取り返すように。

負けた先に何も無いのではなく、たとえ万が一負けたとしても次の勝利に邁進できるように。
ほんの少しだけ変わっただけではあるけれど、彼にとっては十分に大きなことだったのだ。

「リベンジだぜ、百代」

「随分早いじゃないか。大丈夫なのか？」

「無論だ。今度は負けないぜ。惚れた女に負けっぱなしは嫌なんでな！」

「……じじいめ。大正解じゃないか」

「ん？　どうした？」

「なんでもない、気にするな！」

意気揚々と宣言する宗介に、百代が若干たじろいだ。
そんな百代の様子をおかしく思った宗介が疑問を投げかけるが、あせった様子で跳ね除けた。

「そう言われると余計に気になるが、まぁいい！　そんなことよりも言いたいことがあるからな」

「言いたいことだと？」

宗介が唐突に言い放った言葉に、百代も反応して耳を傾ける。
それを確認した宗介はニヤリと笑って、百代にだけ聞こえる小さな声で言った。

「俺はお前が好きだ。心底惚れてる。だから、俺が勝った時には――お前が欲しい」

「なっ！？」

「嫌だとは言わせないぜ。これが最後のチャンスだからな」

反論の間も与えずに宗介は続ける。

彼には突っ走るべき理由があるから。

たった一つの、シンプルで、何よりも明快な理由。

「こんな状況で言うにはなんだが、それだけだ。お前が勝ったらどうしたいとか、なんか言うことはあるか？」

「――いや、別にないが……」

「なにぃ！？　てめえらしくねえぞ！？」

「うるさい！　お前は人を何だと思ってるんだ、全く」

「強欲……冗談だって！　本気にすんな。こういうやり取りもまた懐かしいからいいもんだろーが」

冗談で言った言葉にムカッときたらしい百代に急いで宗介は弁解した。というかごまかした。

しかし、今までずっと離れていた彼にとって懐かしいと言うのもまた真実なのだ。

だから思わず本音が出てしまったとも取れる。

「そうか？」

「そこは空気読めよ……ともかく！　この勝負は俺が勝たせてもらう！」

「そう簡単にはいかないぞ。私にも、自分の強さに対する意地があるからな」

「俺だってそうさ！　だからこそ俺はお前に勝って手に入れる！　強さの証明とお前自身を！　どちらも俺にとって世界で最も大切なものだからな！」

うははははと、柄にも無い笑い声を上げて宗介が言う。
修行を終えて若干心変わりをしたのもあるが、かなりアクティブな性格になっていた。
百代にとっては前の彼よりは親しみやすいが、少し暑苦しいと思うのも確かだった。

「こっちこそ望むところだぞ宗介！　だがそういうことは私に勝ってから言うんだな！」

「無論勝つとも！　俺のことが嫌いなら今のうちに拒否しておくがいい！」

「そこまで嫌いじゃないから心配ないさ。そもそも、負ける気などしていないからな」

「それでこそだ百代！　さあ勝負だ！　絶対に負けんぞ！」

そう宣言して宗介が全身に気を滾らせる。

その体躯から発せられる前よりもずっと研磨された凄まじい気迫に、百代も反応して自然と身構えてしまう。
そこへ、ちょうどいいタイミングでルー師範が歩み寄る。

「さて、二人とも準備はいいネ？」

その言葉に、応という言葉で答える二人。
そして互いに拳を構える。重心を低くし、両の拳を脇と前で軽く構える。
二人を見て一拍置き、大きく息を吸い込んだルー師範が声高らかに宣言した。

「いざ尋常ニ……はじめッ！！！」

そしてルー師範の決闘開始の合図と共に一陣の風が吹き荒れた。
パシッという空気が弾けるような音がして、前ぶりも無く放たれた宗介の拳を真正面から百代が受け止める。

「前よりもずっと速いな。それに技の出が全然見えない。本当に強くなったじゃないか」

「いやいや、これに反応できるお前も十分強いだろうが。まだまだ本気じゃないけどな」

お互いに

「ふ、言うじゃないか……そら次だっ！」

「望むところッ！」

お互いにニッと獰猛に笑って拳を交差させる。
苛烈な拳風が吹き荒れ、雷光のように峻烈に時は過ぎ去った。
前のような派手さは無いが、しかし前よりもずっとレベルの高い戦いだ。
そして宗介が一歩分の距離を取り、深く腰を落として構える百代へとスッと踏み込んだ。

「――砕ッッッッッッ……！」

「ぐ――ふんっ……！」

気合の篭った一声と共に、宗介が3連続で正拳突きを繰り出す。
狙い違わず左肩と右脇腹を打ち抜いた拳に百代が声を漏らし、3撃目の突きへと同じく突きを放った。
二人の拳が激突して、だが、どちらも撥ね返されることも無しに、ほんの一瞬の時間ではあるが完全に静止した。
少なくとも、現在放った突きの威力は全くの同等だったということだろう。

そして両者ともに飛んで離れる。

宗介はさも爽快な笑顔を浮かべて百代を見つめる。
拳は体の両側でだらりと下げた自然体だが、不思議と隙が無い佇まい。
相対する百代も同じく笑顔。本当に待ち望んでいたモノが訪れたような嬉々とした笑顔だ。

拳は前方と脇に構え、いつでも拳を放つことができるベーシックな構えを取ろうとする。

宗介はただ立ったままの自然体のまま、己自身を研ぎ澄ませていく。呼吸している気配も、己の体を奔る気も、攻撃しようという気配すらも感じさせないほどに鋭く研ぎ澄まされ、それとは反対に心は熱く燃えていく。

一切の先読みができなくなった宗介の動きに対し、百代も本気で構えを取った。

百代は構えを変え、右肩を前にして半身に立つ。

どこか流れる水や揺れる柳を思わせるその構えのままで、上下左右にゆらゆらと揺れる奇妙な構え。

膨れ上がった百代の闘気が周囲を覆い、その動きの妙を増大させている。

そのまま百代がまっすぐに前へ出た。

足取りは見えない。そもそも足は動いているのか。それすらも判明しない足運び。

体全体も揺らし続けたままゆったりと、それでいて遅くは無い動き。

迫る百代へと宗介が右の拳を放つ。

全くの自然体から放たれた拳は、通常の構えから放たれたそれよりも速い。

しかし……

「何!?」

「甘いぞ宗介!」

「ッ！？　ぐぅっ！」

確かに百代の顔面に吸い込まれた拳はそのまま百代をすり抜けた。
そして攻撃の後の絶好のタイミングで百代の拳が宗介の頬を捉えたのだ。
しかし勿論、その程度の攻撃で怯む宗介ではない。

「舐めるな百代ッ！」

気迫の篭った一声と共にもう一度、今度は左の拳を放った。
しかし、当然だとも言うかのように百代の体をすり抜けて大きな隙を作ってしまう。

「どうした宗介！　さっきと同じ事をしても――」

「舐めるなと言ったッ！」

宗介の見せた隙へと、百代は迷わず攻撃を仕掛けた。
しかし、次に宗介の見せた動きもまた百代の動きに近いものだった。
唐突に下に沈んだとも思える動きで姿勢を低くした宗介が、そのまま猛スピードで高速回転しながら回し蹴りを放ったのだ。

「がっあ……ッ！」

横合いから薙ぎ払うようにして放たれたその蹴りを、百代はモロに受けて吹き飛んでしまう。
しかし空中で受身を取りながら道場の床へと足をつき、吹き飛ばされた勢いのままで後ずさる。

「夢幻の構えだろ？　知ってるさ。驚いたが……それじゃあ甘い」

「ふ……お前も、まだまだ本気じゃないんだろう？」

ぐいと唇から垂れた血を袖で拭い、百代が笑って問いかける。

それに対して宗介は自然体のままでさらりと答えた。

「当然だ。今の俺はお前よりも強い。お前よりも強くあることができるのが俺の誇りだからな」

「そこまで言うのはいいが……私はまだお前より弱いとは認めていない！」

「わかってるさ。だから今、決着をつけようとしている！　さあ行くぞ。最終ラウンドだ！」

心に秘める思いはひたすらに気高く、たった一人を思うが故に。

誰かを守るためには、その誰かよりも強くあり続けねばならないのだから。

男はただ強くあり続ける。たった一人の女のために。

人は言う。その気持ちこそが――最も尊き思いであると。

第二十三話　お前と向かい合って　前編（後書き）

あとがき

川神流、夢幻の構え。

釈迦堂さんはまゆっちの本気に、それを発揮する間も無く構えを解いちまいましたし。

というわけで色々と自己解釈して書いてみたの巻。

次号！　決着を待て！

第二十四話　お前と向かい合って　後編（前書き）

利用規約の改定にひっかかりそうなので、エロスを消しました・・・

うわあああん！

第二十四話　お前と向かい合って　後編

川神院道場内・観客陣

「あのモモが……いや、モモの夢幻の構えを破るとはさすが宗介君じゃな」

「つーか俺は宗介のアレに百代ちゃんがついてきてるのが信じられないがね」

「それだけ、どちらも強くなっているということだネ」

真面目な顔で、決闘を行う二人を見ながら鉄心と隼人とルー師範が感想を言う。

今まで使うことが無かった川神流の奥義を使い、力押しな戦いをしない百代に川神鉄心が。

遥かに力を増した自分の息子が先日見せた、不可解なほどに速すぎる動きに大神隼人が。

両者が見せる心の底から楽しそうな笑顔と実力拮抗のいい勝負にルー師範が。

誰もが宗介と百代の戦いに目を奪われていた。

「で、鉄心さんはどう見ますか？　この二人」

「そうじゃのう。見たところ宗介君は無理に力を入れすぎるという事も無いようじゃし、今のところは若干宗介君のほうが有利なんじゃが……」

一度そこで言葉を切り、戦う二人に目を向ける。
戦況はほぼ五分の様相。
百代は夢幻の構えをすぐに捨て、普段の真っ向から当たる構えを取って全力で力を発揮する。
ただの力押しでは到底太刀打ちできないと気付いた百代が、今まで自分が学んできたことを惜しげもなく発揮して拳をふるう。
宗介には積み重ねた武術と言うものはほんの僅かすらなく、それも子供の頃に得たものでしかない。
それでも百代にも無い様々なモノを手に入れて、間合い・タイミング・技の『起こり』を自在にコントロールして、本来の速さを更に際立たせる。
宗介は相手のリズム・タイミングを掴み、自分のそれは一切悟らせずに戦い、生まれた相手の間隙に容赦なく入り込んで攻撃する。
故に戦況は五分の様相からだんだんと宗介の方へと傾き始めている。
しかしそれでも、鉄心にはまだ宗介が勝つビジョンが見えてこない。

「前の決闘と同様じゃ。モモを倒せるだけの攻撃にはまだ足りん」

「決定打……ですカ」

「そうじゃのう。なんにせよ、モモの瞬間回復をどうにかせん限りは――」

「心配要りませんよ。ま、公平な立場の二人に言うのもなんですがね」

決定打不足を指摘する鉄心に大神隼人は笑って言う。
その笑顔は一体何から生まれるものなのか。

「どうやらお主は心配しておらんようじゃな？」

「いえいえ。そりゃ少しは心配してますとも。でも、それ以上に信頼もしてるんですわ」

「ほっほっほ。それは楽しみじゃの」

「私も楽しみですヨ。修行では本当にいいものを見せてもらいましたからネ」

宗介の修行では最後の最後まで付き合った隼人とルー師範。
彼らは身をもって宗介の強さを実感している。
その中でも隼人が選ばれたのは、親だからこそとでも言うべきだろう。
宗介にとっての『極限の一』たる技の練習代になったのは、ルー師範ではなく大神隼人ただ一人だけなのだ。
それは単に宗介の意地なのだが、父親である隼人にだけ頼ったのは残っていた子供の部分なのだろう。

「さーて……見せてみろよ宗介。惚れた女をモノにすんなら気合を見せろや。全力でぶつかってお前を認めさせてやれよ？」

＝＝＝

俺の体が俺に力を訴える。

俺は優しく体を諭し、暴れ狂う俺の体を従える。
静かな力が体を渦巻いて、ただひたすらに体を突き動かす。
記憶に眠る術理と体で覚えた術理を発揮し、倒すべき相手へと疾駆する。
だからこそ、俺は百代と戦える。
そして――俺が勝つ！

「むん……覇ァッ！」

「せいっ！」

その場での超高速回転の勢いを載せた回転蹴り。
フェイントをつけて3回転目に放った左足を、百代は冷静に蹴りで打ち落とす。
打ち落とされた蹴り足を引き、逆側の足で更に蹴り。
そのまま俺の蹴りを迎撃した直後の百代を蹴り飛ばした。

「川神流・空衾！」

「遅い！」

百代の放った銃弾の如き跳び蹴りを見つつ、俺は体の不規則なリズムを常に変化させ続ける。
不規則に加えた不規則から生まれる俺にしかわからないリズムで、瞬時に横にずれるかのように移動する。
そしてそのまま百代を蹴り上げようとして――

「川神流・紅色の波紋（ルビー　オーバードライブ）！」

かわした俺の横を抜ける百代が無理矢理に体勢を変えて、技を秘め

た拳で殴りつけてくる。
防御無視の技なら確かに危険か。そして受け止めるのもマズイとなれば。

「ヌッッ……把ァッ！」

拳に一切触れず、体をずらして百代の腕に触れて拳を逸らす。
そのまま拳を逸らさせたままで近づいて、未だに先程の空衾の勢いのままな百代に右の拳を喰らわせる。

「やはりっ効かないかっ！」

百代は弧を描くようにして右前方に吹き飛んでいく。
俺の拳を受けると同時、飛び蹴りをしていた足で床を蹴ってダメージを軽減したようだ。
いや……百代には瞬間回復があるから受身を取りやすくした、のほうが正しいのか。

弧を描いて床へと着地した百代は、そのまま非常に低い姿勢のままで俺へと突撃してくる。
俺は容赦なく百代の頭を下段回し蹴りで蹴り抜いたが、臆することなく百代が俺の足を掴んできた。

「何をする気だ？」

「こうするのさ。川神流奥義！　一瞬千撃！」

「何！？　そこは十七撃――グッ！？」

近接距離から一瞬にして千の拳撃が叩き込まれる。

無論、一発一発の威力はそれほどまであるというわけでも無いし、
一度に千撃叩き込まれるわけでもないが。
さすがに全部受けてやるわけにもいかない。
全力全開で気を放出しているわけではないから、俺の防御力も極限まで高められているわけではないのだ。

「破……極ッ！」

「ッな……がはっ！」

近くにいる百代に無数の連打を受け続けながら、俺は百代の両肩を掴んで自分の頭を百代の額に叩き付けた。。
頭と頭が激突したにしては大きすぎる、破壊的すぎる音が鳴り響いて、一瞬だけ百代の全身から力が抜ける。
しかし一瞬で再び覚醒し、拳を数発放ちながら後退した。

「頭突きとは……驚いた。少し危なかったぞ」

額から流れ落ちた血が眉間を通って、右頬から口角を通過し顎先へと伝い落ちている。
百代は唇の端の血をペロリと舐め取ってそう言った。実に嬉しそうに。

「その程度で終わるタマでもないだろうに。お前こそ川神の奥義をアレンジして増やしてるじゃないか」

一瞬十七撃だろう。一瞬千撃なんて技じゃなくて。そんな技を実行できるのはお前くらいしかいないしな。
打たれまくった体には若干の痛み。だがまだまだ全然戦える。
この程度、ここで戦いをやめることに比べればたいした苦痛には感

じない。

戦いにおける最大の敵は己自身。
だから相手は自分を映す鏡だ。そして己自身を映す鏡であると同時に、百代という最高で最強の女でもある。
そんな考えを一瞬でも持ったからだろう。
待ちの体勢だった俺を、一瞬で近づいた百代の蹴りが吹き飛ばした。

だが体にダメージは無い。
どうやら咄嗟に、腕を使って防いでいたようだ。

「どうした！　防いだとはいえ隙が見えたぞ！」

「今のは俺のミスだよ。だが、もう油断はしない」

「ははっ！　そうか、それならいい！」

更に追撃で百代が拳を放つ。
それを紙一重で避ける。
次々と放たれる右の拳と左の拳、時折小さな蹴りも何発も。
それらを全てすり抜けて、百代の脇腹に拳をめり込ませる。
すぐさま反撃の拳を放つ百代の、その拳に添うようにしてギリギリまで近づき、渾身の膝を先ほど拳を当てたところにもう一度めり込ませる。

「ぐっ……しかしこの程度では！」

「先刻承知！」

くの字に体を曲げた百代が、バッと顔を上げて拳を振りかぶる。

そのまま拳が放たれるのを待つことをせず、軌道を読んで百代に拳を放つ。

「これだけ近距離ならかわせないだろう」

「俺ならかわせるさ」

「ならやってみろ！　川神流・炙り肉！」

一瞬にして、振りかぶっている百代の腕全体が紅蓮の炎に包まれた。
前に戦った時以上の、更に凄まじい火力。
それも、空気を歪ませるほどの。

「狙いはコレか！」

「精緻な見切りは出来まい！」

一瞬の溜めの後で、まっすぐに俺の顔へと炎の拳が放たれる。
軌道は変わっている。おそらくは腕の炎の出力で無理矢理変えたのだろう。
だが――

「甘く見られたものだな！」

拳を真っ向から拳で迎撃する。
いくら強くなろうと所詮は炎！　恐れるほどのものではない！
真っ向から打ち合った拳が少しだけ痺れ、俺たちは衝撃を利用し距離を取った。

そしてまた真っ向から向かい合う。

……だいたい感覚は掴めたか。後はタイミング。

「やっぱり楽しいよ宗介。お前と戦うのは」

「前はすまなかったよ」

「本当だ。死ねだなんて言われて傷ついたんだぞ」

「それは忘れてくれ」

突然喋りだした百代と会話し、そうしながら隙を伺う。
いくら百代でも、もう無駄に打ち込んでくることはしないだろう。
ならば自分から前へ！

地面を一瞬で滑るように移動し、百代の目の前に立って突きを放つ。
それをかわした百代が放った拳撃を避け、更に突きを放っていく。
とにかく連打。連打連打で百代も同様に連続で拳を放ち、打ち合いの様相を呈していく。

「満たされない戦いしか訪れないと思っていた」

百代にとってはそうなのかもしれない。

「ただ孤独な戦いを続けるのだと思っていた」

俺にとってはまさにそうだった。
そうとも。そう『だった』のだ。

「孤独を埋めてくれる女は、既に俺の手を届かせることも叶わないと思っていた」

「私を満たしてくれる男とは、もう会うことも無くなったのだろうと思っていた」

拳の弾幕の中で互いに目を合わせてニッと笑う。
心のそこから歓喜の感情が湧き出てくる中で。

「「だが違った！」」

同時に叫んで拳を交わす。
百代の拳を避けつつ俺も拳を放ち、百代も避けようとするが半数は避けられず受けていく。
しかし勿論、瞬間回復という秘奥を擁する百代が倒れることは無い。

「運命は俺たちを再び結びつけた！　そうとも、戦う運命にあった！」

「運命なんて信じない。でも今だけは、相対するお前に運命を感じる！」

加速する。加速する。加速する。
動きから無駄を削ぎ落とし、体全てを同時に稼動し、戦い打ち倒すために。
愛する女は目の前だ。既に準備は出来ている。
後はただ、己の心の在り方を拳に乗せて放つのみ。

「お前を倒す」

「その意気だ」

「お前を倒して手に入れる！　お前の全てを！」

「そこまで言うならやってみせろ！　私にお前の全てを見せろ！」

「無論わかっているとも！　お前に俺の存在の全てを刻み込む！」

そう叫んで、まっすぐに立つ。
ただ立つだけだが、重心を一切揺らめかせずに立つことは難しい。
爪先にも踵にも偏らず、足全体に体重を散らしてまっすぐに。

時間がやけにゆっくりと流れているような気がした。
いつの間にか全ての音が消え去っていた。
この感覚。
今なら確実に、百代に拳を当てられる。
当てられないなどということ、今の俺にとっては有りうる筈の無いことだ。

いざ！

いざ！

いざ決着を！

俺たちの戦いに、いざ！

俺は全てが遅く流れるその場で立て続けに二度床を蹴った。
一瞬にして百代の目の前に到達した俺は、同時に右手を突き出した。
百代の胸の中心に向かって。

奇しくも前に俺が貫いた位置。
しかし今度は貫くことはない。

全ては一瞬だ。刹那よりも短い凝縮された時の中で行われた。
きっと百代は気付くこともないだろう。
痛みもない。傷つくことも一切ない。
だがそれでも、コレで決着だ。

「千気殺」

その言葉は一体百代に聞こえたのかどうか。
俺が拳を引いたと同時、全身から力が抜けた百代が崩れ落ち、俺は百代を前から抱え込んだ。
そして体から力が抜けて尚も意識を保つ百代に囁いた。

「俺の勝ちだ。百代」

「……ああ、そのようだ」

＝＝＝

「なんじゃ？　今、なにが……？」

「私にもはっきりとハ……ただ見えなかっタ。それだけですネ」

目の前の光景に、鉄心とルーは目を見張った。
それは、横で見ていた彼らにとっても百代が何故倒れたのかがわからなかったからだ。
瞬きをしたわけでもないのに、気付いた時には百代が崩れ落ち、宗介は百代の前に立って受け止めていた。
宗介が攻撃したのは確かなのだろうが、いつ攻撃したのかもいつ百代が攻撃を受けたのかもわからなかった。

鉄心やルーという実力者でさえ、正面から仕掛けられたわけでもない宗介の技を何も見切ることが出来なかった。

「無念無想でただ体の動くがままに。動きに一切の無駄なく、心にも一切の濁りなく、最善最速で動いて拳を当てる……らしいですよ。正直、理論で言っても実行できるわけ無いんですけどねぇ……」

ただ一人、その技の事を知っている隼人だけがそう呟いた。
百代を抱える自分の息子の方を、呆れたような、それでいて満足げな表情で見ながら、鉄心とルーに聞こえる声で。

「言うは易し、じゃな」

「はイ。攻撃の気配を感じなかった事といい、何よりも我ら全員の目が捕らえることすら出来ない圧倒的な速さは素晴らしイ。そして、理論を聞かされても実行できる者などいないでしょウ。まして三日という短期間では不可能でス」

「うむ。その点においてはワシでも無理じゃろ。しかし、百代を倒すにはそれだけじゃ無理じゃぞ？　何か種があるんじゃろ？　隼人君」

「そらま、あるでしょうけどね。俺には理解できませんでしたよ」

天才ってのはどうも思考もすげぇようです、と言って笑う隼人。

鉄心とルーは顔を見合わせて疑問符を頭に浮かべたが、それはそれで考えることをやめることにした。

自分の息子が勝ったことが余程嬉しいらしい隼人のことを放っておくことにしたのだ。

それに、決着がついたからにはやらなければいけないことがある。

ルーは百代を抱きとめている宗介の近くに来て宣言した。

「そこまで！　勝者、大神宗介！」

＝＝＝

ルー師範の勝利を告げる声を聞いて、体を感じたことの無い何かが走り抜けた。

俺は抱きとめた百代を床に横たえて、自分も横に膝をつく。

「……負けたよ。最後のはなんだったんだ？　あの一瞬、確かに何も感じられなかったのにお前が前に立っていた」

悔しいはずなのに晴れやかな顔で、百代が俺に問いかける。

最後のアレ――千気殺の事を問いかけているようだ。

「あれは、俺の気で直接働きかけてお前の気を消す技だ」

「あぁ……だから体から力が抜けたのか。でも、何故始めから使わ

なかった？　手加減していた……わけじゃないんだろ？」

納得したように息をつく百代。

馬鹿だな。俺がお前との戦いで手加減するわけ無いだろ？

「アレを放つためには、相手の気の状態を把握しなければできないんだよ」

「……そういうことか」

「ああ。人の持つ気は千差万別だ。一人一人が全く違う波長の気を持っている。だからこそ、それと真逆の波長で気を相殺させるこの技は、戦いの中で相手の気の波長を探らなければいけないわけだ」

「当然、気の量で勝るお前なら私相手でも気を打ち消せる。そういうわけか」

「そうだ」

たったこれだけの説明で納得する百代もさすがだ。俺と同じく天才なだけ、武に対する理解が早い。

……前に戦った時の百代から感じた気も覚えていたが、人の気の波長は日々変化するからな。前に感じたそれじゃあダメなんだ。

せいぜい、誤差の修正範囲は一日以内ってとこだろう。

数日経った今じゃ無意味な感覚というわけだ。

「……勝ったぜ」

「……負けたなぁ。負けてしまったよ。でもスッキリした気分だ」

「そいつは良かった。でも、俺にはまだやることがあるからな」

「何？　あ……」

ひょいっと、膝の裏と首の後ろに腕を通して抱え上げる。
人が言うところのお姫様抱っこというヤツだ。

「百代、俺はお前を貰うと言った」

「そ、そうだな」

「だがな。無理矢理などと言うことは当然俺はするつもりは無い」

「そうだろうな。お前はそういう奴だ」

理解してくれているじゃないか。
さすが百代だ。
俺が唯一愛する女だ。

「だからこそ言う。一度しか言わないぞ。恥ずかしいからな」

そう言って一拍あける。
腕の中でこちらを見上げる百代の喉から、ゴクリと息を呑む音が聞こえた。
そんな百代の目をまっすぐに見て俺は言った。

「全部とか無粋なことは言わない。だから、お前の心を俺にくれ」

「……」

「お、おい、どうした。返事をしろ返事を。恥ずかしいだろうが」

「……くっ」

「ぬあ！？」

こ、この、笑ったなこの野郎。

微笑を浮かべたままの百代が、そのままの表情で俺に言う。

「そんな飾った言葉は、私たちの間に必要ないだろう？」

「む」

「だから一言、聞かせてくれるだけでいい」

「……わかった」

そうか、そういうことか。

俺は最後まで全く愚かだった。

それでも嫌いにならないでいてくれるコイツがいてくれることを喜ぶか。

そう思って口を開けば、すらっと言葉が出てきてしまった。

「百代、好きだ。結婚してくれ」

「あぁ、構わないさ。お前と一緒ならずっと楽しそうだ。何より……」

そう言って百代は何かしようとするが、俺の技を喰らったばかりで体が動かない。
それでも何とか動こうと頑張っているが、さすがに無理なようだ。

「むぅ。首から上は動きそうなのにな……宗介」

「ん？」

「ちょっと顔を寄せてくれ」

そう言われて少しだけ顔を寄せる。

「もっとだ。もっとこっちに――」

「ああ、そういうことか」

「え？　む……！？」

俺は百代へと一気に顔を近づけながら、彼女の顔を引き寄せて、不意打ち気味にキスをした。

「・・・・・・・・・！？」

「こうしたかったんだろ？」

「この……確かにそうだが、先手を打たれるとは」

「そいつは嬉しいな」

互いに思い合っているということだな。
本当に……嬉しくて嬉しくて仕方ない。

「さて、このまま俺はお前を家へと連れて行くが、文句は無いだろうな？」

「……無い。好き、なんだからな。さぁ、私を連れて行ってくれ！」

「ＯＫ！　しっかり抱えてやるから安心しろよ！」

俺は、愛する女を抱えて道場の外へと飛び出した。

――俺はこの女を選んでよかったと、心から思えた。

「なんか俺ら無視されてねぇ？　まぁいいけどよ」

「ほっほっほ。気付いておらんようじゃな」

「そうですネ。ここは若者には自由にさせテ、片付けでもしましょうカ」

「そうじゃの」

「だな」

第二十四話　お前と向かい合って　後編（後書き）

あとがき

ついに決着。

一人の男と一人の女の勝負の決着が今ここに。

次回は第一章エピローグ（仮）になります。

宗介君の身長は１８０ｃｍ越えてるし、お姫様抱っこでも問題ない。うん。

千気殺

宗介にとっての『極限たる一』。百代にとっては『瞬間回復』がそれに当たる秘奥。

相手の現在の気の波長を感じ取り、それと全く逆の波長の気を作り出して、相手の体に触れて一気に叩き込む。

まず第一に相手の持つ気と同量の気を消耗するため、相手を確実に戦闘不能にさせるには相手より多くの気を持つことが不可欠。

無論、宗介の持つ気は百代以上なのでその点に問題は無い。

そしてこの技の恐ろしい部分は、避けることがほぼ不可能と言う点だろう。

作中でも示されていたように、準備のために気を感じ取らなくてはならない分、一撃必殺可能なこの技。
しかしだからと言って避けようにも避けようがない。
一番いいのは、この技を放つ前に彼を倒すことだろうが・・・それは百代相手に長期戦に持ち込んで勝つ事並に難しいだろう。

気の相殺によって『闘う力』を失った相手は、副産物として全身の麻痺が引き起こされる。
これは体に満ちていた闘気を無理矢理消されたことの副産物である。

没になった技

『バーン・ライトニング・スピナー！』
両腕を高速回転することによって、右からは炎を、左からは雷を生み出す。
それを纏ったパンチを繰り出す。

第二十五話　エピローグ　～共に歩む道～

5月7日　木曜日

宗介にとって朝は非常に好ましいものだ。
昇る朝日も大好きだし、朝の静謐な空気も好きだ。
少なくとも子供の頃はそうだったし、ここ最近もそうだった。
だがしかし、今日はどうやら違うようだ。

「……さま……宗介様……！」

ゆさゆさと体を揺さぶられて目が覚める。
どうやらかなり深い眠りに入っていたらしい。
何度か瞬きをして目を覚まし、自分を起こしたヴィヴィの方へと顔を向ける。
そうするなり彼女が言った言葉はこういったものだった。

「昨夜はお楽しみでしたね」

「ッ！？　……あ、ああ。そうだな」

なんとも驚かせられる言葉を発して、朝食の準備があるとかでヴィヴィは寝室を出て行った。
ふと、横から自分以外の温もりを感じると思って見てみれば、そこ

には裸の百代がいた。
宗介も裸だ。ただ、シーツを被っているために彼らの姿は隠れているが。

「ふ……」

唇の端に笑みを浮かべて、宗介は百代に手を伸ばす。
そうして顔にかかる髪をかき上げて、百代の寝顔を覗き込む。

「……」

「……」

「……ぐぅ」

「……起きてるだろ。お前」

「――はぁ、そこはスルーだろう宗介」

俺が声をかけてしばらく見つめ続けていれば。
その沈黙に耐え切れなくなった百代が、シーツで胸元を隠しながら体を起こした。
にしても余りにも余りな寝たフリだったぞ。

「そこは寝てる私に何かするところだろう」

「起きてる時でもキスするのに、わざわざ寝てる時にする必要はあるのか？　というか、して欲しかったのか？」

「――――別にいいだろ、細かいことは気にするな」

「ほほぉう？」

ニヤニヤとした笑いを浮かべた宗介に、百代はふいと顔を逸らした。
若干だが、百代がほんのりと頬を赤らめている。

「……ニヤニヤするな！　シャワー浴びて着替えるからとっとと出て行け！」

「何を今更。昨晩は体の隅々まで見せ合った仲だと言うのにグファッ！？」

「出てけと言ってるだろ！」

「わぁった。わぁーったよ！　……やれやれだぜ」

顔面にシーツを投げられて目隠しをされ、背中を蹴られて寝室を追い出される。
元々は宗介の寝室なのだが、そんなことは関係ないとばかりの様相だった。
宗介自身も気にしていないし、問題は無いのだろう。

「……というか、着替えなんてどこから調達したんだ？」

宗介は、百代を道着姿のままでここに連れてきたはずだった。
そして道着は昨日の夜に色々やって使用不能だったと、宗介はそう記憶している。

「いえいえ、そうじゃないですよ。昨日の晩にお邪魔したじゃありませんか」

「ヴィヴィか。む……記憶に無いが、そうだったか？」

「はい。お着替えは扉の横へと置いておきましたから。気付かなかったのはハッスルしてたからですね」

「そうか。じゃあ俺も着替えるから朝食の準備を頼んだ」

「了解で～す♪」

笑顔で頭を下げて、スカートの端をはためかせてヴィヴィがキッチンへと入っていく。

朝だというのに、宗介の従者たる彼女の機嫌もすこぶる良いようだ。

ふんふんと楽しげに鼻唄を歌いながら料理をしている音が、かすかにだがキッチンから漏れていた。

宗介は百代が着替えを終えて寝室を出る前に、自分も着替えることにした。シャワーはまぁ、風呂場にまで行けば代用できる。

思えば彼も素っ裸で部屋を追い出されたのだ。

そのことに対して何も言わなかったのは、ヴィヴィのメイドの鏡たる所とでも言うべきか。

「……シャワーでも浴びてスッキリしよう」

そう呟き、風呂場へと向かっていく宗介。

激しい情交の後の残り香が身体に移っていないかと気になるのだ。

別にそこまで気にするほどではないが、彼にとっても特別な朝に感じられる今日くらいはスッキリとさせたかった。

風呂から出て、学生服へと着替えた宗介は居間へと向かう。
今日の朝食は豆腐と玉葱の味噌汁に鮭の切り身を焼くという純和風のものだった。
宗介はまだほんの少しだけ濡れている髪をタオルでワシャワシャと拭きながら、既にテーブルについていた百代に話しかけた。

「それじゃあ改めて、おはよう百代」

「ああ、おはよう宗介」

「……ほらほら二人とも、見つめ合ってないでご飯を食べてください」

「おお、すまんすまん」

ヴィヴィに言われ、宗介は百代の正面へと腰掛けた。
結局は見つめ合うことになっているが、ヴィヴィは既に仕方ないと諦めていた。
そうして二人が朝食の席に着くのを見てから、彼女は居間の席から出て行こうとする。

「ん？　一緒に食べないのか？」

「えぇ。メイドたる私には色々と準備がありますので。百代様は存分に宗介様とごゆっくりどうぞ。まだ学校まで時間はたっぷりありますから」

「おぅ。いつも悪いな」

「いえいえ、それでは失礼いたしますわ」

百代の疑問に答えたヴィヴィは、俺の言葉に軽く会釈をして部屋を出て行った。

そうしてヴィヴィが出て行った後で、百代と顔を見合わせる。

思えば、こうして一緒に朝食を食べるのはいつぶりだろうか。

用意してある食事も、どこか川神院を思わせる。

差し込む朝日も、あの頃を思い出させてくれる大切なものの一つだ。

「何だろう、気を使わせてしまったのか？」

「だな。まぁ気にしなくていいさ。せっかく気を使ってくれたんだから」

「そうだな……それでは朝食にするか」

「ああ。二人きりというのも悪くは無い」

「「いただきます」」

共に手を合わせて食事を開始する。

一口食べて、素直に美味いと感じた。

同時に、一つの事が頭に浮かんだ。

「なぁ百代」

「なんだ？」

「今度、俺に朝飯を作ってくれ」

「……わ、わかった。美味いと言わせてみせるとも」

若干どもりながらの発言だから少し不安だが、多分大丈夫だろう。
言ったからにはやるヤツだという事は、俺が一番よく知っている。

俺達はゆっくりと食事を終えて、学校へと出発する準備を整える。
靴を履いて玄関から出たところで百代が言った。

「あ～。皆になんて言うかな……」

「皆？　あぁ、風間ファミリーか？」

「そうだ。ふふ、私がお前の彼女になったと聞けば驚くだろうな」

「……確かに、俺はあいつらの前で負けてるからな。今となっては遠い昔だが」

くだらない会話をしながらマンションを降りて、川神学園へと向かって歩く。
笑顔と共に交わされる何気ない会話の中で、互いの思いを確認できる。
そんな中、二人の前方に見覚えのある数人の姿が見えた。

「さぁ、私がお前をみんなに紹介するからな。照れるんじゃないぞ？」

「誰が照れるか！　……お前こそ、友達の前だからって緊張するんじゃないだろうな？」

互いに茶化し合いながら歩を進める。
もうすぐそこまで、彼らの後ろ姿は見えている。

「それじゃ……行こう。宗介」

「ああ。行こう」

百代が差し出された手を、宗介は優しく握った。
そして、目前にまで迫った風間ファミリーの面々に向かって歩きながら話しかけた。

「よう。本日を持って百代の彼氏となった大神宗介だ。そういうわけで、よろしく頼むぜ」

俺の夢はここにある。でも到達点はまだ先だ。しかし悩む必要はもう無い。

コイツと一緒なら、どんな障害だろうが乗り越えて行けるって、俺は確信してるから。

だからきっと、俺はこれからもコイツと一緒にたくさんの壁を乗り越えていくんだろう。

大丈夫だ。

俺はコイツがいる限り大丈夫だ。

今なら胸を張って言える。

俺はお前のみを愛する。故に強くいられる。

これからもずっと、俺が一生愛する女がお前である以上はそうなのだろう。

弱さも強さも、俺はこいつに全てを曝け出して、共に生きていこう。

そう。共に――

第二十五話　エピローグ　～共に歩む道～（後書き）

あとがき

第一章、堂々の完結！

第二章は主にS組に主観をおいた運びとなります！

ご期待ください！

第二章プロローグ　～表～　正義たる少年（前書き）

第二章の開幕でございい！
分割し、加筆しました。

第二章プロローグ　～表～　正義たる少年

平穏なる日常を守る『正義』

いつだって自分に素直に生きようとする一条風太のとある一日。

5月2日　土曜日

とある乱暴な男に川まで吹き飛ばされた一条風太は、のんびりと買い物を再開していた。
濡れ鼠になっていたはずだが、体を振ることによって乾かしたようだ。
……まるで犬である。

「え～と？　今日はみんなでカ鍋だからな。肉は多めのがいいのか。みんないっぱい食べるし」

主婦のようなことを言いながら、かごの中に野菜を放り込んでいく。
風太の顔には、今にも踊りだしそうなほどの笑顔が浮かんでいる。

さっき会った奴には自分の言いたいことも言えたし、お使いを終え

て家に帰ったら美味しい食事を作ってもらえる。
彼にとってはかなりいい事が多い日なのだ。

そんな訳でニコニコ顔の彼は家へと帰って一番に言った。

「ただいまー！」

「あ～。風太だ～。おかえり～」

「やっと帰ってきたか。遅かったな」

「何かあったんですか？　風太が遅れるなんて珍しいですね」

「色々あったのさ～」

彼の挨拶に答えるように、居間まで来た彼を友の声が歓迎する。
３人とも、風太にとってかけがえの無い大切な親友だ。

今日はゴールデンウィークも開始と言うことで、風太の友人を皆集めて鍋パーティーだ。
暇だからと言う理由で、榊原小雪と井上準と葵冬馬は既にやってきている。
客人である板垣一家はまだ街にいて、食事時になるまではやってこないだろう。

「ん～。それじゃあ皆来るまでゲームやろうぜ～」

「……人生ゲーム以外な。あれだけは絶対にやらんぞ」

「風太は運が絡むゲームに強いですからねぇ」

「いや若、あれ絶対にそういうレベルの話じゃないですから！」

「じゃあトランプでもやろ～う」

「いえ～い」

「ＯＫ。神経衰弱以外な」

とりあえず、準がＯＫを出したところでトランプを開始。
内容はババ抜きをすることになった。
まぁ、それでも結果は……

「あはははは～準がビリ～」

「……若、なんで俺だけ勝てないんでしょうかね」

「う～ん。そうですねぇ……運が悪いんですね」

「チクショー！　風太！　お前の運ちょっと分けろ！」

「え～。どうやって分ければいいかわからん！」

準がこうやって嘆くのも無理はない。
元から運がいい上に思い切りもいい風太、なんとなくの直感でジョーカーを引かない小雪、上手いこと相手にジョーカーを引かせる冬馬と、やたらとこういう遊びに強い人間ばかりだった。
こんな中で勝とうというのが無理ゲーである。

「……ところで風太」

「ん？　なんだ冬馬～」

「さっきは一体何が会ったんですか？　怪我は無いようですが……たぶん誰かと喧嘩でもしたんでしょう？」

「喧嘩じゃねーけど……まぁおんなじようなもんかな」

小雪が準に罰ゲームを執行中、風太は冬馬に問われていた。
どうやら、冬馬には風太が何をやっていたかが洞察できていたらしい。

「この前にモモ先輩と決闘してたヤツがな～」

「ああ、F組に入った大神宗介……ですか」

「なんか荒れてたからな～。ちょっと喝を入れてきたのさ」

そう笑いながら答える風太に、冬馬は少し考え込む。
彼にとっても、風太の存在は本当に『色々な意味で』大切なものだからこそ。

「風太に怪我が無くてよかったですよ」

「心配ありがと～な」

にししと笑って軽く手を上げて冬馬に応える。
そんな感じに軽い会話を続けていれば、小雪のベランダからの監視されつつ、近くのコンビニまで飲み物を買いに行っていた準が帰ってきた。

「つ、疲れた……」

「お～ご苦労ご苦労。二人もジュース飲もうよ～」

「それではユキも呼んでいますし、おやつにでもしましょうか」

「そーだな。皆で食べよう」

今日も平和な４人組みは、同じテーブルで楽しくおやつを食べ始める。

彼らにとっての一日は、いつも通りに過ぎていった。

「ん？　鍋はいいけど米が無いぞ」

「やべえ忘れてた！」

急ぎ米を買いに行ってからしばらく。

風太の家に続々と友人が集まり始めた。

「よぅ風太」

「おー！　お前が一番乗りとは珍しーな！」

「うるせぇ。鍋なんだから肉も用意してあるんだろうな」

「勿論だよ！」

「ならいい」

何か一仕事やり遂げた顔の板垣竜平が一番に。

「ゲーセンでハイスコア更新したぜー！」

「マジで！？　くっそー！　俺も負けてらんねぇ！」

「ちょ、待て風太！　お前主催の鍋パーティーだろ！」

ゲーセンで人暴れしてきたらしい板垣天使がすぐ後に。

「ちょっと遅くなっちゃったかねぇ？」

「大丈夫！　全然早いよ！」

「Ｚｚｚ……」

「あれ？　辰姉ちゃん寝てる？」

「さっきからドアの前で寝てたのさ」

「おぉう……全然気付かなかった。まぁ入ってよ」

ドアの前で寝ていたらしい板垣辰子を引っ張って、板垣亜巳がやってきた。

そして――

「それじゃあ全員集まったし、いざ鍋パーティーを……」

「お前ら俺を呼ばねーなんてひでぇじゃねえか。おじさんも混ぜろよ」

「何故窓からっ！？」

「こういうのはインパクトだろうが！　つーわけでお邪魔するぜ～」

どこで話を聞いたのか、釈迦堂刑部が窓を開いて現れた。

とりあえず一悶着も起きずに済んだということで、風太が立ち上がって音頭をとることにした。

「そいじゃあとりあえず全員着たという事で――」

「ふぁ～。あれ？　皆おはよう～」

「ちょっと、タイミング悪いよ辰」

「ま、まぁ俺は気にしてないぜ……とにかく！」

辰子が目を覚ましたことによってちょっと出鼻を挫かれた風太だが、なんとか調子を取り戻して声を張り上げる。

「第二次、ＧＷ前の鍋パーティー開始だぜ！」

そうして風太の合図と共に、狂乱の鍋パーティーが始まるのであった。

第二章プロローグ　～表～　正義たる少年（後書き）

＝＝＝＝＝＝＝

あとがき

分担してみました。

ついでに言っときますが、鍋パーティーの内容は書きませんぞ？

第一話は一条くんたちのお休み旅行ですので。

第二章プロローグ　～裏～　死神たる執事（前書き）

分担して加筆しました！

第二章プロローグ　～裏～　死神たる執事

主に刃向かう者を滅する『死神』

脚本は変わり、新たな幕が上がり、役者は舞台で筋書きの無いドラマを作る。

――同日、ドイツにて。

「では、クリスの事は君とマルギッテに頼むことにする」

「は。心してその命を承ります」

私は目の前の主、フランク・フリードリヒに頭を下げる。

闇をどこまで歩けば終わりがあるのかわからなかった昔の私は、とある日にフリードリヒ家に執事として雇われた。

既に凄腕として知られていたフランク・フリードリヒによって、その頃の私が選別されてここにいる。

私にとってこの人は恩人だ。私が従うだけの人物なのだ。

「川神学園にマルギッテと共に入学し、クリスお嬢様を見守ります。害意のある者は――」

「無論、君に任せる」

「ありがとうございます。……では、私の判断で処置を行います」

死神として恐れられた私の牙と爪は、死を齎した旋律のオーケストラは、全てがこのフリードリヒ家のためにある。

古く濁った死の兵隊としての血は抜いた。今の私はこの家の執事として生まれ変わった存在だ。

だからこそ、この家の現当主たるフランク・フリードリヒには忠実たらねばならない。

「マルギッテは中庭だ。模擬戦の約束をしているのだろう？　君を待っているよ」

「――申し訳ありません。それでは失礼します」

マルギッテ程に強い人間は欧州にはいない。九鬼の従者部隊の大御所、ヒューム・ヘルシングならマルギッテより強いだろうが、さすがに模擬戦の相手に呼んでくることなど出来ないだろう。

ならば私は、戦場から退いた身であっても彼女の相手として一刻限りの『死神』となろう。

彼女もそれを望むだろうし、私も彼女と戦っている間は昔を思い出す。

静寂に満ちた廊下を歩き、中庭へと向かう。

元々、暗い所で育った私にとっては眩しすぎる光が窓から差し込む。

マルコ・S・アッシュハウンドという個人は、裏町の泥の中で生まれ、這い上がることも出来ずに戦場の泥の中で死ぬと思っていたが、今の生活はこれ程までに光に溢れている。

それを幸福と感じる私も随分と変化したのだろうな。

「待たせたか？」

「ふっ。待ちに待たせてもらった。準備はとうに済んでいるぞ」

「それはすまないな。その分だけ尽力させてもらおう」

ウォーミングアップを済ませ、眼帯をはずしたマルギッテと相対する。

トンファーを構え、やる気は十分といったところか。さすがに月に何度かの模擬戦だけあって遠慮が無い。

よく見知った間柄だからこそというのもあるが、これからは共に任務をする相手だ。

こうして戦いの中で、より相手を見知るということも大切だ。

「準備はできたか？」

「ああ。こちらはいつでも大丈夫だ。そういう風にできている」

己の武器を仕込んだ手袋は常に身に付けているし、筋肉はいつでも動けるようにほぐれている。

ただ、マルギッテが本気とあればこちらも多少は本気にならざるを得ないだろう。

殺す気でかからなければならない相手ではないことが互いに救いなのだろうな。

この女と相対する時はいつもそう思う。

「それでは……行くぞッ！」

「ああ。こちらも……行くぞ」

まっすぐに地を駆けるマルギッテに、私はその場から動かずに右手を動かす。

空間に一筋の鋼が輝き、咄嗟にかわしたマルギッテが寸前まで立っていた場所に爪痕を残す。

「ふッ……はぁっ！」

「……遅い。遅すぎるぞマルギッテ」

私に接近したマルギッテが振るうトンファーを、一歩後ろに下がって避ける。

耳元に空気をぶちのめすような音を残し、鼻先をトンファーが掠めていく。

そうしながらマルギッテの体にワイヤーを絡め、死なない程度に拘束して地面へと叩きつける。

「ツッ……まだまだ！」

「そうだ。それでいい。諦めが敗北を生むのをお前は知っているはずだ」

マルギッテは頭から地面へと叩きつけられる寸前、トンファーを回転させてワイヤーを絡め、無理矢理拘束を解除し抜け出した。

判断力も十分に高い、応用力も十分だ。さすがに欧州最強のインファイターと言われるだけのことはある。

「だが、まだまだだ。これが終われば次の模擬戦まで間があくぞ。その分をここで吐き出してみろ」

「そんなものはわかっているとも！」

吼える番犬マルギッテ、死神マルコたるこの私に、見事噛み付いて牙を立ててみせろ。
そうして喉笛を食い千切るくらいの芸当は見せてやろうという位の気概を持て。

「Ｈａｓｅｎ　Ｊａｇｄ！」

「Ｔｏｄ　Ｋａｐｅｌｌｅ……第一曲目は魔弾の射手！」

果敢にトンファーを回転させながら挑みかかってくるマルギッテに、私はワイヤーの弾丸を雨と降らせる。
無数に襲い掛かるそれを弾き、逸らし、多少の傷は無視して突き進むマルギッテ。
さすがだ。この女はこうでこそさすがと言えるのだろう。

武神が住むという日本の川神市か。
これほどの女と一緒なら、あちらに行ってもなかなか面白くなりそうだ。

訓練が終わり、傷だらけになったマルギッテと共に医務室へ向かう。

「大丈夫か？」

「……当然です。あなたが加減してくれたおかげでしょう。後に残るような傷は一つもありません」

「それは重畳、乙女の肌に傷を残したとあれば執事失格だろうからな」

「……マルコ」

「なんだ？」

「いえ、言っても無駄でしょうからやめます」

医務室へと向かう道中で、私はマルギッテを心配して声をかけた。どう思われているかわからないが、とりあえず傷が残らないのであれば上出来だ。

傷を残すことにでもなってしまえば、お嬢様になんと言われてしまうことか。

マルギッテ自身はそこまで気にしない正確だが、お嬢様は彼女を姉のように慕っている。

さすがに許しは……まぁ、名誉の負傷とでも言ってごまかす可能性もあるか。

「切り口は綺麗なはずだが念のためだ。上を脱げ、包帯を巻いてやる」

「……マルコ」

「冗談だ。そんなに怒るな」

震える声で怒りを露にトンファーを振り上げられては、退散するし

かないだろう。
……しかし、今日はマルギッテもかなり気合が入っていた。
模擬戦だったとはいえ、私が一撃もらってしまうとは。

「それとも私が弱くなったのか？」

常時戦場の心構えでいることは忘れていない。
自己の鍛錬を怠ることも忘れていない。
それでも数々の戦場を経験して強くなっていくマルギッテよりは、
私はずっと不足しているのだろう。

ただの死神でいればよかった昔とは違う。
今の私は一人の執事だ。執事に過ぎない。

「何を見ていのですか？」

「窓の外だ」

「……そちらの窓の外には何もありませんよ？」

「わかっている」

ただ眩しすぎる日溜りの中に立って。
そして明るく輝く美しい庭を眺めることは日課の一つだ。
特に己を『死神』として戦闘を行った時は特に。
心を執事として保たせるために必要なことの一つなのだ。

「それでは私はまだ準備がありますので」

「そうか……マルギッテ」

「はい？」

「明日からも、よろしく頼む」

「――ええ。当然です。こちらこそ頼みますよ」

笑顔を残して、マルギッテは颯爽と去っていった。

私も、いつまでもこうしてはいられない。

日本へ行く準備は済ませてあるが、行ってどう動くかのスケジュールも組まなければならない。

私とて執事。執事は多忙なのだ。

私は日溜りから抜け出して、自分の部屋へ帰るために歩き出した。

第二章プロローグ　～裏～　死神たる執事（後書き）

あとがき

新キャラ登場のプロローグ。

本当はもう一人だけ新キャラいるけど、出番はまだ先かね。

ヒュームさんは登場するのかどうか……

第二十六話　青くとぼけた空の下（前書き）

時間が開いただけあって難産でした。

第二十六話　青くとぼけた空の下

――俺の名前は一条風太。ずばり、板垣辰子に恋をしている。

「というわけで遊園地に行こう」

「待て、何がというわけでなのかサッパリわからん！」

鍋パーティーもたけなわとなって俺が発した言葉に、準が思い切りツッコミを入れた。
ふふん、それは仕方ないだろーな。
だが……これを見ろ！

「昨日な、買い物をしてばあさんを手伝った時に貰ったのさ」

今時古風な婆さんだったぜ。
八百屋で野菜をぶちまけるなんてドジやったから拾うのを手伝えば、お礼にチケットときたもんだ。
それも人数分なんてイカした婆さんだったぜ本当。

「風太の幸運は本当にすごいですねぇ」

「わーい！　遊園地だ～♪」

そう褒められると俺も嬉しいぜ。
それもこれもあのばーさんのおかげだな。ありがとよ、ばーさん。
――で、あらかた肉を食って姿を消した釈迦堂さんはおいといてだ。
板垣のみんなはどういう反応を……？

「ちょうど休みだしね……いいじゃないか。ねぇ辰？」

「そうだね。みんなで行けるならいいんじゃないかなぁ？」

「よっしゃ！」

軽くガッツポーズ、心の中では大喝采。
遊園地っていや最強のデートスポットだぜ。二人きりじゃないけど。
まぁあれだ。遊べるだけで十分幸せだぜ。

「よっしゃー！　思いきっり遊ぶぜ！」

「はしゃぎ過ぎだろうが。遊園地くらいで」

「うっせぇ、別にいいんだよ。風太ー！　ジェットコースター全種類乗るからなー！」

「任せとけぃ！」

竜兵はなんか呆れたような顔しているけど、そういう遊び苦手だから仕方ない。それでも楽しんでもらえるといいけど。
にしても天がノリノリでよかったぜ。
まーいつもそんな感じだし遊ぶの大好きだからな。

「よっし！　それじゃあ明日は遊園地だ！　朝に駅集合で！」

「もう眠いからここに泊まってってもいいかな～ＺｚｚＺ……」

「でもね辰……ってもう寝てるじゃないか」

「背負えばいいだけだろうが。とっとと帰るぞ」

めんどくさいからとそのまま眠り始める辰姉ちゃんを竜兵が背負って部屋から出て行く。
それに続いて亜巳さんまで出て行った。
や、さん付けにはいつのまにかなってたというか。

「っておいリュウ！　亜巳姉まで～～っ風太、それじゃあ明日な！」

「おう。明日な～」

それに続いて天も外へと出て行った。
なんか最後にやたらと渋ってたような仕草をしてたのは気のせいかな。
うん、鍋に肉も何も残ってないし。

「じゃあ準、とりあえず電車の時間とか任せた」

「って俺頼み!?　ちょ、いい加減にしろよオイ！」

「いいじゃんいいじゃん、信用してるんだって」

「そーだぞ準ー、お前も手伝えー」

「いやねユキ……」

おぉ、ユキも一緒に言ってくれてる。
まー準はそういう役割だからな。適任適任。

「私も手伝うから大丈夫ですよ準。そのほうが風太もいいですよね？」

「まーやっぱり準だけじゃ心配だからな。なぁユキ？」

「うんうん」

「……いや、もういいぜ。そんなに言うならやってやろうじゃねえか！」

いつのまにかなんか準がやる気になってるぞ！
やっぱり頼りになるな準は。空回りしそうで心配だけど。

まぁ、これで明日は大丈夫そうだしな。
今日はもう寝て、明日に備えて英気を養うぞ！

おやすみだぜぃ。

＝＝＝

「やぁおはよう！　よく寝たー！」

「おはよ～風太～！」

「朝っぱらから元気だな、相変わらず」

「それが風太のいいところですよねぇ」

「うん、よく言われる。とにかく遊ぶ準備は万全だ！」

そう言って、みんなの前で実に嬉しそうな笑顔を見せる風太。
明日が楽しみで眠れないなどということは、さすがの風太もなかったようだ。
他のメンバーも何だかんだ言って楽しそうである。
あの板垣一家ですらそうなのだ。

「ほら辰、寝坊するんじゃないよ。というか寝てるじゃないか」

「むにゃむにゃ……大丈夫だよ～。起きてるよ～」

「糞……早寝早起きなんて久しぶりだぞ」

「うっせえぞリュウ、今日は皆で遊ぶんだからな。ゴタゴタ言うんじゃねー」

「チッ、わぁってるよ。今日くらいはな」

楽しそうかどうかは置いといて、まぁ乗り気であるということに間違いは無い。

一番乗り気でない竜兵ですら、黙って遊園地についてくるというノリっぷりだ。
これも風太が、ある種のカリスマとでも言えるような周りを楽しくさせる空気を発しているおかげだろうか。
とにもかくにも全員の準備が完了した彼らは電車へと乗り込み、一路遊園地へと向かうのであった。

さて、無事に遊園地まで登場した彼らであったが……やはり彼らは目立つ。
遊園地内はＧＷ中なだけあって結構な人ごみもあるし、そんなごちゃごちゃした中を大人数で歩くのは色々と面倒だ。
そんなわけで冬馬からこっそりと一つの提案がなされた。

「それじゃあ少し別行動といきましょうか。風太もその方がいいでしょう？」

「そ、そんなことは無いぞ。皆一緒の方が楽しいしな」

そんなことを言いつつも、風太の顔は少々だらしなく歪んだ。
でへへ、と風太は頭をかいて笑う。それは妙に似合っている仕草だったが、内心で何を考えているかが見え見えであった。
しかし冬馬の言うことも最もである。
ついでに言えば個人の好みもかなり異なるし、多少の別行動をしても問題は無いのだ。

そしてその案は採用される。
上手く気を使ったのだろう、風太は辰子と共に。
冬馬と小雪と天使、準と亜巳と竜兵が一緒に回ることに。

少し数が合わないようだが問題は無い。

「それじゃあ行こう、辰姉。思いっきり遊ぼうぜ」

「遊園地って昔に行ったきりだなぁ～」

「今まで遊べなかった分、俺が楽しませてやるぜ。これでも遊ぶことにかけちゃ大抵の奴には負けないつもりだからな」

「うん、よろしくね～」

「おう！」

胸を張って辰子の手を取る風太の顔は、今まで以上に輝いていた。いつも眠そうな辰子ですら、風太の元気に当てられて楽しそうな笑顔を浮かべる。

二人で笑い合う男と女。ここだけ見れば本当のカップルに見えたかもしれない。

風太がはしゃいで辰子を引っ張るような形で去っていく二人を、まだ出発していなかった者達が建物の陰から覗いていた。

「ふふふ、青春してますねぇ。いい事をした後は気分がいいですよ」

「いや若、こうして覗くのはどうかと……ま、面白そうだからいいか」

「楽しそうだね～よかったよかった～」

「辰も楽しそうで何よりだよ。さすが風太だねぇ」

「ウチが風太と遊びたかったのに～！」

「そりゃ残念だったな。ところでいつまでこうしてる気だ？」

とても珍しく竜兵が正論を言っているが、どうやらみんな聞く気は無い様子だ。

そして舞い上がっている風太と、久しぶりに遊ぶモードに入った辰子は尾行されていることに気付かない。

ただ、わかることは二つある。

二人とも笑顔で、とても幸せそうだった。

見ていた彼らもそれを見て安心し、その場を離れる。

結局、彼らは友達と家族が心配なだけだったのだ。

彼らも自分たちが楽しむべく、心機一転して遊ぶことに心を傾けるのだった。

＝＝＝

いくつかのアトラクションを楽しんだ風太と辰子は、次に遊ぶアトラクションへと移動していた。

行き交う人全員が活気に満ちているというわけでもないが、その中でも二人はよく目立っていた。

「次はお化け屋敷……っても、怖そうじゃないな。どうする？」

「一回くらい行ってみたいかな～」

「ＯＫ！　なら行こう！」

風太は不安そうに辰子に聞いた割に、答えを聞くなり元気よくガシッと辰子の手を握り締めた。

そうしてお化け屋敷に向かっているというのに、やたらと元気よく入場していく。

一通り遊びきった二人は、合流場所へと向かって足を進めていた。

「やっぱお化け屋敷はお化け屋敷だな～」

「あんまり怖くなかったかな」

「……まぁ、もう怖がれる年齢（トシ）でもないからね。俺も辰姉も怖がりな方じゃないし」

「そうだよね～。でも昔は素直に怖がってたよね？」

「昔の事だよ！　忘れてくれよ！」

唐突に辰子が言った言葉に猛烈に反応して風太が吼える。

子供らしい子供であった風太にとって、お化け屋敷で怖がっていたという隠しておきたい過去がある。
まぁ怖がったと言っても、リアクション大きく驚いてたからそう見えただけなんだが。
なんにしろ、その話を小雪経由で知られてしまったことは風太にとっては不幸でしかない。

「そろそろ皆と合流の時間だけど、辰姉は他に行きたいところはある？」

「ん～それじゃああれは？」

そう言って辰子が指差した先には観覧車。

「観覧車か……おう。俺も乗りたかったんだ！」

「ふふ」

「どうかした？」

「子供みたいだな～って」

（うおぉ……否定できない！　だって観覧車で景色眺めるの好きだし！）

心の中でそんなことを叫びながらも、否定できない事に頭を抱える。
アトラクションにはしゃぎ、辰子の手を引っ張って積極的に歩き、風太はまさしく子供のようだった。
風太はそんな自分の姿を思い出し、少し顔を紅くして頭をかいた。

「それじゃ、観覧車に乗ろうぜ。時間も無いし」

観覧車はゆっくりと動きだした。
まだまだ夕暮れというわけでもないが、対面に座る二人にとってはいい密室だろう。いろいろな意味で。
もっとも、風太は高所から見る景色にはしゃいでいるし、辰子も風太を見習って外を眺めていて、色っぽい雰囲気にはとてもなりそうにはなかったが。
しかし、突然、思い出したように風太が口を開く。

「辰姉たちはあんまり遊園地に来た事無いと思うけど、どう思う？楽しかった？」

「うん。あたしもまた来たいかな」

「じゃあまた来よう。そんときゃもっと友達を増やしてな。そのほうが楽しいぜ」

「そうだねぇ」

結局、風太は自分よりも他人を優先する。
だからこうしてチャンスをものにすることが出来ないのだが、それで他人が幸せになるならそれでいいのだ。
辰子たち、板垣一家に普通の友達ができる可能性は恐ろしく小さいだろう。
だからといって未来がそうなると決まっているわけではない。
だからこそ風太は、目の前にいる辰子の姿を目に焼き付ける。

こうして観覧車に乗って、楽しそうに外の景色を眺めている彼女を。
風太にとって、今でも魅力的な彼女が、友人を得ることによってもっと笑顔になれるのなら。
それはどれだけ素晴らしいことなのだろう。

そうこうしているうちに時は過ぎて、観覧車のてっぺんにいた彼らも地上へと戻ってきた。

「それじゃ、皆と合流しよう」

「みんなも待ってるかなぁ」

「時間にきっちりしてるのは冬馬くらいだし、大丈夫でしょ。ゆっくり行こう。ゆっくり」

こうして、二人で過ごす時間はすぐに消えていってしまった。
それでもやっぱり、こうして時間を取れたのは風太にとって嬉しいことだ。

これからもこうして楽しく過ごせていけたらなぁ、と。
風太はそんなことを思いつつ辰子の隣を歩いていくのだった。

第二十六話　青くとぼけた空の下（後書き）

あとがき

遊園地に実地研修に行ってきました。そしてこの体たらく。
……一応言っておくが、一人で行ったんじゃないからな？

各オリキャラ達の過去をまとめ、番外の章として「スピンオフ編」
ｏｒ「ＳＳ編」を出そうと思うのですがどうでしょう。
それについて意見を頂けたら幸いです。
あ、もちろん平常運転のストーリー関係の意見・疑問もバシバシ受
け付けてます。

第二十七話　強さが示すものとは

――5月4日　月曜日　箱根にて――

「クリスお嬢様、楽しそうで何よりです」

「任務に集中しろマルギッテ。今回の任務はクリスお嬢様に何も無いように様子を見に来ただけだぞ」

「わ、わかっています。ちょっと考え込んでいただけです」

箱根の山中でなにやら話し込む二人の男女。
その周辺には軍服姿の男が30人ほど控えている。

「お前達も配置につけ」

「了解です、マルコ隊長」

山中でありながら執事服を着たマルコに敬礼をして、周りにいた30名の部下達はあたりに散らばっていく。

「……中将は？」

「中将殿は少し遅れてくるそうです」

「珍しいこともあったものだ」

「次の任務が忙しいのです。勿論私もなのですが、今はこちらを優先しろと」

「そうか。それなら仕方ないな」

マルギッテの言葉にゆっくりと頷いて、マルコは手元の機械を耳に当てる。

彼は先ほどからこうやって旅館の内外に仕掛けた盗聴器・集音機をフルに使って情報を集めていた。

「やはり、彼らはこのまま山へと向かうようだ」

「正確な場所は？」

「――少し離れた方がいいな。細かい調整はこっちでする。付かず離れずの位置を保とう」

彼らは静かに軍隊らしく移動を開始する。

観察対象は風間ファミリー。

要警護対象はクリスティアーネ・フリードリヒ。

要注意人物は川神百代。あまり近づきすぎず、気配を悟られるべからず。

＝＝＝

双眼鏡も使わずに、山の奥から川辺で釣りをする風間ファミリーを観察する。
遠く離れている位置だが、マルコにとっては視認できる距離だ。

「状況を報告しろ」

『こちらB班、問題ありません』

マルコは、釣りを行っている風間ファミリーを包囲するかのように配意された部下達へと連絡を送る。

『C班も異常なし』

『D班も異常ありません』

しかし、なぜかA班の反応だけが無い。
A班にはマルギッテがいるので、そうそう問題がおきるはずは無いのだが。

「……おい、A班はどうした。マルギッテは？」

当然疑問に思ってマルコは応答しないA班へ向かって通信を行う。
そしてしばらくの沈黙の後で通信が帰ってくる。

『少尉は先ほど、ここは任せると……』

「お前に任せて消えたわけか？」

『いえその……』

「どうせあいつの事だ。先ほどあった報告で聞いた、目の前で模擬戦でもされて乱入したくなったんだろう」

『……さすがです隊長、だいたいあってます』

機械越しにだが、部下がマルコの洞察に感嘆した様子が伝わってくる。

そんな声を聞きながらマルコは小さくため息をつく。

マルギッテには、強い者を見れば勝負をふっかけようとするという困ったクセがあった。

長い付き合いでそれも承知してはいるが、子供相手に本気になるなともマルコは思っていた。

「中将はまだなのか」

マルコは空を眺めてそう呟けども、中将の来る気配は依然として無し。

彼がいるからこそ遅刻しているのだろうが、あの親バカがそんなに遅刻をするはずも無い。

おそらくはもうすぐそこまで来ているはずである。

そうは言っても問題は起こっているのだから、ままならないなとマルコは思ってしまうのだった。

そして更なる問題が起こった。

「……む、不味い。どうやら気付かれたか」

森に張り巡らしていた糸の振動と、部下達に付けていた糸からそれが伝わってくる。

元々、川神百代という世界でもトップクラス……むしろ異常なほど

に戦闘力の高い存在に、一切気取られずに観察任務をこなすということの方が無理があったのだ。

「連絡！」

『こちらB班……げふっ』

「チッ」

やはり部下達では到底歯が立たない。
百代が何を考えて全滅させにかかってきたのかわからないが、このままでは彼らは全滅だろう。

「マルギッテもいない状況だが、私まで倒されぬようにせねばな」

百代は着々と部下を倒しながらマルコの下へ向かってくる。
そんな危機的状況でも、マルコはいつもと変わらず冷静に呟くのであった。

中将が、森の外で百代を待っていた直江大和と、偶然の邂逅をするまであと僅か。

「お前かぁ～？　さっきから鬱陶しい奴は～」

「やはり最強……か。厄介な上に面倒だ」

「まぁいい。お前も倒して終わりにしよう」

「……」

軽くマルコに対して倒すと言ってのける百代に、マルコはゆっくりと身構える。

ただ、構えるといっても彼の構えは普通とは違う。

直接拳でもって戦う者ではない彼は、かといって刀などといった武器を使うわけでもない。

マルコが使うのは、最新の科学技術によって作られた、まさに科学の集大成とも言うべき代物だ。

たった1本で10トンもの重量を持ち上げる、おまけに細過ぎて見ることもできないという、不可視にして切れない『インビジブル』という名称の糸。

それを無数に携帯している彼は、『インビジブル』の他にも様々な太さのワイヤーを使いこなす『糸』のプロフェッショナルだ。

「む……糸か」

「そうだ……」

「ふん。珍しいものを使うな。だが、今の私に通じるかな？」

マルコから百代へ向かって伸びるワイヤーを意にも介さず、百代はまっすぐにマルコへと向かう。

そして百代が完全に近づききる前に、マルコは激しく腕を動かした。

「Ｗｉｒｂｅｌｗｉｎｄ」

「……っと！」

腕を猛スピードで動かし続けるマルコの前で、百代が前後左右へと逃げ回る。

百代の進行方向、マルコの前で渦巻く複数種類の無数のワイヤーと、不規則に百代へと伸びてくるワイヤーの攻撃。

どうやら腕から伸びる何条もの太いワイヤーは、見た目以上の威力を秘めているらしい。

百代が動いた後の地面には、その糸によってつけられたであろう巨大な爪痕が幾つも残っていた。

しかしそこは百代。

一瞬にも満たない隙を見つけてマルコへと走る。

しかし、拳が届きそうな距離まで近づいたところで咄嗟に横に飛びのいた。

「……今のは」

「ふむ。よく避けた。しかしお前はもう私の手の内だ」

百代が近づいていたマルコの傍には、キラキラ光る何かが何条も張り巡らされ、それがヒュンヒュンと蠢いていた。

光に当たってようやく見えるほどの細いワイヤー。それが、二段目の防御線というわけだ。

「だが、種がわかればやりようもあるぞ」

「聞こえなかったか？　お前は既に私の手の内だと」

「？……っな！？」

マルコが嘲笑を浮かべて両腕を動かした瞬間。
少し離れて油断していた百代の体が空中に磔となった。
その手足を結ぶのは本当に目に見えない細さの超極細ワイヤー『インビジブル』。
一本づつの強度も破格のそれが、何重何百重にもなって百代の手足を縛り付けていた。

「馬鹿な！　私は気付かなかったぞ！」

「無論、気付かれないようにしていたのだ。一本一本を重ねず、ギリギリまで触れないようにしてな」

雁字搦めになった百代に、マルコは静かな口調で告げる。
山中のあらゆる物と百代の体を結び付け、指先一本動かせないほどに縛り付ける。
いくら百代であろうとも、この量の『インビジブル』を切り裂くことは出来ない。
ましてや自分の体を縛り付けられている状況では。
大爆発を起こして脱出することも可能かもしれないが、それで本当に『インビジブル』から脱出することができるとは限らない。
何しろ、レーザーですら焼き切れなかったという耐久実験の結果を出しているのだ。

だからマルコはこれでなんとか抑え込めたと思った。
しかし、その認識は甘い。

何故、百代が最強と言われているのかを言うことへの理解が、圧倒的に足りなかった。

「この程度で……」

「む」

「この程度で、私を縛り付けることが出来たと思うな！」

そう言って、絶対に動かす事など出来ないはずの右脚を踏み出す。

一歩、そして今度は左足で一歩。

「馬鹿な……この山にある全ての物に繋いであるのだぞ……」

「たかが山程度！　その程度で止められるほど甘い覚悟は持っていない！　今の私にとっては、山の一つや二つよりも『最強』という名の方がずっと重い称号なんだ！」

山全体が揺らぐ。

地震でも起きているかのように、グラグラと全てが揺れている。

そうして、驚愕に目を見開いたままのマルコの頬に、全身を拘束されたままの百代の拳が吸い込まれた。

＝＝＝

十分後。

唇の端から血を垂らした跡のあるマルコと、いい汗かいたという感じのマルギッテ、娘に会えてご満悦のフランク中将、そして百代を含めた風間ファミリーの面々が一堂に会していた。

「……少しは加減して欲しいものだな、最強。……抑えていたとはいえさすがにキツイ」

「マルコ、大丈夫ですか？　川神百代に殴られたと聞きましたが」

「何っ！？　マルコはモモ先輩と戦ったのか！　大丈夫なのか！」

「心配ありません、お嬢様。軽減はしましたので」

マルギッテやクリスから心配されて、問題ないと返すマルコ。
さすがに百代に殴られたことによるダメージはあるようだが、元々全身を雁字搦めにされていたのだ。
拳にそこまでの威力を乗せられるはずも無かった。

あの後、マルコが一発殴られて跳び退ったところで、直江大和と一緒にフランク中将が登場。
そして誤解を解いて和解した後、そのまま山が揺れたことに驚いていた風間ファミリーと合流。
マルギッテが模擬戦に乱入したらしいとマルコが話して、みんなで一緒にマルギッテが向かったらしいワン子と京が模擬戦をしていた場所に向かったのだ。

そして現在に至る。

「気のせいかな。モモ先輩、山を動かしてたような気がするんだけど」

「大丈夫だモロ、俺様も見た。明らかに強くなってるよな」

「……姉さんに殴られて平気なのか。クリスの執事ね……」

モロとガクトの二人がそんな会話をして、百代が強くなってるんじゃないかと推測を立てる。

そして大和はマルコを観察して、その戦闘力に感心しながらマルコの事を記憶する。

そのうち何か役に立つ情報になるかもしれないし、百代相手にそこまで戦えれば十分に要注意人物だからだ。

「「クリスお嬢様」」

「なんだ、マルさんもマルコも二人揃って」

「いえ、一応今度から私達も川神学園に入学……」

「そこで、マルギッテがマルさんと呼ばれ、私はマルコと呼ばれるのに違和感があると言われまして」

突然に話しかけられたクリスは、その話の内容に首を捻らせる。

とてつもなくどうでもいい質問だし、そんなのは今まで特に言われた事も無いからだ。

クリスにとって、マルギッテはマルさん。マルコはマルコで定着している。

それはクリスにとって姉のような存在であるマルギッテと、常に執事として距離を取ったことから来る違いでもある。

「誰が言ったんだ？」

「マルギッテです」

「馬鹿な！　私はそんな事言ってはいない！」

「冗談です」

「……」

全部が全部マルコにからかわれていたとわかって、マルギッテがピシリと固まった。
そしてそのままプルプルと震えだした。
クリスが何事かと思って近づき、マルコは薄笑いを浮かべて少し離れる。

「またあなたは私をからかって……？」

「いつものことだろう。気にするな」

「マルコ……あなたと、あなたという人は～っ！」

「うわっ、マルさんが怒った！」

マルコの襟に掴みかかって怒るマルギッテ。
その珍しい姿にクリスが驚き、ぐいぐいと引っ張られているマルコは相変わらず余裕の笑顔。
他のものにとっては到底想像できないような光景に、風間ファミリーの面々もビックリだった。

「マルコ、マルギッテ少尉も、そろそろやめたらどうだね」

「は……はっ！　すいません中将殿！」

「申し訳ありません、フランク様」

しかしいくらふざけてはいても、こうやってフランク中将が声をかければ普段通りになるのだからさすがだ。

軍人としてのあり方が骨身にまで染み込んでいるからこそできる取れる反応である。

「話終わった？　いざ尋常に勝負！　負けないわ！」

そしてマルコたちの会話が終了したとわかったワン子が威勢よく勝負を挑んでくる。

どうやら、マルコと百代が争っていた最中に行ったマルギッテとの戦いが、不完全なままで終わってしまったことで不完全燃焼のようだ。

「……次の作戦開始の時間が迫っている」

「悪いなサムライガール。マルギッテ少尉は優秀な人材だ。やるべき仕事が多くてな」

「私にも、あちらに戻ったら終わっていない荷造りを済ませなければ」

しかしワン子と戦っている暇は彼らに無い。

そもそもここに来たのだってフランク中将の独断なのだから、通常

任務がなくなったわけではないのだ。
まぁ約一名、物凄くくだらない理由に聞こえるが。

「だったらわざわざ連れてくるなという話だな弟」

「ちょ、姉さん楯突くのはいいけど俺に振らないで」

速攻で愚痴を漏らす百代。そんな話題を振られた大和にはいい迷惑である。
マルコ達からすれば、そのくらいは楯突いたことにはならないのだが。

「だが、君の願いは後日叶うぞサムライガール。マルギッテも君達の学び舎に転入予定だ」

「うぉっ!?　マジで？　……アリだな」

「どこまで親バカなんだか」

フランク中将から突然に知らされた情報に、ガクトと京はまるで違う反応を示す。

「マルコも転入させる予定だ。クリス、困ったことがあったら彼に言うといい。大抵の物は用意させる」

「うわ、ホントに親バカだよ」

「ぶっちゃけどっちも二十歳越えてそうだよね」

完全な親バカ発言をするフランク中将。

京は完全に呆れかえって、むしろ引いているし、モロに至ってはツッコミに力が入っていない。

「彼らはクリスの隣のクラスの２－Ｓに転入させるつもりだ。優秀な二人に相応しい特進クラスではあるしな」

完全に優遇しまくってはいるが、フランク中将も別に間違ったことは言ってはいない。

マルギッテやマルコが優秀であるということは、確かに間違ってはいないからだ。

「中将、撤収の時間です」

「む、そうか。さっきマルコから聞いたが、こちらの精鋭が倒されたことについては互いに遺恨ナシとしよう。こちらもマルギッテが襲い掛かってしまったことだしな」

「……ま、こっちもその黒いのに一発入れてるしな。別にいいさ」

確かに、どちらも襲い襲われているのだから五分五分なのだろう。

ワン子や京は襲われたことを気にしてはいないし、マルコも百代に殴られたことを気にしてはいない。

なら、これ以上気にすることも無い。

「それでは一足お先に、兵を集めておきます」

「頼んだぞマルコ。……ではな、クリス」

「はい！」

こうやって、彼らは整然とした足並みで去っていった。

「娘を……頼むぞ？」

恐ろしい声で、そんな言葉を残して去っていった。
過保護な軍人ほど厄介なものは無い、そんな事を大和は思ったとか思わなかったとか。

第二十七話　強さが示すものとは（後書き）

あとがき

この二次創作のキャラクターファイルを作ろうかと思いますが、どうでしょうか？
各キャラの簡単な説明、能力、備考を含めたものとなります。
ちなみに、こちらはＳＳ編の冒頭に設置させていただきます。
それらの意見やここまでの感想含め、どしどし意見をお待ちしております。

第二十八話　もしかして平穏（前書き）

5月7日で日常編です。

第二十八話　もしかして平穏

また、きょうもひとりだった。

――父さんは世界で人を救ってくる。お前はお前の手の届く範囲を救うんだ。

おやじはそういって家をでていった。

おれはおばあちゃんとふたりきりで家にのこっていた。

だからおれは、ずっと見ていたかっこいいおやじみたいになりたかった。

「おい！　弱いものいじめをするヤツは許さないぞ！」

「げ、あいつだ……」

「けんか強いんだよな……たいさんしよーぜみんな」

おれが言って人を助けて、たまにけんかになることもあったけど、おれは負けなかった。

だって、誰かを助けるってことが大好きだったから。
だからおれがまけたら、また誰かがいじめられると思って。

ああ、でもどうしてだろう。
おれはたくさんの人を助けているのに。

おれのまわりにだれも人がいないのは、どうしてなんだろう。

――それは、そのときのおれには全くわからないことだった。

だからおれは、ただひたすらに、ひとりでがんばってたたかいつづけた。

＝＝＝

5月7日　木曜日

「姉さんの!?」

「彼氏!?」

「ああ。何か問題があるか?」

「いやいやいやいやいきなりぶっ飛びすぎててついていけないっていうか、えー！？」

朝の河原に、数人分の驚愕の声が響き渡った。
その騒動を引き起こした男女は、周りに驚愕の目で見られながらも冷静を保つ。

「まぁ落ち着け」

「私が言うことでもないが、そう簡単に落ち着けるもんじゃないと思うぞ」

「……そうか？　言われてみればそうかもな」

ははははと呑気に笑いながら言う二人に、未だに半信半疑の者達が話しかける。
朝の登校途中に、やたらとラブラブな雰囲気を発している大神宗介と川神百代に声をかけられ、どうしてそんなに仲がよさそうなのかと聞いたのが始まりだった。
突如として宗介と百代の交際宣言。おまけに百代にも否定する気無し。
そんな突然の状況には、いくら風間ファミリーといえども驚愕するのも無理は無い。

「お姉様、昨日帰ってこなかったのって……」

「ああ。こいつの家に泊まった」

ワン子の問いかけに、当然のごとく宗介と腕を組みながら答える百

代。
なんというか密着しまくりのその姿に、反応を示す少女も一人。
「羨ましい……ね、大和」
「なぜ俺に振ったし」
「え、だって――」
「別に言わなくていいから」
「わわわわわ、す、すごいです。二人とも大人です……」
「でもまゆっちにはまだ早いんじゃね？　ゆっくりいこうぜゆっくりー」
「そそそうですね松風。ちょっと、早いんじゃないかなとか思ったりしなかったり……」
京から話しかけられて迷わずツッコミをする直江大和。
延々とループするかのように松風との会話を続ける黛由紀江。
「モモ先輩に勝って告白が成功したのか……あれからそこまで日も経ってないのに、大神は凄いんだな」
「そりゃ俺も凄いが、一から修行し治せたのはルー師範とかの力も借りてるしな」
「それでも強くなれたのは自分が努力をしたからだろう。それを誇るべきだ」

「そりゃどうも。やっぱ、品行方正なお嬢様は言うことが違うな！」

わははと笑いながら明るく返事を返す宗介に、苦笑いを浮かべながらガクトが話しかけた。

その顔には、不気味なものを見たという感情に彩られている。

「いや、お前いくらなんでも性格変わりすぎじゃね？」

「そうか？　むしろ始めからこんな性格だと――」

「「「それはない」」」

「フ……手厳しいな」

何かかっこつけたように笑う宗介を見て、京が百代へと一声かけた。

「正直、似合ってないよね。あんなのでいいの？」

「いや、むしろこの方がいい。昔は宗介はこんな感じだったからな」

「お姉さま、それって子供の頃の話よね？」

「暗に、大神が子供っぽくなったと言っているんじゃないか？」

「ク、クリスさん、失礼ですよ」

突然に彼氏を作ったという百代を中心に、少女達も楽しく談笑を始める。

「Ｚｚｚ……なんか面白そうな話が聞こえた！　俺も混ぜろ！」

眠りながら登校という妙技を行っていたキャップまでもが目を覚まし、彼らは楽しく学校へと登校していった。
どうやら大神宗介は、百代の態度や宗介自身の性格の豹変も手伝って、無事に友人として受け入れられたようだ。

さて、登校後。
宗介が百代と付き合い始めたからと言って、そんなに大きく何かが変わることも無い。
そもそも言いふらす気なんてさらさら無いんだから、それが広まるはずも無いのだが。
大きく変わったことといえば、宗介の雰囲気だろうか。
話しかけやすいというか、得体の知れなさが消えたというか、ともかく前に比べてまともになっていたのだ。
そんなわけで、普通の日常風景の中に宗介も混じっていた。

「ユーオウマイシン！　ユーオウマイシン！」

「ワンコちゃん勇往邁進の意味分かってます？」

「ええ。何があろうとひたすら突き進む事ね！」

「スクワットしてるけどサ、科学的に見るとキケンじゃなかったっけソレ？」

「まー膝への負担はあるけど、王道よ。キケンなのはウサギ跳びかな？　まー川神院では普通にやるけど」

いつも通り、元気にトレーニングをするワン子と、そんなワン子に話しかける甘粕真与と小笠原千花。
常に努力を怠らず、頑張る姿勢をとり続けるワン子は人気がある。
目標である川神百代の強さが並外れている上に、ワン子自身の明るい性格も手伝って、彼女には友達が非常に多いのだ。
まぁ、主にマスコット的な意味の人気であるが。

で、後ろの方の席からそんな光景を眺める位置にいる大神宗介はといえば。

「大神がアニメの事についてわかるとは思わなんだ……」

「ん。まぁ、アメリカよりは日本のアニメの方が百倍面白いしな。あっちのはなんというか……作風が違うし色々と濃い」

「言わずともわかる！　日本のアニメの方が素晴らしいとも！　アニメは日本の文化、アメリカなんぞと比べるのはおこがましい！」
「ああ、そうなのか。一応、帰宅後にアニメとか見てたんだがな、やっぱロボとか出るのが……」

「大神はロボットアニメが好みか。おっと作品名は言うな、当ててみせよう……」

「わかるもんなのか？」

「ガンニョムの最新シリーズだな。正直微妙だ。作画はいいがストーリーがつまらん」

「おー。マジでわかったな。さすがだ」

何故か知らないが大串スグルと一緒にアニメについて話していた。
一体どこから話す接点が生まれたのかはわからないが、どうやら話は弾んでいるようである。
そんな会話を続けている時に、宗介の耳が周囲の会話の中からある単語を聞き取った。

「ところで、次の日本史は宿題があるらしいが」

「あんな平安京ばっかりの宿題だが、やらなきゃ面倒だからな」

「まぁ、確かにアレはおかしいからな」

そんな事を言いながら、すました顔で机の中から宿題を引っ張り出す宗介。
おそらく目の前の人物（スグル）は、宗介が川神百代とくっついたと知れば色々と言ってくるだろうが……
まぁ、知らぬが仏というか。
いずれそれが学校中に知れ渡る時が楽しみである。

ただ、この大神宗介と川神百代のカップル。
付き合っているという事実を広める気は無いようだが、隠そうという気も無いわけで。
学校中がソレを知るのは、案外早いのかもしれない。

そして昼休み。
屋上には数人の人影があった。

「……」

唇の端をヒクヒクさせつつ、ヴィヴィ作の巨大な重箱の前に座る宗介。

「おい、嫌がらせかハゲ。あとその他。白いのはいいけど」

明らかに怒りを露にして、卵焼きを箸でつまんだまま静止する百代。

「すいません、ついてきてたみたいで……」

頭を下げて宗介と百代に謝っているヴィヴィ。

で、そのヴィヴィの後ろで佇む四人。

「おお～。美味しそ～」

「駄目ですよユキ、勝手に食べては」

「……そ～っとすれば」

「アホか風太ッ！　おま、死ぬ気か！？」

弁当から覗くヴィヴィの料理を見つめる榊原小雪に、それを抑える葵冬馬。

既にこっそり弁当に手を伸ばしていた一条風太に、それに対して思い切り羽交い絞めにしてガクガクと揺さぶる井上準。

ハゲ……じゃなくて準は、ラジオの旅に百代の脅威にあっているのだからその恐怖もハンパではない。

「にしても噂は本当だったようですね」

「わざわざ噂の確認なんかで邪魔に入ったのか」

「おや、すいませんね大神君。ですがやはり、交際しているのは本当のようですね」

「羨ましいだろ？　むしろ羨ましがれ」

「いえいえ、私にはユキがいますから」

確認を取るように宗介に話しかける冬馬に、むしろ自慢して語る宗介。

そんなどうでもいい会話を他所に、風太だけでなく小雪まで弁当箱に手を伸ばした。

「トーマー、食べていい～？」

「あの、ちょっと、榊原さん？　すいませんが葵さん、この方を止めていただければ……」

そんな小雪をなんとか抑えるメイドのヴィヴィ。

別に力づくでこられるから困っているというよりは、その無垢な視線で食べ物をおくれと訴えられるのがキツいようだ。

「うちのメイドが困ってるが」

「ユキ、あまり迷惑をかけてはいけませんよ」

「は～い」

冬馬が一言注意を促せば、それだけで小雪はヴィヴィから離れて帰ってきた。
そして未だに風太を羽交い絞めにしたままの準も、既に弁当は狙っていない風太へと話しかけた。

「ほら、若もああ言ってるだろ風太。頼むから自重してくれ」

「美味そうな飯だからつい手が伸びただけだぜ。普段はこんなこと無いぜ」

「わかったわかった。だから大人しく離れような～」

「うぉぉ準、引っ張るなって引っ張るなって」

ずるずると準に引きずられて、風太は屋上からフェードアウトしていった。
そんな風太と準を見送って、何故かその場に残る冬馬と小雪。

「せっかく二人で弁当を食べようというのに邪魔するつもりかー？」

「そんなつもりは無かったんですけどねぇ……」

「じゃあ何のつもりだったんだ」

「それは……秘密です。強いて言うなら、私達も密会みたいなものでしょうか」

「そらすまなかったな。だが、今は俺と百代のラブラブ弁当ゾーンだ。とっとと消えろ」

「怖い怖い。蹴られる前に退散しましょう。ユキ、行きますよ」

「うん。わかった～！」

終始心の内を悟らせること無く、冬馬は小雪と共に屋上を去っていった。

そうしてヴィヴィがポツリと呟いた。

「一体何がしたかったんでしょう」

「知らん。ヴィヴィは同じクラスなんだからそっちの面倒は任せる」

「わかりました」

「さぁ邪魔者はいないぞ～。宗介、弁当を食べよう」

「勿論だぜ百代！　ヴィヴィの作った弁当は美味いぞ！」

「……とりあえず、私の弁当はそのうちな」

「そこでテンション下げんでも……お？」

いつの間にかその場からヴィヴィは消えていて、屋上には二人きりになっていた。

ニヤリと笑顔を浮かべた宗介は、勝手にヴィヴィの意思を読み取ったことにした。

「どうしたんだ？」

「いやいやなんでもない。さっさと弁当食っちまおうぜ」

すぐさま笑顔を消して、早く弁当を食べ終えようとどんどん箸を進める宗介。

それを少しだけ疑問に思いつつも百代も箸を進めていく。

一体宗介が何を考えたのか、弁当を食べた後に何をする気なのか。

むしろナニをする気なのだろうが……隠す気が無いとはいえ羽目をはずしすぎである。

はてさて、数分後には彼ら二人は何をしているのだろうか。

「計画通り……フフフ」

どこかの扉の陰で、一人のメイドが笑ったとか笑わなかったとか。

第二十八話　もしかして平穏（後書き）

あとがき

＞（＾ｏ＾）＜　とうまとうまー
（　）
／／

・・三　　＞（＾ｏ＾）＜　とうまー
三　　（　）
三　　／／

・　　＞（＾ｏ＾）＜　　三　ねーとうまー
（　）　　三
／／　　三

＼
（／ｏ＾）　とうま聞いてるの！？
（　／
／　く

第二十九話　いつもの事、いつもじゃない事（前書き）

ＳＳ編もよろしくぅ！

第二十九話　いつもの事、いつもじゃない事

場所は川神市内のとある部屋。
一条風太の住まい、彼の寝ているベッドの上。

「な、な、なんじゃこりゃ～～～～～！」

朝っぱらから彼がそんな悲鳴を上げるのには理由がある。
というのも周りを見れば一目瞭然なのであるが……

「焦げ臭い……そしてこの黒い煙は何！？」

『まさか火事か！？』と疑うほどに大量の黒い煙が、開いていたドアから入り込み、風太の寝室中に充満していたのだ。
黒い煙を辿ってドタドタと廊下を走り、風太がキッチンへと着いた時。
そこには未だにキッチンに向かっているツインテール娘の後ろ姿があった。
あたふた慌てているその姿は、彼女が偶然履いていたミニスカートがひらひらと揺れて色々と可愛らしいのだが……

「げ……」

漏らした声は可愛らしいというよりは、かなり切迫した感じの声だ

った。
ぎくりと背を震わせて、ぎぎぎと壊れたブリキのように風太の方を振り向く。
振り向いた板垣天使の顔にヤバイヤバイと書いてあるのを見て、とりあえず風太はこの惨状について意見を言うことにした。
「魚を焼くなら換気扇を回せよぅ！　というか焦がしただろこれ！」
「ってそっちツッコムのかよ！　魚じゃねーし！」
「じゃあ何だってのさ……まぁ、確かに魚の匂いはしないけどさ」
くんくんと犬のように鼻を鳴らして匂いを嗅ぎ、風太は天使にそれを尋ねた。
そうして尋ねられ、天使は顔を紅潮させた。
余程言いにくいのだろうが、風太がジーッと見つめ続けるのに耐え切れなくなった天使がついに口を開いた。
「その……料理で失敗して……」
「お、わかったぜ！　なんとか誤魔化そうとしたんだな！　俺も前にあったから――」
「うっせぇ！」
「ぐほぁ！　あっちい！　あっちゃっちゃっちゃっちゃい！」
大量に黒いナニカが乗った熱々のフライパンを天使が思い切り風太に投げた。
それが頭部、おでこに直撃して中身が全身に降りかかった。

床を転げまわって叫びまくる風太に一瞬唖然としていた天使だが、
自分が咄嗟に何をやったかに気付いてすぐに駆け寄った。

消火器を持って。

「風太ー！　大丈夫かー！」

「今現在進行形で大丈夫じゃなくなってるー！　ぎゃあー！」

5月8日　金曜日　朝

「いや、お前災難だったな……」

「へ……何てこと無いさ……スキンシップと思えば何のそのだぜ」

登校前の風太と準。
ユキは現在準備中で、冬馬も冬馬で色々と準備することがあるのだとか。
そのため現在は風太と準は、二人が来るまで待機中。

「結局あの有様は何だったんだ？」

「いや昨日さ？　天使と一緒にゲームしたまま寝ちまったみたいで」
「ほうほう？」
「で、気を利かせて朝飯を作ったらしいんだが」
「アイツそこまで料理下手なのか」
「いや、ちょっと見栄を張って魚を焼こうとしたら、その魚がくさやだったらしい。フライパンの方はくさやを何とかしようとしてるうちに焦がしたとか」
そこまで言い切って、風太は軽い火傷を負った手をさする。
天使もとんでもないドジをやらかしたものである。何か慌てる理由でもあったのだろうか。
「あー。そりゃ悲しい事件だな。どっちにとっても」
「へ？　どういうことだ？」
「いやいや、気付かんならいいのよ」
南無、と言いながら右手をあげる準。
いろいろな意味での経験が豊富な彼には、何が起きたかの大抵の予想が付いていた。
まとめると、『風太の事だ。どうせゲームしたまま眠っちまったんだろう。それで寝たままベッドに移動したんだろう。多分、一緒にゲームしてた天使も一緒に連れて』という事である。
一条風太の習慣はとてもよく出来ている。

いくら遅くまで何かをやっていても、一定の時間に寝ようと思っていればいつでも寝ることができる。
そして更に、その眠りについた場所がどこであってもベッドまで帰ることができるのだ。

――ただ問題は、周りにいる人間まで一緒に連れて行こうとする事だろうか。

それについては中学生の勉強付けの日々が密接に関係しているので、問題は冬馬たちにあるとでも言えるのだが。
そんなことは予想していなかったのだから、それを責めても仕方ないだろう。

「世知辛いねぇ……」

「準、爺臭いぞ」

「うっせえ」

準は達観したような顔で思った。
一体こいつ、いつになったら自分に向けられている好意に気付くのだろうかと。
しかし同時にこうも思った。
こいつは多分、一端誰かを好きだと決めたら他の相手から好意を向けられても気付けないんだろう。まっすぐなだけに。
それを色々とフォローする身にもなってくれと、準はそう思うのだった。

＝＝＝

いつも以上に騒がしい川神学園のグラウンド。
そこには、大勢の生徒に追われている川神百代の姿があった。

「おー！　大和！　我が最愛の弟よ！」

「うわぁ、嫌な予感しかしない」

「気をつけろ。こういう時のモモ先輩の頼みはたいてい金だぞ」

そんな百代に話しかけられる直江大和に、偶然一緒にいた風間翔一。
もう何が来るのかわかっている彼らは何歩か後ずさったのだが、そんな物には何の効果も無かった。

「今日も可愛いなぁ弟、よーしよし」

そう言って近づいてきた百代が、大和の頭を撫でる。
そして唐突に言った。

「ということで、金貸してくれ」

その言葉を聴いた翔一は一目散に逃げ出した。
しかし大和は頭を抑えられていて逃げることが出来ない！

「どういうことだがさっぱり分からん。というか、後ろの人達は誰？」

「うん、私が借金をしている連中だ。少しでも返済期限が遅れると、どこまでも追跡してくる」

悪びれも無くそんな事を言った百代の言葉に、大和の頬がヒクリと動いた。

大和がチラリと百代の後ろを覗き見てみれば、確かに怒っている彼女らの姿があった。

誰もが皆、怒りを露にして金を返せといっている。

「見ろこの金の亡者達を。人間こうはなりたくない」

「うん。こういう人間って困ったものだよね」

「なー」

「姉さんの事だからね？」

まさにお前が言うなという状況だったが、大和はあえて皮肉った。

どの道通じていないのには変わりないが。

「こいつら全員ぶっ飛ばしてもいいけど、そうしたら二度と金貸してくれなくなるだろうしなぁ……」

「当たり前でしょ。ていうか姉さん」

「なんだ弟～」

「大神は？　借りればいいじゃないか。彼氏なんでしょ？」

「……あ～、それはな～」

大和が、つい最近に付き合い始めて大神宗介のことを話題に出せば、ものすごく言いにくそうに百代が目線を逸らす。
なにか嫌な予感がした大和はそのことについて詳しく尋ねようとしたのだが……

「ちょっと姉さん、一体何を……」

「それは後で話す！　今は頼むぞ弟！」

「……金は貸さないからね。話はつけるけど」

「よしよし、それでいい」

頷く百代に借金取り達の前に突き出され、大和はやれやれとため息をついた。
そうして借金取りの生徒たち全員を見渡すようにして……校舎の屋上からこっちを見ている視線に気付いた。

「あれは……」

そこには、片手を上げて『悪いな』と口を動かす宗介がいた。
物凄くすまなそうな顔をしている分、本当に何かがあったのだろうと容易に納得できる。
かといって、内容を聞かないという選択肢は大和の中には無いのだが。

「えー皆さん、ちょっといいですか？」

とりあえずそっちを聞きだすのは後にしようと、大和は借金取りた

ちの方へと歩み寄った。

それからしばらく。
多摩川の川沿いへと、大和は百代を追いかけやってきた。
そこで彼が見たものとは。

「……何してるのさ、お二人さん」

「おろ？」

「んむ？」

「はぁ……こっちは頑張ってたっていうのに」

そこにいたのは百代と宗介の二人
その二人は河原に座り、宗介が手に持っている袋からクッキーを取り出して仲良く食べていた。
色々と奮闘していた大和がぼやくのも当然である。

「そりゃすまんかった。食うか？」

「貰うよ」

宗介に袋を差し出され、クッキーを受け取る大和。
そしてそのまま一口齧る。

「お、結構美味しいね。これってどこの？」

「うちのメイドが作った。芸達者だろ？」

「ふ～ん……」

若干感心しながらクッキーを食べ終えた大和は、百代たちと同じように河原へと腰を下ろす。

そうして百代へと借金についての報告を始めた。

「あの人たちからはなんとか一週間返済を遅らせたよ」

「おお、さすが弟」

「俺の信用がかかってるんだから、一週間後には確実に払ってもらうからね」

「よーっし。じゃあ賭場にでも行ってパーッと――」

「頼むからそれはやめろ！」

百代がそう言うなり宗介が叫んだ。

……大和がいる前でもなりふり構わず、かなり逼迫したような声だ。

「え～」

「え～じゃねえよいい加減にしろ！」

「地道に稼ぐというのは性に合わない」

「……そうかそうかそうですか。俺様のハイパー兵器で説得された

いってワケだな？」

そこまでの会話でいい加減にキレたのか。
目のハイライトが消えたかのような感じになった宗介が、突然に違う声色で喋り始めた。
どういう経緯があったのかわからない大和は、とりあえずこっそりと百代に聞いてみることにした。

「姉さん、一体何がやらかしたの？」

「やらかしたとは失礼な。毎日宗介から金を借りただけだ」

「……」

たったそれだけで全てを察したのか、大和は未だに一人で喋り続ける宗介をじっと見る。
何故か同士を見ているような、凄く気持ちが分るような、そんな気持ちで大和は思った。

『大神、ご愁傷様』と。

宗介と百代が壮絶な追いかけっこを始めようとしているのを横で見ながら、大和はクッキーをもう一枚手に取った。

＝＝＝

放課後、若者にも人気のある『ラ・チッタ・デッラ』にて。
そこには甘い物を買おうとやってきていたヴィヴィの姿があった。

「この前勧められたケーキ……あぁ、でもこっちも捨てがたいし……」

あっちへうろうろこっちへうろうろ。
さすがに女性だけあってかなり悩んでいる様子だ。
男であるなら全部食べればいいじゃないかと言うのだろうが……

「そんな事で甘い物食べ過ぎて体が崩れたら大変ですし……」

結局、ヴィヴィはケーキを買うことにした。
はぁとため息をつきながら通りを歩いていくヴィヴィ。
そうしてしばらく歩いていくと、見覚えのある体型の生徒が目に入った。

「あれは……」

川神市内のケーキ屋などで、ヴィヴィに会うたびそういった美味しいお店の情報をくれる生徒。
彼女にとってはとてもいい友人（情報提供者的な意味で）なので、とりあえず近づいて話しかけることにした。

「こんにちは」

「あ、どうもこんにちは」

手に持っている食べ物を食べるのを一旦やめて、熊飼満はヴィヴィに挨拶を返した。

クマちゃんが挨拶をしているのを聞いて、すぐ隣にいたバンダナの少年もヴィヴィのほうに振り返った。

「あれ、ヴィヴィさんじゃん」

「風間さんもこんにちは」

「おう、こんちは～」

風間とヴィヴィは前に川神院で会った事がある。
彼女に対して「さん」付けになってしまうのは……彼女の持つ雰囲気のせいだろうか。

「ヴィヴィアンさんも買い物に来たのかい？」

「そうなんです。熊飼さんにもらった情報はとても役立っていますわ」

「そう言われると僕も嬉しいなぁ」

結構前、この二人は買い物中に出会ったらしい。
それで美味しいものがいっぱいで悩んでいるところにクマちゃんが来てお勧めの店を紹介したとか。

「お二人も買い物ですか？」

「おう！　クマちゃんに美味しい店を教えてもらおうと思ってよ！」

「お勧めのお店はまだたっくさんあるからね」

「まぁ、楽しそうでございますね」

全員一緒にニコニコと笑って会話をする。

そうしてしばらくクマちゃんに美味しいお店を教えてもらい、ヴィヴィがそろそろ失礼しようかとした時。

「そうだ。一緒に店をまわらないか？」

「え？　よろしいんですか？」

「当然！　それに皆で一緒に食べた方が美味そうだしな！」

「僕もいいと思うよ。この前貰ったクッキーは美味しかったしね」

食通のクマちゃんを満足させる程には、ヴィヴィのクッキーは美味しいらしい。

「それでは、ご一緒させていただきます」

「よっし！　それじゃあクマちゃん、次のお店にゴーだぜ！」

「うん、次のお店はね――」

新しくヴィヴィを加えた一行は、美味しい菓子を探して再び歩き始めた。

「あ、でもカロリー計算だけはしますからね」

「糖分控えめのお店も知ってるから大丈夫大丈夫」

彼女の唯一の懸念も何とかなりそうだ。

＝＝＝

さて、川神市の町外れ。

そこには、修行に励む板垣一家と一条風太、そして彼らの師匠役である釈迦堂刑部の姿があった。

「９８７……９８８……９８９……」

「風太よぉ、お前は別に修行しなくても強いだろうが」

「そういうわけにもいかないって。最近強いやつが多くてさ……っと」

両手で巨大な岩を持ちながらスクワットなんかしていた風太が、竜兵の問いに答えながら岩をおろした。

どうやら今日の鍛錬はコレで終わりらしい。

あくまで基礎の鍛錬であるので、この後は竜兵相手に殴り合いという名の模擬戦があるのだが。

そうして板垣一家の三姉妹をよそに模擬戦を行っていた彼らに、横

で見ていた釈迦堂が話しかける。

「ったく、お前らも素質はあるんだからもうちょいフェイントとかも使えればなぁ」

ただただ単純な殴り合いを続ける二人に、釈迦堂はふと漏らした。
二人とも武を習っている者からすれば勿体無いくらいの逸材であるのに、小細工なんて知らないとばかりにただ前身しかしないのだ。
それも確かに正解例の一つではあるが、何か言いたくなるのも仕方ないというものだ。

「そいつは無理だぜ釈迦堂さん。俺はまっすぐだし」

「俺には必要ない」

そして即答する風太と竜兵。
勿論そんな返事が返ってくることは釈迦堂とて承知ではある。
何せ今まで何回もやってきたやり取りなのだ。

「へへへ、知ってるさ。だったらそのまんまで頑張りきってみな」

「おう！」

「言われるまでも無い」

ベクトルは違うが互いに元気よく返事を返す。
そしてそのまま殴り合い（模擬戦）を続ける二人。

そして珍しいことに、釈迦堂が二人に歩み寄りながら声をかけた。
何かを考えているような顔で笑いながら、言ったことは更に驚愕を生む物だった。

「ちょいとおじさんも混ぜてもらおうか」

「何？」

「え～と、え？」

「はぁ！？」

「Ｚｚｚ……」

「急にどうしてそんな事を……？」

模擬戦中の二人どころか、周りで修行していた板垣一家全員が驚愕しながらそちらを振り向いた。
今までは特に何もせずに指示したり見ているだけだったはずなのに、急に模擬線に混ぜろとは。
誰もその意図を図ることができずにポカンとしている。
そんな弟子達に対して釈迦堂は軽く答えることにした。

「何、ちょいとばかし懐かしい気配を最近感じてね……随分強くなってたみたいだし、少しおじさん心配になったのよ」

そう言って、ニィと笑みを浮かべる釈迦堂刑部。
彼の笑顔の中でも特に怪しくぎらつく眼。
その眼の奥には、闘争に猛る黒い炎がごうごうと燃え盛っていた。

第二十九話　いつもの事、いつもじゃない事（後書き）

あとがき

フラグもいっぱい、何もかもいっぱい。

そして作者はいっぱいいっぱい。

あ、上手い事言え（ｒｙ

第三十話　せんとうシーン（前書き）

ちょっと脳が湧いているのかもしれません。

第三十話　せんとうシーン

「ふと思ったんだが……」

日曜日の昼下がり、俺は自宅のリビングでくつろいでいた。
同じく俺の家に上がりこんでいた百代が、俺の呟きにこちらを振り向く。

「どうした？」

ソファーで寝転がりながらクッキーを食べている百代。
随分とリラックスしているのだろう、シャツにスカートという格好で無防備な姿を俺に晒している。
具体的に言うなら、あともうちょっとスカートが捲り上がれば下着が見えそうな……
しかし、向かい合うソファーのもう片方に座る俺からの視線に気付いたのか、百代はギリギリのところでそれを直してしまった。
……惜しいな。

「……おい、どこを見ている」

「百代の太ももです」

決して下着ではないことを了解してもらいたい。
そうしてもらえれば俺がいかに紳士的かということもわかってもらえる筈だ。

百代の太ももは鍛えてあるし足もスラッと長いから素晴らしい景観と感触なのだ。
感触については見てるだけじゃあ無理だが、見てるだけでも十分すぎるほど十分だと保証しよう。
まぁたっぷり触ったことがあるから言える事だが。

「まぁいいじゃないか。今更どれだけ見たところで減るものじゃない」

「……まぁいいか。それで何なんだ？」

「ああ。ふと気付いたんだがな」

百代から許可を貰い、改めて太ももを眺める。
そして紅茶のカップをテーブルに置きつつ口を開く。

「お前、そんだけいい乳しといて肩凝りはしないのか？」

「……おい、表に出ろ」

「すまんすまん。乳という言い方はやめよう……胸とおっぱいはどっちがいい？」

「せいっ！」

ごきりという音と共に、百代の蹴りを受けた俺の首が横に曲がる。
ああいや、ダメージはそんなに無いぞ。ただ首がこってたから思い切り横にして音が鳴っただけだから。
というかいきなり蹴ってくれるな。本気じゃないにしろ俺以外じゃ危険だから。

「ともかく、肩はこらんのかという話だ」

怒りを静めた百代をソファに戻してもう一度問う。
一応聞いておかねばなるまい。特にその大きな胸を見ていると言わずにはいられない。
そして俺は考えたらすぐに行動したくなるタイプだ。
我慢もするが、我慢する理由は欠片も無いからな。

「あのな。私は鍛えてるから問題ないってわからんのか？」

「わからんな。いくら鍛えていても疲れは溜まるはずだ。今日の俺は気分がいいから肩もみくらいはしてやろう」

「それが目的か」

ソファに座ったままで身構える百代。
そこまで警戒しなくてもいいだろうに。

「ただ俺はこのゴールドフィンガーで百代の肩を蕩けさして、ついでに百代も蕩けさせようと思っただけなのにな」

「そういう事するから警戒するんだろ」

両手をワキワキと動かしながら俺は言った。
男なら色々な意味で必須のスキルだろうと思うのだが、百代からは素早いツッコミが入った。
やれやれだぜ、と思いながら俺は顔を若干赤くした百代に背を向けて紅茶のお変わりをしに向かう。

「ふ……随分と喜んでいたのは誰だったかナァッ！？」

背後から俺の頭部へと何かが直撃っ！

前方につんのめるようにして倒れ掛かった俺は、頭に当たったものを空中でキャッチしながら百代を振り返る。

手の中には俺の頭部にぶつかって割れたクッキーの皿。

そして振り返った俺の前には、顔を見事に赤くした百代がいた。

「ははは、おい百代。本気で投げただろ今」

「ははははは……まだまだ本気でやってやるさ」

冗談が通じない……いやま、こうやって楽しむのもなかなか乙なものだ。

本気で放たれる百代の拳を真っ向から受け止め、そのままソファーに投げ飛ばす。

殺伐とした雰囲気っつってもまぁこんなもんだ。

「というわけでいただきまーす」

「わっ！　おい！」

俺は百代を転がしたソファーへと華々しくダイブを決めた。

「はぶしゃっ！」

――そして空中で蹴りを受けてきりもみ回転しつつ壁に張り付いた。

全く、ここはそのまま流れに身を任せて～ってとこだろうに。

ツンデレってのは扱いが難しいね、どうも。

なんかで気を紛らわせた後でもう一回チャレンジしてみますか。
さーて、なんか百代をリラックスさせるいい方法はないものか。

＝＝＝

俺は思うんだ。
『力』を持ったからには、力を隠して平凡な生活をするよりも、その力を生かして劇的で意義のある日常を送るべきだって。
この前に準と見たクモ男の映画でも、『大いなる力には、大いなる責任が伴う』って言ってたし。
多分これは間違いじゃあないと思うんだけど。

「おぉー、ここがその銭湯かー」

「やったー！　とうちゃーく！」

「ユキ、余り騒がないようにしてくださいね」

「ひゃっほー！　天然モノの温泉だー！」

やっぱたまの休みくらいは思いっきり遊んだってバチは当たらないよね！
正義の味方も今日は休業だ。今日はみんなで思いっきり楽しむぞう！

そんな事を思いながらやってきた咲之湯とかいう銭湯。
色々忙しかったせいでもう夕方なっちまったけど、とりあえずくつろげるだけくつろごう。

「でもユキが一人で大丈夫なのか？　凄く心配なんだけど」

こんな事なら天とか辰姉とか亜巳姉とかつれてくりゃ良かったんじゃなかろうか。
そんなに人がいないから他人に迷惑かけるような事もない……事もないだろうな。やっぱ。
だってユキだし。風呂の壁突き破って突入してきたりはしないだろうけど。
こういう時に偶然ストッパーとなりうる誰かが女湯側に入ってるとか、ありえるのかな～。

「あー。考えても仕方ないかー」

「つーかお前はさっきから何を唸ってるんだよ」

湯船に浸かって頭を抱えていたせいか、横でだんまりと温泉を楽しんでいた準に話しかけられた。
まぁ確かに、いつもの俺ならはしゃいでるだろうしな。

「ユキが楽しめてるかってのと他の人に迷惑かけてやしないだろうかと」

「ああ、板ばさみってわけだな」

やたら納得したといった顔で準が頷いた。

まぁユキだし。準もそこらへんはよくわかってるしな。
ところで準の頭を見てたら無性にタコ焼きが食べたくなってきた。
なんでだろう。

「それにしても風太？」

「なんだよ冬馬ー」

「……最近、随分と傷が増えましたね」

む、そりゃ最近修行の量も増やしてるし、竜兵とバトったりしてるし。
でもまだ本気の辰姉に腕相撲で勝てないのはなんでなんだろう。やっぱ辰姉が天才だからかね。
傷が増えたのはそのために頑張ったからで、仕方ないことでもあるんだけど。

「傷は男の勲章だか懸賞だか言うじゃないか」

「懸賞は違いますけどね」

「どっちでもいい！　とにかく、傷なんてもんは増える時には増えるんだよ」

「おい風太、なんだその傷が増殖するみたいな言い方」

「準は黙ってろ！」

そんな恥ずかしいことにツッコミ入れるなよ間違えたんだよ！
どうせ俺はバカだよチキショウめ。

……まぁともかく俺が言いたいことは、アレだ。
傷が増えたことは俺にとっちゃそこまで大きなことじゃあないというか、気にすることでもないし、むしろカッコイイと褒めてくれないかという。
ああ駄目だ。俺ってあんまり言葉知らないからな。

「俺の力溢れるボディはともかくとしてだ。冬馬の体は細すぎるぞ！　準もそう思うだろ？」

「まぁ俺たちが若に荒事はさせないからいいが、細いか細くないかで言えば……細いな」

「ははは……私は頭脳労働が主ですから」

そんな事言って笑う冬馬だけど、やっぱりもっと肉を食ったほうがいいと思う。
俺と準の前にいると、なんかそーたいてきにもっと小さく見えるし。準も俺も体を鍛えてるから、普通に比べると大きいほうだからな……かといって無理に体を鍛えても体に悪いだろうし。ジョギングあたりから薦めた方がいいかもしれない。

――むっ！　誰かが入ってくる気配！

「ったく混浴さえあればここはパーフェクトなんだけどな。もっとこう、川神ならそれくらいあってもいいだろうに」

「なんだあのアホは」

「いや風太、お前が言うな」

なんだと準、それって暗に俺がアホだと申すか！？
まぁそうだけどはっきり言わんでもいいじゃないか……はっきりじゃなくて暗にだったな。すまん。
ところで最近凄く見たことのある顔だな。
確か名前は……

「おやおや大神くんですか。奇遇ですねぇ」

「げ。なんでお前らがここにいるんだよ」

そうそう、男らしく全身丸出しにして手ぬぐいを肩にかけて歩いている奴。
名前は大神宗介だったな。あのモモ先輩と付き合ってるだかで屋上で弁当食ってたっけ。
ある意味あの人と付き合えるという事に関してだけは尊敬してやろう。あの人と付き合えるとかすげえよな。
かけ湯を済ませて湯船へと入った大神に、俺たちは話しかけることにした。

「ところで、君は一人でここに？」

「いや、女湯の方にモモとヴィヴィが入ってる。そっちはいつも一緒にいる白いのも連れてきたのか？」

「ユキの事だな。お前の言うとおりだよ」

「……なんかさっきよりも更に女湯が心配になってきた」

なんかこう、ケミストリーだぜ！みたいな意味で。
ヴィヴィは俺たちのクラスに入ってきたコイツのメイドだったから、

あっちには相当カオスなメンバーが集まってることになる。
……う～む。他の客に迷惑かからないといいけど。銭湯ってのはみんなで安らぐためにあるからな。

「風太、風呂大好きだからな。まぁモモ先輩も公共の場で変なことは……いや、するかも知れんが。ユキだって多分自重くらいする……しないかもしれないが。多分大丈夫だって」

「オォイ準！　なんか投げ槍になってるよな！」

「ハハハ！　おいおい……そんな事言うから俺まで心配になってきちまったじゃねえか！」

「お前も！？」

なんてこった。オーカミはモモ先輩のストッパーなんだからしっかりしてくれよ。
うむむ。というか、あっちでは一体何が起きてるんだろうな。
なんかすごく気になってきた。
だからって覗きはやらないぞ。命が足りないし、どうせ覗くなら正面から堂々とがモットーだからな。

「でも誘われたら行くんですよね」

「冬馬ー、それは忘れてくれよー！」

「あはは。ユキが楽しくしているかどうか、私も心配ですからね。ちょっとした気まぐれですよ」

気まぐれで俺を弄らないでくれってーの！

まったく、冬馬にも困ったもんだぜ。
……今度、板垣のみんなも連れてこよう。ここのお湯はいい。うん。
覗きはしないけどさ。いくら好きな人がいてもさ。

そんなこんなで俺達はしばらくの間、オーカミと話すことにした。
ユキが一人なら可哀想だからさっさと出て合流しようかと思ってたけど、そうでもなさそうだしな。
もうちょっとだけ、ゆっくりしていこう。

＝＝＝

「ふぅ……」

体を綺麗に洗い流した私は、手桶を置いて湯船へと足を入れた。
少々熱いが、これくらいならいつもとたいして変わらないだろう。
長い髪を団子にして頭の上で纏め、私はそのままゆっくりと肩まで湯に浸かる。

体の芯まで染み込むような湯の心地よさに目を閉じる。
確かここのお湯は地下の温泉からそのまま汲み上げていると聞く。
私がここの銭湯が好きな理由の一つに、体を疲れを取る効果が他の銭湯に比べて高いということがある。
それに、壁にある昔ながらの富士の絵というのもいい。
別に富士の絵が好きと言う訳ではないが、昔ながらの雰囲気が実家を思い起こさせる。
あの学園は私にとって普通に日常を暮らす事ですら大変で、おまけ

に同じクラスに化け物クラスの人間がいるのだから余計に気苦労がかかる。
しかもその化け物クラス、その力の象徴とも言えるものを常に持ち歩いているのだ。
いくら私でも、口汚くいい加減にしやがれとでも言いたくなってしまいそう。

「わーい！　お風呂お風呂ー！」

「……」

なんでしょう、この神聖な銭湯の空気をぶち壊すような能天気な声は。
私が入り口の方に目を向ければ、そこには真っ白な人がいた。
たぶんあの人は川神学園で見たことがある。
いつもハゲの人や褐色の人やバカの人と一緒にいる人。一応先輩だった気がする。
ただ、公共の風呂場でこのような態度は気に食わないが。

「ふんふふーん♪」

まぁ、一応はかけ湯もしてるし、マナーも全く知らないというわけでもないらしい。
しかし……あの体。
下半身を中心に随分と鍛えられていると見える。
筋肉のつき具合もバランスがよく、あれならおそらく見栄えもいい事だろう。
……その上あの胸は何だ。
全身が適度に鍛えられ、それでいて女性としての丸みや凹凸等を失っていないのはいい。

だが、あの胸は何なんだ。

跳ねるように歩いて蛇口の前まで進んだ彼女。ああ胸が強調されている。

そうしてお湯を手桶に注いで体に掛けた彼女。ああ胸が強調されている。

立ち上がってこちらに向かってきている彼女。ああ胸が強調されている。

くっ……だからどうしてそんなに胸を強調しているのです。湯を体に掛けたせいで灯りの光を反射して、さらに色っぽい雰囲気が増しているじゃないですか。

胸のところで持っている手ぬぐいがその部分だけ大きく突き出しているし、湯船に浸かるべく手ぬぐいを置いた今では、その湯で濡れた大きな胸を揺らしながら歩いているではありませんか。

破廉恥な！

「ん～。気持ちいいな～」

「……ふ」

「？」

おっと。思わず笑みを浮かべたのに気付かれましたか？

ってどうして湯船に胸が浮かぶんですか腹が立ちますね。二つの浮き袋ですねそうなんですね。

いえ、腹が立つ理由なんてこれっぽっちも無いんですが。

しかしです。ウェストは私のほうが勝っているのは確認しました。

素のお腹を晒して湯船に浸かる際にはっきりと。

いくら私がそういった事に興味が無いとはいえ、女性同士では気に

しますからね。男性なんて知ったこっちゃない。同姓愛主義者というわけでもないですが。そう、対抗心のようなものですね。
ええ、ですから興味は無いですとも。
ふ。よし。もう大丈夫だ。この人は気にしないでゆっくりと温まろう。

「おー。あいつが選ぶだけあっていいトコじゃないか」

「はい。事前に情報を調べたところ、ここの地下に天然の温泉源があるそうですよ」

な、ななな。
なんですかアレは。
いきなり開いた入り口の戸の方に目を向けてみれば何なんですかアレは。
こっちの方が白い先輩よりも背が高くてナイスバディィに見えるじゃないですか。
おまけに片方はあの川神百代さんで、もう片方は金髪の……確か最近転校してきた美人メイドじゃなかったっけ。
どっちもすごい美人でナイスバディィ。私なんか比べ物にならないほどに……ッ！

――思わず、決して触れまいと思っていた自分の胸に意識を向けてしまった。

なんとまぁ、彼女らに比べて自分の胸の平坦な事か。
運動するにはとても便利だが、下着が要らないほどにまっ平らなのはどうなのだろう。実家で言われて以来、さらしは一応巻いているのだが。
これが格差というものなのでしょうか。

いえ！　私はまだ高校一年生、まだまだ全てにおいて成長の余地があるはずです。
あのクラスメイト連中の成長具合を見ていると非常に不安なのですが、きっとなんとか……。

「くぅ……っあの、百代様？」

「むふふ～なんだ～？」

って何ですかこの声。

「すいません、私は別にそういうのはですね」

「安心しろ、私に任せておけ」

「いえ、そのっ、～～～～～～～っ、くぅぅぅぅっ！！」

って神聖なるお風呂場で何をやらかしとりますか！
カッと目を開いて、私は声のするほうを見た。
そこには！　全身を百代さんに洗われて悶える金髪さんの姿が！
ってアレ？　別に普通の光景じゃないか。友人であるならばあれくらいはおふざけの範疇だろう。
何を勘違いしてたんだ私は。

「ねーねー」

「はい？」

声をかけられ顔を上げれば、神秘的な白い肌を晒してこちらを見る白い先輩。

さすがに名前までは知らないから呼びようがないが、一体私に何の用だというのだろう。

「そんなに自分の胸を睨んでどうしたの～？」

「はうぅっ！」

ピンポイントですか。ピンポイントでそこ言ってきますか。

うぅ、何とかして胸以外のことを考えようと思っていたのに。自然とそっちを見てしまっていたなんて。

ですが仕方ありませんよ。そんなの。気にするなって言う方が無理なんです。

チラリと、すぐそこにある他人の胸に目を向ける。

すぐ隣に座ってこっちに身を乗り出している白い人の胸、真っ白な肌とその大きさと見るからに柔らかそうなそれはまさに大きなマシュマロのよう。

既に湯船に入って金髪の人となにやら楽しげに話している百代さんの胸、健康的で瑞々しいな肌がお湯で火照ってやたらと色っぽく見える。そういう趣味がない私でもそう見える。

そして何故だか蕩けたような表情で湯船に浸かっている金髪の人の胸、さすが外国人だけあってボリュームがすごい。湯に透けて見える体のラインもこう、ボンキュッボンみたいな感じで。

ああ、彼女達に比べてなんと私の体の貧弱なことか。主に外見的な意味で。

身長は自分では十分なほどに成長しているというのに、悲しくなるほど平坦な胸。実家では双子の弟にまな板と呼ばれるたびに木刀でシバいていたっけ。

「ははは、なんでもありません……」

「？」

もう駄目だ。安息の地は苦行の場へと成り果てた。
出よう、すぐ出よう。そして日課のムサシノ牛乳を飲もう。
うわーん！　もうこの銭湯来ないからなこんちくしょー！

「おー。お前はいつぞやの白いのじゃないか」

「あらあら。同じクラスの小雪さん。ということは他の方も男湯にいるんですか？」

「うん。トーマたちも一緒だよ～」

「……う～ん。宗介が他のと仲良くやれるのかどうか」

「大丈夫ですよ。あの方はお風呂大好きですから」

後ろで聞こえる話し声を聞く限りでは、男湯の方も大変なことになっているようだ。
まぁ正直知ったことではないのだが……一般のお客さんがいないことを祈ろう。

＝＝＝

あいつらが上がった後。
しばらくのんびりと湯船に浸かった後で、俺は上がることにした。
まぁ、いくらなんでも一人でいるってのもアレだし。百代を待たすのも悪いしな。
タオルを巻いた腰に手を当て牛乳瓶を口につけ、ぐーっと飲んで一息つく。

「ぷはぁ～。うむ！　やはり風呂上りのコレは格別だ」

思わず呟き、何度も頷く。
風呂上りに一瓶の牛乳を飲む、誰が考えたのかは知らんが褒めてやりたい発想だ。
一瓶飲み干した俺はそれをゴミ箱に入れて浴衣へと着替えることにした。
藍色の浴衣に袖を通して、今度はコーヒー牛乳を買って番台に金を払って外に出た。
既に外は十分に暖かいし、湯冷めで風邪を引くなんてアホでもないしな。

「……今日は雲一つない快晴か」

夕暮れ時の薄暗い空に、無数の星が輝いている。
黄金色の月の方は今日は綺麗な三日月のようだ。
時期はずれかも知れんが、帰ったら月を見ながら宴をしてもいいかもしれない。川神水でも使えば文句はないだろう。
そんなこんなで俺がコーヒー牛乳を飲みつつ待っていると、１０分くらい経ってからだろうか、百代たちが姿を現した。

「待たせたか？」

「いいや、こっちもちょうど来た所だ」

振り向けば、同じく浴衣姿の百代とヴィヴィ。
ああ、似合ってるじゃないか。ちょっと考え込んで選んだだけあったな。
もちろん黒髪美人な百代だけじゃなくて根っこから外国人のヴィヴィも似合ってるぞ。

「さ、帰ろうぜ。のんびり帰ってもちょうど晩飯時だろうさ」

「ふふっ、腕によりをかけて食事を作らせていただきますね」

「ああ、頼むぜヴィヴィ。それで百代？」

「ん？　なんだ？」

早くも夕飯のことに考えを向けるヴィヴィから、百代の方へと顔を向けて話しかける。
奇しくも、腕を組んで空を見上げている姿はさっきの俺みたいだった。

「いいとこだろ、ここ？」

「そうだな……いい所だったぞ。昔じじいに連れて行かれた山に似た空気だった」

「おい、そりゃいいとこって言えるのか？」

「まぁ似てただけで全然違うからな～。あっちは息が詰まったが、こっちはのびのびと休めたし」

「そうかい」

まぁ、お前が良いって言うならいいんだけどさ。
紹介した俺としては駄目だったっていわれるのが一番辛いわけだし。

「お前のメイドがなかなか弄りがいがあったのも良かったしな」

「なんのこっちゃ？」

「気にするな。こっちの話だ」

……まぁいい。百代の機嫌が随分と良くなったってだけで俺には十分だ。
まだほんのりと明るい夕暮れの道を百代たちと歩き始めた俺は、そんな事を思いつつ残っていたコーヒー牛乳を飲み干した。

第三十話　せんとうシーン（後書き）

あとがき

中盤の風呂に入っていた不幸な女子生徒Ａはまた出てきます。
背もそれほど高くなく、ぺったんこな子です。

というか書いてて思ったんだけど何なんだこのカオス。

第三十一話　加入せしマル＆マル（前書き）

次あたりは何かしらバトルが書きたい。
書きたいんだあああああ！

第三十一話　加入せしマル＆マル

6月8日　月曜日

大神宗介とヴィヴィアン・バゼールが川神学園に転校してきて1ヶ月と少しが経った。
彼らも随分と学校生活というものに馴染み、特に宗介の場合はクラスメイトとも気軽に楽しく話せるくらいにまで溶け込んだ。
元々がツンツンしてだけに、これはかなりの変化ともいえる。
前日の日曜日など、クラスメイト数人とゲームセンターに行ったりなどして現在の日常を満喫していたほどである。

そんないつも通りとなった月曜日、授業中のことである。
みんなが夏服になって露出が増えたり、みんながやたらと色恋話をやってたり、体育祭が水上体育祭に決まったり。いよいよ夏へと移り変わるかという一日の始まりだった。
宗介は授業に集中するでもなく、居眠りをするでもなく、ただノートに落書きというくだらな過ぎる遊びに扮していたわけだが、グラウンドの方から何やら音が聞こえてきた。
それも、彼の意識をはっきり覚醒させるような戦いの音が。
一体なんだとクラス中がざわめいて担任の小島梅子に怒られることとなるが、それ以上に皆グラウンドが気になるようだ。
どうやら小島自身も気にはなっているようで、多少ならばと見物の許可を出した。

S組の転入生が戦っているらしい。

ヴィヴィにあとから報告させてもいいと宗介は思ったが、みんな見ているしここは勢いに従ってみることにした。
どんなバトルスタイルか若干気になるし、その転校生がどういった人物なのかも気になる。
……何故だろうか、浮気したわけではないのに、彼の首の後ろにぞわりと悪寒が走った。
若干の躊躇いを覚えつつ宗介がグラウンドへと目を向けると、そこでは二人の女性が火花を散らしていた。

「あっちのメイドも確か軍人崩れってヴィヴィが言ってたし、軍人同士でバトってるようなもんか？」

グラウンドで決闘を行っていたのは、S組にいる九鬼英雄の従者である忍足あずみと、転入生であるマルギッテ・エーベルバッハ。
宗介はマルギッテの名前を知らないが、クラス内でクリスがマルさんだーとか言っていたのでそんな感じの名前だと補完した。
ちなみに彼がマルサンと聞いて一番初めに思ったことは、朝のみそ汁に使った味噌の事だったらしい。
そんな無礼なことを考えていた宗介を他所に、決闘は引き分けという形で決着がついた。

そうして決闘が終わり、F組の中はその転入生の事で盛り上がっていた。
しかし話題となっているS組の転入生だが、どうやらマルギッテだけではなくもう一人いるそうな。

「もう一人？」

「うん。私の家の執事だ」

おいおいクリスの家は自重を知らんのかと宗介はツッコミかけて、自分も大概だったと思い返す。
自問自答を適当に切り上げて、宗介はクリスに問いかけた。

「名前は？」

「マルコだ」

「マルさんとマルコか。・・・・・ウケ狙いか？」

「いやいやいやいや、それは無いって」

聞いてすぐ思い当たったことを口に出し、反応を期待するかのように師岡卓也の方を向き、すぐにツッコミを入れられた。
この大神宗介、正直言ってギャグのセンスは皆無である。
本人が面白いと思っているから困ったものだが、最近は他人の反応を気にするようになってそれを自覚し始めてきたとか何とか。
まぁこんな無駄話はともかく。

「そいつは決闘しないのか？　ノリならするだろ？　というか男ならやるだろ？」

「確かになぁ……前に見た時はモモ先輩に殴られても大丈夫そうだったし、戦えないってわけじゃねぇんだろ？」

宗介とガクトが思いのほか意見の一致を見せてクリスに聞く。
この二人、ちょっと前までそんなに仲は良くなかったはずなのだが（宗介がワン子に言い散らした一件で）。
一体何が二人を仲直りさせたのやら。
そんな二人の問いに、クリスは腕を組んでゆっくりと答えを返した。

「マルコはそういうのはな……うん。マルコは戦いが好きじゃないんだ。訓練ではよく見てもらったてたけど」

「ふ～ん……実際には見たこと無いけど、強いのか？」

「ああ！　マルさんにだって引けはとらない強さだぞ」

接近戦ならマルさんのほうが強いけどな、と続けるクリスをよそに他の者は考える。

風間ファミリーの面々からすれば、『モモ先輩に顔を殴られてるにもかかわらず平然としていた』という印象が大きいマルコであるが、あの時に山が動いていたりしたのはまた何か百代がやったのだと思っている。

そして今グラウンドで行われた戦いを見る限りでは、マルギッテの実力はとてもじゃないが百代には遠く及ばない。

彼らは、じゃあマルコはどれくらい強いんだろうと全く予想できなくなった。それともマルギッテがグラウンドで見せた実力が全てではないという見方が正しいのか……とにかく判断がつかないのである。

「あっ、そうだ。マルコはあやとりも得意だぞ」

「なんでそんな人があやとりを……いや、なんとなく予想はつくんだけどさ」

「東京タワーとか凄いんだ！　今度教えてもらう約束をしている」

「良かったねクリス」

「ああ！」

しらっと答えた京にクリスが笑顔で返事を返す。
その曇りの全く無い笑顔がヒジョーに眩しい。

「ドイツ人があやとりねぇ……不思議な時代になったもんだ」

「大丈夫だ大神、今は魔法少女が魔王になる時代だ。気にするな」

「それもそうだな」

アホな感想を漏らす宗介に、スグルが反応して随分すっとんだ意見で返す。
今日も平和な２－Ｆの日常だった。

＝＝＝

さて、その頃２－Ｓでは。

「ねぇねぇ、マシュマロ食べる？」

「いらん……む、引き分けか。あのメイドもなかなかやるな」

「あらあら、ならここにもう一人メイドが……」

「失せろ」

窓際の席でグラウンドを眺めるマルコを中心に、実に微妙な空気が広がっていた。
それを遠巻きに、心配そうに眺めるハゲが一人と笑って眺める色男が一名。

「若、な～んかまた一騒動起きそうな気がするぜ」

「大丈夫ですよ、ユキも大丈夫だと思っているから近寄ってるんでしょうし」

「だといいんだけどな……で、お前は何してるんだ風太？」

準が声をかけた風太は、英雄と一緒に窓からグラウンドを眺めていた。
英雄は自らの従者たるあずみと互角に戦うマルギッテを認め、風太は――

「またクラスのＮｏｔ制服率が増えたんだぜ」

微妙な顔をしてそんな風に愚痴っていた。
その視線はグラウンドから教室内の制服ではない面々にも移っている。
そんな風太の肩を近づいてきた準が叩いた。

「もう俺は諦めてる。このクラスには季節感は期待しねえ。Ｆクラスの委員長に癒してもらうってな」

「おぉ～」

「相変わらずハゲはロリコンじゃの」

「うるせぇよ！」

「お前ら、決闘終わったんだから授業の準備もしろよ？　……聞いてないか」

騒がしくなる教室内を見てため息を付きつつ、担任の宇佐美巨人が声を漏らす。

彼らとてS組なのだから言われずとも勝手に騒ぎが終息して授業に移るのだろうが、それでも言わなきゃならないのが教師である。

まぁS組の中でどれくらくいの者が彼のことをきちんと敬うべき教師として認識してるのかどうかはわからないが。

というかそんな人間かなり少ないだろうが。

そうして宇佐美の悲しきため息と共に授業が始まり、それも終わって何事も無く昼休みになった。

食堂に行く連中と弁当を食う連中でバラけて、各々が食事を済ませていく。

そんなS組の教室の中、とある４人と転校生の２人がそれぞれ集まって弁当を食べていた。

弁当を自作するのはそれなりに得意な風太が、準にも協力してもらって４人分の弁当を用意したようだ。

自分で飯を作れるというのはポイントになるとの思惑と、とにかく親しくなろうと趣味をあわせる意味合いがあるらしい。

今日の弁当は和風メインの幕の内弁当のようだ。

冬馬やユキにもなかなか好評を得ている。

「風太、また腕が上がったのではないですか？」

「そうか？」

そう冬馬に言われて風太は首を傾げて箸を進める。
こういうのは自分ではわからないものであるというが、彼もそうのようだ。

「美味しいよ～。前はもっとまずかったもん」

「――ありがとよ、ユキ」

でももうちょっとオブラートに包んだ言い方とか、なんか工夫して欲しい。
そんな風に心の中でほろりと涙を流して風太はユキに礼を言った。

「にしてもよぉ……」

「どうしたんですか準？」

卵焼きを口に運びながら準が呟いた。
その向かいに座ってお茶を飲んでいた冬馬がその呟きに対して尋ねる。
そんな準の視線は、冬馬の後ろにいる二人組みに向けられている。
何やら気になったのでユキと風太も食事をやめて準の方に顔を向けた。

「あれ、一体なんだと思う？」

「あれ、ですか？」

「「アレ？」」

クルリと後ろを振り返る冬馬とユキ、準の隣に座っていた風太はちょっと背伸びして同じ方向に目を向ける。
果たして彼らが見たものとは。

「うおぉすげえ！？」

「これは……見事なおせち料理ですね。時期があってませんけど」

「美味しそー！　食べていいかな？」

「いーや待て待て。許可取らなきゃダメだって」

それは、弁当というにはあまりにも大きすぎた。
大きく、ぶ厚く、重く、そして壮麗すぎた。それは、まさに重箱だった

「……いやいやいやなんだ今の！？」

思わず突っ込みを入れる準に気付き、こちらに背を向けていたマルギッテが振り向いた。

「私たちは食事中です。何か用ですか？」

「あー。いやな……」

「もしも食べたいというのなら分けてやるぞ。元々、私たちが食べるためのものではなかったのだからな」

振り向かれて言い淀む準へと、マルギッテの正面に座っていたマルコがそう告げた。
その言葉に対して冬馬がマルコに問いかける。

「おや、いいんですか？」

「あぁ」

マルコはむすっとした表情で重箱の中のおせちを睨みつけ、そんな表情のままで箸を動かしている。
一体全体どうして彼はそんな表情をしているのか。
だが、そういうときに限って空気を読まない男女が一組。

「お前良いヤツだな！」

「やったー！」

既に箸を伸ばして重箱の中身を掠め取っている二名。
さすがに失礼だと思った準が止めるまもなく、すぐに料理を口へと運んでしまう。
そんな二人を他所に、冬馬はマルコへとまた質問をした。

「なにかあったのですか？」

「……本当はクリスお嬢様に、私が日本料理を特訓した成果をお見せしたかったんだが、な。今日は友人と一緒に自分で作った弁当を食べるということらしい。ならば、私がしゃしゃりでるまくでは無いだろう」

やたら落ち込んだ声でマルコはそう言った。

そういえば自己紹介の時に、彼は自分のことをクリスの執事であると言っていた。
だからこそこれだけ落ち込んでいるのだろう。
しかし、それにしてはマルギッテの方は随分と平然としているようだ。

「せっかく作ったものを腐らせておくのももったいないと思い、私が共に食べようと提案しました」

「……まぁ、もったいないしな。二人も美味そうに食ってるし、ありがとよ」

「礼には及びません、作ったのはマルコですから」

つまりマルコが一人で先走って作り、マルギッテは関与していなかったらしい。
確かにそういったサプライズな用意をするような女性には見えないが、そんな風に見えないのはマルコだって同じである。
転校して早々、意外な素顔が見れたといったところか。

「ああそうだ、聞きたいことがあるんだが」

「ん？　なんだ？」

笑顔でおせちを食べる風太とユキ、更に薦められて冬馬と準もつまみ始めた後。
マルコの方から準たちに向かって口を開いた。

「そこの……一条だったか」

「ふぉむ？」

口に食べ物を突っ込みすぎた風太が顔を上げる。
返事をした時にほんのちょっぴり口の中から欠片が飛んで、マルギッテが嫌な顔をして遠ざかった。

「そういう姿を見たからこそ思うのだが、よくSクラスにいられるな。試験でも上位のものしかいられないと聞いているが」

「ふぉうはな？　ふぉふぇを――」

「はいはーい。風太は黙ってよーかー♪」

「もがが」

珍しく空気を読んだユキが、口に食べ物を詰めてハムスターのような顔になっている風太を押し留める。
いろいろな意味で迷惑というか、かなり汚いのでその判断は正解だろう。

そしてマルコが発した疑問。
どうしてこんなバカっぽい、というかお馬鹿な風太がS組にいられるのか。
その問いは、風太がS組にいられる一番の功労者である冬馬が答えることにした。

「彼は頭が悪いわけではありません。少しお茶目なだけですから」

「お茶目だと？」

「ええ。風太は試験前に集中して勉強を教えてあげればちゃんと高得点は取れますから。まぁ、少しだけお馬鹿かもしれませんけど」

さすがの冬馬も馬鹿という事だけは否定し切れなかったが、つまりはそういう事だ。

一条風太はバカだけど、頑張れば頑張るだけ成果が出せる程度のスペックは持ち合わせているということだ。

それでも成績がS組の最底辺スレスレを滑空しているのは、やっぱり本人がバカだからなのだろう。

「やる時はやる、と。つまりはそういう事か」

「はい。そうですね」

「地力が無ければそれもできないだろうしな。個性的というよりむしろ頭が足りないように見えたので言わせて貰っただけだ。あまり気にするなよ？」

「うぉぉい！　気にする！　気にするよ！　そういうお前はどうなんでい！」

やっと口の中の物を飲み込んだ風太がマルコに突っかかった。

一応気にはしているようだが、さすがに勉強方面で対立するのは分が悪い。

「私か？　だいたいマルギッテと同じだ。私たちは優秀である事を求められるからな。そうだろうマルギッテ？」

「当然です。私たちは優秀であるべきだ。年上としても、軍人としても」

「まぁ私の場合は元軍人……というか、時々軍人なんだがな」

ハッハッハと笑うマルコと、その横で憮然とした表情なマルギッテ。

どうにも個性的な二人組みがこの日、２年Ｓ組のメンバーとなったのだった。

第三十一話　加入せしマル＆マル（後書き）

あとがき

そろそろ温厚で優しい日常ルートではなく、バトルも書いていきましょうかね。
俺様、他の小説で盛り上がってきたからこっちでもウズウズきてるのですよ。

オラ、ワクワクしてきたぞ！

第三十二話　水着の準備は入念か？（前書き）

いいタイトルが思いつかなくなります。

第三十二話　水着の準備は入念か？

「水中運動会？」

「おう！　今度の体育会はそれに決まったってさ」

俺は家に帰って、そこで待っていた天に体育祭の事を話していた。
何で俺の家にいるのかと言えば、遊ぶ設備が整っているからだそうな。
まぁ、確かに板垣家にあるテレビよりは大きいしな。ゲームの種類も色々あるし。
つっても格ゲーばっかりやってるのしか見てないけど。準がもちこんだノベルゲーとか言うのもあるらしいんだけど、やってみればいいのに。

「んで、明日あたり色々と買い物に行くんだけど天はどーする？」

「買い物？」

「そうそう。去年の水着なんかもー小さくなっちまってさ。ついでだから色々と買えるだけ買おうかと」

去年に比べたらやっぱでかくなったからなー俺。
あんまり実感無かったけど、サイズを調べたら全然違うわ。
で、センスのない俺は冬馬や準に頼んで一緒に買いに行こうと思ったわけだが（正直ブーメランでいいけど）。

「すいません。その日は忙しいので」
「俺も若もちょっと用事がな。だから他の奴を誘ってくれ」
「誰を誘えばいいんだ？」
「ん？　そりゃ、似合う物を買えばいいんだから決まってるだろ。そうだよな、若？」
「そうですね。風太が誘えばいいのは――」
という事で話し合った結果、天を誘えばいいということになった。
まー亜巳姉ちゃんは忙しそうだし辰姉はたぶんそういうのに向いてないし。
竜兵は……うーん。俺が危ないな。
そういうわけで天だ。この人選はグッドだと思う。
「というわけで頼むよ」
「何が『というわけで』かわかんねーけど、どこに行くんだよ」
「ん？　駅前のデパートとか、色々と」
詳しいことは直感で、行ってから決める。
……まぁ冬馬に色々と聞くけどさ。詳しいし。
「で、返事は？」

数日後、日曜日。
俺は駅前デパートへとでかけていた。
冬馬にはあんまり目立たない格好で買い物をしたほうが言われているから、今日は普通に半袖のシャツとジーンズを身につけている。
まー俺は普段から目立ってるからあんまり気にする必要ないと思うんだけどさ。

「おい風太、何ボーッとしてるんだよ」

「置いてくよ、さっさと来な」

「……どうしてこうなった」

駅の壁に手をついて溜息。
まーなんとなくそんな気がしないことも無かったけど！
どうして今日に限って板垣一家全員が暇なのさ！　めんどいからって辰姉だけは来なかったけどさ！
別に賑やかな方がいいから悪いことは無いんだけど、なんか相談したのが馬鹿みたいになるじゃないか！

「くく、海に行くのが楽しみだな風太！」

「そうだなー」

「去年よりもたくましくなったからな、くくく……」

なんか竜兵の視線が怖い。友情だと信じよう。
皆がついてきたのは、もうすぐ夏だから皆も水着を買うからだろう。
去年もトーマ達と一緒に海水浴にいったからなぁ……俺の水着もあの時に買ったんだけど、やっぱり皆大きくなったってことだろう。
辰姉も買い換えた方がいいとは思うんだけど、来なかったってことは亜巳姉が代わりに買うのかな。
どこがーとは言わないけど、凄く成長してるしなぁ……うん。

「ほら、竜も風太も遅れんじゃないよ」

「ああ。わかってるさ」

「了解だぜ」

まぁ今は亜巳姉が急げって言ってるからその言葉に従おうか。
天は先に進んでこっちを睨んでるし、随分と待たせちゃったかな。

「よっし、急ごう」

「一々折檻されるのはゴメンだからな」

それには同意する。
最近なんだか容赦が無いしな。とにかく急ごう。

「風太、面倒だから俺は先に帰るぞ」

「ここまで来たら一蓮托生だろ。逃がさないぞ」

「……チッ！」

俺に荷物やら何やらを預けて帰ろうとする竜兵を、ガッシと腕を掴んで逃がさないようにする。

確かにこんな場所に俺達がいるのはすごい場違いで空気に耐えられないのもわかるが、そんなところに俺を一人置き去りにするつもりかよと。

腕を掴んだ俺の手をジッと眺め、舌打ちをして諦めた様子を見せる竜兵。

逃げる気がなくなったようなので腕を放すが、急に渋い顔をした竜兵は周りを見回してからこう言った。

「風太よぉ、なんで俺達が女用の水着売り場なんかにいなきゃならねえんだよ」

何かを苦しみながら耐えているような声だった。

うーん。やっぱり竜兵でも周りから向けられている女の人達からの視線が耐えられないようだ。もしかしたら物凄く怒ってるのかもしれないけど。

そう、俺と竜兵はもう自分達の分の買い物を終わらせている。俺にいたっては雑貨用品も全部買い終わったのだ。

しかし俺達はこうして亜巳姉と天の水着ショッピングに付き合わされている。

何でそんな事になってるかさっぱりわからないが、とりあえず一人でこんな所にいるのは嫌なので竜兵に帰られてしまうのは非常にマズイ。

ただでさえ俺と竜兵の体は大きいのに、二人揃ってこんな所にいればすごく目立つ。

向けられるのが奇異の視線だけならいいんだけど、なんか不審者を

見るよな視線も感じるんだよな……
ともかく、居心地が悪いことこの上ない！

「風太、いるかー？」

「ちゃんとそこにいるのかい？」

その時更衣室の中から聞こえた声は天と亜巳姉のものだった。
どうやら水着の試着が終わったらしい。
……不審者を見るような視線、たぶんここが更衣室の前だからってのもあるんだろうな。
せめてボディガードみたいなもんだと思ってて欲しい。割とマジで。
俺がここにいるよーと返事を返すと、それと同時に更衣室のドアが開いた。

「ど、どうだ？　風太！」

右のドアから出て来たのは天だ。
俺と竜兵は左に竜兵が来るようにして並んでたから、自然と俺は天のほうに近いことになる。
天は堂々と胸を張って、俺の方に体を向けていた。
全体的に落ち着いたデザインであるものの、髪に合わせた色のビキニタイプの水着を着ている。

「に、似合ってると思うぞ？」

なんか褒める時に若干声が裏返ったような気がしないでもない。
うん、でも本当に似合ってるのは確かだ。
凄く可愛い、と思う。

「本当か？　嘘じゃねーよな！」

「俺は嘘はつかないぞ！」

「そ、そうだった。うん、ありがとよ風太」

俺にお礼を言って、本当に嬉しそうな笑顔を見せる。

うん。よかったよかった。

……で、亜巳姉の方は？　なんか静かだけど。

「……ほら、なんか言いな」

「……いや、俺が言うべきことでもねぇだろ」

なんか、静かに見つめあい……睨みあい？　ながらそんな事を言っていた。ぶっちゃけ竜兵が素直に褒めてたらそれはそれで違和感ありまくりだけど、こういうのも勘弁して欲しい。

凄く不毛な争いだと思うけど、たぶん俺が止めなきゃいけないんだろうな。

「えーっと、二人とも？」

「ちょうどいいな。風太、交代だ」

「え？」

ぐいと竜兵に引っ張られ、立ち位置を入れ替えるように動いてしまう。

いきなりだったから反応も……それに抵抗する気も無いからあっさりと俺は亜巳姉の前に立っていた。

「やっぱ弟に見せてもしょうがないからねぇ」

「だからって俺ですかよ！」

「いいじゃないか。ほら、どうだい？　似合ってるだろう？」

そう言って俺に向かってポースを取る亜巳姉が着ていたのは、深い青にシルバーの競泳水着っぽいヤツで、ぽっかりと腹部と背中が開いた水着だった。
正直言って凄くエロい。ポーズも相まって余計に。
ともかくアレだ。褒めないと。

「えーと。普通に似合ってるぜ」

「普通？」

「あー、……すごく似合ってるぜ！」

なんか不満げに聞かれたので、言い直しておく。
うん、今度は笑顔だ。
なんとか納得してもらえたようでホントに良かった。

「おい風太、一人で納得してないで天を何とかしろ。すごく鬱陶しい」

どうやら竜兵は、今度は天とまでトラブルを起こしたらしい。
喧嘩するほど仲がいいって言うし、全く問題な息がするけどな。
ローキックを受け続けている竜兵が可哀想だし、さっさと天を止めてやることにしよう。

……なんで怒ってるのかはわからないけど、褒めればきっと機嫌を直すさ。

「じゃあ竜兵、交代だ」

「というかな、いい加減買い物を済ませてくれ」

「……言われてみれば」

水着の会計を済ませ、あらかたの買い物が終了した俺達はデパートを後にした。

さっきやたらと褒めまくったからか、天はご機嫌顔で俺の腕にくっついている。

まー嬉しいんだけど、亜巳姉と竜兵の視線が生暖かい気がする。なんでだ。

「ところでさ、亜巳姉」

「ん？　なんだい？」

「いや、最近釈迦堂さん見てないから知らないかなーっと思って」

「おや、風太は知らなかったのかい？」

ちょっと気になったことを尋ねれば、不思議そうに返事を返してきた。

竜兵もなんとも言ってこないって事は、俺だけ知らなかったのかよ。

「最近は色々と飛び回ってるそうだよ」

「何で？」

「ふん、さぁな。案外、自分より強い奴を探しているのかもしれないぞ」

割り込みで話しかけてきた竜兵がそんな事を言った。

うーん。確かに釈迦堂さん、最後に見た時はかなり真面目に特訓してくれたしなぁ。やたらと張り切ってて違和感があったような気もする。俺の勘だからなんともいえないけど。

あー、ところで天？　さすがに俺は抱きつかれるのは無視できないぞ。一応、俺ってば一途なわけだからな。

……なんだよ！　日本人が奥ゆかしいってのは嘘だ！　絶対に嘘だ！

「報われないねぇ。竜、あんたもなんか言ってやればいいじゃないか」

「面倒だ。こいつの問題なんだからこいつが解決すりゃあいい」

「辰も関わってくるからややこしい事このうえないねぇ」

「なんのこっちゃ！」

「まだ知らなくていいよ、時間が解決するはずさ」

わけがわからんぜ。

ともかく天を引き剥がしてと。次はどこに行こう。

腹も減ってきたし……よし。

「とりあえず、お昼だからファミレスにでも行かない？」

「ウチもお腹すいてきたし、風太に賛成」

「そうだな。俺も賛成だ」

「……まぁ、やっぱりまだまだ色気より食い気って感じだもんねぇ。仕方ないか」

なんか呆れた顔で亜巳姉が呟いたけど、買い物で疲れたとかかな。
とにかく飯だ飯。ついでに休憩！
買い物も済んだから休憩したからってどこに行くってワケじゃないけどな！

「ん？　あれは……辰か？」

「え？　マジで辰姉ちゃん？」

昼寝から覚めてうろついてるのかな、と思ってそちらに目をやるも姿はない。
竜兵の言葉に対する俺の反応が遅かったか。惜しい！
……とまぁ冗談はそれくらいにして。

「俺の見間違いかもな。おい風太、飯食うんだろ。行くぞ」

「ん～。わかった」

いつも河原の方で寝てる辰姉ちゃんが町の方までふらふら歩いてくるとは珍しい。

見間違いならそれで別にいいけど、やっぱ気になるっちゃ気になる事だ。

まぁ、ここらで板垣の名を知ってるのなら変なことなんか怖くて出来ないだろうけど。

今は静かなこの町も、どんどん物騒になる事を思うとなんだかなぁ……と思う。

とりあえず、今は大切な人たちと一緒に楽しく過ごせることを楽しもう。

第三十二話　水着の準備は入念か？（後書き）

あとがき

とりあえず本編を書いてみた。
水中運動会、書くのが楽しみでならないよホント。

第三十三話　ウォーターカーニバル

「準備は？」

「完了！　いざ出陣だぜぃ！」

「よし、F組委員長の水着姿を堪能するぞ！」

「……あれ？　そっち？」

初めは一緒に元気よく声を上げた二人だが、すぐに片方が疑問を浮かべた。

まぁ、純粋な風太には若干穢れ気味なロリ好き準の気持ちは理解できなかったんだろう。

「さぁ、いきますよ。水上体育祭ですから士気は低いですが……前哨戦の気分で勝ちにいきましょう」

「おう！　絶対勝つぞー！」

「ま、たまには頑張ってみるか」

「おー！」

冬馬の仲間である3人が気合の声を上げる。

S組全体の士気は低いが、それでも負ける気がしない。

冬馬はかけがえのない大切な仲間の大きな声を聞き、にっこりと笑

顔を浮かべた。
――そこからほんの少しだけ離れたところで。

「……ねぇ、あずみさん」

「てめぇがさん付けとか気色悪いからやめろ。つかどうしたんだヴィヴィ、そんな落ち込んで」

やたらと落ち込んだヴィヴィアン・バゼールが忍足あずみに話しかけていた。
周りがそうであるように、彼女ら二人もスクール水着を着用している。
小柄でスレンダーな体型のあずみと、長身で体にはっきりとした凹凸のあるヴィヴィ。どちらも鍛え上げられた無駄のない体つきをしている二人だ。
普段はメイド服着用なだけに、逆に珍しい恰好をしているともいえる。
二人の仲は良好とも険悪とも言い難いものだが、そんなヴィヴィが妙な態度で話しかけてきたからあずみも話す気になったようだ。

「まさかスクール水着なんてものを今更着ることになるなんて思いもよらず……」

「いや、あたいに言われても知らねーよ」

「そうよね。私と違ってスクール水着が似合う子供スタイルだものね。大人の悩みはわからないわよね」

「……あ？　喧嘩売ってんのかヴィヴィ？」

さっそく空気を悪くしているあたり、根っこの部分でかみ合わないのだろう。
今回ばかりはヴィヴィが喧嘩を売った形というのは否めないが。

「と、冬馬ー？　なんかいきなり雲行きが怪しいんだぜ？」

「……まぁ、彼女らのあれは暗黙の了解で本気の喧嘩まではいかないはずですよ」

「だといいけどな。ってあれ？　なんか一人ノリ悪いのがいるぞ」

不安要素の二人の様子に、どうなることかと思うのも当然か。
どちらとも戦力になるのは間違いないのだから。
そんな中、準が未だにいつもの軍服姿のマルギッテに目をとめた。
妙に目立つマルギッテの横では、何故か薄い笑顔で海パン姿のマルコが、傷跡だらけだが鍛えられた体を晒して横に立つマルギッテに目をやっている。
元々クールな執事として人気となるマルコだが、後に傷跡がワイルドだとかで人気が高まるのはまた別の話。
その時本人は、隠れファンなんてのはどこにでもいるものだと笑って語ったという。

「……私は応援に徹する」

「戦力になるから出てほしいぜオイ。……そっちのやる気満々に見えるマルコもなんとか言ってくれよ」

「ははは。もちろん、私はマルギッテの分まで活躍するつもりですよ」

「ありがたいねぇ……で、マルギッテはなんで不参加なんだ？」

笑って頼もしい言葉を言うマルコに準は安堵し、その横で若干不機嫌そうなマルギッテに目を戻した。

マルギッテ達が転入してきてからそれなりに時間が経っている。その間に彼らのＳ組内での交友関係も充実してきていて、マルコもそのイメージ通りの人間ではないとわかったために気軽に話しかけられるようになっていた。

特に、というかなんというか。マルコはよく餌付けをしているのが理由か小雪にも懐かれ、その友人である準とも仲が良くなったのである。

……マルコが準のロリコンを知っても動じずに、むしろ推奨したのが友情の第一歩だったに違いないだろうが。

さて、二度目の準からの言葉にマルギッテは声にあからさまな苛立ちをこめて言葉を発した。

「貴様……医者の息子なら察しなさ――」

「すいません。マルギッテは今日アレの日なんですよ」

「……あぁ！　それなら仕方ねーな！　そうか、他にも参加してない女子は生理か～！」

口をはさんだマルコのみならず、準がしでかしたデリカシーのない発言にマルギッテが震えた。

実を言うとマルギッテ、ここに来るまでに散々マルコにおちょくられていた。

それでも怒りを抑えてプルプル震えていたが、そんな堪忍袋の緒も切れたようだ。

「……Ｈａｓｅｎ　Ｊａｇｔ！！」

「ぬぉわ！？」

「当たらなければどうということは――」

「既に見切っている！」

「なん……だと……！？」

マルギッテの拳がマルコの顔へとめり込んで決着がついた。怒りの対象がまとめてマルコへいった分、準は無事ですんだようだ。……他の女子から白い目で見られている事を別にすれば。

そしてマルコはその殴られた勢いのままで後ろへと何回かバック転して着地した。

どうやら運動会に参加する分に問題はなさそうだ。

「さて、色々と問題はありましたが……落ち着いていきましょう」

所変わって２－Ｆは。

Ｓ組に勝利することを念頭に、軍師たる大和がみんなと一緒に作戦会議を行っていた。

もちろん、そこにはイベントに目がない大神宗介の姿もあった。

……なんだか今日はテンションが低いみたいだが。

「で、どうするんだ軍師とやら。俺は爺に自重するように言われている。そのせいであんまりやる気がない。当てにはするなよ」

「始めから当てにしてないよ」

「んだとコラァ！　俺が頼りないってか!?　あぁ！」

「どっちだよ！　というかちょっと黙っててくれ！」

大神宗介はクラスの中から選抜するタイプの競技には出ないように言われていた。

百代はある程度なら自重するというのに、水上運動会と聞いてはしゃぎまくっていた彼に鉄心が与えた罰のようなものである。

おまけに自分の彼女である百代にも「みんなで楽しむんだから自重しろ、な？」的な事を言われてやる気が一気に削がれたらしい。

自業自得であるとはいえ悲しい男である。

元より優勝賞品に興味があるわけでもないから構わないのだろうが……

「フ、まぁ元気を出せ」

「お前は……生きていたのかスグル！」

「勝手に殺すな」

「梅先生にやられてたからつい、な」

つい先ほど梅先生をおちょくって3秒で倒れたスグルが宗介へと話しかけた。

とんでもなくダメージを負ったのは確かだが、とりあえず話せるく

らいには回復したらしい。
砂浜に腰をおろして足を投げ出した宗介の横に立ち、いつもの笑みを浮かべていた。
この二人、宗介がリア充だとわかってからは少しギクシャクしていたのだが、最近になってまた仲が良くなっていた。
新しく始まったアニメの評価が、二人揃って最高だったというものだったのがはじまりだったか。別にヲタクというわけではない宗介にとっての最高と完全にそっち側の人間であるスグルにとっての最高はだいぶ違うのだろうが、それでも同じアニメに対する意見が一致した事には変わりはなかったらしい。

「何を黄昏てるんだ。正直言って3次元の男がやっても似合わんぞ」

「うっせぇよ。せっかくやる気だったのに微妙に冷めてなぁ……どうすっか悩みどころなんだよ」

「なるほど……まぁそこそこにしておけ。こんなお祭り企画に本気で挑んでも仕方ないだろう」

「む、遊びに本気になるからこそ人生楽しいんじゃないか」

「……それもそうか。ジャンルは違うがな」

浜辺でくだらない会話を続ける二人。
そんな二人を放っておいて（勝手に戻ってくるだろうと判断して）、ついに水中運動会が始まった。

「海上に浮かべられた５０メートルの不安定な足場を駆けてわたってもらうネ！　海に落ちたら失格」

いよいよ時間となり、ルーが第一の競技の解説を行った。
第一の競技は、男子が行う『浮橋渡り』だ。
それが知らされるや否や、Ｆ組では風間翔一がまず第一走者へと飛び出していった。
それに対してＳ組の第一走者は……

「若なら考えがあるんだろうが……大丈夫なのか？」

「頑張るってんだから無粋だぞう！　がんばれよ冬馬ー！」

「そうだよー準、空気読まないとダメだよー」

「……お前らが言うなよな。オイ」

「ははは。まぁ、あまり期待しないでくださいよ」

いつもと同じく笑顔を浮かべ、やる気があるのかないのかはっきりしない葵冬馬が第一走者に。
直江大和の予想では、周りの様子やそんな采配をする時点でＳ組にはほとんどやる気がないと見ていた。
というかそもそも前提として、Ｓ組全体にやる気が満ちていたら、どれだけ策を弄しようとも勝率が限りなく低くなってしまうのだから仕方ない事である。
限定的なメンバーの運動力ならともかく、クラス全体の平均的な運動能力でいうのならＳクラスがトップクラスなのだ。まともにやっているだけでは無理ゲーもいいところなのだ。
そして、運動神経抜群の風間と運動神経がよろしくない冬馬の参加

した第一レースの結果は……

「不安定になる前に走れば関係ねぇぜ！　一番っ！」

下馬評通りにキャップが一位に。
第一走者だけあって他のクラスも気合の入った人選であり、次々とゴールしていく中で。
レース前に何か考えていたようだが……

「やぁ、海に落ちて濡れてしまいました」

ドボンという音と共に、足場から海へと落ちていた。
その顔にはいつも通りの笑顔がある。

「これが本当の水も滴るいい男……なんてね」

余裕綽々でそう言い放ち、ギャラリーを沸かせていた。
おかげで、せっかく風間が一位を取ったにもかかわらず歓声はほとんど冬馬の方へいっていた。
やはり、S組にはやる気がないという事が見え見えであった。
……まぁ、一部は違うのだが。

「冬馬ー！　やる気あんのかよぅ！　ブーブー！」

「言ったじゃないですか。期待しないでくださいって」

「まぁ、若が何をしようとしてるのかはだいたいわかったぜ？　じゃ、俺も行くか」

「準もがんばれー」

「おーう。できるだけな」

ユキの応援にひらひらと手を振って、準がゆっくりとスタート位置に向かっていく。

直江大和は準の実力を知っているため、おそらくは準の番になれば価値を捨てたレースを狙ってくるだろう、そのように冬馬は予想した。

簡単な話だ。絶対に勝てない相手とのレースは捨てて、エース級を使えば勝てそうな相手とは勝負する。エース級でなくても、ギリギリ勝てそうな相手と勝負して高い順位を狙っていく。

後出しさえできるのなら、直江大和が実行するそれが失敗する事はないだろう。

「まぁ、準も意図を把握してくれたみたいですし」

「うぉ？」

「なになに冬馬ー？」

「ああ、二人はいいんです。楽しんでくださいね」

冬馬がつぶやいた言葉に反応した二人に、気にしないでいいと返す。

F組の策を返す方法は簡単だ。

こちらが何もしないと思わせておいて、順番を直前で変えるだけでいい。相手がエース級を出したところで、そのエース級ですら勝てないようなメンバーにすりかえれば、さらに効果が期待できるだろう。

例えば、今も冬馬の目の前で応援をしている風太とか。

「彼が積極的ではないのが幸いですね。まぁ、この競技で一位を取られても挽回なんていくらでもできますし」

そう零す冬馬の視線の先には、海辺で佇む大神宗介の姿があった。
覇気が窺えない姿はともかくとして、とりあえずこの競技には参加して一位はかっさらっていくようだ。
それならばこちらも、始めから勝てないとあきらめて順番を決めればいい。本人のやる気はともかく、順番自体は自由にできる。本人にやる気がないのなら、余計にどんな順番で走ってもいいと考えているので動かしやすいのだろう。

「……まぁ、これだけ全員にやる気がない状態で全体三位なら問題ありませんね」

もっとも、平均能力が高いS組なら一位を取ってもおかしくないはずですが。
競技が終了した後、冬馬はそう呟いた。
英雄には『勝利した上でパフォーマンスした方が英雄らしい』と誘導したし、準も風太も一位を取った。
頼んだ事を聞くかどうかもわからないマルコは、何故か頼んだ通りにギリギリの勝負を演出して一位を奪取。
試合内容は、『手を抜いてはいるものの、S組の地力が高いために三位を許した』と見る事が出来る試合内容となっていた。もっとも、各人のやる気が微妙という点では間違っていないのだが。
ただそんな演出をした弊害として、『それならば追い抜ける』を相手をやる気にさせてしまうのが考え物だが……逆に相手に勝てないと思わせる面もあるため一長一短ではある。
明確に思いはしないだろうが、S組を目指すのは諦めて他の組を抜かす事を心の底で思わせる程度には効果があるだろう。

「さて、第二競技は……ビーチバレーですか」

第二の競技は女子が行うビーチバレートーナメント。
冬馬としては確実に優勝、ダメならベスト3くらいは狙っておきたい競技だった。
それくらいの順位を取れば、この後の試合運びがかなり楽になる。
既に先の競技の事を頭で考えている冬馬の頭の中では、そんな事がぐるぐると回っていた。
そして始まった第二競技。

「なんでアタイがヴィヴィと組まなきゃいけねーんだよ。あぁ？」

「まぁ、そうですよね」

仲が悪い二人にも少しは目があるとみたが、やはりあずみは断った。
上手くコンビを組ませる事が出来るのならユキとあずみを組ませる以上に戦力になったのだろうが、こうして一度断られた時点で冬馬も諦めた。下手に誘ってこの後の競技でもやる気を無くさせるわけにもいかないのだから。
第二競技が始まった後、冬馬はヴィヴィへと近づいて話しかけた。

「すいませんね。初めはあなたを選出したのですが、彼女には断られてしまいまして」

「いえいえ、そんな気にしないでくださいな。彼女、ユキでしたっけ？　あずみとの相性を考えれば私よりはずっといい試合ができると思いますよ」

なるほど確かに。ヴィヴィの言う事ももっともだった。
ユキはああ見えてとても強い。同時に、こういう運動をさせてもな

んなくこなす。
あとの問題は、二人組などで競技を行う時に相方がユキに合わせる事ができるかどうかという事だ。
その部分、ヴィヴィでもあずみでもよかったのだが……ヴィヴィはあずみと組んでみたいらしかったので、あずみがそれを断った時点でユキとあずみを組ませることに決めたのだ。

「ところで、あなたはなぜ彼女と組みたかったのですか？　仲が悪いのでしょう？」

理由は知らないが、見ているだけでそうと知れる。
既にS組の中には、ヴィヴィとあずみの仲がそうよろしくないことを知らない者はいないだろう。
ただ、その仲の悪さがどの程度のモノであるかは誰も知らないのだが。
冬馬が観察した二人の仲は、仲は悪くても決定的なものではなく、ただ単に反りが合わない。生まれつきの相性が良くないのだろうと見ているのだが。

「そんなの、理由は単純ですよ」

「そうなんですか？」

「ええ。だって、彼女は面白いですから」

その言葉を聞いて、冬馬は考えを撤回した。
ヴィヴィは思っていた以上に性格が歪んでいる。
あずみとヴィヴィの仲が悪い原因は、おそらくそこにあるのだろう。
今も、冬馬に見せている笑顔の裏でも何を考えているのやら。
仮面を被ったりする事など当に慣れきっている冬馬にすら、その下

の真意は読めなかった。
あずみも、得体の知れないヴィヴィのそんな所が嫌なのかもしれない。それを笑顔で、何事もなく行うのだからなおさらだ。単純に理由などなく嫌いという考えもあるが、おそらくはそれが正解だろう。

「あら、負けてしまったようですね」

「おや……？　そのようですね」

見れば、冬馬がそうしている間に競技は終了したようだ。
結果はユキとあずみが二位。Ｆ組は一位を取った。
風間ファミリーのメンバーである、川上一子と椎名京のタッグにうまくやられたようだ。さすがに、ユキとあずみの急増タッグでは無理があったらしい。
後は二つの競技をこなせば昼休み、そしてその後に第五競技が控えている。
まだまだＳ組が一位を取るチャンスはいくらでもある。
冬馬にとっても、随分と楽しめる水上運動会になりそうだった。

第三十三話　ウォーターカーニバル（後書き）

あとがき

原作とやってる事は同じ？
ノン、同じでも裏の事情が違うぜ。

最近、（「見切ったぁ！」→見切れずにヒット）っていう流れが面白いと感じるようになった。
何故だ？

第三十四話　エピローグ　～Carnival　End&p;,Ready～

昼休みも終わり、第五競技である玉入れが始まる時間になった。
現在のS組の戦況は、まぁまぁと言ったところだろう。
冬馬の友人たる3人の活躍も大きい。
しかし、F組には完全に警戒されてしまっているだろう。ここまでS組がやっておいて、それを放っておくほど直江大和は愚かではないのだから。

「まぁ残り競技も少ないですし、なんとかなりますかね」

玉入れに至っては、風太が投げるたびにポンポンと籠の中に球が入っていく。
明らかに適当に投げているというのに、全く狙いが外れない。
おまけに、あたりからは妨害が来ているというのに風太の元には勝手に球が集まってくるために、投げる球に困る事がないのだ。
見れば見るほどに異常な幸運である。
この様子なら玉入れも余裕で勝利できそうだ。
こういう競技ではSクラスの他メンバーのやる気は期待できないが、予想以上に上手くいった。
……ただ、F組には投擲スキルほぼマックスの椎名京がいるため、そう簡単には事が運ばない。F組の得点もかなりのものだった。
競技が終わり、冬馬はとりあえず気になっていた事を聞く事にした。
話しかける相手はマルコだ。この玉入れでは妨害側に回っていたが、水の中からジャンプした癖にかなり長く滞空して玉を叩き落としていた。

Fクラスには彼の使えるクリスティアーネ・フリードリヒがいるというのに、どうしてSクラスに貢献し続けるのか。

「あぁ、その事ですか」

「はい。少し気になりまして」

「簡単です。このようなお遊びが続く競技大会ですが、お嬢様に発奮して楽しんでもらうためにも敵役は大きくあるべきでしょう」

「なるほど」

別に過保護が治ったわけでもなく、ただ単にクリスのためにも盛り上げたいという事らしい。
それならと冬馬も納得した。得体の知れない理由であるとかよりはよほど良かった。
理由が割れている方が行動も予測しやすい事もある。
今のところ、FとSの得点は僅差だ。
そんなこんなで競技を重ね、セミファイナルステージ。
川神鉄心の考え出したという益荒男決定戦が開始された。

「さて、誰かを送り出すわけですが……」

ルールは簡単。
各クラスから選出された男一人が、はりつけにされた状態で他のクラスの女子に誘惑されて、その誘惑に動じなければ勝利であるというもの。
正確には、その誘惑に股間が反応したら負け。時間制限式。反応するまでの時間が遅ければ遅いほどに高得点が得られるというもの。

「葵君はこういうの、論外じゃろうからの」

「はい。女子に囲まれただけで電流モノですよ」

「そうじゃ、九鬼英雄なぞよいのではないか？」

「フハハハ確かに我は益荒男よ！　だが辞退する！　はりつけにされるなど！　恥辱でしかないわ！」

「ああ、なるほどのぅ。確かに気持ちはわかるのじゃ」

がやがやとS組の主だった面々で集まって話し合う。

冬馬は絶対に反応するからという理由で論外、英雄ははりつけにされるなどという行為は断固拒否で不参加。

そんなわけで残りの人物にスポットが当たった。

何故か離れたところで話し合っていたマルコと風太である。

「ますらお……ってなんだ？」

「おや。知らないのですか？　いいでしょう。私が教えてあげましょう」

「わかるのか！？」

「ええ。お嬢様のために日本のことをとても勉強しましたから！」

「おぉ！　すげえ！」

胸を張って言うマルコも、それを見上げる風太も、凄くアホに見えたとか。

S組の面々はとても頼りにならなそうな彼らから目をはずした。こういう競技ではむしろ役に立つはずなのだが、それを言ってはいけないだろう。
なにせ彼らのどっちかを呼ぶよりも早くに、やけに自信に満ちた笑顔で準が立候補したのだから。

「いやハゲ、お前絶対無理だろ」

「F組の委員長さんでイチコロですよね。ロリコンですし」

「ふ……秘策がある！」

そんな事を言っている準であったが、周りの反応は微妙だ。
普段から散々ロリコンっぷりを晒しているのだから仕方ない。

「葵くんはどう思うのじゃ？」

「私ですか？　準に秘策があるというのなら私は準を信じますよ」

「む……それならば、よいのじゃが……」

結局、秘策とやらを持った準が選ばれることになった。
その間マルコと風太は離れたところでお勉強である。もう誰も話しかけようともしないあたり、微妙な扱いの悪さが見え隠れしている。
不参加のマルギッテくらいだろうか、そちらに目を向けているのは。
呆れと一緒に仕方ないといった感情を混ぜた視線を注いでいるのは、マルコとの付き合いの長さからくるものだろう。
執事としても戦闘者としても優れていた彼に、マルギッテはクリスの為にと思って色々と教わった事があるのだ。裁縫や料理などの家事スキルも完備していたマルコには、戦闘訓練だけではなく本当に

お世話になっていた。
故にだろうか。マルコがあれで意外と面倒見がよかったり、教えるのが得意だということも知っている。

「ですが、状況を考えてほしいですね」

「全くです」

「……唐突に話しかけないでください」

「ははは、すいません」

既に競技は開始されている。F組からS組へは直江大和が送られてきていたのだが、それにちょっかいを出した冬馬は教師から注意を食らっていた。だから少し離れたのだが、ちょうどいいからマルギッテのほうに来たというわけだ。
こういう個人競技では指示なんて出せるようなものでもないし、出す必要も無い。だいたい細かい指示に従うような人間はS組にはほとんどいない。

「それにしても、この競技は彼か風太にやってもらうのがよかったんですけどね」

「マルコなら協力したかと思いますが」

「ああいう風に楽しそうにしてるのを見てると、止める気にはならないでしょう？」

「……そうですね」

マルギッテと一緒に、離れたところで競技を行う準を眺める冬馬。
準はなんとか耐えようとしているみたいだが、何故かF組の委員長の甘粕真与ではなく椎名京に何かを囁かれていた。少し謎だったが、準が既に陥落しそうになっているのなら何か理由があるんだろう。
秘策が意味を成していないような準を見て冬馬はそう結論付けた。
まぁ、結局そのまま準は誘惑に負けて敗北したわけだが。
それでも準に誰も何も言わなかったのは始めから期待してなかったからだろう。

「それにしても、彼女は何をやっているのでしょう。悩ましい」

「彼女はまぁ……単純ですから。それより、さすがは大和君ですね。ゾクゾクします」

笑顔でそんな事を言った冬馬から、マルギッテは無表情で二歩距離をとった。
S組の女たちに囲まれた直江大和は最後まで耐え切り、更には不死川心を騙してソープの真似事までさせたようだ。おかげで不死川は今更になって慌てふためいている。
まぁそんな事はともかく、この競技はF組の一位で終わったのだった。

「結局、勝負は最終競技に持ち込まれましたね」

「準はダメだなー。ロリコンだからかな」

「ハゲだからだよー」

「うるせえよ！　耳元でなぁ、あんな萌えボイス言われて耐えられるわきゃねえだろーが！　次だ次、次で挽回してやる！」

ぶーぶーと言われて爆発する準だったが、ご愁傷様としか言いようが無い。

一応、最終競技で挽回しようというやる気はあるようだ。

最後の競技は怪物退治。

中に川神院の修行僧やらが入った着ぐるみを相手にして、早く撃退することができれば高得点という競技だ。

今のところはどの組も点数はどっこいどっこいだから、ここで一位をとった組が優勝となるだろう。

戦力豊富なS組ならばそんなに問題は無いのだろうが、F組に転入してきたメンバーが問題だと冬馬は考えていた。

「3－Fの着ぐるみにはモモ対策として儂が入る」

そう、問題はその川神百代に匹敵する強さを持つ大神宗介だ。

もしも何の対策もしないとすれば、一巻の終わりである。

「2－Fの着ぐるみにはルー師範に入ってもらうからの」

「げ」

「師範代が！？」

「勿論チームワークを重視するからネ。一応の処置だヨ」

とてもではないが普通の生徒ではルー師範には歯が立たない。

というかF組には師範代であるルー師範とまともに戦えるのは宗介

くらいしかいない。
ルー師範がそういった強さではなくチームワークを判定する旨を明らかにした時、クラスの全員が安堵のため息をついた。もちろん宗介も。理由は自分のせいで勝ち目潰したんじゃ悪いとか思ってたようだ。

「有利な点とすれば、倒す相手があそこまでの人ではないことですかね」

それでも川神院の修行僧というのはレベルが高いので、一般人だとかなりキツイものがあるのだが。
生憎とS組には一般人らしい一般人のほうが少ないくらいである。
協力は望めなくとも、修行僧くらいは楽に倒せるだろう。

「む？」

「おー？」

「……どうしました？」

しかしどうやら、こういう時は思い通りに進まないのが常らしい。
着ぐるみに入っている『誰か』に何かを感じたらしい風太とユキから話を聞いて、冬馬はやれやれと肩をすくめた。

＝＝＝

「それじゃ、頑張れよ」

「ちょっとちょっと、大神くんも手伝ってよ」

「んー、でもなぁ。仲間と一緒に戦ってチームワークを競うってんなら、俺はむしろ邪魔だろう？」

元々チームプレイは苦手だし、と宗介は言う。

ルー師範が選ばれたのは宗介に対する牽制もあるだろうが、だからといって真面目にやれってわけでもない。

今までゆるりとやってきたのだ、今更ノリノリでやるって気にはなるわけも無い。

まぁ、いくら相手がルー師範でも心配する必要は無いだろう。

「それに、やたらとやる気になってる犬もいるみたいだしな」

そう言って視線を向ける先には、風間ファミリーに囲まれて気炎を上げる一子の姿。

チームワークでも何でもいいから、ルー師範を相手に認めてもらいたいとかなんかだろう。

前に宗介は一子に色々と言ったことがあって、その際に大人気なく一撃でのしてしまったりもしている。

だから……というわけではないだろうが、一応は一子の事を気にするようにはしていた。百代から色々相談されることもあるし、自分に努力がどうのこうのと言ってきた相手でもある。

まぁだからと言って、一子のために動こうとかそういう気にはならないのだが。

「にしても、あの着ぐるみ……中身の気配にモロ覚えがあるんだが、まさかな？」

S組の相手をするらしい着ぐるみを眺める宗介。
川神の修行僧連中に混じった、とても覚えのある気配。それがS組の着ぐるみから感じ取ることができたのだ。
しかし、結局それがわからぬままに競技は始まってしまった。
競技開始と共に騒がしくなり、戦闘を開始した川神院の修行僧たちの影響もあって気付くことはできなくなった。
まさか宗介も、自分の父親がそこにいるとは思うまい。
川神百代と付き合うことになった宗介を見守るためという名目で、この川神市へと宗介の両親は引越してきていた。そうして、父親である大神隼人は川神院へと戻っていたのだ。
そうして今日、S組の生徒たちの相手をさせる為に隼人が駆り出された。

「まぁ、いいか。おい大和」

「ん、やる気になったのか？」

「そうだよ。役割をくれ。何もしないってわけにはいかないだろう」

あくまで仕方ないといった感じで言った宗介だが、別にそれに何か言われることはなかった。
既に宗介がそういう性格であることはみんなも把握しているようだ。

「攻撃力不足になりそうだからね、ワン子たちで隙を作った後のダメ押しをお願いするよ」

「了解だ。任しとけよ」

宗介はニヤリと笑って提案を了承した。

同時に、時間を無駄にすることが無いように他の者と一緒に動き出す。
着ぐるみを着ているルー師範は確かに強敵で、一子やクリスや京たちでは隙を作らせることしかできないだろう。本気の彼ならそれすらも無理なのだろうが、今は競技ということで彼はそこまでする気はない。元から負けてF組のチームワークを図ろうというのが目的だから。
そうして皆で作ることのできた隙に、最後の一撃として宗介に攻撃させるのが大和の作戦らしい。
百代を倒したということは大和も知っているので、当然といえば当然の作戦だ。

そのおかげなのか、F組は見事に勝利を収めた。

最も、宗介の攻撃よりも一子たちのチームワークが評価されたのだろうが。
とにかくルー師範は宗介の攻撃を受けた時点で退却していった。
ちなみにS組の着ぐるみはどうなったのかというと。

（ったくこの学園マジでヤベーぜ。S組は優秀って聞いてたがこれほどとは……っとぉ）

「こ、この着ぐるみ、此方のことをおちょくっておるのじゃー！」

投げようとしても寸前でひょいひょいと避けられたり。

（元傭兵……おーこええ。おっさんにはキツイんじゃない？）

「チッ……のらりくらりと。あたいの攻撃をここまで受けきるとはな」

攻撃してもうまく受け流されてしまったり。
一対一の戦闘力ではそうそう相手にならない。というか相手にしてもらえずにうまくかわされる事態が続いてしまい、Ｆ組に劣る結果となってしまった。

こうして水上運動会は、Ｆ組の優勝という形で幕を閉じた。

＝＝＝

「終わっちまったな」

祭りが終わった後の帰り道で、準が言った。
４人並んでの帰り道。
結局勝てなかったけれど、それでも精一杯楽しめたんだからいいだろう。
少しだけ、悔しいものは感じるが。

「次は負けねーって。そうだろ冬馬！」

風太がそう言って私たち全員の肩に手を回した。
いつのまにかユキは風太の背中に乗って、その肩の上から顔をのぞかせている。

「ボクも頑張るよー」

そう言ってくれるだけでどれだけ頼もしいか。
準も肩を組まれて少し呆れた顔をしているが、内心では嫌だとは少しも思っていないだろう。
当然、私も。

「ええ。次は負けませんよ」

たとえどれだけの苦難が待ち受けていても、この道を選んだ私は止まることはできない。
それに今なら、その苦難さえもなんとも無いように思う。
友達と一緒なら。
一緒にこの道についてきてくれる友達がいるのなら。

第三十四話　エピローグ　～Carnival　End&

集イシ者達ノ全テ（前書き）

順次、設定や細かい部分も乗せていきます。
もしも書いてほしいことがあったら感想にて言ってくれれば、もしかしたら書くかもしれません。

集イシ者達ノ全テ

人口全国第九位の政令指定都市、川神市。
現在も発展を続けるその町へと、長らく日本を去っていた一人の少年が帰還した。

それに伴い、様々な人物の運命の歯車が動き出す。

＝＝＝＝＝＝

最強最高最大級／Ｇｒｅａｔ　Ｍａｘｉｍｕｍ　　大神宗介

圧倒的な武の才を持った天才。
幼いころに川神院に預けられていたが、これまではずっとアメリカにいた。
元々の性格からか転入早々に百代と激闘を繰り広げ、子供のころの約束を果たそうとする。
しかし、才能に頼った戦いをしていた彼は百代に敗北することになる。
その後、周りの人の言葉や久しぶりに行った修行、自身との対話によって更なる強さを得た。
同じく一つの殻を破って更に強くなっていた百代を打ち破り、晴れて最強の称号と『川神百代』を手に入れた。

特徴：子供の頃から変わらない好奇心
本人はかっこつけないと男じゃないと思っているし、強くなければ男に生まれた意味が無いとすら思っている。
だからこそ自分は大人であり、周りに対しては上から目線な話し方をすることも多い。
しかし、あまりに荒んだ生活をしていた為に娯楽関係には目が無く子供のように好奇心旺盛。そのおかげかＦクラスでも大串スグルを始めとする面々と仲は良いようだ。

性格：欲望には結構素直
闘いたい相手にはやろうぜと言うし、犯りたい時にもヤろうと言うし、面倒くさいことなら嫌だと言う。
結構ノリで動く節はあるものの、真面目に動くときは真面目に動くのでしっかりと割り切れている。

能力：大量の気・・・大量すぎて体に毒。
本人曰く、圧倒的な武の才についてきたオマケのようなもの。
制御できないと体を壊すほどなので、扱いには非常に注意が必要だ。
その気の総量は百代を含む武道四天王を足しても追いつかないほどであるが、今のところ『必要な時に必要な分だけ使う』という方法で制御するしかない。
宗介の体は幼い頃の事故によって後遺症を負っており、一定以上の気を一度に使用するとオーバーヒートするようになっている。

ちなみにルー師範曰く「年単位で長い時間をかければ治せるかもしれない」らしい。

＝＝＝＝

絶対幸運少年／Ｂｉｇ　Ｈｅａｒｔ　一条風太

川神学園の２－Ｓに在籍する、正義を生き様とする少年。
その幸運は誰もが認めるところであり、サイコロで永久に一を出し続けられるレベルと認識されている。
その才能には未だに未知の部分が多く、細かい強さすら不明。
ウジウジ悩むことはあっても、そこで立ち止まらないというポジティブな性格の持ち主。
いつもは２－Ｓでも特に仲の良い友達と遊んでいることが多く、何故か親不孝通りでも見かけることが多い。
板垣一家とはとても仲が良く、その中の一人に恋をしているのだが……

特徴：突き抜けた直情バカ
人を疑うことをあまりしない上に何でも信じようとする。
おまけに勉強もあまり得意ではない。それでも集中力は高いので、親友の葵冬馬から勉強を教わることで何とかなっているようだ。
その性格ゆえか他人に好かれやすく、本人も基本的には人懐っこい。
よく喋り、よく眠り、よく食べて、よく遊ぶ。まるっきり子供である。
だからだろうか、大人っぽい女の人には弱かったり同年代の女の子にはかなり優しかったりする。

能力：幸運・・・どこまでも幸運

神に愛されているのかと思わせるほどの幸運を持つ。
その力がどこまで及ぶのかは未だに謎。

＝＝＝

凶悪型愉快執事／Ｌｉｖｉｎｇ　Ｎｉｇｈｔｍａｒｅ　マルコ・Ｓ・アッシュハウンド

フリードリヒ家に仕える執事。クリスを見守るために２－Ｓへと派遣された。
学業は勿論、運動や家事にも優れた能力を発揮する。
昔はひどく暗い性格だったらしいが、今の彼には他人をからかうだけの心が生まれているようである。
キレると手がつけられなくなるらしい。酒に弱い。

特徴：Ｎｏｔ　クールキャラ
マルギッテをからかう為に色々と動いている姿がＳ組では良く見られる。
それどころかお嬢様の為にと重箱弁当を用意したり、毎年冬にはセーターをプレゼントしていたり、日本好きの一家の為にあらゆる日本の遊戯について学んだりしている。
不死川心を相手にあやとりで勝負している姿が昼休みにはあったとか。

能力：糸使い・・・あやとりから戦闘まで
『インビジブル』と呼ばれる強力な糸がメイン武器。
百代ですら断ち切れないその糸を用い、山へと百代を縛り付けたこともある。もちろん無効化されて殴られたが。
幼い頃から糸を使う才能を持っていて、執事となる前はそれを暗殺

技術として昇華させて使っていた。
今となっては武術にまで昇華させ、マルギッテやクリスの模擬戦相手も勤める事が多い。

＝＝＝

清廉潔白なる剣士／Ｉｎｎｏｃｅｎｔ　Ｓｌａｓｈ　咲島

そこかしこで有名な斬鉄剣「流星」の使い手。

特徴：貧乳
かわいそうなくらい。

能力：剣技
あの釈迦堂を相手にしても一歩も引くことは無い実力者。

＝＝＝

年齢不詳メイド／Ｕｎｋｎｏｗｎ　　ヴィヴィアン・バゼール

宗介の転入と同時に、２－Ｓへと転入してきた金髪メイド。
『八咫烏』の異名を持つ傭兵だったらしいが、現在は大神宗介付きのメイドをしている。
十数年前から世界各地に出没している。
とんでもない切れ味の鋏を持っている。

特徴：年齢不詳

大神宗介が怪我をして以来、彼の側にずっとついていた。
そのことから考えると、どう考えても２０代ではない。
しかし実際に１８歳レベルで通用する美貌と、モデル顔負けのスタイルを持っている。
忍足あずみよりも更に年上らしいのだが……

能力：謎。

＝＝＝

中年親父／Ｄａｄ　　大神隼人

大神宗介の父。現在は世界旅行中（無期限）。
不可思議な技を使う。
二人の息子がいたが、片方は死んでもう片方はグれてしまい、とても気にしていた。
妻とは未だにラブラブであり、現在は尻に敷かれている。

能力：合成式大神術・・・色々混ざってる。

＝＝＝

和風美女／Ｍｕｍ　　大神真稀子

大神宗介の母。大神隼人と共に旅行中。
世界でもベスト３に入る程の陰陽道の使い手。
一人の息子が死んでしまったことで、もう一人に思い切り愛を注ぎたいらしい。
ただ天然がはいった性格なので、行動が鬱陶しいと宗介自身には不評である。

能力：陰陽道・・・せーめーさんもビックリ。

＝＝＝

ＳＳ編のサブ

＝＝＝＝＝＝

小鷹迅（こだかじん）

小鷹家の若頭。先代はどっか山奥で隠居中。

＝＝＝

ディール・ヘルシング

ヒュームさんの血縁者。養子かもしれないが、姿は非常に似ている。

能力：過剰暗器

＝＝＝

謎／Ｌａｓｔ　Ｈｅｒｏｅ　ミイラ男

第０話　串団子は戦いを呼び寄せた（前書き）

この際だからこっちもあげちまおうと。

第０話　串団子は戦いを呼び寄せた

２００９年　２月１０日

「ったく……若いうちから修行三昧とかやってられるか」

派手な金髪に、黒いスーツの胸元を大きく開いた男が呟いた。
男はブツブツと嫌味を呟きながら川神の町を歩いていく。

「にしても、やっぱこの町はいいな。強い奴の気をそこら中に感じる上に――」

男は腕が霞んでしまう程の速度で、一瞬だけ腕を動かした。
そうして手に現れたのは、一本の串団子。

「こうやって美味い串団子まで食える。――ん、みたらしはやはり美味い」

明らかに外国人とわかる姿の金髪の男が、黒いスーツを着崩して団子を片手に歩いていく。
非常に目立つその姿は、この町に住む者達からも非常に目立ってしまっていた。

だからこそだろう。
いや、当然というべきか。

一瞬にして串団子を『万引き』した彼を悪と認識し、動き出した者

がいた。

「そこのお前っ！」

「ああ？」

振り返れば、『正義』の文字が描かれたシャツをきた、やたらと元気そうな青年がそこに仁王立ちしていた。
おまけにみたらし団子を食べる彼に向かって指差しながら。

「やいやいやい！　俺は見たぞ絶対見たぞ！　絶対お前は万引きをした！　店頭から団子を掠め取っただろう！」

「……チッ」

さすが川神、と彼は心の中で呟いた。
やたらとヘンテコな癖に、俺のハンドスピードを駆使した万引きを見切るとは。
そんな事をどうでもよさそうに考えながら、彼は団子を食い続ける。

「ああっ！　だから食うんじゃねぇって！　盗品だろそれ！　返してこいよ！」

「食いかけをか？」

「え？　ああいやそうだったな。だったら金払えよ！」

ぎゃーぎゃー喚く青年を見て、男は目を鋭く細めていく。
体には無駄なく筋肉がつき、気も十分過ぎるほどに滾っている。
そして一番に、男の勘はこの青年が強いと告げていた。

「しゃあねぇな。そっちに車があるから財布を取りに行かせてくれ」

「おういいぞ！　その代わり俺もついてくからな！」

そう言って男が歩き始め、その後ろを青年が続いて歩く。
そのままどんどん男は歩き、すぐさま路地の方に入っていく。

「おいおーい。こんな方に車なんてあるのか～？」

「ねぇよボケ」

途端、一瞬だった。
男の右手に突然に両刃の剣が現れて、その剣で振り向きざまに青年に切りつけたのだ。

「にょぉあぁっ！？」

「ほぅ」

奇声を上げながら、上半身を真後ろに倒れこませるように折り曲げて刀をかわす青年。
その青年の対応に、男は感嘆しながら声を漏らした。
バックステップで少し遠ざかり、青年は男に叫んだ。

「あっぶねぇじゃねえかよ！」

「当然だ。斬るつもりで振り切った」

返す男の右手には、既に剣の姿は無い。
代わりに、何か黒くて長細いものを両手に持っていた。

「名を名乗れ。お前は楽しめそうだ」

そう言って、男は唇を歪めて笑顔を形作っていく。
明らかにヤバげな雰囲気を感じた青年は、それでも引かずに堂々と名を名乗った。

「俺の名前は一条風太だ！」

「へぇ、そうか。じゃあ風太、俺を楽しませてみろ」

そう言うやいなや、男は両手の『黒い何か』を握りこんだ。
カチリという音がしたかと思えば、恐ろしい速度で小さい何かが風太の胸へと突き刺さった。
それによってバッタリと仰向けに風太は倒れ、男はため息をつく。

「あの程度の『矢』でやられたのか？　いや、さすがに……」

失望の色を浮かべながら倒れた風太を眺める男。
しかし突然、むくっ！と風太が起き上がった。

「びっくりしたじゃねーかこの野郎！　ダーツか！？」

「ダーツとは違うな、小型にしただけのボウガンだ。威力は改造済みだがな」

「ぬぬぬ……」

「ほら、立ったならさっさと向かって来い。それしかできないんだろ？」

「本気でぶっ倒す！」

男が挑発を続ければ、風太もイラッと来て本気宣言。
地面が砕けるほどの速さで男へと駆け出した。

「だらっしゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

「無駄に熱くて何の意味がある」

男の手から細長い何か――『軍用の小型ボウガン・カスタムモデル』が消え、代わりに巨大な棒状の何かが姿を現した。
右手には棘状の突起物を柄頭に数多く取り付けた棒状の武器。
左手には棒の先端に槍の先端の両側に、左右対称に三日月状の刃が付いている武器。

「狼牙棒に方天戟、だ」

「どっから出したんだよっ！」

「秘密だ」

手に握る長大な狼牙棒と方天戟の二本を、ヘリのプロペラのように猛スピードで回転させ、そのまま風太へと突進した。
素手でしか防御手段の無い風太には、恐ろしく危険な攻撃だ
しかし彼は恐れない。

「うおおおおおお！　俺は自分を信じるぜ！　刃の無い所で止めてやる！」

「アホ……が！？」

そのまま、二本の武器のど真ん中へと突っ込んだ。
そして男は二度驚く。

その胆力とクソ度胸に。
そして、物の見事に幸運を呼び寄せたその力に。

そして彼は風太に体で止められている二本を捨て、両手に巨大な鎌とバトルアックスを握り締めた。

先ほどから男の両手に現れる武器は全て『暗器』だ。
到底持ちきれるはずのないモノまで暗器として扱い、男は無数の武器を携帯している。
銃火器類や爆弾、先ほどのような長物や剣、勿論通常使われる暗器まで。

本来の男の才能はそちらに向いているわけではないのだが、そのおかげで様々な武器を一流以上に使いこなすことができる才能にも男は目覚めていた。

男は鎌と斧を用いて、同時に勢いよく斬りつける。
通常なら恐怖に負けて引いてしまい、更に追い討ちで切り伏せられてしまうだろう。
それを知ってか知らずか、風太は更に前に出る。

そうして、振り下ろされた斧と鎌の、刃の無い柄の部分を無理矢理

に握りこんだ。

「ふんぬっ！」

そのまま掴んで投げ捨てるが、既に男は武器を放して遠くに離れている。

しかしその両手には何も握られてはいない。

「よく防いだじゃねえか。俺の本気で潰してやるよ」

そう言った男は、風太が見たことも無いような武器を持ち出した。

それは到底『暗器』に分類されることは無いだろうが、男が使う以上は暗器である。

「潰すとか、聞き捨てならない事を言ってくれるじゃないかよ」

「ん？」

男は、風太がかすかに震えながら立っているのを見て取った。

怯えているのかとも思ったが、違う。

「ただただ口で言ってりゃそれが正義ってワケじゃない。本当の正義ってのは、他人の悪を見逃せない男の心を言うんだよ！　そして、俺は正義で無きゃならない！　敗北を恐れて、負けを喫することなんかしたくないんだ！」

「だったら、それを証明してみろよ。その正義とやらで」

「当然！　うおおおおおおおお！」

気合を込める声をあげ、風太の体を不可視の力が包み込んだ。
それを見て、男は笑顔を更に深めていく。
風太は、自らの感情と湧き出る力をそのままに、男に向かって突っ込んだ。

そうして彼らの戦っていた路地が、到底路地とは呼べなくなる惨状となった頃。

「名前……を……」

風太は、全身傷だらけになって路地のど真ん中へと倒れていた。
しかし、その手は男のズボンの端をしっかりと握り締めている。

「しゃあねぇなぁ、ま、強そうだから名乗ってやるよ。ディール・ヘルシングだ」

「コンチクショ……取立てに行ってやる……からな……」

「しつけぇ野郎だ。ま、面白そうだからいいか」

男はその場を去っていった。
男のお家の事情は複雑で、自分に体術ばっかり身に付けさせる保護者に一泡吹かせたく、それに体を鍛えるのが若干面倒だからという理由で暗器を身に付けた。
それはある意味で成功し、今となっては訓練科目に『暗器』が増え

たくらいだ。
面倒臭さも倍増してしまったようだが、男にとっては百倍マシであるらしい。

特に最近は色々と忙しいようなので、本来ならこうして川神まで来ることはできなかったろう。
ただ、無理して来た甲斐があったと、彼はそう思っていた。

「物の見事に負けちまった……」

風太は無様に寝っ転がったままでそう呟いた。

「やっぱ、もっと強くなんないとな」

彼は拳をギュッと握り締めて空を見上げた。
思うのは、彼の大切な仲間達の事。

「よしっ！　鍛え直すか！」

そう言って少年は、更に前へと進むために立ち上がった。

第０話　串団子は戦いを呼び寄せた（後書き）

あとがき

あげてなかった第０話。
男の正体は、名前の音の響きに隠されてるとか言ってみる。

第1話　とある島での決闘（前書き）

ＳＳ編第一話。

Ｓ編では補完や蛇足などを行っていきます。

ええ、大真面目です。

第1話　とある島での決闘

２００９年　２月１日

南国らしい木々が生い茂る無人島。
そこそこ広いその島にある白い砂浜に、二人の男女が立っている。

片方は無傷。
片方は満身創痍。

無傷の男は目の前の女を前にして無防備に両腕を大きく広げた。

「くははははは！　弱い、弱すぎるぞ九鬼！　それとも俺が強すぎるのか？」

けたけたと笑い声を上げながら、一歩一歩と女に向かって近づいていく。
満身創痍の女は、しかし、目から光を失うことは無い。
傷だらけの体に鞭打って、拳を構えて前へと踏み出す。

「そう簡単に負けるわけにはいかんな。たとえお前が強くても、まだまだ我は立ち上がれるぞ」

「ハッ！　痩せ我慢をするものだな」

「我は痩せ我慢をしているのではない。ただ、己の意思を貫いているだけにすぎん！」

次の瞬間、九鬼揚羽が取った行動は単純だった。
たった一歩で大神宗介の目の前まで踏み込むやいなや、その顔面へと拳を叩き込んだ。
確実に当たるだろうという確信を持って放った拳は、彼女の確信どおりに彼の顔面へと吸い込まれて衝撃を拳へと伝えた。

しかし、目の前の力の具現のような男は微動だにしない。
ペロリと額から垂れた血を舌で舐め取り、邪悪な笑顔を浮かべて笑みを浮かべる。

「効かねぇなぁ？　それが全力か？　それともまだ奥の手でも隠してるってのか？」

「くっ……」

わざと宗介が作った無防備な顔面に放ったにもかかわらず、ほとんどダメージは無い。
揚羽は続けて第二第三と拳を放ち、勢いを乗せた右回し蹴りをあびせかける。
しかし宗介は全てを無理矢理に跳ね除けて、揚羽の腹部に向かって前蹴りを叩き込んだ。

「ぶっ……げほぉっ！」

「あ、あ～あ、やっちまった」

揚羽はその場から吹き飛んでいって、木を数本折ってからやっと止

まる。
その体は、白い砂浜の砂に半分以上埋まりこんでいる。
すぐさまその近くまで飛んできた宗介はつまらなそうに舌打ちをした。
「ちょいとやりすぎたなぁ。アバラが逝ったか？　ククク」
「……」
「？　さすがに気絶なんてこたぁ無いだろ――ぬぉっと！」
唐突に立ち上がって距離を取った揚羽に、宗介は少々の驚きの声を上げた。
「やっぱいいねぇ。諦めないならもっと頑張ってくれよ……くひぁはっはっははは！」
「さすがにマズイ、か……！」
足元の砂浜に大きく一歩を踏み出す宗介。
途端に、宗介が足を踏み出して前へと進んだ衝撃だけで、彼の後方へと大量の砂が吹き上がった。
揚羽の視界に、恐ろしい速さでで自分の下へと突っ込んでくる宗介が見えた。
「シィィィィィィィィ！」
「はあぁっ！」

そのスピードのままで拳を砲弾のように繰り出してくる宗介を、揚羽も気合の声を上げて迎撃する。
衝突した瞬間にあたりの空気が破裂するかのように飛び散って耳障りな音を立てる。
同時に、揚羽は己の左拳からも軋む様な音が伝わってきたのを感じ取る。

（拳が持たない！？　ダメージを受けすぎたか……しかし！）

骨にヒビの入った拳を強く握り締め、痛みを無視して振りかぶる。
ギリリと奥歯を噛み締めて、眼光鋭く宗介に向かって打ち下ろす。

「ふん！　……ぐぅっ！」

「ぬっ……お？」

この攻撃によって揚羽の拳は完全に砕けたが、宗介にもダメージが入った。
先程みたいに額を少しだけ切るという小さなものではなく、意識を揺さぶってしまう程の打撃。
高すぎる防御力のせいで衝撃は通らないが、揚羽は上手く顎を狙って攻撃を放ったのだ。
それも、相手の突進力を上乗せしたことで攻撃力を上げたことによって成功させた。

「お……っとと？」

「その体勢では避けられまい」

揚羽は砕けた拳をまるで庇わずに、腰を落として力をためる。

大技を放とうとする揚羽の前で、宗介は無防備にただ立っているだけである。
そうして宗介のリカバリーが終了する前に、彼女も攻撃を直撃させた。

「九鬼決戦奥義！　古龍昇天破！」

そう叫び、思い切り拳を振り上げる。
アッパーのように振り上げた拳は、宗介の顎にヒットして大きく上空へと吹き飛ばした。
壮絶な衝撃音と共に、宗介が宙へと舞い上がる。

通常ならこれで終わりだろう。

しかし揚羽は一瞬たりとも宗介から目を離さない。

だからこそ彼女はその瞬間を見逃さなかった。

宗介が竜巻の中でくるりと一回転し、何事も無かったかのように地面へと着地するのを。
そして、揚羽の技で生み出された竜巻の中で微動だにせず立ち続ける宗介の姿を。

「カァッ！」

そうして気合の声を一声上げて、宗介は内側から竜巻を吹き飛ばした。

「……さすが、だな」

「おいおい、何を褒めてんだ？　まさか諦めたとか言わねえよな？」

「当然だ。我が諦めるわけがないだろう」

「そいつはよかった。ここまでやっといて降参じゃ白けるからな」

ニヤリと笑って思い切り宗介は伸びをする。

そしてそのまま笑ったままで――

突然に猛スピードで、地を這うように揚羽へと疾駆してきた。

「ッ！？」

揚羽に、もはや回避は間に合わない。

一瞬にして間を詰めてきた宗介は、もう拳を構えたままですぐそこまで迫っている。

防御を何とか間に合わせて致命傷を避けるのか――？

否。

それは逃げだと揚羽は考える。

防御したところで既にダメージは限界。チャンスは一片たりとも無

くなってしまう。

だから、彼女が取った選択肢は防御ではなく。

己が身を捨てた、まさしく捨て身の攻撃。

迫り来る破壊の槌たる宗介の拳に、一切の防御無く拳を引いて待ち受けた。

「喰らえ！　そして倒れろ！　俺に勝利を献上するがいい！　シャァァアアアア！」

まっすぐに突っ込んで来る宗介とその拳を、自らの手で相殺するべく。

彼女は自らの拳を引き絞る弓を引いた。

「受けてみよ！　九鬼雷神金剛拳！」

「ぶっ倒れちまえ！　獄殺千轟撃！」

そうして、後に『最強』を名乗る男と、現在の四天王を冠する女は激突した。

結末は――

第1話　とある島での決闘（後書き）

あとがき

ＳＳ編第一弾はこんなもんでした。

え？　どっちが主人公？

あはは～ＳＳ編ですから～。

第2話　おせっかいさは正義の証（前書き）

ＳＳ編第二話。

やたらと名前が出る人が出ますが、特に気になさらないでも結構です。

本編でもちょろっと名前が出ればいいかなって人だから。

第2話　おせっかいさは正義の証

２００６年　１月下旬

「うおおおおお！　待ちやがれえええええええ！」

「くっそぅ！　あのガキしつけーなぁオイ！」

いつかの昼下がり、町中を一人の男と一人の少年が走っていた。
猛ダッシュで逃げる必死の形相の２０才ほどの男と、叫びながら全速力で走り続ける中学生くらいの少年。

逃げる男はありえねーありえねーと言いながら、巨大な袋を背負いながら逃げ続ける。
来ている赤い服と白いマフラーと背負う袋だけ見れば、一見サンタクロースのようにも見える。

追う少年は胸に『正義』と書かれた半袖のシャツを着て、防寒着も無しに雄たけびを上げて追い続ける。
むしろ逃げている男よりも目立っていることに気付いているのかいないのか。

逃げる男の名は小鷹迅（こだかじん）、追う少年の名は一条風太と言う。

なぜこんな状況なのかといえば、男が袋を持って建物から出てきた

時に風太がそこを通りがかったのが問題だ。
始めは道を塞ぐような形になっていた風太が、出てきた小鷹を通そうと体をずらしたのだが、すぐに中から聞こえてきたのだ。
「そこにいる人！　その人を捕まえてください！」と。
それと同時に全速力で駆け出す男と、捕まえようと腕を伸ばして失敗し、追って走り出す風太。
そうやってかれこれ２０分ほど追いかけっこが続いているのだ。

袋を担いだままで全力ダッシュをしているに関わらず、一向にスピードを落とさずに走り続ける小鷹という男。
かなりのスタミナと脚力の持ち主なのだろう。
しかし、風太も物凄いスピードで「うおおおお！」と叫びながら追いかけていく。
その差は一向に縮まらず、一向に離れない。
だから逃げに逃げて工業地帯まで辿り着き、周りに建物が多くなってきた頃にその状況に変化が起こった。

「秘技！　壁走りっ！」

そう一声叫ぶや、小鷹は古ぼけたビルに向かって走り出し、斜めに横断するように垂直の壁を走り始めた。

「ふはははは！　さすがについてこれ……何ぃ！？」

「うおおおおおおお！」

小鷹が走りながら軽く後ろを確認すれば、自分と同じく壁を走る風太の姿。

それに思い切りビックリするが、それも仕方ないだろう。
小鷹の場合は滑る様に、壁になんら影響を及ぼさずに壁を走っている。
しかし風太は違った。
とにかく足を物凄い速さで動かし、若干足を壁にめり込ませながら走ってくる。

「無茶すんなアホ！　ここらの建物は……」

「無茶なんて上等だぜ……あれ？」

垂直な壁の上をドガドガと音を立てて走る風太に小鷹が注意を呼びかけるが、既に時遅し。
彼らが走っている建物が崩壊を始めた。
この建物が工場地帯の中でも町から離れた東に位置し、廃棄されて誰もいない建物だったのは非常に幸運だった。

そうして崩落し始める建物をよそに、小鷹と風太は地面へと降り立った。

「お前アホか！　このガキ！　あんなことしたら建物がぶっ壊れるに決まってるだろ！」

「知らないっての！　アンタが逃げるのが悪いんだろー！」

そうしてガーガーと言い争っていた二人だが、ビルが斜めに傾き始めたのを見て顔色を変える。
周りには工場だっていくつもあるのだ。
このまま倒れれば、いくら廃工場とはいっても大惨事だろう。既に

惨事になっている気はするが。

「ったく。コイツは言い争ってる場合じゃねぇみたいだな」

「ドロボー野郎に言われる筋合いじゃないけど、そうみたいだな」

ガラガラと瓦礫を落としつつ、ゆっくりと倒れていくビルを見て二人は呟く。

この場は一時休戦で、目の前のビルの崩落の被害をなるべく小さくしなきゃならない。

風太は勿論そのつもりだが、小鷹もなぜかやる気になっていた。

肩に担いでいた袋を少し離れたタンクの陰に置き、腕を回しながらビルへと近づいていく。

「どうするんだ？」

首をかしげながら風太は問いかけた。

どうにかするとは言ったものの、彼自身どうやったものかと悩んでいた。

そこへ腕を回して自信満々に小鷹が近づいたのだから疑問を浮かべるのも当然だ。

「ちょっと上から押し潰す……ってとこか。まぁ、そこまで大きいビルでもないしな」

「これを押しつぶすのか……」

そう言って風太はビルを見上げる。

現在ピサの斜塔程に傾いたビルは、潰すという表現が似合わない程

度には大きいんじゃないかと風太は思った。
そんな風太へと、腕まくりをした小鷹から声がかけられる。

「ま、そーいうわけだから破片とか飛んでかないように頼むぜ。でかいのは大人がやってやるから残りはガキがやれよ」

「俺はガキじゃねぇぞ！」

「ガキは皆そう言うのさ」

そのまま傾いてきていた方向の壁をスルスルと登っていき、掌を当てる。
そしてそのまま全身に力を込めて、倒れようとするビルを押し返した。

「……すげー」

風太が呆然と見ている間にも事態は動く。
一階部分がメチャクチャになっているが、ともかく建物がまっすぐに立った。
それを確認した小鷹が、ビルの屋上まで移動。

そして――

「圧壊！」

思い切り上から押し潰すようにして、小鷹がビルに拳を叩きつけた。
その途端、赤錆びた鉄柱やらボロいコンクリやらで構成された廃ビルが真下に向かってまるごと潰れた。

バキバキ、グシャグシャ、メキメキ、様々な音と共に真下へと潰れる廃ビル。
かなりの衝撃を受けたせいだろう。そこから飛び散る廃材なども、相当な数があるはずだ。

しかし風太は自分の仕事を怠ってはいない。
風太がピョンピョンと何度も跳ねて、弾けとんだ破片や瓦礫を残さず地面へと叩き落していた。

「ジャスティス忍法……跳梁跋扈！」

どうやらそのおかげで、近辺の建物には何の被害も無かったようだ。

そうして無事に建物の破壊も終わったところで、袋を拾い上げた小鷹が風太に話しかけてきた。

「ガキの癖に頑張ったじゃーないか。ヘマしたらフォローしてやろうかと思ってたんだけどよ」

「うるさい！　ヘマなんかするか！」

未だに気に入らないのか、さっきの光景を見ても噛み付くのをやめない風太。
そんな風太に小鷹はめんどくさそうに対応する。

「つーか泥棒ってなんだ？　俺は何かを盗んだ覚えは無いぞ？」

「へ？」

どうやら彼らの間には大きな認識の違いがあったようだ。
しかしとりあえず小鷹を捕まえることには成功したので、風太は自分に捕まえてくれと言った人の所に戻ることにした。
もちろん、めんどくさそうに歩く小鷹を連れて。

「いやーありがとうございました。ウチの若頭が迷惑をかけたようで」

そう言って、先ほど風太に声をかけた３０歳くらいのおっちゃんは頭を下げた。

「……泥棒じゃないの？」

「ちげぇっつーのよ。ほら」

そう言って小鷹が袋を開く。
その中にあったのは包装された大量の書類だった。

「うわ、何これ？」

「うちの歴史書だ。覚えさせられんのが嫌だからいっそのこと捨てちまおうと思ってな」

「……おぉう、確かにこれは覚えたくない」

その書類のあまりの多さに、風太も若干引きながら答える。
勉強が嫌いな風太にとっては、その書類の量は見ているだけで嫌になるものだったのだ。

「泥棒じゃなかったな……すんませんでした」

「謝ることはありませんよ。うちの若が逃げ出したのは確かですからね」

「……逃げて悪かったなーオイ」

おっちゃんは小鷹の腕をガッシリと掴んで、もう一度逃げ出そうとする事を許さないようにしている。
だからだろうか、小鷹の顔はやたらと不機嫌そうに歪んでいる。
誰だってあんな量の歴史書をひたすらに読まされるとなれば嫌になるだろう。

「そういや俺はゲーセン行く途中だったんだ。それじゃ――」

「待てやコラ」

風太がさり気無く去ろうとして、後ろから肩を掴まれた。
振り向いてみれば、そこには小鷹の姿が。

「名前くらい教えてけ。また会うことがあるかもしれないしな」

「……一条風太だよ。この泥棒もどき！」

「んなっ！？」

名前だけ教えて、風太は手を振り払って駆け出した。
これ以上ここにいれば、何か巻き込まれそうな予感がしたのだ。

彼の予感はよく当たる。
だから彼は直感に従ってこの場を去ることにした。

「俺の名前も聞いてけよってのに……まぁいいか。どうせあっちに引っ越すんだ。会うことも無いだろ」

「若〜。歴史書の読破を〜」

「くっそウザッてぇ……」

交わりかけた運命は途切れ、途切れた運命はまた交わるのかもしれない。

運命の歯車は止まらない。

第2話　おせっかいさは正義の証（後書き）

あとがき

俺がお前に正義を執行する！

悪を滅して俺が勝つ！　さぁ今すぐにぶっ倒してやるぜぃ！

第3話　素晴らしき弁当のメモリー（前書き）

何気ない日常。

第3話　素晴らしき弁当のメモリー

２００９年　６月初旬

「なぁ……」

「ん？　どーした？」

「いや、一体何事かと思ってな」

宗介はそう言いながらテーブルの上を指差した。
そこには弁当箱やら卵焼きやらフライ返しやら、とにかく料理をしていた後が散乱していた。

「弁当だ」

「なんでまた。珍しい……というか作れたのか」

「あまり美味しいものを期待されても困るけどな」

そう言いながら、学校の制服の上からエプロンをして料理を続ける百代。
髪を後ろでまとめて料理をする姿が、やたらとさまになっているのは何故なのだろうか。
首を傾げながら、宗介は百代がいきなり弁当作成に手を出したわけを考える。

「ほら、ヴィヴィが宗介に手料理を振舞うのを見て思ったんだよ。自分が作った料理を食べてもらいたい、ってな」

「……どうしよう。百代がやたらと優しい。熱でも出したか？」

「おい、失礼だぞ」

じとーっとした目で宗介を睨んでくる百代。
しかし腕を動かす手が止まってないところを見るに、さすがだと言わざるを得ない。

「ウフフフ、宗介様、おはようございます」

「ぬぅおわぁ！？　ヴィヴィ、びっくりさせんな！」

百代のエプロン姿をじっと見つめていた宗介は、背後からヴィヴィに声をかけられて飛び上がった。
普段ならヴィヴィの隠密が優れているとはいえこんな事は無いので、よっぽど百代に集中していたのだろう。

「このこのぅ！　やりましたね！　ついにデレさせましたね！」

「お前そんなキャラだったか？」

「え？　……ゴホン。ともかく、良かったですね」

何かをごまかすような咳払いをして、ヴィヴィが宗介を祝福する。
今更な感じもするが、なぜか祝福する。

「で、原因は何だと思う？」

宗介はそうヴィヴィに問いかけた。
彼にも少し心当たりはあるのだが、さすがにそれを言うのは躊躇われた。

「それは……やっぱり昨日の会話では？」

「……やっぱそうなのか。気にするような奴じゃないと思ってたんだが」

「意外と乙女なんですねぇ～♪」

クネクネしながら笑うヴィヴィと、眉間を押さえながら頭を振る宗介。
百代がこうして弁当を作っている理由は、昨日の会話にあるようだ。

「ところで百代、お前は料理できるのか？」

「は？　何だ唐突に」

夕食時、突然に問われた言葉に百代は首を傾げた。
そんな彼女に宗介は続けて質問する。

「いや、気になるじゃないか。将来味噌汁を作ってもらったりする関係なわけだし」

「いやん。宗介様、ディープですわ♪」

「ヴィヴィィ、お前ちょっと黙ってろ。で？　どうなんだ？」

ちょいちょいとつついてくるヴィヴィを無視して、宗介は百代に問いかける。

そんな彼に、百代は箸を動かして食事を続けながら質問に答えた。

「……人並みには出来るぞ」

「なぜどもったし」

「いや……」

そこで宗介は気付いた。

百代が箸を止めずに動かし続け、チラチラと食卓に並んだ料理を見ている。

まさかと思って観察していれば、百代のほうがその視線に気付いた。

「な、なんだ宗介」

「いや、それは俺のセリフなんだが……」

「あ、私の料理が美味しいからちょっと心配なんですか？」

「うっ」

ぶっちゃけたヴィヴィのセリフに、百代が呻いて箸を止めた。

どうやら、宗介の予想は大方その通りだったようだ。

「いや、そこまで気にしなくてもな……」

「不安になるだろう。お前は普段からこんなに美味しいものを食べてるんだから」

「大丈夫ですよ、愛情は最強のスパイスって言いますし！　ね！　宗介様！」

「そこで俺に振るな」

いきなり無茶な会話を振られて、宗介はヴィヴィに突っ込みを入れる。

しかし百代はその会話が気になるようで……

「実際、宗介はどうなんだ？」

「え？」

「お前はヴィヴィの作る物と私の作る物ならどっちが食いたい？」

「いや、まだ食ってないからなんとも言えんぞ」

若干机に乗り出して問いただす百代の勢いに、少し引きつつ宗介は答える。

こういう会話など普段するはずも無い彼だからこそ、どう答えようかと非常に困っていた。

「ま、まぁアレだ。食えばわかる」

「そこは普通、私の方を選ぶんじゃないのか？」

「う、うるせーっての！　今度お前に料理の機会があったらな！」

そんな会話が昨日の晩御飯時にされたわけだが。

「それでさっそく作ろうというわけですね」

「気が早い奴だ……」

やれやれと首を振る宗介だが、彼も気付いている。
自分が軽々しく言った言葉で、百代が奮起しているのだと。

「まぁ、楽しみにさせてもらうか。せっかく作ってくれてるわけだしな」

「そうですよ～。女の子は大切にしなきゃいけません！　勿論私も――」

「黙れ。お前は『見かけだけ』だろ」

ピシリと時が止まる。
おまけに空気が固まって、ヴィヴィはギギギと宗介の方を向いた。
それはそれは素晴らしい笑顔で。

「私モデスヨ？」

「……わかったわかった。そう怒るなって」

どうどうとヴィヴィを手で抑えながら落ち着かせ、宗介は百代の方を見る。

珍しく真面目な顔をして、一生懸命に料理をしている。

そんな百代を見ていると、彼もそれを食べるのが少し楽しみになってきた。

だからつまみ食いでもしようと手を伸ばした……のだが。

「危なっ！？」

後ろを向いたままで百代が放った包丁が、一瞬前まで宗介の手があった場所に突き刺さった。

そろそろと百代の方を見た宗介は、自信に満ちている百代の顔を見た。

「弁当時までは、お楽しみだ」

「いやお前もし刺さってたらどうするつもりだったんだ！」

「……ふっ」

「スルーか！　スルーするのか！　おい！」

すぐさま宗介に背を向けて料理を始める百代。

信頼されてるのか、料理が忙しいのか。

なんにしても、危なっかしいものである。

うむ。

やはり、彼らはこうでなければいけない。

第3話　素晴らしき弁当のメモリー（後書き）

あとがき

この弁当は本編にて・・・出るかも!?

第４話　熱血少年とお嬢様ｗｉｔｈフェスティバル（前書き）

グダグダでも許して欲しいのだ。

第４話　熱血少年とお嬢様ｗｉｔｈフェスティバル

１９８９年

京都にある、とある大きな屋敷にて。
こっそりと屋敷の壁を乗り越えた少年が、屋敷の中庭へと降り立った。

「よし……誰もいないな」

そのまま抜き足差し足忍び足で、少年は巨大な屋敷へと近づいていく。
そうしてトン、トントン、と一定のリズムで、とある場所の壁を叩いた。

すると、その壁の向こうで微かな物音がした。
そして見上げるほどの高さにある窓が動いたかと思えば、その開いた窓から少女が顔を出した。

「待ってたよ～」

「ごめんごめん、ちょっと見張りが消えるの遅くてさ」

「お祭りなんだよね？　楽しみだな～」

「俺の姉貴が祭りの手伝いやってるからな、期待してくれていいぜ」

小さな声でそんな事を二人は話す。

今日は町でお祭りがあるのだ。

少年の姉はそのお祭りの手伝いをやっているらしく、少年は実に誇らしげにそれを少女に教えた。

そうして少年は、少女の着ている浴衣が汚れないように支えながら穴から降りるのを手伝った。

「よいしょっと」

「隼人くん、ありがとね」

「へ、へん！　このくらいどってことないぜ」

まっすぐに顔を見られてお礼を言われ、少年は照れつつそっぽを向いた。

そうして照れながらも、少女に向かって手を差し出した。

「ほら、あんまり遅くなる前に行こうぜ。真稀子もたくさん遊びたいだろ？」

「うん！」

そうして二人は、仲睦まじく手を繋いで祭りへと向かった。

「やぁやぁお二人さん、今年の祭りは大成功みたいだよっ」

「そーみたいだな。活気が溢れてやがるぜ」

「ふふん。まぁこのあたしが仕切ってるなら当然なわけよ！」

「さすがはお姉さんです！」

活気が溢れるお祭りの、裏方が集まってる舞台の裏手。
そこに3人の男女の姿があった。
浴衣を着ておっとりとした話し方の少女は賀茂真稀子。
ジーンズにシャツという普段着なままの少年は大神隼人。
ねじり鉢巻を頭に、さらしを胸に巻いて、法被を羽織った少女は大神咲乃。

「真稀子ちゃんも似合ってるよ！」

「えへへ、そんな褒めても何も出てこないよ？」

「そんな見返りなんかいらーん！　それより、祭りを楽しんでもらった方があたしは嬉しいぞ～！」

「勿論楽しむさ。姉貴も後で舞台出るんだろ？　そんときは見に来るよ」

「偉いぞ隼人。それでこそあたしの弟だ」

咲乃は隼人の姉で、今日は祭りで全体の指揮を取ることになっている。
今日は隼人が真稀子を祭りへ連れ出すと聞いて、思い切り楽しい思い出にさせてやろうと更に気合が入っていた。

「そいじゃあ二人は行きな！　思いっきり楽しむんだよ！」

「あったり前よ！　行くぞ真稀子！」

「あ、うん。お姉さんもまた後で～」

手を繋いだ隼人に引っ張られながら、二人は祭りの活気の中へと入っていった。

それを見送る咲乃にも声がかけられる。

同じく祭りを引き立たせる裏方の仲間からだ。

「花火の方は準備中だ。そっちの準備は？」

「あいよ。そんなもんオールＯＫに決まってる！」

「じゃあ合図はお願いしますぜ？」

「おうともさ！　さぁ、いっちょ盛り上がらせようか！」

羽織った法被を翻し、汗が浮かんだ健康的な素肌を晒し、彼女は祭りを更に盛り上がらせるべく舞台へと向かった。

「やってるな～」

「そうだね～」

大神隼人と賀茂真稀子の二人は、わたがしを買って二人で食べていた。
舞台の前でわたがしを食べながら、舞台の上で激しく体を動かしながら太鼓を叩く咲乃へと視線を向ける二人。
さすがに練習の成果というか、慣れているというべきか、太鼓を叩く腕前も凄まじいものだ。

そんな活気に満ちた音楽をバックに、道行く人々からも楽しそうな声が聞こえる。
ここら一帯で一番大きなお祭りだけあってきている人も多い。
祭りが後半になってから始まる大規模な花火が打ち上げられるのだが、それが行われる前の盛り上げ役としても機能していた。

「……花火が楽しみだな」

「……そうだね」

しかし、二人はだんだんと口数少なくなっていく。
いつも通りに笑顔で、いつも以上に楽しめるはずなのに。

「夏も終わっちまうな～」

「……そうだね」

隼人がポツリと呟けど、帰ってくる答えは変わらない。
ふとそちらを見てみれば、今にも泣きそうな顔の真稀子がいた。
そんな彼女が、目に涙を浮かべながら隼人へと話しかける。

「夏が終わったら……いなくなっちゃうんでしょう？」

「あぁ。姉貴はこっちに残るかもしれんけど、俺は行く」

大神一家がここにいたのは、ほんの偶然に過ぎない。
夏の始まりにここへ来て、そして真稀子と出会って、夏が終われば
この土地を去る。
一つの所に留まることを知らないというか、父も息子も旅人気質で
母親は既に他界していることが原因だろうか。
大神隼人が賀茂真稀子に出会った経緯も、なかなかに面白い状況で
あったが捨て置こう。

「お姉さんと一緒に残ってはくれないんですか？」

「それもいいんだけどな」

「なら……！」

「でもさ。やっぱ俺は男だからよ。旅立たずにはいられないのさ」

いつの間にか始まった花火を見上げながら、隼人はそう呟いた。
彼にとっての男が何なのかは彼にしかわからないが、確固たる自分
の道を持っているのは確かだ。
親譲りの旅人気質を受け継いで、それ以上に世界を見て回りたいと
いう欲求と、それによって様々な知識を得るという向上心を持ち合
わせていた。

「それじゃ、さよならなんだね」

「ああ。でも、この場合はさよならよりもいい言葉があるぞ？」

悲しそうに言う真稀子へと、隼人は明るく言ってみせる。
俯く彼女が顔を上げたところで、彼は鼻がくっつくくらいに顔を近づけた。

「またね、だろ？」

「でも……でも、私は。私の父さんだってそんなに待ってくれない。ここで隼人が行ってしまったら、次に会う時に今のままでいられる保証なんて無い」

真稀子の家、『賀茂』の家は日本でも有数の陰陽師の家系だ。
こうして祭りに来るためにも、家から見つからないように脱出しなければならないくらいには厳しい家。
きっと、年も十分なほどに成長している彼女には、結婚相手も勝手に用意させられてしまうだろう。

「……って言ってもな。俺はどうしようもないぜ？　自分の事は自分で決める。俺はそうする。お前もそうしろ」

「そんなの……っ！」

「ああ。いきなりは無理かもな。でも、お前ならできるさ。お前を信じろ。この夏の間にいろいろなお前を見てきたが、自分の人生を親任せにするような奴じゃなかったはずだぜ」

「そんな下手な根性論で、なんとかなるわけないでしょ……？」

呆れた顔で、それでいて羨ましそうな顔で真稀子は呟いた。
そんな事を言われて、隼人も恥ずかしそうに頬をかいた。

「やっぱりか？　でもだな……」

「でも、ちょっと吹っ切れたかな」

「へ？」

素っ頓狂な声を上げて、隼人は真稀子を見つめた。
今の彼女の顔には、先ほどまでの悲嘆にくれた表情は無い。
そうして真稀子は、隼人をまっすぐに見つめてから正面から抱きついた。

「なななななっ！？」

「約束！」

「何を？」

「絶対に、私を迎えに来ること！　絶対によ！」

「……おう！　また、夏が始まる頃に迎えに来るぜ！」

――これは、馬鹿みたいに暑い、夏の夜の出来事。

第４話　熱血少年とお嬢様ｗｉｔｈフェスティバル（後書き）

あとがき

グッダグダになっても、一度書き始めたら止められないのだよ。

第5話　死神は戦場で何を見た（前書き）

最後にビッグなお知らせ・・・！

第5話　死神は戦場で何を見た

話をしよう。
あれは私がマルコ・S・アッシュハウンドではなく、ただのマルコだった頃の話だ。

生まれて物心ついた頃には、既に私は泥を啜って生きていた。
幼い上に体格に恵まれない私は、裏町でも最下層の存在だった。
こそこそと逃げ回り、寒さに震え、いつも他人の影に怯えていた。

いつかの死にそうなほど寒い冬の夜だった。
私は空腹と極寒の気温によって死に掛けていた。
そして死を目前にして私は他者からの強奪を決意した。
他の連中と争うのも痛い思いをするのも嫌だった私は消え去っていた。

限界状態にある体は重いにもかかわらずよく動いた。
後は他者を殺す手段だけだった。
絞殺などできる体力は無い、刃物など見当たらないしあったとしても突き刺せるだけの体力は無い。
一体どうすればいいのか。

答えは、普段生きる裏町に散らばっていた。
ワイヤーを手に巻きつけて、私は私の殺す相手の首にワイヤーを通して後ろからぶら下がった。
交差させて通したワイヤーが絞まり、呼吸障害を起こしたソイツがもがき苦しむ。

私はいくらソイツが暴れようとも、決して力を緩めなかった。
そうすれば確実な死が待っている。
私は死にたくなかった。
コイツだって弱っているのだ。寒いのは同じなのだから。だから殺せるはずだ。
死ぬくらいなら、昨日まで鼠同士だった隣人だろうと殺して生き残る。
その時の私は、そんな選択肢しか持っていなかった。

数年が立ち、私は戦場にいた。
理由は簡単だ。
私は殺しすぎた。
殺しすぎて裏町にはいられなくなった。
それでも私は生きるために足掻かなければならなかった。

射殺か、戦場か。
未だ幼い私がその二択を選択する時、確かにあの時と同じ感覚だった。
だから私は迷わず選んだ。

戦場に立ち、人を殺す方を、私は迷わず選んだのだ。

＝＝＝

とある市街戦。
テロリスト集団だか何だかが占拠した町の奪還が目的だ。
このご時勢に厄介なことだと思うが関係ない。

私は一切の事情も関係なく、ただただ殺しつくすだけだ。

「ん？　今のは……い？」

近づいてきた人間の首が斜めにずれて、血を撒き散らしながら倒れ伏す。
その体にも糸を巻きつけ、大きな音を立てることも無い。
血が飛び散る音もしているが、それはそこまで大きくは無い。
なにせ、首を切り落とす前に血管ごと首を絞めて血を止めているのだから。

「……4人目」

『気付かれていなければそのまま任務を実行しろ』

「了解」

上司である男の声に答えて、影のように存在を薄くして町を進んでいく。
一人、また一人と殺して、殲滅するべく町を進んでいく。

本来ならこのような手間を取ることはない。

真正面から歩いていったとしても、私は決して負けないだろう。
銃弾など、私に効きはしないのだから。

それでもこのような手間を取っているのは、そういう任務だからというだけの理由だ。
極力、敵に見つからないままでどれだけ相手を殺せるかという、つまりはテストのようなものだ。
無論私は、最後の一人を殺すまで、一切の気配を気取られるつもりは無い。

「これで最後か。案外つまらなかったな」

総勢４７名のテロリストの殺害を完了した私は、いつも通りに帰途に着いた。
テロリストを殲滅し尽くした町の、奴らが作っていたアジトまで迎えに来た軍事用のヘリへと乗り込む。

「よくやった、マルコ」

「……」

いつも通りに少尉を名乗る男に肩を叩かれる。
所詮、私は駒だからと階級は与えられていない。

しかしこの男はどうしてこうも無神経なのだろう。

せっかく、殺す事が私にとって何なのか考えていたのに。

生きる手段の一つか、それとも私の一部分か、切り離せない何かなのか。

……コイツも殺してしまおうか。

今日に限ってもう一人軍人姿の金髪の女が乗り込んでいるが、障害にはならないだろう。
どうせ殺しても不慮の事故扱いだ。
ただちょっと体を操ってヘリから飛び降りさせるだけ、簡単だ。

いや、それでもやっぱりこの手で殺すべきだろうか。
頭の中で目の前の男を殺すことを考えながら座っていれば、横から腕を掴まれた。
そうして小声で囁かれる。

「殺気が駄々漏れですわよ？」

「……邪魔だ」

指先を軽く動かして横にいる女を切り裂こうとする。
が、しかし防がれた。
おまけに糸を絡めとろうとしてくる。

面倒なことに、コイツも私と同じようなことができるらしい。

「ねぇ、こんな小物を殺しても仕方ないでしょう？」

「よく目の前で言えたものだ」

「あら。もう気絶してますもの」

「……そのようだ」

そちらを見れば、少尉は首を掻き毟りながら床へと倒れ伏している。
いつの間にやったのだか。得体の知れない女だ。
しかしこれは死んでいると思うのだが。

「ちょっと邪魔ですね。えいっ！」

そう言ってヘリの扉を開けて死体を蹴り落とした。
いいのだろうか。むしろ下に人がいたらどうするのか。

「下が山でよかったですね」

「なんで殺したんだ？」

「え？　命令だからですよ。あの男は色々と汚職に手を染めてましたからね」

そうか、それが理由か。
なるほどそれなら殺されても仕方ないだろう。
だがしかし、私の邪魔をして獲物を奪ったコイツは何者だ？

「あなたにもしっかり命令が来てますよ～。ほら、これです」

「何だ……転属？　今更私を？」

「はい～。現状を聞いて、しっかりと教育しようって人が出たそうですよ～」

女の耳障りな声を聞いたままに、私は書類に目を走らせる。
フランク・フリードリヒ中将……か。随分と上の人間が目を付けてくれたものだ。

「既にこのヘリはそちらの中将がいらっしゃる基地へと向かっていますわ」

「待て、お前は何だ。誰だ。答えろ」

「女には秘密が必要ですの。覚えておきなさい」

そう言って女はヘリの扉を開けた。
まさか、飛び降りて逃げるつもりか？
この女ならやりかねないと思った私は、急ぎ指と腕を動かして無数の糸を外に向かわせる。

「あらあらあら。これは……」

外に飛び出した女がそんな事を呟く。
私は一瞬にして空中に無数の『鋼の槍』を作り出し、女を取り囲んだ上で更に巨大な檻を作り出していた。

「Ｔｏｄ　Ｋａｐｅｌｌｅ……第三曲、『魔王』」

直接干渉しようとして微弱な妨害で逸らされるなら、一気にまとめて閉じ込めるのみ。
全方位からの攻撃包囲網と檻による封鎖だ。逃げられまい。
……何？　何だその笑顔は。

「コレは使いたくなかったんですけど～」

そう言って女が取り出したのは巨大な鋏。
いや、いくらなんでもそんなものでそう簡単に切れる素材ではないぞ。ましてや何重にも束ねて使ってある――

ジョギン、と……そんな音がして檻が断ち切られて女は外へと逃げていった。

もう糸も届かない距離だ。

「逃げられたか」

遠目に見れば、どうやら糸を木に引っ掛けて無理矢理落下スピードを遅くしたようだ。
あの女、本当に何者だったのか。この文書を届けてきたということは軍の者なのだろうが。

運び屋か、傭兵か。

どちらでも構わないが、また会うことになれば容赦はしない。

今は……大人しく転属命令に従おう。

さて、どのような上司が私を待っているのだろうか。

願わくば、私に『答え』を教えてくれるだけの人物であることを祈

ろう。

第5話　死神は戦場で何を見た（後書き）

あとがき

第5話はマルコの過去でした。

といってもまだまだ活躍は本編でいっぱいあるんだけどね。

次回予告！

「次回でお前らに見せてやる、俺たちの桃源郷（げんそう）はこれくらいじゃ簡単には壊れはしないってことを！」

「ふん……幻想を抱いて溺死しろ」

SS編第六話「開催！　川神コスプレコンテスト！」

君の心に今すぐアクセ「おいバカやめろ早くもこの小説は終了ですね」

第6話　ナットゥー（前書き）

Q：なんでこんなモノを？
A：勘を取り戻すため何や・・・許してつかーさいお巡りさーん

第6話　ナットゥー

「……この、ネバネバしたものを口に入れるのですか」

「そうです。わかりましたか？」

「いえ、その。理解は出来ますが。しかし……なにぶん初めてなもので」

「大丈夫です。私も初めてですから」

ドイツにあるフリードリヒ家のとある一室。
そこに集った若い男女が二人。
彼らは一体二人きりで何をしているのか。

「日本では朝食の時、これがおかずとして振舞われるのです」

「ほ、本当なのですか？　こ、これが……」

「そう、これが『納豆』です」

『初めて納豆を見た反応は、それは面白いモノでした』
後日、フリードリヒ家で執事を勤める男はそう言ったという。

それは随分と前の事。
まだマルギッテ・エーデルバッハが日本文化についてよく知らなかった頃の話……

「なるほど！　日本好きなお嬢様の為に自分も学ぼうと！」

「ええ……しかし、何故そんなに笑顔なんですか？」

「だって面白……いえ、あなたの役に立てると思うとつい笑顔にね」

「な、なるほど。そうですか。そうならそうと早く言ってください」

明らかにそれ以外の理由で笑っているマルコだが、マルギッテはそれに気付かない。
それほどマルコが感情を隠すのが上手いということでもあるのだが、それだけではない。
マルギッテはまだ、マルコと知り合って日が浅い。つまり、どのような人物かをしっかりと把握していなかったのだ。
それを含めて、フランク中将は彼らにこうした休暇を与えたわけだが。

「まず、和食の基本からです」

「基本、ですか？」

「はい」

頭の上にハテナを浮かべるマルギッテに、爽やかな（邪悪な）笑顔

を浮かべたマルコが近づいた。
彼は笑顔の裏で、明らかに何かを考えていた。
マルギッテの和食に対する知識がまだまだ未熟であることを把握して、それを上手く使った悪戯を考えている。
子供の頃に荒んでいたからと言っても、大人になってから子供のような性格が発現するというのはどうなんだろう。

「さあ！　まずは納豆です！」

そして冒頭へと戻る。

「この納豆というのは、ご飯と食べると美味しいのですよ」

「そこはかとなく不安ですが、その言葉を信じさせていただきます」

マルコの言葉を信じたマルギッテが、まだ慣れきってはいない箸を使って白米の上に納豆をかける。
別に美味しいから間違ってはいない。
というか普通の食べ方だから問題などないのだが。

「これは……予想はしていましたが口の中に残りますね」

「そういう食べ物みたいですし、仕方がありませんよ」

食べ終わり、マルギッテの言った感想がそれだ。
普通に考えればドイツ人が和食を食べる機会なんてそうそうないだ

ろう。
寿司とか刺身とかならまだしも納豆は……どうなのだろうか。

「でも、美味しいでしょう？」

「そう、ですね。美味しいです」

揃ってもぐもぐと口を動かし続ける。
二人とも、納豆がなかなかにお気に召したようだ。
そうして食事を終えたマルギッテの顔を見ながら、マルコは微笑みながら言った。

「さて、それじゃあ次は何にしますか？」

「う～ん。こうして納豆を食べるとい出しますねぇ」

「なにがー？」

「ちょっとした、昔の話ですよ」

S組の教室で食事中、弁当を眺めながら昔のことを思い出していたマルコへと榊原小雪が話しかけていた。
その際、こっそりと弁当からおかずを拝借するのも忘れていない。
マルコはそれに気付きながらも咎める事はしない。

ここ最近の昼休み、昼食を食うときは結構な確率で小雪や風太がおかずを掻っ攫いに来るのだ。
それも見越して最近のおかずは少し多めに作ってきているのだが、そのせいで余計に調子に乗らせてしまっている部分もあるかもしれない。

「すいませんね。いつもお昼に迷惑をかけてしまって」

「気にすることは無い。少々、弁当を多めに作ればいいだけどのことだ」

「そう言っていただけると何よりです」

礼儀正しく話しかける冬馬に、同じく礼儀正しく返すマルコ。
そんな二人のところに、F組へ行っていたマルギッテが帰ってきた。
どうやら彼女はクリスの様子を見に行っていたらしい。

「おや、おかえりなさい」

「ふふ、おかえりなさい」

「……不気味ですね。何の話をしていたのですか？」

マルギッテから見て、彼ら二人が揃って笑うのはかなり不気味だったようだ。
確かに冬馬は元からそっちのケがあると言われているし、マルコにはそのような噂は無くても、その容姿や性格や他者に対する態度がハマっていた。
まぁ早い話が、ホモキャラ二人の笑顔に見えたのだ。
マルギッテはそういうのに詳しいわけではないが、怪しげな空気と

いうか雰囲気が見えたような気がしたらしい。軍人の勘というヤツだろうか。

「いや、特には何も話していない。それよりマルギッテ、クリスお嬢様は？」

「友人と一緒に食事だそうです」

「なるほど、風間ファミリーだったか。友人ができるのはいい事だ。それ以上にならなければ問題ない」

ほんの一瞬、マルコの目から鋭い眼光が漏れる。
フリードリヒ家で過ごす者にとって、クリスとは大切な家族であり宝物のような存在だ。
そんな彼女に邪な考えを持って近づいた者に未来は無い。
近づいたが最後。異常な程の勘の良さで気付いた中将の命を受け、猟犬と死神がやってくるだろう。

「ところでマルギッテ、昼食はまだだろう？」

「え？　えぇ、そうですが」

「なら、そこの席にでも。まだまだ食料は残っている」

マルギッテに着席を促し、マルコは隣の机の椅子を引いた。
マルギッテが促されるままに席に着き、マルコの近くへと机を寄せる。
そうしてから初めて弁当の中身を確認したのだが……

「いえ、あの、ちょっと私は遠慮させていただきます」

「？　どうかしたんですか？」

突然に嫌そうな顔をして弁当から目をそらしたマルギッテに、先程からすぐ近くに座っていた冬馬が声をかける。

ギギギ、とオイルが切れた人形のような動きでマルギッテが冬馬の方を向く。

そうして彼女は恨めしそうに小さな声で呟いた。

「納豆があるのなら、教えてくれればよいものを……」

「……嫌いなんですか？　納豆が」

弁当の片隅に設置された納豆入りの小さな器。

どうやらマルギッテが嫌がっている要因はそれにあるようだ。

「嫌いではありません。ただ……」

「ただ？」

「いえ、その、前にマルコと日本について勉強していた頃に……」

毎日毎日ずっと納豆を食べさせられていたもので……と、つまりはそういう事らしい。

冬馬はそれを聞いて全てを理解した。

マルギッテに限ってわざわざ嫌いなものを好きだと言い張るはずもないだろうし、つまりは見たくも無いほどに食べ飽きてしまったのだろうと。

一度薦められた物を好きだと言ってしまい、後に引けなくなったのだろう。

「さぁ、どうしたんですかマルギッテ？」

「う……」

マルコの声にマルギッテが振り向けば、そこには自らに箸を差し出す彼の姿。

その更に後ろには不思議そうにこちらを見ているユキの姿も。

ぐっと小さくうめき声を上げ、マルギッテはゆっくりと差し出された箸を受け取った。

「いただきます」

そして、覚悟を決めて箸を進めるのであった。

「なぁ準」

「ん？　なんだよ風太、俺はＦ組委員長の写真を鑑賞するのに忙しいんだが――」

「なんでマルギッテはあんな顔色してると思う？」

「マルギッテが？　ってマジじゃねーか」

手元の写真から視線をはずし、準はマルギッテの様子を見る。
そこには確かに、顔色は悪いまま、他はいつも通りのマルギッテの姿があった。

「その横で微笑気味なマルコが怪しいな。……ま、いつも通りだろ」

「そーだな」

わははと笑って風太がどこかに走り去っていった後、準はもう一度よく考える。
あのマルギッテが、そうそうそんな顔になるわけない。
一瞬だけ気にしようとも思ったが、準は凄く嫌な予感を感じ取った。
日々の川神ラジオによって彼の危機回避能力は高められているのだ！

「触らぬ神には祟り無し、だな」

触ったが最後、マルギッテに何かされるかもしれない。考えすぎではあるが。
とりあえず彼は、風太に話しかけられるまで実行中だった写真の鑑賞に戻ることにした。

第6話　ナットゥー（後書き）

あとがき

どうあがいても絶望な程にキャラ忘れが激しかったので書いた。公開は若干しているとかいないとか。

次は……バトルや……

第7話　ブレイドファイヤー（前書き）

またつまらぬものを斬ってしまった・・・

第7話　ブレイドファイヤー

「せぇいっ！」

「はっは！　やるなぁ嬢ちゃん！」

裂帛の気合と共に振り下ろされた刀が空気を切り裂いた。
同時に。シャコン、と。
白日の下で、一本の木が細切れになって波打ち際の白い砂浜へと散らばり、一つの岩が爆発するように砕け散る。
陽光を反射して輝く白刃から金属音が響き渡り、二人は激突を続ける。

片や、笑いを浮かべた熟年男性。
片や、成人すらしていない少女。

男は黒い闘気を腕に集めて少女の振るう真剣を弾き飛ばす。
防御力を高めたその右腕には、鋭い刃物を素手で防いだにも関わらず傷一つない。
男、釈迦堂刑部が素手で刀を武器とする侍娘に挑んだのは、それだけの事ができるだけの実力があったからなのだ。

「こっちには咲島の爺さんの相手をしに来たんだがな。まさか爺さんは死んで、嬢ちゃんみたいな子が後を継いでるとは驚きだ。名前はなんだい嬢ちゃん」

「無頼の輩に名乗る名前など無い！」

言い切り、一閃。
少女がその場から動かず振るった刀が直線状にあるモノ全てを両断した。
砂場も岩礁も海も……ただ一人、釈迦堂刑部のみを例外として。

「っと、おいおい。不意打ちとは卑怯じゃないの」

「すっ、すまない！　つい興奮して――」

「不意打ちならもっと確実にやらなきゃよぉ！」

行儀よく、わざわざ頭を下げて謝る少女の隙を突いて釈迦堂が気のリングを飛ばす。
自分へと高速で飛んでくるそれに気付いた少女は、咄嗟に刀を構えてそれを切り裂いた。
ご丁寧に４つの気のリングを全て真っ二つに。

「卑怯なり！　こちらは謝っているところだというのに！」

「戦いの最中に綺麗過ぎるんだよ嬢ちゃんは！」

言って、釈迦堂は再び少女へと拳を構えつつ突進する。
少女は動かない。
刀を鞘に納め、腰をほんの少しだけ落とし、目を細めて釈迦堂を待ち受ける。

「へッ……」

釈迦堂は笑う。いざ戦いとなれば、目の前の少女は戦う者としての

顔になる事に。
掘り出し物だと思いつつ、拳により一層の力を込める。
釈迦堂が少女の間合いに届くや否や、少女の居合いの構えから白刃が放たれる。
狙いは釈迦堂の両足。
咄嗟に刀を飛び越える形でその斬撃を避け、更に放たれていた第二撃を空中で体を捻りながら拳で叩き落とす。
そのまま釈迦堂が体を捻らせた勢いのままで蹴りを繰り出せば、足に感じたのは人のものではない硬い感触。

「くっ……」

釈迦堂の蹴りを白い鞘で受け止め、少女は左足で跳ねるようにして飛び退った。
数mほど後ろに下がり、白い砂浜を踏みしめて再び剣を構える。
今度は腰を落とした居合いの構えではなく、剣を頭上に振り上げた上段の構え。そのまま少女は自分からは動かず、釈迦堂が動くのをじっと待つ。
間合いにはいるや否や、神速の一撃が狙い過たずに放たれるだろう。
しかし、それくらいの事で釈迦堂が足を止めるはずも無い。

「……いい殺気だな、嬢ちゃん」

「……来るならば来い。ただ、どのような怪我をしても保障は無いぞ！」

「上等だなぁオイ！　そう来なくちゃあ面白くねぇ！」

獣の如き前傾姿勢で、地を這うように少女へと踏み込んだ。
上方から振り下ろされる雷の如き速度の斬撃へと、釈迦堂は地面ス

レスレから手刀を形作った拳を振り上げる。
もちろんいくら強固でも、擬似的な拳の刃では鉄をも切り裂く斬撃を真正面から打ち負かすことなどできるはずも無い。
真正面からぶつかれば、だが。

「……ッ！？」

「ほぉらよぉ！」

常人では視認出来ない速度で振り上げる手刀の先端を、刀に触れる刹那でそっと一瞬だけ動かした。
少女の放った斬撃を弾き、自分から僅かに逸れる程度に。
そして、それだけで釈迦堂には十分すぎるほどだった。
逸れた斬撃をほんの僅かな動きで避け、振り上げた手刀で少女の左肩を突いて吹き飛ばした。
放物線を描くようにして少女は吹き飛び、白い砂浜の上に落下して煙を舞わせる。

「ははは、いつまでも加減なんかしてるからだぜ嬢ちゃん。それに、受けてるだけじゃあ勝てるわけがねぇ」

おそらくは肩を脱臼したのだろう、激痛に震える少女が自分の左肩を抑えようとして苦悶の表情を浮かべている。
刀は少女の目の前に突き立っているが、少女にそれを振るうことができるのか。
釈迦堂も少女の底を一度も見ることなく、このまま戦いを終わらせてしまうのは惜しいと考えた。少し、決着を急ぎすぎたという気もしていた。

「あー、大丈夫か嬢ちゃん」

手を軽く振りつつ釈迦堂は少女に近づく。
少女の刀を弾いた時の衝撃で、少し右腕が痺れたようだ。よくそれだけで済んだものである。

「仕合の相手に心配される筋合いはありません！」

左腕をだらりとぶら下げたままで、少女は砂浜に突き刺さった刀を支えに立ち上がる。
健在の右手と震える左手で刀を正眼に構え、余裕の無い表情で釈迦堂を睨みつける。
余裕無く、全身に気を張り巡らせて刀を構える少女の姿。
釈迦堂にとっては、体調が万全であった時の少女よりも威圧感を感じることが出来た。余裕がない分、本気に近いという事だろう。

「まだまだやる気じゃねえか」

「当然です！　それと、先程は申し訳ありません」

「あ？」

「本気でお相手をしなかった事です。……この怪我は、私の油断が招きました。体調は万全ではありませんが、これより本気で生かせて頂きます」

「は……ははははははは！　面白いこと言うな嬢ちゃん！」

幾分かずれた少女の言葉に、釈迦堂は大きな笑い声を上げる。
しかし少女の言葉を理解して感じたのは、どちらかと言えば喜びの方が大きい。

今まで刀を持っていることで加減していた相手が、いくら負傷しているとはいえ本気を出すと言うのだからそれも当然か。
ここ最近の弟子との個別特訓によって昔よりもずっと強くなったと感じている釈迦堂には、せっかく強くなっても相手が本気を出さないなんてつまらなくて仕方が無いのだ。

「来いよ嬢ちゃん！　本気を出してみろや！」

「――いきます！」

少女はそう言って、滑るように釈迦堂へと近づいていく。
その速度自体はそれほどのものではないが、まっすぐに近づいてくる少女の体の軸にブレが無い。
そうして、正眼の構えを保ったままで近づいてきた少女は釈迦堂に突きを繰り出した。

「はぁぁあああっ！」

「うおっとっとぉ！」

左肩を負傷して尚、０．１秒刻みで放たれる連続突き。
それを釈迦堂は危なげなくかわしていく。
怪我をした肩から激しい痛みが走っているのか、少女は苦悶の表情で突きを放ち続ける。

「チッ」

放たれ続ける少女の突きに、釈迦堂は思わず後ろに下がった。その体には、かわし切れなかった剣の傷が幾筋もある。
さしもの釈迦堂も、少女の変化に驚愕していた。

剣に込められた力も、それを連続する速度もそうだが、それ以上に『読み』や『勘』が通用しない。
おそらくは剣に込める殺気以外にもフェイントとして殺気を飛ばしてきているのだろうが、それだけではない。
剣の間合いは把握しても、突かれた時にその間合いが若干の変化を得ているという事は……

「やるな嬢ちゃん。縮地、だろ？」

「……さすがに見抜くのが早いですね」

釈迦堂が離れ、問いかけるのと同時。少女は大きく息を吸って吐く。
先程、釈迦堂へと接近して突きを放つ時の歩法を見ていなければ気付けなかっただろう。
その時も少女は上体を一切揺らがせること無く、近づく速度や間合いも曖昧になってはいたが……
それを、突きを放つ最中にも使用した。
相手が間合いを把握して後ろへと下がる時に、相手へと悟らせずに少女も移動した。ただそれだけ。
それを、戦闘中の釈迦堂に一切気付かせることなく行ってみせたという事になる。

「面白い技使うじゃねえか。でも、それだけじゃねぇんだろ？」

「……当然です」

息を整えた少女は、刀を白い鞘に納めて腰を落とす。
それは始めに見せた居合いの構え。
釈迦堂が一度は破った構えではあるが……しかし。

「――今度こそ本気ってわけか。いいねえ、最高だ！」

纏う空気が、感じる力が、前回とは明らかに違う。
連続突きによる稼動で悪化したはずの激痛も、一切無くなってしまったかのような落ち着いた顔。
油断も隙も無く、釈迦堂の放つ真っ黒な気にも臆さず、すなわちいわゆる明鏡止水のように。
それを見た釈迦堂も、よりいっそうに黒い気を解放して拳を構える。
辺り一帯を覆いつくし、少女の全てを飲み込んでしまいそうなそれを前にしても、少女は一切揺らぐことは無かった。

「……」

少女はただ真っ直ぐと釈迦堂に目を向け、釈迦堂の攻撃を待っている。
やはり彼女は後の先を主体とするスタイルのようだ。
それを崩さず、負傷した彼女ができる最後の一撃を繰り出そうとしている。

（カウンター狙いか。構えからして居合いだし、問題なんざ一つもない、はずなんだがなぁ……ったく）

黒い気を纏う釈迦堂はそう思いつつ、いつ仕掛けるかのタイミングを計る。
しかし少女には隙が無い。一部の隙もありはしない。
今の少女を見る限り、カウンターを受ける前提で一撃を受けようにも、防御が効くはずもない事はわかりきっている。かわそうにも、少女の気配から軌道を予測することが全く出来ない。
本来なら、ここで少女の間合いへと飛び込むなんてのは正気の沙汰ではない。

「行くぜ？」

「……我が斬鉄剣、『流星』の切れ味を甘く見ないほうがいい」

「心配はいらねえよお嬢ちゃん」

この期に及んで最後の警告をした少女に、釈迦堂は野蛮な笑顔を向ける。

そうして彼は拳を構え、地を足で蹴り付けて、空気を切り裂く超速度で少女へと突貫した。

ほんの僅かな距離を一瞬で移動する刹那の合間。僅かな一瞬が長く引き伸ばされたその時に。

釈迦堂は確かに、少女が技を呟くのを聞いた。

「咲島流、虚乃華」

居合いの技だと想像がつくが、それ以上は全くわからない。

進み始めた肉体を押し留めることなどできはしない。

釈迦堂はその少女が放つ、動作と気配を感じぬ居合いへと立ち向かう。

結果は、如何に。

第7話　ブレイドファイヤー（後書き）

あとがき

続きは本編で。

というか結果は本編で？　みたいな。

それでは皆さん今後もこの作品をよろしくお願いします。

第8話　ガチ男クライシス（前書き）

6月21日、本編・第三十三話「ウォーターカーニバル」を更新しました。
ぜひ読んでください。

第8話　ガチ男クライシス

とある天気のいい日の午後。
川神市から少し離れたところにある小さな砂浜にて。

「おいおーい。てめぇ、まだヤル気かよ」

実にめんどくさそうに頭をかいて、釈迦堂刑部は呟いた。
その言葉を向けられている少年は、砂浜に頭から突き刺さったままで手足をぶんぶんと振り回している。

何を隠そう、その少年をそんな状態にしたのは釈迦堂刑部だ。

ここでは今日、釈迦堂刑部が直々に組手をすることによって少年に修行をつけていたのだ。
実戦形式でかなり本気である上に、発言からしてもう何度も行っているらしい。
ただ、釈迦堂の服や体中もボロボロになっているという事実は、修行を付けられている少年の方も相応の実力を持っていること。
そんな少年が、やっとこさズボッと砂浜から頭を引き抜いた。

「当然だー！　勝つまで諦めないのが俺のいい所だってわけだぜ！
さぁ次だ！　次っ！」

そう笑顔で言い放った風太は、ボロッちくなったシャツを脱ぎ捨てて拳を構える。
それを見た釈迦堂は、どこか疲れた顔で拳を構える。
それもそうだろう。いくら釈迦堂が強いとはいえ、そう何度も何度も立ち上がるしぶとい奴を相手にすれば、疲れも見えてくるという

ものだ。
それどころか風太の場合、戦う毎に力を増しているかのようにも思える。

「来ないならこっちからいくぜ！」

グルグルと腕を回した風太は思い切り右手を振りかぶった。
そして気合一発、強く叫んだと同時に風太の姿がブレる。

「――――――フォゥ！」

正面に立つ釈迦堂は、咄嗟に腕を交差させて風太の『攻撃』をなんとか受け止めた。
風太の叫び声は、そうして釈迦堂が攻撃を受け止めた後から遅れてやってきた。
ただ真っ直ぐ突進してストレートを繰り出したようだが、それだけで音速を超えた動きをしたようだ。
しかし、それを平然と受け止める釈迦堂も釈迦堂である。

「おいおい、速過ぎだろ」

「それを止める釈迦堂さんもマジすげーと思うんだぜ」

「そう簡単に師匠が弟子に負けるわけにゃあいかねえだろう……よ！」

釈迦堂はそう言い放ちながら、風太に思い切り前蹴りを喰らわせて蹴りとばした。
蹴られた風太は吹き飛びながらも態勢を立て直し、すぐさま再び釈迦堂へと突っ込んだ。

そして、やたらめったらに釈迦堂へと拳を打ち込みまくる。
どれもこれも直線的であり、隙も大きいその攻撃は、カウンターを叩き込む絶好のチャンスである。

「おらおらおらおらー！」

「よっとっとぉ」

余裕綽々の表情で、釈迦堂は全ての攻撃をするりと避ける。
これまで行った戦いでも、まず最初は必ずこのやり取りが為されているのだ。
……だが果たして、それはいつまでも全く同じ結果に結びつくだろうか。
若者は、常に目覚しい成長を遂げるものだ。

「ダメダメだねぇ～。隙が大きいぜ……って、マジかよ」

カウンターで放った釈迦堂の拳を受け、これまでの風太ならそれで猛攻をやめるはずだった。
しかし、その一撃を受けても風太は全く止まることなく。
それどころかカウンターをした隙をついて、釈迦堂に拳を当ててみせた。
釈迦堂にとってもそれは予想外であったものの、さすがに危なげなくそれを防御する。
……防御したの、だが。

「うおおおおおおおおおおおっらぁ！」

「何ィ！？」

腕で防がれた拳に力を込めて、風太は無理矢理ガードを突破せんとする。
釈迦堂からすれば、一度完全に勢いを止めた拳から急激に増す圧力を感じた形になる。
そのまま風太は拳を振りぬき、釈迦堂を砂浜へと殴り倒した。
いくら釈迦堂が手加減をしているとはいえ、驚愕の出来事である。

「くっ……ははははははは！」

「どわっ！？」

笑い声を上げた釈迦堂が、己を倒した風太を見上げながらゆらりと立ち上がった。
釈迦堂の体から吹き出た大量の黒い気に圧倒されて、風太は一歩二歩と後ずさる。

「やるじゃねえか、なぁ！」

「おぉぉぉう？　釈迦堂さん本気かよ！？」

「そりゃー少しくらいは本気も出したくなるわなぁ。なんせお前もやる気満々みてえだし？」

周囲の空間が歪むほどの気を纏い、自分から下がった風太へと近づいていく。
明らかに自分よりも強い釈迦堂を前に、おめおめと尻尾を巻いて降参するのか？
ありえない。。
風太がそんな事をするはずがない。

「にっひっひひひ。やっぱ釈迦堂さんすげーよ。凄すぎるぜ」

「にしちゃあ、お前も随分余裕だな？」

「余裕なんじゃねえよぅ。凄いって感動して、とてもじゃないけどここで終わらせる気になれないだけだ」

笑って風太はそう答えた。

そうして一度深呼吸し、全身に力をめぐらせて自分から一歩踏み出す。

「だから、俺もここは本気出す」

しっかりと釈迦堂と目を合わせ、拳を構えて前へと進む。

ゴォ！！と尋常ではない量の気が風太を覆う。

黒い気に包まれた空間の中ではほんの小さなものではあるが、それは一面の黒の中で小さく光る。

「いっくぜい！」

「こい！」

そんな戦いがあったのは実に9ヶ月前。

風太が高校一年生になって初めて、みんなで行った旅行から帰ってきた時の話なワケだが……

さて、時間軸を現在に戻そう。
風太はちょうど釈迦堂さん自身の訓練と風太の修行を兼ねた本気（ガチ）の勝負をするところだった。

「初めて会った時に比べて、随分デカくなりやがったなぁ」

「ん？　そーかな？」

風太はその問いに首を傾げる。
釈迦堂の言うとおり、風太の体は大きくなった。一回りどころか二回り以上、ヘタすればそれ以上は大きくなったかもしれない。それでも竜兵のようにガチムチに見えないのは、背丈もキチンと伸びて全体的に大きくなっているからだろう。
彼にとってはそんなに体が大きくなった感覚なんてないし、初めて戦った時は何度も何度も倒された記憶しかないのだ。
まぁ、そうして敗北も経験しているからこそ今の風太があるとも言えるが。

「そいじゃあ確認だ。本気を出して一本勝負、いいな？」

「望むところだぜぃ！」

「へっへ……いいねぇ、それじゃあ本気でいくかぁ！」

ギラリと目を光らせた釈迦堂が、一瞬で黒い気を纏いながら風太に殴りかかってくる。
互いが同意した時には、戦いは既に始まっているのだ。
風太も同じ認識なのだろう。だからこそ、放たれた釈迦堂の初手を防ぐことが出来た。

「そぉい！」

釈迦堂の拳を屈むようにして避けた風太は、昇竜拳のように勢いをつけて釈迦堂の顎に向けて思い切り拳を振り上げた。
それを首を逸らす事で避けられた後も、その勢いのままで空中へ飛び上がって回転蹴りを繰り出していく。
空中で独楽のように高速回転をしたまま、釈迦堂へと突撃して蹴りと拳を放っていく。

「ハリケーンアタタタタタタタァーック！」

ぐるぐると、ぐるぐると、それでいながら正確に狙いをつけた突きと蹴りとが放たれる。
その無数の攻撃を釈迦堂は全て受け流す。撃ち落す。
クリーンヒットは一発として通さない。
１０秒以上も攻撃し続けてやっと勢いが止まって、まだ空中にいる風太へと次は釈迦堂が攻撃を行う。

「吹っ飛べやぁ！」

「げっふ！？」

いくら反応速度が速くても、風太は武空術を使えるわけでもないし、

さすがに空中では避ける手段は無い。
釈迦堂が放った鋼鉄をも切り裂く鋭い蹴りを受け、風太は空高くへと吹っ飛んだ。
宙に舞った風太を追いかけて釈迦堂も飛び上がり、更なる追撃を加えんとする。
しかし風太は異常なタフさですぐに回復し、追撃を行う釈迦堂を待ち受ける。

「いけよ、リングゥ！」

「げ、しまっ――」

釈迦堂が放った気のリングが風太にぶち当たる。
いきなりの事に対応できず、そうして囚われたままの風太に釈迦堂は大きく足を振り上げる。

「そーら墜ちろ！」

「げっふぼあああああ！」

きりもみ回転しながら高速で風太は地上へ墜落した。あたりは一面が砂煙に覆われる。
釈迦堂がスタッと砂浜に着地し、目にしたものは犬神家。
ではなく、上半身を丸々砂浜に埋め込んで、腰より下がじたばたと動いている風太の姿だった。
しかしそれも少しの間だけ。
風太は暴れていた足をしっかりと地面につけて、砂だらけになった上半身を引き抜いた。

「ぺっぺっ、砂が口の中にぃー」

「はっはっは。災難だな風太。こりゃ少しは加減した方がいいか？」

「手加減なんて似合わないぜ釈迦堂さん」

「つってもなぁ……」

頭をかいて釈迦堂は苦笑する。

いくら風太が劇的過ぎる成長を遂げたとはいえ、自分と本気でやるにはまだ早かった。

それはまぁ当然の考えなのだが、彼が風太の才能を見込んで修行をつけてきたんだから少し足りなく思うのも確かだ。

ため息でもつきたい気持ちの釈迦堂だが、逆に風太は怒りのような気持ちを覚えていた。

「ごちゃごちゃうるせーぜ釈迦堂さん」

「――あ？」

「俺に落胆するのなら！　俺を完膚なきまでにぶっ潰してからするんだな！」

キッと強い眼差しで釈迦堂を睨みつけ、砂煙を全て吹き飛ばすほどの気を纏う。

否、砂煙を吹き飛ばすどころか……釈迦堂から発せられ空間に満ちていた黒い気さえも。

「風太、てめぇ……」

「このパワー！　この漲る力！　まだまだ本気になれそうだぜぃ！」

あたり一帯を満たす黒い気を押し返して、更に風太から溢れ出る無色の力。
釈迦堂が見込んだその才能が、彼の努力と思いによって実を結んだ本気の力。
それが今、まさに開花していた。

「いくぜ釈迦堂さん！　戦いはまだまだこれからだ！」

ビシッと拳を釈迦堂に突き出し、風太はそう啖呵を切った。
対する釈迦堂は――？

「くくく……」

笑う。

「ははははは……」

大きく口を開けて。

「はぁっーーーっはっはっは……おもしれえじゃねえか風太ぁ！　本気でやろうぜ、おい！」

本気と本気のぶつかり合い。
ラストスパートではなく、ここからが本番の開幕。
いざ、勝負。

第8話　ガチ男クライシス（後書き）

あとがき

三人称の練習してたらおかしくなったでござる。
許してちょう。

第九話　英霊残滓（前書き）

ここに飛翔。
誰かと誰かの昔話。
きっと血は受け継がれ、魂は後継に宿る。

第九話　英霊残滓

「私は思うのだよ」

何を？

「人の起源だ」

起源？

「英雄には英雄の、勇者には勇者の、生まれもった器が何に影響しているのか」

それは……何だと思うのですか？

「私はね、魂だと思うのだよ。安易な答えだろうけどね」

魂……

「そうとも。前世を含めたその魂が持つ全ての道筋が、その者の持った器に影響する。そう思っている」

なるほど……それは面白いですね。

「誰かの生まれ変わり、という言葉は決して偽りではないと思うのだ。現代の名高い人物は、過去の英傑の生まれ変わりだったとして

もおかしくないのだからな」

ふーむ。

しかしその仮説を真実とするのなら、私の知人も面白い前世を持っていそうです。

「おぉ。それはいい。私に君の知人の事を教えてくれないか？」

いいでしょう。お教えします。

＝＝＝

万物は木・火・土・金・水からなる。

それを用いた術の中でも、特に攻撃力が高いのは火を用いる炎術だ。

万物を焼き尽くすそれは、近づく者を燃やし尽くす太陽のごとく。

物理の法則悉くを無視し、使役する者の匙加減一つで生き物のように姿を変える炎。

「だからどうした……」

「理解できぬか？　到底、お前のようなただの無頼にアレは救えない」

「そんな事はわからないだろう！」

「どうかな？　以前に私に敗れたのを忘れたとは言うまい？」

そう述べる、彼の敵たる男は術師だった。
そして彼は武士だった。彼はとある家に使える武士の一人なのだ。
彼は戦い、術師を倒さなければならなかった。
それが彼の使命であり、彼の仕える家と対立する家を打倒するための手段だった。

「さぁ、いい加減に死ぬがいい。この国の変革のため、女は生贄とさせてもらおう」

「そういう事はな、拙者を殺してから言ってもらおうか！」

燃え盛る大地。
対立し、敵対しあう両者の周囲は、燃え盛る炎で覆われていた。
敵にとってはおあつらえ向きな有利な状況。彼は圧倒的に不利だった。
それでも彼は諦めるわけにはいかない。
彼にとっては戦って生を勝ちとる以外に、彼と彼の大切なものを守る術はないのだから。

「死ね」

敵が腕を振った。
同時に彼の眼前に、蒼き炎が顕現した。その炎の色は、敵が本気になった事を指し示す。
蒼き炎とは炎術において、紅き炎よりも上位に位置する。
その事を彼も知っているからこそ、心に少しの恐れが生まれてしまう。
しかしそれでも――

「諦めて……諦めるわけにはっ……いくかあああああああああ！」

声を上げ、渾身の力を込めて地を踏みしめる。
まっすぐに敵を見つめ、腰に下げた刀を抜いた。同時、彼の体から噴き出すように大量の気が立ち上る。
しかしそれも、眼前に迫る蒼い炎が内包する巨大なエネルギーと衝撃の前にはあまりにも……

あまりにも、頼りない？

本当に、そうなのだろうか？

気はつまり、人間が持つ属性の無いエネルギーだ。
あらゆるものからの庇護や助力を得ず、人間が単体で発するエネルギー。
あえて属性をつけるとするなら、それは『人間』であると言えるだろう。
人間はあらゆるモノに打ち勝ち、そして敗北してきた。
時に人間は神へと昇華し、時に悪魔へと堕落した。
純粋な気はそれゆえに全ての属性に強く、だが同時に全ての属性に物量において敗北する。

しかし、しかしだ。
それでも障害や困難を打ち倒していくのが人間だ。
大いなる存在に打ち勝った英雄たちも、きっと諦めなかったはずだ。
どうしようもない敗北の運命も、己の力と信念で持って打倒してきたはずだ。
だから諦めなければ、天をも焦がす炎にも、全てを押し流す水にも、それこそあらゆるものにさえ、勝利を掴むことができるのではないだろうか。

彼は足を踏みしめて刀を構える。
目の前に迫る炎ごと、全てを断ち切らなければ未来はない。
今の脅威は、最大の敵たる目の前の相手ではない。諦めようとする己の心だ。
己に勝利し、敵に勝利し、彼は前へと進むのだ。
いよいよもって彼を炙り始めた炎へと、その向こうにいる敵へと、彼は己の人生を全てかけた一撃を放った。

一閃。

彼の体を飲み込もうとしていた蒼き炎の大波が、斬撃に沿って横一文字に斬り裂かれた。
敵に迫るため、彼は懸命に地を蹴った。
全霊を持って炎を切り裂いた彼の体にはほとんど力が残されていないが、しかし。
驚愕に顔を歪め、無防備な体を晒す敵に刀を突き立てるには十分だった。

「ぐ……はぁっ！」

「がふっ！？」

敵は体に刀が刺さった事に苦悶の声を上げ、すぐさま彼を殴り飛ばした。
それに耐えるだけの力がない彼は、殴られるままに地面へと倒れ伏す。
同時に彼が思い切り握りしめていた刀が敵の体から抜けて、刺さっていた箇所から大量の血が噴き出した。
見る間に力を失った敵の体は、ゆっくりと前のめりに倒れて行った。

「な……ぜ……」

倒れる間際、己の敗北を信じられない敵が呟いた。
既に何かをする力は残っていない。動くのは唇と喉だけだった。

「……決まっているだろう」

彼は言った。
敵には到底理解できない事を。
しかし彼にとっては、それが唯一の真実なのだ。

「お前は、強すぎる。だから、上を見すぎたのだ」

「……」

「下を見ないから、拙者のような取るに足らない足元の小石に躓いてしまったのだ。その身に宿しておくべき、最も大切なモノを置き忘れたのだ」

ゆっくりと、立ち上がりながら彼は言った。
前に一度敗れた時とは立場が逆転した。
敗北して倒れ伏したのは敵となり、勝利して見下ろしたのは彼となった。
そして、この立場はもう二度と覆る事はない。
殺すほどの価値もなしと彼を見逃した敵は、彼に命を奪われて二度と立ち上がる事は出来なくなったのだ。

「さて……」

物言わぬ屍となった敵の躯に背を向ける。
周囲の大地は、既に燃える事を止めていた。燃える草木が尽きたのか、術師である敵が死んだからなのか。彼には分らない。
しかし、炎によって閉ざされていた道が開けたのは確かだった。

「早く、行かぬとな……」

彼は遠くに見える城へと向かって歩き始めた。
敵を倒した事を、彼の主たる少女へと伝えるために。

その家を、敬愛する姫を救った彼の者の名は――

＝＝＝

「誰なのです？」

いえ、そこは言いませんよ。

「なぜ？」

守秘義務ですから。

「なるほど……」

＝＝＝

既に兵は無く。
城も廃墟と化し。
それでも尚、その女はそこにいた。
正しくは、囚われていたと言うべきだろう。かつて己が住んでいた城に、姫ではなく虜囚として。

（こうして全てを失ったおかげで、かえって心が楽になりました）

女を逃がした父は得体の知れない術師に焼き殺され。
その術師は、雇い主の家から女一人と廃墟と化した城を貰い受けた。
その目的は知れぬままだ。ただ、良からぬ未来が待っている事は女にも理解できていた。
だが女は逃げる事は出来なかった。術者によって閉じ込められていたからだ。

「……？」

しかし。術師が死んで結界が消えた。
隅の小さな窓へと目を向けて、暗雲の立ち込める空を眺めていた女も気付いた。
何かで押さえつけられていたものが、それから解放されるかのように、カタリという音がした。
女は襖へと近づき、ゆっくりとそれを開けた。
襖は簡単に開いた。さっきまでは、女がいくら力を込めようとも開かなかったはずなのに。

「これは、もしかして……」

女は部屋から外へ出た。

誰もいない。この城に仕えていた人たちも、城へと攻め寄せた兵たちも。

術師ただ一人に支配され、女が囚われていた城は、術師の死によって完全に解放されていた。

女は愚かではなかった。その支配が解かれた事の意味をすぐに理解した。

そして、女はゆっくりとその部屋を後にした。

彼は焼け焦げた道を歩き、滅びた城の門にまでたどり着く。

ふらつく体を、今にも折れそうな刀で支え、一歩一歩をゆっくりと踏みしめて。

ただ、己が助けに行くべき人のために。

「やっと倒したというに、顔も見れずに死ねるかよ」

彼は毒づいて前を向く。自分に渇を入れ、主のもとへと歩いていく。

もうここには、この家には何も残っていない。

兵も、臣下も、城も、何もかも。あっけなく消えてしまった。

それでもまだ、確かに残っているものはある。死ななければ、命さえあるのならば、きっとそこには道がある。

……ふと彼の耳に、枯れ葉を踏んだような乾いた音が届いた。

「っ！」

続いて、息を飲む音。彼は、音の聞こえた方向へと顔を向ける。

そこには彼が助けた女の姿があった。
彼を探すために、囚われていた部屋を後にした女の姿があった。
彼を見つめるその瞳には、大粒の涙が溜まっている。

「ご無事でしたか……よかった、本当に」

彼も、再会に笑顔を浮かべてその場へと膝をつく。
未だに彼は女を主と認めていた。全てを失っても、忠義と誇りは残っていた。
だが女は。姫ではあったが姫ではなかった。全てを失い囚われた際、姫としての彼女は一度死んだのだ。
憎き敵を倒し、それで失った者が戻る事はなかったが、彼らは自由を手に入れたのだ。

その後、彼らの行方は杳として知れない。

＝＝＝

「ほほぅ。これはいい」

そうでしょう？

「名前さえ教えてくれればもっと面白いのだろうに……」

我慢してくださいな。

「……仕方あるまい」

それでは、そろそろ時間ですので失礼します。

「そうか。では、また会おう」

はい。また。

第九話　英霊残滓（後書き）

あとがき

眠気に満ちた状態ならこんなもんよ！

一応、伏線なのかな？　ん。

第１０話　ゴーホーム　※９／２３更新分

とある日に、ただ普通に教室で寝ていた宗介は、突然に風間に話しかけられた。
実はこの二人、意外と仲が良かったりする。
ゲームとか、街探索とか、後はヴィヴィの作った菓子を分けて食べたりとか。風間ファミリー内で、百代を除いて一番に彼の家に来たのも彼である。
きっかけは、百代の彼氏ならと言うことで、風間ファミリーに入りたかったりするのかと聞いた時の事だ。
風間としてもみんなと話し合いをしてから話したわけではなく、なんとなく聞いてみただけであった。
答えはＮＯ。
なんとなく感じてはいたが、やっぱりそんな答えだった。
宗介からＮＯである理由、何かに所属して仲良くするのは苦手なんだという事を聞き、風間はそれなら仕方ないと諦めた。

たとえ風間ファミリーに入れる事をファミリー内の話し合いで決めてあったとしても、たぶん風間は誘うのを諦めただろう。そしておそらくは、他の者もそうするだろう。だって、嫌だという相手を無理に誘うのでは、ファミリー内で仲良く遊んだりするのが目的なのに本末転倒になってしまう。
元々が少人数、仲の良い友達同士で、ファミリーの居心地がよくてそこにいたいと思うからこそ、彼らは風間ファミリーなのだから。
少なくとも彼らの中には嫌だと思っている者はいないし、新しく風間ファミリーに入ったクリスも黛も、風間ファミリーに入りたいから入ったのだ。

断りを入れた宗介は、しかし断りの理由を言った後で風間に言った。

「いい仲間の集まりだと思うよ。毎日が楽しそうだ。百代もいるし……まぁ、俺もそういうのが苦手じゃなきゃあな」

「宗介だってスゲェさ。あのモモ先輩に勝っちまうなんてよ。あ、今度アメリカの話も聞かせてくれよな」

互いに褒めあう形になったのか、微妙に話しはズレていたが、しかし意思は伝わった。

その後は流れでファミリー内とアメリカ滞在中の話をしたり、普通に話しているうちに波長があったらしく仲良くなっていた。いつの間にか風間が宗介を名前呼びしている事には、家に帰るまで気がつかなかったようだ。

そんなこんなで今日まで友誼を結んだ彼らだが、今日は何の用なのか。

絶賛睡眠中だった脳をたたき起こし、宗介は口を開いた。

「それで、なんなんだ？」

「いや、モモ先輩の提案でお前んちに皆で行こうって事になったんだけど、大丈夫だよな」

「はぁ？　俺の家来て何するんだよ」

「ヴィヴィはお菓子用意してるって言ってたぞ」

「あいつ……まぁ、来たいなら構わん。島津あたりは相当乗り気だったろう。それに……」

「それに？」

「お前ら面白いしな」

＝＝＝

そして週末がやってきた。
風間ファミリーの面々は何故か偶然に全員が暇だったらしく、揃って俺の家にやってきた。
現在は、結構な広さを誇る居間に全員が集結してまったりしている所だ。
無駄にデカイソファが二つもある事に感謝ってところだな。

「テメー、こんな所にメイド付きで住んでるとか羨ましいぞこのヤロー」

やたらと豪華なソファに腰掛けた島津が、俺に向かってそう言った。
しかし口の中に菓子入れたままで話すのはやめて欲しい。見ててすごく汚いからな。
ヴィヴィも結構嫌そうな顔してる事に気づけ、島津よ。
まぁ、俺の知った事ではないけどな。

「そんなに羨ましければ、自分で雇えばいいだろう。少なくとも、今のヴィヴィに対しての給金は俺が払っている。ほれ」

「お、それは私も初耳だな」

「ちなみに、どれくらいなの？　月給とか」

うるさい島津を黙らせる打開策として言ってみたら、百代と師岡が食いついてきた。

百代は金だからだろうが、師岡はそういう細かい部分が単純に気になったんだろう。

ヴィヴィに答えさせようとも思ったが、ちょうどキッチンで飲み物の準備をしているようだ。俺はしかたなくキッチンにいるヴィヴィの代わりに答えてやることにした。

「確か、５０万くらいだったか。それに仕事する度にプラスで」

「仕事？」

「そりゃ秘密だ。悪いな直江」

結構色々やらせてきたからな。

さすがに直江ならそういう耐性は高いと思うが、周りには他の奴等もいるんだ。言うわけにはいくまい。

それにクリスあたりはかなり五月蝿そうだ。黙っていたほうがいいだろう。

「皆さんどうぞ。紅茶の方が良かったですか？　一応、ジュースの方がいいかとも思ったんですが」

キッチンから出てきたヴィヴィが、全員の前にジュースが入ったコップを置いていく。

ヴィヴィはいつも通りメイド服だ。

紅茶じゃないって事は、たぶん風間や一子の事を考慮したんだろう。
こいつら、紅茶を飲む楽しみなんてわかりやしないだろうからな。
それがわかるのなんて、クリスや黛くらいじゃないだろうか。
普通に緑茶だったら全員わかるかもしれんが、まぁジュースの方が問題ないだろう。

「いや、ありがとよヴィヴィ。俺はこっちの方が好きだ」

「あたしもよ！　……わ、美味しい！」

案の定だった。風間はジュースでよかったようだ。ついでに一子も。
他の奴らは普通にジュース飲んでるし、やっぱ年齢的にこういうのが好きなんだろう。
……ま、俺も人のことは言えないか。
それにしても、隣に座ってる百代が腕を絡めて身体をくっつけてくるせいで視線が痛いのだがなんとかならないものか。
別に見せびらかすのはいいが、知人が相手だとなんか微妙な気分になる。特にこいつらの場合、全員が仲の良い友達同士ってのがな。
俺にとってもクラスメイトなわけであるし、最近は結構交流する事も多いし。

「ところで……」

「あぁん？」

「いえ、その、お聞きしたいことがありまして」

「おいそーすけー、まゆまゆが話しづらいだろー」

「いえっ！　その、そんな事は！」

別に威圧的な雰囲気を出した気はないんだが……俺の元からの雰囲気が悪いって事だろうか。
多少あがり症のケがある黛には、優しく接する必要があるようだ。
というかクリスまで俺を変な目で見るのはやめてくれないか。
ただちょっとチンピラ風で機嫌悪く見えたかもしれないが、それは百代にひっつかれて感情操作が完全じゃなかったという事にでもしておいてくれ。

「了解。オーケー。わかったよ。それで、何が聞きたいんだ？」

「あの、お二人の馴れ初めを」

おっと、馴れ初めときたか。
なんともはや、こっちとしても話したくなる話を振ってくれるじゃないか。

「そういえばあの時はまだまゆっちとクリスはいなかったね」

「私も聞きたいな。皆が聞いているなら私も、ぜひ」

「はっはっは。二人も気になるか～」

「そうか聞きたいか、聞きたいのか。ならば話してやろう！　思う存分話してやろう！」

ついつい声を荒げてしまった。
まぁ百代も一緒だ。
できるだけ大雑把かつ大胆に話して聞かせてやろうじゃないか。

「……いきなりテンション高くなったね、二人とも」

「うん。惚気も入ってるね。大和と私も惚気よっか？」

「いやお友達だから。惚気る事ないから」

「さぁお前ら黙れ！　口を開くな！　俺がせっかく話してやろうと言うんだからな！」

「始めてあった頃の方が熱くなかったね……」

「あぁ。モロに同感だ」

オイそこうっせぇぞ静かにしろ！
ふふふ、静かになったか？　なったな？
じゃあ話してやろう。百代と俺が始めて会ったときの事をな。
何？　既に百代から聞いた？
別にいいじゃないか。コイツの視点と俺の視点とじゃ感じが違うかも知れねぇ。

「あれは、俺らがまだまだガキの頃の話だ――

――まぁ、そんな感じだ」

俺はちょっと熱を入れて、菓子食ったりジュース飲んだりする連中の前で昔語りを終えた。

まぁ、大体は語りつくせたと思う。

俺がここからいなくなってからの話は……まぁ、今は必要ないだろう。

「おい宗介」

「なんだよ」

不機嫌そうな声に振り返れば、眉をひそめている百代がいた。

特に間違った思い出話はしてないと思うんだが。

とりあえず百代が何を不満に思っているのかと思っていれば、とんでもないことを言い出した。

「最後に勝ったのは私だろう？」

「何ィ！？　聞き捨てならんぞ！？」

「お前が忘れてるだけじゃないのか！？」

隣に座ったままの超至近距離で百代とにらみ合う。

……まぁ、折れるのは俺の方なんだけどな。惚れた弱みってやつだ。

惚れた女に弱くなるのは俺的に当たり前だと思う。いやまぁ、ガチバトルとかになったら話は変わるけどな。

「おい。別にどっちでもいいじゃないか！　昔の事なんだろう？」

「大丈夫だクリス。私は宗介を信じているさ」

「チッ」

（姉さんの顔が……俺達から金を借りるときの顔だ……）

なんか聞こえたような気がしたが、別にいい。

そうとも。別にいいのだ。

なんてったってなぁ――

「今勝ってるのは俺だからな、焦ることなど何もない」

「む……」

ふふははは！　言い返せまいて！

そうとも、俺が百代に対して勝ち越しているのは事実！　もう既に結構な人数が知っている公認の事実よ！

俺と百代は別に言いふらしなどしなかったが、ヴィヴィがSクラスを手始めに言いふらし始めたおかげでかなりの人物に広まっていた。

別に頼んだ覚えなどないが、商店街で買い物をしにいく度にも広めていたらしい。

おかげで町中に広まることになった。まぁ、遅かれ早かれ百代が負けたなんて事になれば噂は広まるってわかってるんだがな。

「なぁ大和、いくらなんでも戦闘開始なんて事にはならないよな？」

「……そう願いたいね。止められるとは思えないし」

周りからはちょっと距離をとろうとする声が聞こえてくる。まぁ、無いとは思うが少し危険だからな。

しかし百代は、膨れっ面をやめてコップを手に取って一気に飲み干した。
怒っている様子はもう無い。

「おあいこだからな。次は無いぞ」

「へーへー。わかってるよ」

さすがに俺もくだらない過去の事で嫌われたくは無い。
初めかわかってたぜ？　こんなことで喧嘩するわけないじゃないか。
もちろん、わかってたとも。
うんうんと俺が頷いていると、今度は師岡が話しかけてきた。ゲーム関係でスグルと話したこともあるから、その事もあって話しやすいんだろう。

「あれ、なんで宗介……くんは2年のF組に？　話し聞いてる限りだとモモ先輩のクラスにいってもおかしくないと思うんだけど。学年てきにさ」

「そりゃ、いろいろあって留年したのさ。あっちにいってる間にな。あと、別に呼び捨てでいいって言ってるだろうに。次から名前な」

「なるほど。道理で年上っぽいわけだね」

「そうか？　私から見ると、宗介は結構子供っぽく見える」

好き勝手言いやがって。ま、別にいいけどよ。
だいたい、師岡がいう年上っぽいってのはいい。だがクリス、子供っぽいとはどういうことだ。俺はガキじゃねえぞ。

「そんな事よりもさ、俺はアメリカで何してたか聞きたいぜ」

「私も話してもらってないぞ。そら話せ」

そりゃまた次の機会だ、と言おうと思ってたんだが……
全員の視線がこうも期待感を溢れさせてるんじゃ断るわけにもいかないか。
いや、一人だけヴィヴィの方を見てる男はいるけどさ。筋肉に満ち溢れた男が。

「……いいさ。話してやるよ。ただ、あんまり面白くは無いと思うぜ？」

苦々しい記憶だが、話してみるのも悪くないかもしれない。
ま、始めは……怪我が治ってすぐに起きた事件の事だな。

第１０話　ゴーホーム　※９／２３更新分（後書き）

あとがき

俺の中のゴーストが囁いた。（０ｗ０）＜ウェーイ！！

「男の子なら誰もが持っている正義の光！　それがヒーローだ！」

とか言ってみたいよね。

いや、言えないからこそ小説内のキャラクターに夢を託すわけだけど。

ゲイルさーん！　待ちゲイルに徹しないからー！　……あぁ、違うキャラか。

ってアニメすげえええええええ！　エフェクトもすげえええええ！

つかフラグばっかじゃねえか！

アレだな。下半身とかなんとか色々と楽しみだ。……ユキでも筋肉達磨を天高く蹴り上げられるレベルか。

七夜もどきの中二殺人貴とアーチャーみたいな中二与一君で書ける可能性も……夢がヒロガリングだね！

身軽さならキャップ、パワーなら岳人。

勝負をしたら……岳人の攻撃が当たれば岳人の勝ち、当たらなければキャップの勝ち。

大和は百代の攻撃のおかげで見切りなら結構なものだし……あ、モロ、お前は――

いや、モロはみんなの癒しなんだよ！　囚われのお姫様「卓代」ちゃんなんだよ！

最後に一言。「お前のような一年がいるか！」

Ｓも知ってるネタがわんさかで面白くなりそうですな。そしてデッドエンドオオオオオ！

第三十五話　～プロローグ～　『川神』にて。

「ふはは！　今の私にはそんなもの効かないぞ宗介ーっ！」

「相変わらず出鱈目な……だが俺も本気だっ！」

水上運動会が終了した後、宗介は思い切り暴れられなかった鬱憤を晴らすかのように川神院で暴れていた。
正確には暴れているのではなく鍛錬に打ち込んでいた、の方が正しいのだが、訓練相手が百代である時点で激戦は必至。まるで暴風が吹き荒れているかのような模擬戦となっていた。
ただ、本気を出して戦っているのは対戦相手である百代も同じ。
ドラゴンボール並みの空中戦をこなしながら大量の気弾をばら撒いた宗介へと、その全てを回避した百代がぐんぐんと近づいていった。
回避する際の先読みや機動性、反応速度はどこぞのニュータイプもびっくりなものだ。

今のところ、彼らの戦いは互角に見える。
それは当然だ。彼ら二人は戦い、共に強くなった。もしも彼ら二人が2，3ヶ月前の自分と戦ったなら、圧倒とまではいかないだろうが確実に勝利して見せるだろう。二人ともそれくらい強くなった。
初めは殺し合いに発展しかけた決闘の後で、そして決着を付ける決闘の最中にも、飛躍的にレベルアップを遂げた。
更に彼らが付き合い始めてからは、一緒に鍛錬をする事で強者に飢える事も無く互いに互いを高めあった。
今もそうだ。戦いを通して強くなり続けている。どちらともが溢れんばかりの武の才を溢れさせ、それを昇華させていく。

「どうした宗介！　そんなもんじゃないだろう！」

百代は無数の気弾を縦横無尽に回避し、思い切り勢いを付けて宙を蹴った。
拳を構え、一直線に上空にいる宗介の元へとかっ飛んでいく。

「ふ。茶番は終わりだ！」

怪しく笑顔を浮かべた宗介がそんな事を言い放ち、百代が迫りくる中で両の拳を握り締める。
そしてあと僅かで百代の拳が届くといった所で、握った両の拳を胸の前で思い切り打ち鳴らした。同時に空気の破裂するような音が鳴り響き、突進した百代が真反対の方向へと吹き飛んだ。宗介が発生させた衝撃派が百代を吹き飛ばしたのだ。
それでも空中で体勢を立て直し、地面へとあっさりと着地してしまうのだからたいしたものだ。

「それは反則だろう！」

「反則なんてもんは存在しねえ！」

百代を追って地上へと降りてきた宗介は腕を組んで高笑い。
それを見ていた百代も怪しい笑みを浮かべると……

「それじゃあ……私もだっ！」

「何ぃ！？」

左手を前に突き出し、それに比例するように右手を思い切り振りかぶる。
煌々と光り輝く白銀の拳が周囲を圧倒し、その威力の高さは離れた

宗介にも伝わった。

「流星拳っ！」

「なるほど言い得て妙……っつか、マジで隕石レベルの熱量とエネルギーだから笑えないんだが」

「反則とは言わせないからな！」

「根に持ってやがるなてめえ！」

実は宗介の技が空気圧を伴って顔面ヒットした事を根に持っていた百代、宗介が身構えようとするのと同時にその拳に秘めた力を解き放った。

宗介の言葉通り、小型隕石もかくやという勢いとエネルギーを持つパンチを前に、百代が地面を抉りながら突き進んでいく。今更ではあるが、こんなに修行場所を荒らして大丈夫なんだろうか、人のことを言える立場ではないが宗介はそう思った。

「つっても今は目の前のこれだよな……」

百代の放った流星拳はどこぞのペガサスな技では決して無いが、とんでもない威力とスピードだった。

それでも止めきれないことも無いのだが、まともに受け止めれば宗介はともかく川神院が危ないだろう。止まらない百代と爆発被害的な意味で。

宗介は仕方が無いのでなんとか正面から受け止めることにした。ダメージは受けるにしても、そこまで重傷にはならないだろう。

「くらえ宗介！」

「大人しくくらうかこのバカ！」

宗介が右の拳を構えれば、百代とは正反対の黄金に拳が光り輝く。
そうして地を蹴り、百代へと右の掌を開いた上体で突っかかる。
百代の白銀の拳を、宗介が黄金の掌で包み込むように受け止めた瞬間。

辺り一帯はまばゆい光に包まれた。

＝＝＝＝＝＝

「あー、そこじゃない。もうちょい下だ」

「……チッ、しゃーねえな」

うつ伏せになって指示を出す百代に、そのすぐ横に座って指示に従う宗介。
今日の模擬戦の結果は百代の勝ちという事で、しかたなく宗介は百代の言うことに従っていた。ちなみにその勝敗を決めたのは傍で見ていた川神鉄心だったので、宗介も文句は言いながらそれに従うことにした。
勝敗を分けたのは最後の技の威力と基本技の応酬だったのだとか。

「よーし、気持ちいいぞー宗介ー♪」

「マッサージなんか要るのかお前？　いらんだろ？　どこも凝ってないぞ、むしろふにふにだ。ほら」

「ひゃあっ！？　ってお前どこを触ってるんだ！」

「お前の尻」

何故か百代相手のマッサージ行為を要求された宗介は役得を存分に満喫していた。

言われたとおりに腰の辺りを揉んでおきながら、文句を言って尻を揉むあたり基本を心得ている。

そもそも百代には疲れをとる手段として瞬間回復があるのだから、本来こういうものは必要ない。宗介が文句を言うのもそれを知っているからこそだ。

とはいっても、その必要の無い行為を求められているという事自体は嬉しいのだろうが……素直じゃない男だ。

結局そのせいで百代に殴られても、あんまり怒ってないんだから重傷だ。

「ってーな全く。別にいいだろ？　これくらいは」

「いいわけないだろー。どれだけ破廉恥だ私は」

「別にそういうんじゃ無いと思うけどな」

やれやれと肩をすくめて百代から離れた宗介に続き、うつぶせになっていた百代も体を起こした。また尻でも触られたらたまらないとでも思ったのかもしれない。

そのまま二人は少しだけ移動して、冷たい麦茶や菓子が用意してある卓袱台の前へと座り込んだ。とぽとぽと湯のみに麦茶を注いで、

一気にグイッとそれを飲む。
ぷはーと親父くさく息をはいた後、退屈そうに卓袱台へと肘をついた。

「世間はＫＯＳで賑わってるってのに、出場禁止とはなぁ……辛いぜ」

「仕方ないだろう。前までは無名だったかもしれないが、今のお前は私に勝ったという実績があるんだからな」

現在、世間はＫＯＳという催しの開催によって賑わっている。
ＫＯＳ――キングオブソルジャーズは九鬼財閥主催の武道大会のこと。世界中から名のある戦士や野に埋もれている戦士たちが集まり、その力を競うという名目で行われる。
参加形式は４人１組。開催場所は川神と七浜。武器などの制限無し。一般人にさえ被害が及ばなければほぼなんでもありと言ってもいいだろう。
その優勝チームには５００億という大金と、普通なら得ることもできないだろう名声と名誉が付いてくる。
これだけのお膳立てをされ、得るものの大きさを知った世界中の戦士たちは、きっと我こそはと思って大勢参加してくるのだろう。

「あの時に目を付けられてたからなぁ……百代と戦ったから余計にか。惜しい事したぜ」

しかし、川神鉄心やルー師範、川神院の師範代クラスである者たちには参加資格が無かった。もちろん百代や宗介にも。
参加されるとバランスが崩壊して大会として成り立たなくなってしまうのだから仕方ない。
宗介が若干不機嫌なのはそういった理由だ。せっかくのお祭り、そ

れも武道大会に参加できないなんてとんでもない苦痛だ。だからというわけではないが、最近は川神院に入り浸ってこうしてだべっている毎日だ。

「ところで、武道四天王の残りの一人ってのは見つからないのか？」

「ん？　ああ。橘天衣を倒した奴はまだ見つかってない。と言っても――」

「む、その先は言わなくていいぞ。ひとまず今後の標的は鉄乙女だ。そうすりゃ武道四天王3人抜きになるからな。ほら、全員倒したらなんか称号もらえたりしそうだろ？」

「……ゲームやりすぎだろ。そりゃ確かに前代未聞だと思うが」

ＫＯＳに参加できないとわかってからの宗介の行動は早かった。残る武道四天王である鉄乙女とコンタクトを取り、決闘を申し込んだのだ。その際、宗介が既に九鬼揚羽や川神百代を倒していると言う実績は非常に役に立った。そのおかげで決闘の約束もしっかり取り付けることができたのだ。

一応その後も考えて橘天衣を倒した武道四天王候補の人間も探しているが、彼にとってそれは二の次だ。まずは身元もわかっている武道四天王、鉄乙女が倒すべき相手である。

「乙女さんは強いぞー。私に勝ったからって油断して負けたら許さないからな」

「ハッ！　当然だろ？　毎日お前と修行してるんだ、負けるわけがないね」

宗介は自信満々にそう言って、菓子を口に放り込んだ。
ＫＯＳに参加できない彼らにとっては、差し迫ってそれが一番のイベントだろうか。

「ところで百代、あいつらはＫＯＳに参加するのか？」

「あいつら……ああ、キャップ達か？」

「さすがにレベルを考えれば危ないかもしれんが、あの風間ならノリで参加しそうだと思ってな」

くくくと笑いながら思い浮かべるのは風間翔一の事だろう。クラスでも特に目立つ男なだけあって、宗介の頭の中にも色濃く残っていた。
というか、彼らは結構仲が良かったりする。どっちもあまり深く考えて行動しない……というわけではないが、普通にウマが合うというかノリが合うというか、川神市内の美味しい店を探索する際にもクマちゃんも一緒に皆で歩き回ったりしている。
一応、宗介も友人のことが心配ではあるらしい。

「キャップ達は参加するって言ってたぞ。ワン子たちも参加するらしいし」

「羨ましいねぇ……お前も参加したかったんだろ？」

「そりゃーそうさ。でも、今はお前がいるから満足してるし。そこまで飢えてるわけじゃないんだ」

「……嬉しいこと言ってくれるぜ」

若干照れてそんな事を言い、もう一杯と冷えた麦茶を呷る。
そんな様子を見ている百代はニヤニヤと笑っているが、彼女自身も自分の言ったことに照れているのは確かだった。
今日も仲の良い二人は普段どおりの日常を過ごすのだった。

＝＝＝

暗い部屋の中で深く椅子に腰掛け、思案顔で彼はつぶやいた。

「ＫＯＳに参加する以上、多少の怪我も計算に入れないといけませんね」

『そうか？　クライアントはお前さんだ。なんなら参加するのをやめちまえばいい』

電話越しの声を聞いて、冬馬は軽く肩をすくめる。
釈迦堂という男と対話していても、余裕綽々のその態度は変わらない。

「そういうわけにも行きません。こういうイベントはむしろこちらに有利ですからね」

『イレギュラーでもか？』

「はい」

電話の向こうで釈迦堂が笑い声を漏らした。
不確定要素をも計画に盛り込み、尚も悪に走るというのだから面白い。
釈迦堂が彼らの計画に参加したのも、こういった危うさの上に成り立つ計画に興味があったからだ。
とはいえ、今では彼自身の目的や興味も様々な物に移っているが。

「ところで、前に釈迦堂さんが連れてきたあの子ですが……」

『あの嬢ちゃんか』

「ええ。川神学園に在籍していますし、周りに強さを隠す術には長けているので大丈夫そうですよ。協力してくれるそうです」

『そりゃいい。うちの弟子たちの刺激にもなるだろ』

釈迦堂の脳裏に、自分と戦った少女の姿が浮かぶ。
なにせ『釈迦堂の腹を真一文字に掻っ捌いた』相手だ。覚えていないはずがない。
それで死なずにすぐに怪我を治した釈迦堂もだが、すぐに直すことができてしまうほどに綺麗な太刀傷を作り出した少女も少女だった。
結果的に少女の意識を吹き飛ばした釈迦堂の勝利ではあったものの、状況を見れば相打ちとなんら変わりはないだろう。

「彼女も中々に可哀想な子だ。釈迦堂さんも知っているでしょう？」

『あぁ。あそこの爺さんが死んだ後はごたごたしてたらしいからな。あの強さでも跡を継がせてもらえなかったのは――』

「彼女の抱える問題が致命的だから、でしょう？」

『ま、そうだろうなぁ。こっちとしては強けりゃいいんだけどよ』

釈迦堂の笑い声を聞いて、冬馬もほんの少しだけ笑う。

確かに釈迦堂の言うとおり、彼にとっては駒となる人間が強ければいいのだ。その内面にまでかかわる必要はないし、そんな余裕などない。

情に流されやすくなった気がするのは、風太に感化されたからだろう。

それはそれで、冬馬にとっては嬉しく思える事なのだが。

「とりあえず、釈迦堂さんはそのままＫＯＳに参加してください。あなたの提案に、彼女も乗り気になっていました」

『そりゃあいい。なんかあったらそっちから連絡してくれ、じゃあな』

携帯をゆっくりとしまい込み、冬馬は椅子から立ち上がった。

九鬼財閥主催のＫＯＳ、冬馬たちの計画するカーニバルにとってのイレギュラー。悪い点も良い点もあるのが救いだろう。

悪い点というのは強者が集まるという点で、駒として用意している不良たちがまったく役に立たなくなってしまうという事だ。

良い点は人の目を簡単に他へと向けることができるということだ。暗躍するための隠れ蓑になるとも言える。

もう一つだけ利点はあるが……それは冬馬も未だに半信半疑で、彼一人しか知らない事だ。それが自らにとって悪い方向へと転がることは断じて無いと言い切れるので、冬馬はそれのことは考えないことにした。

「……さて。仕込みは上々ですが、準や風太のように強くない私で

はＫＯＳに出れませんし、少し退屈しそうですね」

不良を束ねる板垣竜兵の存在があるおかげで、ドラッグの浸透も手早く確実に行えている。

一般人や川神学園の生徒たちにもだんだんと使用者が出てきているほどだ。対策は取られ始めているが、もう遅い。冬馬にとって十分すぎるほどの効果を挙げている。

ＫＯＳ告知と共に治安の悪くなった街のため、ＫＯＳによる被害の減少のため、という名目で九鬼が警備ロボを配備したが、それに対して仕込みを行う準備もできている。

風太の提案で追加した案も、冬馬がしっかりと練って計画に追加している。それ次第では、というかこの計画発足時点で敵に回ることが確定していた風間ファミリーに対抗する手札も既に揃えてある。

冬馬が行う裏方の主な仕事は既に終わっている。

しかし、しいて言うのなら――

「風太には、そこそこにがんばる様に言っておきましょうか」

目立たないという意味でも。

もう一つの意味でも。

冬馬はもう一度携帯電話を手に持った。

＝＝＝

「ああ、ついに、機会がやってきたのですね」

携帯によるとある人物との会話を終了し、少女は目を閉じてそう呟いた。
傍らに置いてあった彼女の刀『流星』を手に取り、左膝を立てて立ち上がる。
『彼』は彼女にとあるチームに加わってＫＯＳに参加してもいいと言う。あくまで頼むのは『彼』の方だと言ってはいたが、彼女のほうこそ感謝してもし足りないほどだった。
ＫＯＳへ参加しようにも、組む相手がいない彼女にとっては絶好の機会。

『彼』はそれを彼女に与えたのだ。

薄い胸の前でそれをギュッと抱き締め、己の未来に思いを馳せる。
過去には何も無いから。
己をこの地へと追いやった家に対して、彼女が思うことは何も無いのだ。憎しみも、悲しみも。
……いや、唯一つ思うことといえば、自分が強いかどうかという事だけだろうか。既に彼女の剣は次の後継者を越えているのか、現在の継承者を越えているのか。
それとも結局、自分は弱いままなのか。

彼女は過去に釈迦堂という男を斬った。重傷を負わせたが彼女は負けた。
勝利には何が足りなかったのか。それを思っても意味は無かった。
流派を名乗って負けるなど、それも流派の業の継承者でもない者が勝手に戦うなど、許されるようなことではなかった。戦った相手が誰であるかなど関係は無かった。
そして彼女は川神学園へとやってきた。家から離すためなのか、せめて自立できるだけの強さを得させるためなのか。
どちらだとしても、彼女には関係の無いことだった。

「必ず、ハッキリさせます……！」

彼女は無造作に、それでいて綺麗に刀を抜いた。
鞘を左手に持ったまま、右手は刀を振りぬいて横へと開いた形に。

音も立てずに、大きな岩が僅かに揺れた。

本当だったら音もしないはずだったから、彼女はほんの少しだけ不機嫌な表情を浮かべた。

第三十五話　～プロローグ～　『川神』にて。（後書き）

あとがき

いよいよ盛り上げどころですねぇ。
腕の見せ所でござる。

第三十六話　ＫＯＳに向けて（前書き）

前夜祭みたいなもの

第三十六話　ＫＯＳに向けて

「今が選択の時だ、と。覚悟はいいかい？」

「当然。今の私に斬れぬものなし、だよ」

笠を被り、全身を黒布で覆った人影が釈迦堂の言葉に答えた。
その人影が黒布の中から覗かせる左手には、何の飾りもついていない鞘が握られている。
そして右手には、今しがた振りぬいたと思われる一本の刀が握られていた。

「素晴らしいよ釈迦堂君！　君の提案には驚いたが、これを見れば納得だ！　彼は君の後釜かね？」

「ま、そんなもんでさぁ。チームに入れるには不足なしって所でしょう」

目深に笠を被り、顔を見せないその人物の頭を釈迦堂がポンポンと叩く。
そんな釈迦堂の横に立ち、目の前の光景に歓喜の声を上げるのは野党幹事長の蘇我梅雪。ＫＯＳに参加する釈迦堂と同じチームであり、彼を雇っている人物である。
蘇我のチームは本来なら、釈迦堂の他にサイコクッキーと呼ばれる九鬼のロボットを国税をつぎ込んで強化した専用機を2体チームに加える予定だった。

だったのだが、釈迦堂が紹介してきた人物を見て考えを変えたようだ。さすがに、郊外にあった廃ビルを真っ二つにし、釈迦堂と普通に戦ってみせる人物を見れば仕方ない事だろう。

「ふむ。それじゃあ彼にはサイコクッキー1号の代わりをお願いしよう」

「地味に経費削減ですわな」

「ははは、その通りだな。では、よろしく頼むよ」

「御意」

こくりと頷いたその人物に気をよくし、蘇我は笑い声をあげる。しかし、横に立つ釈迦堂が違う意味での邪悪な笑顔を浮かべていることに彼は気づかない。

目の前の人物が笠の下で浮かべる表情にも、気づくことはない。

戦いは、ＫＯＳは、いよいよ始まろうとしていた。

＝＝＝＝＝＝

多馬川の横の河川敷。

そこに黛由紀江とその友人がいた。

友人といっても、最近友となった不死川心ではない。

「由紀江ちゃんの友達にも、感謝しなきゃなぁ」

「気にしないでください総理さん。友達なんですから！」

「友達は助け合うもんだぜー」

松風ボイスで言った言葉に、総理と呼ばれた男は笑みを浮かべる。
総理と言うのは、別に何かの比喩とかそういう意味ではない。
この特徴的な声をした男は、本当の意味での総理大臣なのだ。
どうしてそんな総理と黛由紀江が友人なのかといえば、この河川敷で互いに助け合ったからとか何とか。始めは友達ができなかった由紀江が、河川敷にいた総理と知り合ったのが始まりだ。その時は総理も色々と悩み事が遭ったようで、互いに互いへ助言をしたらしい。

「ところで由紀江ちゃんに聞きたいことがあるんだが、いいかい？」

「？　はい、私に答えられることでしたら」

しばらくＫＯＳについての話をしてから、総理が由紀江にたずねた。
何を聞くかと思えば、それは最近の川神では少しばかり有名で、川神鉄心に聞かされていた総理が気になっていた二人のこと。

「大神先輩は、今度は別の武道四天王に挑戦するって言ってました」

「おいおい、マジか。まぁ川神院で姿だけは見たことはあるが、そこまで考えてるとは思わなかったぜ。野心に溢れすぎ、という感じもするけどなぁ」

「でも、モモ先輩と一緒にご飯を食べにきた時は、すごく落ち着いた雰囲気を感じましたけど」

「んまぁ、俺は話を聞いただけだからな。実際に見て聞いた由紀江

ちゃんの方が正しく見てるはずさ」

川神百代は、そして川神院の存在は、世界でもとても有名だ。
総理が元はこの川神にいたという過去も含め、結構気になっていたのだろう。それも、世界最強と名高い川神百代が敗れたと風の噂で聞けば、それを破った相手のことも気になって仕方ないのも当然だ。
そして黛由紀江から聞いた事は、予想外ではあったがとても良いものだった。
総理は川神鉄心から大神宗介の事は聞いているが、実際に同年代がどう思うのかはわからなかったので、ここで由紀江に聞けたのはちょうどよかったと言える。
たとえ川神百代の幼馴染で、川神百代よりも強いとしても、人として素晴らしいとはわからないのだ。それも杞憂であったとわかった総理は安堵した。

「まぁ、由紀江ちゃんが言うなら心配ないな」

「はい！　大神先輩はいい人ですよ」

大神宗介は、百代と一緒に何度となく由紀江のいる島津寮を訪れている。百代と一緒だからなのかもしれないが、彼は前よりはずっと社交的になった。島津寮の皆とは既に仲がいいし、たまにお菓子をもってきて皆でゲームで遊んでいたりする。
宗介が元から遊ぶのが好きだったというのもあるが、やはり百代と付き合いはじめて気が抜け、影響を受け始めたというのが大きいだろう。
百代自身も前よりはずっと大人しくなったし、競い合い支え合う相手ができたというのはやはり大きいのだろう。
ただ……ＫＯＳが始まるこんな時期に新しく戦うための相手を用意しようとしているのは、やはり大神宗介も川神百代も戦いを求める

武人だからなのだろう。
それはきっと、変えようの無いことなのだ。

「おっと、ずいぶんと長く話しちまったな」

「あ、そうですね」

「悪いが、色々と忙しいんでな。由紀江ちゃん、またな」

「はい。総理さんもお仕事頑張ってください」

ＫＯＳを控えた今でも、総理は毎日忙しい。
こうやって仕事以外に時間を使えるのは、それだけ総理が優秀だからだろう。
それでもそこまで時間が取れるというわけでもなかったのか、色々と話してしばらく経ったので、総理の迎えである黒い車がやってきてしまったのだ。
総理は由紀江に別れを告げると、その黒い車に乗って帰っていった。
それに続いて由紀江も、島津寮へと帰っていった。

＝＝＝

ここは島津寮。
島津岳人の母の麗子が寮長を務め、経営している寮である。
外もそろそろ暗くなってくる晩御飯を終えた時間帯、そこにいた面々はＫＯＳのことについて話していた。

「じゃあ、クリスはマルギッテ達とチームを組むのか」

「ああ！　マルさん達や父様が一緒に参加してくれるんだ」

大和の問いに、クリスは大きな声で答えた。

ＫＯＳが始まれば競争相手になるため、今からでも情報を集めておこうという腹だろう。さすがに軍師と呼ばれるだけはある。ちなみに大和と同じチームにはこの場にいる黛由紀江もいるのだが、さすがに由紀江にもそういう情報収集を求めるのは酷だろう。なにせ友達を作るのにすら四苦八苦する子だ。

まぁ、その分以上に大和が情報収集を行うから問題ないだろう。それに、ここは仲間内なんだから情報なんて集めようとしなくても勝手に集まってくるのだ。

「キャップ達も参加するし……おまけに、何故か大神のメイドまで連れて来てるし」

キャップがＳ組から引っ張り出してきたのは、大神宗介のメイドのヴィヴィアンだった。

この寮にも度々顔を出しているからかもしれないし、町で買い物しているヴィヴィアンとよく顔を合わせるからかもしれない。あるいは気軽に誘えそうな井上準が既に仲良し４人組でチームを作っていたからか。

ヴィヴィアンの実力が忍足あずみレベルだとすれば、戦力バランスはともかくかなりの不確定要素になりうるだろう。

「ワン子や京も別で、ゲンさんまで他でチーム組むみたいだしな……」

大和がやれやれと思ってもその事実は変わらない。ワン子達はウメ先生をチームに誘えたようだし、ゲンさんは親代わりの宇佐美がチームに入っている。もちろん、ウメ先生はともかく宇佐美の強さなど大和は知らないのだが。
それに、メリットだってちゃんとあるのだ。身近に強力なチームが生まれたことを知ることができたし、その能力などの情報も初めから知識にあるのだから。
大和のチームだって弱いわけではないのだから、上手く戦えばどのチームにも勝てるだろうと大和は思っていた。今のところ知っているチームには、だが。

「ところでゲンさん、最近は親不孝通りの方がどうなってるかわかる？」

「ん？　あぁ、九鬼の警備ロボが配備されてから親不孝通りも静かになってる。効果大だな」

「そりゃよかった」

「……今は大人しくなってるだけかもしれねぇ。あまりあっちには近づくんじゃねぇぞ」

「わかってるよ」

やっぱりゲンさんはツンデレだなぁ、などと思いながら大和は返事を返した。
結構前から親不孝通りの治安は悪くなってきていたのだが、ＫＯＳの発表と同時に九鬼が手配した警備ロボが街中に配備された結果、かなり治安が良くなっていた。
おそらくは九鬼英雄が、親不孝通りの状態を見て対応したのだろう。

開催地は七浜と川神の二つの町なのだが、警備ロボの配備の比重は明らかに川神に偏っていた。
出回り始めていた『薬』はほとんど見かけなくなり、柄の悪い連中がうろつくことも少なくなった。それでも一旦蔓延した薬はそう簡単には消えないし、柄の悪い連中だって安全な暗がりに潜んだだけだ。それでも、こうして一回食い止めたということは大きいだろう。

しかしいくら大和でも、川神に黒い影をもたらしている張本人がＫＯＳに参加しようとしているとは想像することもできなかった。

この先ＫＯＳで、一体どんな戦いが待っているのか。
それはまだ、誰にもわからない。

＝＝＝

「さて風太」

「おう？」

冬馬が、有り余った元気を発散させていた風太へと話しかけた。
風太は多馬大橋の手摺りの上で逆立ちをしていたのだが、すぐにやめてピョンとその場に降り立った。
再確認するかのように、冬馬は風太へと問いかける。

「ＫＯＳでの風太の役割は大変です。それでも、大丈夫ですか？」

「まかしとけぃ！」

グッとガッツポーズをする風太。彼はいつも通りの笑顔を浮かべていて、それを見た冬馬の顔も緩む。

冬馬達は世界中の強者達が集まるＫＯＳに参加する。学生達だけで参加するというのは不似合いかもしれないが、冬馬たちの計画のためには仕方ない。いや、むしろ御誂え向きのイベントであるとも言えるだろう。おかげで彼らに突破すべき条件が、いくつもクリアしやすくなったのだから。

冬馬自身は戦えないが、彼の３人の友達はとても強い。冬馬は自意識過剰なわけではないが、彼らが半ば自分のために強くなってくれたのだろうということを知っている。

友達の為であれば、一緒にいるためであれば、きっと彼らは自分のためになんでもするのだろう。

冬馬の心は危ういところで揺れる、一歩踏み違えれば真っ逆さまに落ちていくような闇の狭間にある。そうならざるを得なかったし、そうあれと思って生きてきた。そう生きてきて尚も冬馬が冬馬でいられるのは、冬馬だって彼らと同じ気持ちだったからだ。

友達と一緒なら、どこまで落ちても怖くない。

「どうした？」

「……いえ。いよいよＫＯＳとアレの日です。準も、ユキの事もお願いします。残念ながら、私は誰かを守れるほど強くは無いですからね」

「うん、大丈夫さ。俺はもう二度とミスはしない」

風太にも、思うところはあるのだ。

彼の志す『正義』を守れなかったからこそ、大切な友達を一度でも

守れなかった過去があるからこそ、余計に『友達』に執着している今がある。
もう絶対に友達を悲しませたくない、一人にさせたくない。その思いが、ずっと昔のあの日から彼の心の中にはあった。

「安心してくれよ冬馬。俺は躊躇わないさ」

人気の少ない多馬大橋の中央あたり、綺麗な夕日を背負って風太が言った。

「風間ファミリーは『悪』だ。川神百代だろうがなんだろうが、強い奴は全部俺が倒すから。だから、安心してくれ」

＝＝＝

おまけ

ＫＯＳチームメンバー予定表
（現在判明済み）原作見ていればわかる描写はした……はず。

総理チーム

・総理

・黛由紀江
・不死川心
・直江大和

生徒と教師＋αチーム

・椎名京
・川神一子
・クッキー
・小島梅子

風間チーム

・風間翔一
・島津岳人
・師岡卓也
・ヴィヴィアン・バゼール

野党チーム

・野党員
・釈迦堂形部
・サイコクッキー2号
・謎の剣豪

軍人チーム

・クリス
・マルギッテ
・マルコ
・フランク・フリードリヒ

おっさんその他チーム

・宇佐美巨人
・源忠勝
・忍足あずみ
・メイド（ステイシー）

友達チーム

・一条風太
・葵冬馬
・榊原小雪
・井上準

第三十六話　ＫＯＳに向けて（後書き）

あとがき

言葉で攻撃する王様野郎（都城＋カンフーハッスル）とか、圧倒的速度で移動するマッハ女（ラディカルグッドスピード＋光速の女神）とか、

ちなみに、得体の知れない求道者ＸＺは登場するかもしれない。

「全てを超える真理！　それは愛！　素晴らしい！　素晴らしい！　素晴らしい！」とかな。

やりたい事はたくさんあったけど自重。

さあ！　道理なんか脇道へ投げ捨てろ！

無理と無茶を通して全てをぶっ飛ばしていくぜ！

第三十七話　ネクストこんてぃにゅー

ＫＯＳの開催日当日。
朝っぱらからかなり賑やかになっている七浜市に、各地から大勢の猛者が集結していた。腕に覚えがあって優勝を狙う者も、自分がどれだけ強いのかを知るために参加する者もいる。もちろん、優勝賞金である５００億という途方もない大金を狙っている者もいる。
ＫＯＳに参加する選手は、各人様々な思いをもっている。小さな思いも大きな思いもそれは変わりない。

「ふむ」

今ここに立つ一つの『それ』も、そんな思いを持つ者たちの一人だ。
とある理由によって世界の表舞台、裏舞台からも消えていた『それ』は、こうしてＫＯＳに参加するために戻ってきた。
そう、全身を包帯に包んで、その姿の一切を隠したままで。

「しかし、随分と懐かしい。こうして各地の猛者が集まる状況でなければ、とても戻っては来れなかっただろうな」

騒がしさを増す二つの街。そこに集まった強い者たちに紛れる事で、『それ』は『それ』であると認識されずにすんでいる。
いや、そもそも『それ』を『それ』であると知っている人間がいるかはわからないが、『それ』に気づいた奴が『それ』をタダの人間でないと思う事は確かだろう。
……マァ、『それ』に気づける人間などいるはずも無いのだが。

「ふ、しかし。なんにせよここに残りの５つが――」

「イッエーイ！」

「グッフォアァァア！」

と、モノローグに浸っている間に無駄にかっこつけていた『それ』ことミイラ男が、横から飛んできた赤い幼女に吹き飛ばされた。
腹部に受けたタックルによって体がくの字に折れ曲がっているが、たいしてダメージは無さそうだ。
せいぜいが口と鼻から血を流して地面に這い蹲る程度である。
げはっ、がはっと地面に四つん這いになって苦しむミイラ男だが、そんなミイラ男に慈しむ様な声をかける存在が現れた。

「おぅ、まい、ごっど、だいじょうぶですか？」

「……その棒読みと、俺の頭を踏みつけている足は何なんだろうな」

「ソンナコトナイヨー」

「まぁいい。どっこいしょ」

頭の上に置かれた靴をどかし、爺臭い言葉と共にミイラ男は立ち上がる。
もちろん、程よい棒読み具合で失礼なことをした青い幼女にはお仕置きを……するはずもなく、ポンポンと頭を撫でるようにしてスルーした。
意外と優しいミイラ男。

「しかし実はロリコンだからなのかもしれない」

確かに有り得る話だ。

ロリコンであるとすれば、そのミイラ男が女の子に何かをされても怒らないのも当然だ。
しかし、頭を踏んだ相手の頭を撫でるという行為は若干マゾヒストのような気も――

「てめぇは何に介入してんだ」

「天の声ー」

「……」

「うぃっ！？　いたい～！」

ミイラ男は今度こそ、黄色い幼女の頭に躊躇無く拳を振り下ろした。
それもロリコン呼ばわりは許せなかったのか、かなりの勢いだ。具体的には、黄色い幼女の足元の床が罅割れるくらいの勢いである。
といってもそれくらいでは大した衝撃なワケでもないので、幼女が頭を抑えて涙目になる程度の効果しかなかったが。
それでもなんとか幼女軍団の暴走は止めることが出来たのに満足したのか、ミイラ男は再び街の方へと意識を向ける。
この街のどこかに、彼に足りない穴を埋めるための欠片がある。それを感じ取り、己に訪れる未来を考えれば考えるほどに、彼は思うのだ。

「どうやら俺は、俺を見ているどっかの誰かによっぽど好かれているみたいだな」

クククと笑い声を上げながら、ミイラ男と幼女軍団の４人組は街へと消えた。

＝＝＝

「む！」

「宗介、どうした？」

「いや……これは……」

「だからどうしたと言うのだ！」

やたらともったいつける宗介の首を、ガクガクと百代は揺さぶる。
当然、百代には特に感じることなど無かったのだが、横にいた宗介がやたらと驚いているので気になってしょうがないのだ。

「これは……まさか……」

「なんだ！？」

「よもぎならぬ、わさびイン餅だと！？　なんてこった……こりゃ食うしかねぇ……」

アホな言葉に宗介の視線の先を見てみれば、そこには確かにそんな名前の餅が売っていた。
誰が買うんだと百代は思ったが、目の前の自分の彼氏が興味津々なのを見てため息をついた。

「おい」

「なんだ。俺は今猛烈に感動している。わさびと餅のコラボにな」

「どうでもいい。というか、お前は今日何しにきたかわかってるか？」

「当然だろ？　ただ自分が手を出せないから微妙に退屈なだけだ」

パクリと餅を口の中へ放り込みながら宗介は答える。

まぁ仕方ないだろう。

これだけのイベントを、ただ見ていろと言うのだから。

そんな2人がどうしてここに来たのかといえば、ＫＯＳに参加するためではなく、そのＫＯＳでとある役についてくれないかと言われたからだ。

その他、川神鉄心やルー師範代も参加するその役は、ルールを侵した参加者に罰を与えるという役割だ。

具体的には、実力行使を行ってＫＯＳを強制的に失格にさせるというわけだ。

「にしても、ビシビシ感じるぜ。こりゃあ見てるだけでも随分と楽しめそうだ」

「そうだな。元からこの土地にいた者も多いが、外からやってきた強者も多い。ふふふ、キャップや大和たちがどれだけの結果を残せるか楽しみだ」

「だなぁ。ま、あいつ等は運も良いし、意外と長く残りそうな気もするけどな」

ＫＯＳ参加者の集合地点である七浜公園に向かって二人は空を飛びながら話を続ける。
正確には空を飛んでいるのではなく、ただ宙を蹴った衝撃で宙を舞っているだけなのだが、たいして変わりは無いだろう。
どれだけ強く、どれだけ自分の力を制御しきれているのか。前よりもずっと簡単に、力づくではなしに宙を舞う二人。

「なぁ宗介」

ちょうど眼下に公園が見え、参加者であろう人の群れが見えたところで、百代が宗介に話しかけた。。
その口元には抑え切れなかったという風な笑みが浮かんでいる。

「どうした？」

「楽しみだな」

「……あぁ、そうだな。楽しみだよ」

唐突な言葉にも、意味を理解してはっきり答える。
何に対しての言葉なのか、複数の意味を含んだそれも、同じものを感じている彼ならば理解できる。
見ることもまた戦いとも言うが、それを指しているわけでもない。
こうして、戦いの気配を感じるとうずうずする。その渦中で友が戦おうとしていて、その戦いと頑張りを見ることが出来ると思うとどきどきする。その中で生まれるドラマを期待してわくわくする。新しい強者の発見に繋がるかもと思うとぞくぞくする。
そのどれかかもしれないが、その全てかもしれない。

「さーて、じいさん達も見えてきたし、そろそろお仕事モードに入

るか？」

「あぁ。揚羽さんに迷惑をかけるわけにもいかないしな」

そう言うなりのんびりと話すのは中止して、２人は仕事モードに切り替える。

遠くの方から微妙に視線を感じるのは、到着に気づいた九鬼揚羽や川神鉄心のものだろう。開催者である揚羽はともかく、鉄心の方はご苦労様といったところか。

ルー師範代も一緒にいるあたり、あの人の律儀さを感じさせる。

このメンツを見て、わざわざルール違反なんてする奴はいないだろう。世界最強クラスの戦力がこれだけ集まる事自体が珍しいのだ。。

宗介としては、こうして開催者側のスタッフで戦ったほうが世界最強決定戦になるんじゃないかとすら思うくらいだ。

「ま、いっか。凡才がどれだけ頑張るってのを見せてもらうとしよう」

努力をしろと自分に啖呵を切った少女を思い浮かべ、彼はくくくと笑い声を漏らした。

そんな、空を舞う二人の遥か下。

白い少女と輝く頭が目立つチームにて。

「なぁ、若」

「……どうかしましたか、準。何か問題が？」

いつもとは違う冷たい声音で話し合う二人。
その横でいつも通りな榊原小雪を他所に、輝くハゲである井上準はもう一度葵冬馬に話しかけた。
今度は、普段と同じ呆れたような声で。

「シリアスな雰囲気は守りたいんだがよ。こいつはどうしたんだ？
完全に腑抜けてるぞ？」

そう言って準が指差すのは、彼らの親友であり仲間である一条風太。
とんでもなく気合が入っているでもなく、むしろそれとは真逆の状態となっていた。
簡潔にいえば……

「たてー、たつんだイチジョー！　あはははは」

「こらユキ、縁起でもないこと言わないの」

「だってー」

笑い声を上げながら、真っ白になってる風太をたたく小雪を準が止める。
これからの大切な戦力であるというのに、完全に戦闘不能になるのはなんとか避けたいのだ。
……見たところ既に戦闘不能な気はしているのだが。

「まぁ……何と言いますか」

そして冬馬もさすがに困惑を見せる。
彼もなんとなくの事情は察しているというか、とある人物から伝え聞いているのでわかっていたが、それでここまで風太が精神的ダメージを負ってダメダメになるとは思わなかったのだ。
それでも風太がやると言ったので連れてきたのだが……

「失敗だったでしょうか……」

「大丈夫だぜ冬馬。俺は戦えるぜ。大丈夫なんだぜ」

「大丈夫に見えないんですよ」

小雪に叩かれて揺れている姿を見ると、いつもの元気な姿が嘘のようだ。
大丈夫だとは言っていても、その言葉に力が無いのは明らかだった。
さすがの冬馬も頭を抱えたくなる惨状だ。
……貴重な戦力がこの有様では当たり前か。

「もう登録はしてしまったからどうしようもないんですけどね」

「風太は大丈夫だもんねー」

「おーう。もちろんだーぜ」

「……すごくダメッぽいんだが」

準のツッコミにもあまり元気が無い。悲壮にも思える風太の様子にパワーを奪われているかのようだ。
周りからの視線も微妙に痛いが、そんなのはいつもの事かだから問題ないだろう。

しかしそんな中でも、周りの時間はどんどん流れていっているわけで……

「あ、はじまるみたいだよー」

「あぁ。不安要素はあるがなんとかなるだろ」

「そうですね。いざとなったら奥の手を使いますし」

「ははははーいくぞー。俺はやるぞー」

色々と困難と問題と事情を抱えた仲良し四人組のＫＯＳが始まる。

「おぉ！　凄い人数ですね父様！」

同じ七浜公園の違う場所。

満面の笑顔で目を輝かせながら、クリスティアーネ・フリードリヒは隣に立つ自分の父親へ向ける。

それに対するフランク・フリードリヒも、同じくクリスに笑顔を向ける。

「うむ。あのクキが開く大会だけあって、かなりの強者（つわもの）たちが集まっている。クリスにも良い経験になるだろう。……マルギッテとマルコはクリスの邪魔をするものを排除しろ」

会話の最後に、クリスに聞こえないように近くの二人に命令が飛んだ。
横に控える二人はそれに対して、笑顔を浮かべるクリスが周りに気を取られている間にフランクと話を進める。

「はい中将。そうそうたる顔ぶれですが、我々の同業者にはお嬢様のお手を煩わせません。そうでしょう、マルコ？」

「当然ですね。……しかし、思った以上に世界でも有名な人物が揃っています」

メッシしかり、ゲイルしかり……マルコが有名どころを次々と言っていく。
その中にはさすがに武道四天王クラスの強さの者はいないだろうし、これは本当にクリスにとっていい経験になると、クリス以外の３人は思っていた。
ただ、彼らの危惧する同業者の存在。
この場にそぐわぬ銃火器を持ち込んでいるものも少なくはない。

「しかしフランク様、結局は銃火器を持つ者は真っ先に狙われるかと思いますが」

「マルコの言うとおりだろうな。しかし、だからこそ率先してやる意義があるのだ。……クリスのためにもな」

どこまで親バカなのか。
クリスの邪魔はしないが、クリスの邪魔になるものは全力排除という方針はこうしてできあがった。
もちろん。マルギッテ・エーベルバッハも、マルコ・アッシュハウンドも、フランクの気持ちはとてもよくわかるほどにクリスの事を

敬愛しているので、ビシッと敬礼を持って了承の意義を示したが。

「マルコもマルさんも、一緒に頑張ろう！　父様も見ててください！」

そんな事を元気いっぱいに言うクリスを見て、にっこりと笑顔を浮かべる軍人チームだった。

「ヴィヴィアンさん、えっと――」

「ヴィヴィでいいですわ」

「あ、そうですか。ヴィヴィさん、こんなのに参加して本当に大丈夫なの？　大神くんは参加しないみたいだけど……」

七浜公園のまた違う場所にて、メイドのヴィヴィアン・バゼールと師岡卓也が話しかけていた。

そのすぐ近くには風間翔一と島津岳人もいて、周りの連中が強そうで面白そうだと話し合っている。

師岡としては、なんでヴィヴィアンがこのチームに参加してきたのか、そもそも風間（キャップ）がどうやって勧誘してきたのかすらも謎だったのだ。

そういう意味を込めての先ほどの質問だったのだが、ヴィヴィアンは軽く答えて見せた。

「知り合いも出るみたいですし、キャップさんには色々とお世話になっていますから」

「へぇ。キャップがなんかしたの？」

キャップといえば無意識で色々と親切をやって皆に気に入られることが多いが、またそんな感じなのだろうか。

そう思って師岡は話を聞いたのだが、まぁだいたいそんな感じだった。

なんでも、街中で不良に襲われた時に助けられたとか。

……実際は前にやられた時の復讐目的だと思われるが、知らないほうがいいこともある。

「え？　参加して大丈夫なの？」

「はい。困るのは街中でやられた時だけですから。私はとっても強いですよ？」

「そ、そう。じゃあ大丈夫そうだね」

ニッコリと笑顔を向けられて師岡は、照れながらも良かったと安堵していた。

キャップに感謝していた本当の理由を聞いたら、彼はどう思うのだろうか。

実際ヴィヴィがキャップに感謝していたのは確かなのだが、街中でぶちキレて大暴れ寸前だったところでキャップが間に入り、なんとかヴィヴィが精神の平衡を取り戻したところで、そのままキャップに助けてもらうという形にしたのである。

なんというか、真相を知れば性根が歪んでいるとしか思えないのではないだろうか。

「それより、気をつけてくださいね

「え？」

「非戦闘員とはいえ、容赦してくれるとは限りませんから」

「う……僕、確かに足手まといだよね」

この中では、というかＫＯＳに参加している選手の中でも、自分の実力は最下層であろうと理解しているのか、ヴィヴィの言葉にかなり落ち込んだ様子を見せる。
その様子を見てヴィヴィも慌てる。
別に彼女とて、師岡を侮辱したり、落ち込ませたりするつもりは無かったのだ。
ただ、状況を客観的に見て言ってしまう昔の癖が出てしまっただけだ。

「まぁ、そんなに落ち込まないでくださいな。その分だけ他の事で頑張ってください」

「……うん。ありがとうヴィヴィさん」

「どういたしまして。しかし、お礼を言われるほどの事は言っていませんよ」

「二人とも！　周りの様子を見てきたぜ！」

「なかなか強そうな奴らがいやがるぜ。見ててくれヴィヴィ、俺の筋肉で薙ぎ倒す様をな！」

周りを見ていたキャップと岳人が、二人の元へと帰ってきた。
ちなみに岳人のテンションが若干高いのは、ヴィヴィのメルアドをゲットしているからだ。
何故だかキャップの方がずっと早く入手していて、宗介が岳人に教えていなかったので、こうしてＫＯＳの同じチームになったのを機にメルアドを教えてもらったようだ。
一応ヴィヴィは金髪でナイスバディで年上なメイド美人であるため、岳人の好みにも入っているらしい。

「よーしみんな！　優勝目指すぞ！」

そうして、いよいよＫＯＳの開催が宣言された。
方式はバトルロイヤル。
４人で１チームを作り、他のチーム全てを倒したチームが優勝となる。
一定時間他チームと戦わなかったり、参加してない一般人を傷つけるなどしてルールを違反したチームは、川神百代や九鬼揚羽を初めとするＫＯＳの最強スタッフ陣に制裁を受け、容赦なく失格となる。
数多くの参加チームの中から、一体どのチームが優勝の栄光と優勝賞金５００億円を得るのは誰なのか！
今、開戦の火蓋が落とされる！

第三十七話　ネクストこんてぃにゅー（後書き）

あとがき

なかなか本編進めるのが難しいぜ。
忌憚なき意見を述べてくれたまえへ。

『百代の拳は未熟（キリッ』
『って同年代の奴が言っても微妙なだけだよな（笑）』

同年代じゃなくて、ルー師範代とかの大人が言うんだったらものすごく説得力があると思う。

新キャラはオリジナルで書き始めたパンツに影響を受けたわけではない（キリッ
いや、真面目にずっと前から考えてたからね。
そしてそしてＯＰで燃え上がりすぎてイェアッ！って叫んだのは俺だけじゃないはずだ！　そうだろ！？
やっと、バトルが書けるぜ……！

８／３１　追記：川神百代誕生日おめでとう！

第三十八話　百火動乱（前書き）

百花繚乱って言葉はあるけど、ただもじっただけだから気にせずに。
こんな言葉は存在しないのはずだぜ。

第三十八話　百火動乱

町の中心部から少しはなれた街路地にて。
そこでも戦いが繰り広げられていた。

「ぬうぅぅこの野郎が！　よくも俺の仲間を！」

「知らんよ。俺はやる気ねー、だからこいつらを使う。目的の一致と都合の問題だ」

「その通りＤＥＡＴＨ！！　というわけでさよーならー」

筋肉の塊のような巨大な男を、少女とも言い難い幼い娘の姿をしたモノが、思い切り殴り飛ばす。
数メートルは吹き飛んで、そのまま男は動かなくなった。
周りではその男の仲間だったのだろう連中が、顎骨やら腰骨やらを砕かれて同じように倒れ伏している。
そんな光景を作り出した張本人である幼い容姿の少女達は、一人の怪しい包帯まみれな男の周りで話し合っていた。
既に倒した相手には全くの興味を抱いていない。

「やれやれ。まぁ雑魚相手だとつまらんもんさな」

「わっはっは。雑魚相手なんて指先一つでダウンなのよ！」

「メメタァー」

「ごっどはほんとーにあたまのいーおかた」

「いや知らんって。つーか踏むのやめてやれ。蟻んこ虐めたら可哀相だろ」

ぐーりぐりと倒れてる男の足を踏み続ける青色少女に男は言った。
一応そういうのを可哀相に思う程度の人間ではあるらしい。それでも蟻んこと形容するあたりダメな感じではあるが。
つーかリアルに危ないと思う。ネタ的な意味で。

「なんなんだ……お前は……」

「通りすがりの……今のところはミイラ男だな。覚えておかなくていいぞ」

「そして私らはー！」

「サンバカラスー？」

「のー、あるふぁぷらーん」

完全にふざけた口調で言う彼らを前に、倒れた男は愕然とするしかない。
話が通じない相手だなんて、初めは思っていなかったのだ。
だいたいにして、戦いを仕掛けてきたのはミイラ男側からだったのだから。

「ふ、ふざけてるのか……」

「いやなに、俺はどうでもいいが、まぁこいつらがぶん殴りたいってんだから仕方ない。５００億とか興味ないし、優勝の栄光もどうでもいい。ここで会ったお前らは不運だったということだ」

標的とされてしまった以上、もうどうしようもなく不幸なだけ。こうやって敗北の運命が待っていたのだ。
それを理解した男は考えるのをやめた。
この相手に対しては考えるだけ無駄なだけだとわかったのだ。
それでも、もうこれ以上の犠牲を出さないためにも男は言った。

「頼む……俺はどうなってもいい。だから、俺の仲間には手を出さないでくれ……」

「いいせりふだ、かんどうてきだな。だがむいみだ」

「ダメダメじゃんよ、お前」

「コタエハキイテナーイ」

「早い話、そこで倒れてりゃあ放っておいてやるよっつーかな。立ち上がるなよ？　めんどくせーし――っと、次はあっちか。面白そうな気がする」

ミイラ男が最後の一瞬で発した、純粋すぎる混じりっけのない殺意を浴びた男はすぐさま意識を手放した。
完全に気絶している男から目をはずし、遠くを見つめるような仕草をするミイラ男。
その目には、自分が感じた敵に対しての欲望と希望がない交ぜになった複雑なモノがある。

「強い強い……そこらのモブキャラとは話にならねぇ強さを感じる……おもしれぇなぁ」

どこか異質な雰囲気を纏った異常なミイラ男は、少女達を引き連れて歩き始めた。
彼らが定めた狙いをはずすことはない。
次に彼らが狙う標的は――

＝＝＝

バトル開始から一時間経過！
その時、既に銃火器を使うチームは大多数が淘汰され、残ったチームの大半は素手か近接武器を使う強者たちだけとなっていた！
そんな中でも残っている、銃を扱う数少ないチームの内の一つ。
狙撃手である総理を抱えた直江大和達のチームは、事前に決めたポイントから確実に敵チームを倒していた。
凄まじい精度を誇る総理の狙撃により、丘の上からバンバン敵を倒していく。
接近状態であればかなりの腕前を誇る達人たちも、認識できない遠距離からの攻撃にはどうしようもないようだ。

「敵の目標４に着弾。目標沈黙、槍チーム制圧」

「まぁざっとこんなもんよ、狙撃は任せときな」

そして今も、一つのチームが彼らによって制圧された。

総理の狙撃の腕前に、同チームの皆も感心している。

「たいしたもんじゃのう」

「実弾じゃないですよね？　それは何を使って？」

「電撃弾だ。当たれば痛い程度だが思い切り痺れる。ま、3、4日は体がビリビリ麻痺してるだろうさ」

相手を傷つけず、スマートに相手を片付ける戦い方には大和もかなり感心していた。

しかしスマートに戦い続けた結果と言うか、そろそろ拠点を移動した方がいいと判断したらしい。

いくら攻撃しやすく、反撃を受けにくい場所であるとはいえ、バレた拠点にいつまでも居座り続けるのは愚策だ。

それも考えていくつかの拠点を用意してある大和はさすがといえよう。

「……！？　見られています、用心してください」

その時、不意に黛が声を上げた。どうやら敵のようだ。

続いて総理も、黛が言った『近くにいない』という情報から相手の狙撃手を発見した。

既に射撃準備に入っている狙撃手相手に、ほぼ同時に打ち合いという形になったが……先に発見した相手の方がワンテンポ速い。

そのため、総理が相手を補足して狙撃しようとする寸前に、相手の銃が火を噴いた。

しかし。

「ハマの海風を計算にいれてなかったようだな」

相手の弾丸は総理の頬を掠め、総理の弾丸は狙いをはずすことなく狙撃手へと命中していた。
それを双眼鏡で確かめた大和は思わず声を上げた。

「！　おお倒れてる。凄いです本当に命中ですよ！」

「日頃の行いってやつだわな」

「流石ですね……さ、移動しましょう」

さらに山の上にある拠点へと、彼らは移動を開始した。
もちろん奥深くにあるという事は相手チームが来ないという事、そして処刑チームが動く危険をも孕むのだが……
大和は事前に、処刑チームである川神百代と取引して、事前にメールが来るように仕込んでおいたようだ。

「お前そういう根回し系統上手いのう」

「姉さんとの交渉で借金チャラにされたけどね」

「まぁそれでも休めるのはありがたいな。……俺を邪魔しようという奴等はどう動くかな」

同時刻、川神市のはずれにて――

「超必殺！　スーパーウルトラハリケーンサンダートルネードギャラクティカ大噴火稲妻大車輪落としキック！」

「名前なげ……ぐはぁ！」

「勝った～！　敵チーム、完！」

「風太、ユキ、遊んでないで行きましょう」

「そうだぞお前ら、周りは危ないのだらけだからな」

やれやれと、二人の保護者であるようにため息をつくのは井上準。彼自身もさらりと敵チームの一人を倒していたりするのだが、実際に動いたのは風太一人だ。

離れて見ていた葵冬馬と、その冬馬の隣ではしゃいでいる榊原小雪は一切手を出していない。

あくまで彼らのチームは風太がメインで、見守る二人の代わりに準と風太の二人に頑張ってもらうのが目的だ。

「あとは予定通りねぇ、いいのかよ若」

「まぁ、元から優勝は狙っていませんしね」

「つってもなぁ。戦闘員2人だからさ、みたいな感じで手加減してくれると思うか？　あのモモ先輩が」

「おそらくしないでしょう」

ラジオの度にボコされる準の言葉には、かなりの説得力があった。
そして、冬馬はそれに即答で肯定の意を示す。

「しかし、それこそが狙いです。あとは風太に任せておけば大丈夫ですよ」

「了解。……風太、お前話聞いてた？」

「もちろんだぜ！？　聞いてたぜ！？」

「本当に大丈夫なのかよこれ」

小雪がけたけた笑う横で、風太はかたかた震えて笑っている。すごく不気味だった。
どうやらさっきまでの戦いも全部が空元気だったようだ。
とはいえその強さは前に比べても磨きがかかっている。
彼が以前に敗北を晒した相手2人にプロの傭兵1人を加えた3人をまとめて相手にし、それでもなお彼は勝利したのだ。

「大丈夫でしょう。しばらくすれば元に戻ります」

「まぁ、風太だしな。そんなもんか」

「そんなものです」

結構ひどいことを言って、彼らは倒れた敵に背を向けて歩き出した。
もう彼らには誰かと戦う予定はない。少なくとも、このＫＯＳに参加しているチームとは戦う予定はない。

今回相手のチームを選んだのは、一度でも風太を倒した相手がいるからこそ。冬馬による最終チェックのようなものだった。
しかし、そのチェックも無事完了。目標は達成された。
このＫＯＳで彼らがやるべき事は後一つ。

その目的はきっと、こうして戦わずにいれば向こうからやってきて達成されるだろう。
冬馬からしてみれば、既にチェックメイトをかけたようなものであった。

＝＝＝

「ウゥ……ッ！」

持っていた武器を切り刻まれた禿頭の男が、峰打ちを受けてコンクリートに倒れ付した。
周りには彼と同じチームだった者たちも倒れ伏し、既に制圧されたことを示している。
辺りには砕け散った刀剣の類や、クレーターのような爆発跡が広がっている。

「素晴らしい。２チームを一度にでも一切問題なしか」

「凄いもんですなぁ。そのロボットは」

「私もまさかここまでとは思わなかった。それに……」

インドのダルビッシムを含むチームを蹴散らしたロボットを見上げた蘇我幹事長は、もう一つのチームを蹴散らした用心棒を見る。まさに剣客といった姿をした用心棒に、彼は賞賛の言葉を投げかけた。

「まさか彼がここまでとは……釈迦堂君」

「へぇ、なんでしょ？」

「君の推薦は間違っていなかったようだな」

「まぁ、今の雇い主からも言われてましたからね。これなら文句なしってところですわ」

俺も少しは戦りたいんですがね、と言いながら釈迦堂は笑みを浮かべる。

今回は蘇我の近くで立っていただけで戦いが終わってしまったため、結構欲求不満なようだ。

しかし、蘇我が満足そうに言い放った言葉に再び笑顔になった。

「さて、この勢いで総理を倒すとしようか。……こっちだな」

「場所も把握済み。さすがですな」

「匂いを辿る機能をつけてるんでね。抜かりはない、いくぞ」

「……」

ロボットの持つ匂いを辿る機能を元に場所を割り出し、そちらへ向

かって直進していく。
ヨウジンボウは一言も話すことなく、ロボットの後ろをついていく。
そんな剣客に、背後から釈迦堂が話しかけた。

「よう、大丈夫か嬢ちゃん」

「……はい。何も、問題はありません」

「そうか。まぁ、焦って事を仕損じるなんてないようにな。”大将”にも気をつけとくよう言われてるんで」

「声は出しませんし、顔も明かしません」

「ならいい。あくまで前哨戦っての忘れねぇようにな」

全身を覆い、体格を悟らせないゆったりとした服装。顔を明かさない為の大き目の被り笠。その縁からは薄い布が垂れて隠蔽能力を高めている。
あくまで、本当の戦いはＫＯＳの先にある。それは釈迦堂にとってもこの剣客にとっても同じなのだ。蘇我には悪いが、彼らが本気を出すべき時は今ではない。
しかしそれでも、この剣客が戦わんとする敵は同じだ。負けたくはないという思いも、また同等。
影に隠れた顔に、剣客は知らぬ間に笑顔を浮かべていた。
各々が複雑な感情を抱く中で、目指す総理の居場所を睨んだ蘇我が全員に言った。

「行こう。総理はこの山の上にいる」

第三十八話　百火動乱（後書き）

あとがき

コンビニのおでんは結構美味い。
煮干ラーメンににんにくを大量に入れると凄く美味い。
でも、愛が詰まったお弁当ほど美味しい物はうわなにをするやめ――
久しぶりにまじこいやったらまーたデータが消えてたでござる。

友達は作るものじゃない、既に出来ているものだ。とか言ったらまゆっちに殴られそうだから劇中で言うのは自重しました。とあるネタの流用だったが、やめといてよかった……
そして今更ですが、野党チームのヨウジンボウはとあるゲームの召喚獣イメージですね。

いつもスターウォーズとか見ながら戦闘シーン書いてるんだけど、気分が乗るよね。
ところで、天下一武闘会みたいな内容とセルゲームみたいな内容だったらどっちがいいと思う？
あまり変わらんかも知れんがね。

第三十九話　戦うぜブシドォ（前書き）

ソロモンよ、私は帰ってきたあああああ！
と、言う具合にとりあえず一話。

第三十九話　戦うぜブシドォ

海辺の倉庫近くで、一人のメイドが後ろに立っている男子生徒に声を掛けた。

「三人とも、今度はあちらに孤立してる人を発見しましたよ」

「うわー、すごいねヴィヴィさん」

「あぁ。モモ先輩みてーとは言わないが、十分すごいぜ！」

「美人な上に強い……くっ！」

「……岳人は何を想像してるのさ」

どことなく余裕をもったそのグループは、風間が率いるチームだった。

ここまで生き残る為にかなり慎重に立ち回ったおかげか、順調に弱ったチームを潰すことができている。

彼らよりも戦力が上のチームは多いだろうが、まだ十分に優勝を狙える位置にいる。

そんな彼らが目をつけたのは、他のチームメイトがやられたのか一人で孤立している存在。

実力としてはそこそこ高いが、島津岳人と風間翔一が力を合わせれば十分に倒せるレベルの相手。

まぁヴィヴィがヤル気を出せばそこらへんの敵はちょちょいのちょいなのだが、さすがにそれは野暮というモノ。オンナノコ？　として応援とサポートに徹することにした。

作戦は単純だった。
ヴィヴィが仕掛けた糸のトラップで相手をこかし、そこを風間と島津が袋叩き。師岡はトラップのタイミングのチェックと、他の敵が来ないかを警戒する。
そんな感じに作戦をたて、そして実行した。

作戦通りに相手が一瞬でも気を抜いた瞬間に罠を発動。
相手がすっ転んだところで攻撃を仕掛けたのは風間（キャップ）だ。
こけた相手に自慢の脚力を用いて即座に接近、起き上がろうとする相手の顔面にライダーキック。そのまま空中で二段蹴りを決めて、相手の頭を飛び越えた。
しかし相手だって（一応）強者である。
キックで首をひん曲げられながらも、ふらふらとその場に立ち上がった。

「うおらあああああ！　ハンサムラリアット！」

しかし見るからにダメージが残っている様子を、第二攻撃陣の島津岳人が見逃すはずがない。
猛ダッシュで接敵した岳人は、未だ体制を整えていない相手に向かって思いっきりラリアットをぶちかました。
いくらタフな空手マンでも、さすがに筋肉専門で鍛えまくったバカの攻撃力は耐えられなかったようだ。
ラリアットが直撃した相手――鈴木健太とやらは、バッタリとその

場に倒れ伏した。
本来なら岳人の攻撃くらいは簡単に避けられるだけの能力は持っているようだが、足を取られてすっ転んだ上に顔面にキックを食らったのだから仕方ないだろう。

「いよっしゃあ！」

「上手くいったね」

「あぁ。ヴィヴィもナイスだぜ！」

「いえ、それほどでも」

ぐっとガッツポーズ&イェイとハイタッチ。
予想外に上手く行き過ぎて結構嬉しい3人組。声をかけられたヴィヴィも満更でもない様子。
真っ向からのガチ勝負ではないにしろ、見事な勝利を得たことに違いはない。
それに元々ヴィヴィは真っ向からのバトルタイプというわけではないし、風間や岳人だってバトる方が好きだが、目標の事を考えて戦い方を選ぶこともできる。師岡は当然のように大賛成だったが。
ようするに、こういう作戦勝ちでも大満足という事だ。

「これで6チーム目くらいだしな。今日はこれくらいで終わりにすっか」

「おう。でもよキャップ」

「なんだ？」

「そろそろ暗くなってきたけどよ、どこに寝るんだ？」

島津寮に戻れば、そこに戻ってくるワン子や京たちとの対決になる可能性が高い。

今はＫＯＳ中だから普通に戦いになるだろうし、正直言って勝てる気がしない。

ワン子と京だけなら――それでも難しいにしてもまだ戦いになるにしろ、それに加えてクッキーやウメ先生までいるとなれば無理ゲーにも程があるというものだ。

で、あるならば。

少なくとも寝床を用意しなければならないだろう。できるだけ早急に。

「別にその辺で良くね？」

「でもキャップ、ヴィヴィさんもいるんだよ？」

「あー。そういやそうか」

すっかり忘れてたぜ、と言う具合に頭をかきながらキャップは言った。

宿泊場所と言うのは悩みものだ。特に、夜の奇襲もＯＫなこのＫＯＳでは重要な拠点となる。身体を休めなければこの戦いは生き残れないし、奇襲をたやすく受けるような場所に拠点を設置するわけには行かないのだ。

キャップの運があれば、適当に拠点を決めても大丈夫そうかもしれないが、一応はヴィヴィに対する配慮という者を考えたのだ。

「でしたら、いい場所がありますよ」

「お、そうなのか？」

「えぇ。凄く安全で十分に寛げますし」

そんなヴィヴィ自身が、そう提案した。

条件もかなりいいので皆が乗り気である。

「それってどこなんだ？」

一体どこなのか気になったキャップが、ヴィヴィに尋ねた。

そんな彼に、ヴィヴィはいつも通りの笑顔を浮かべて言った。

「現在、私が住んでいる家ですよ」

大神宗介及びヴィヴィアン・バゼールの住処。

川神駅の比較的近辺に位置するマンションの一室。

彼らは今宵、そこに泊まることになった。

＝＝＝

「――――セェィッ！」

「あぅっ！？」

暗き住宅街の中空にて、一つの戦いが繰り広げられていた。

それを行うのは2名の剣士。黛由紀江と、未だに名乗らぬ黒衣の剣士。

幾度も自らの刀をぶつけ合い、その度に散る火花がお互いの姿を照らし出す。
黒髪、清廉、真剣（マジ）な表情、豊かな肢体を持ち黛十三段の娘であり優れた剣士、黛由紀江。
黒衣に編み笠の正体不明、滅多に見えない笠の下にすら仮面をつけて素性を晒さぬ謎の剣客。
そんな二人が、寝静まった住宅地を足場にして空を舞いながら斬り合っていた。

その場には、彼女らの下――地に立ったままでその戦いを心配する者もいる。
最も、彼らとて心配するばかりではいられない。
襲い来る巨大ロボの攻撃を避けなければならないのだから。

「くそっ！　クッキーみたいな外見しやがって！」

大和が悪態をつくが、それも仕方ないだろう。
今も彼らを襲い続けているロボットの外見は、風間ファミリーの一員（人間じゃないからカウントしないが……）であるクッキーのものと、色と大きさを除いては全く同じだった。
既に大和たちはそのロボに攻撃することを躊躇ってなどいないが、だからってそう易々と倒せるはずもない。
遠距離からの総理による狙撃の援護もまるで意に介さずに、そのロボは大和と不死川にビームを乱射してくるのだ。
本来なら狙うべき敵のリーダー、蘇我はと言えば――

「釈迦堂君、ちょっとやりすぎたかな」

「そうですかねぇ？」

「ふむ。それならいいか。よし、もっとやれ！」

異様にヤバげな雰囲気を持つ釈迦堂なる人物の横に立ち、こちらを面白そうな顔で見物している。

口から放っている言葉は、とても国を担う議員の言葉とは思えない。

総理はこんなのを相手にして大変だったことだろう。たぶん。

「くそっ、これじゃあジリ貧だ！」

大和はそう言いながらも頭を回す。

こういう時に焦ってはいけない。冷静にならなければならないことを大和は知っている。

そしてチームの頭脳としての役割をこなす彼は、常にクールにいなければならないのだ。

（といっても……この状況を妥当するには手が足りない。まゆっちの強さは予想の範囲内だったけど、相手にも同じだけの使い手が複数いるなんて流石に予想外だ。総理の狙撃が牽制になってるのかはわからないが、今のところはまだ逃げ切れる。不死川がこのクッキーもどきをなんとかしてくれればありがたいんだが……）

チラリ、と横目で不死川を見る。

振り下ろされる巨大ソードやビーム兵器を危なげなく避けているが……どうなのか。関節技が得意ならパパッとロボットをぶっ壊して欲しいものだが、さすがに心単体では無理だろう。

手詰まり。

それが今の状況だ。

黛由紀江が相手を撃退してくれるか、それとも相手の釈迦堂とか言うのが動き出すか……均衡が破れるのはその時だろう。

前者なら希望はあるが、後者は絶望的だ。

「まゆっち、がんばってくれ」

今できる事は、現状維持と由紀江への応援だけ。

大和は、自分へむけて放たれたビームを横っ飛びして必死に避けた。

そんな黛由紀江は、予想外の苦戦に戸惑っていた。

なんというか、噛み合い過ぎているのだ。

刀と刀をぶつけ合い、技と技とを競い合い、雌雄を決しようとする仕合が、余りに噛み合い過ぎる戦いが、彼女の戦闘を長引かせていた。

急がなくてはならなくとも、焦って隙を見せれば敗北するのは彼女の方だ。

「はぁぁっ！」

「……っ」

黛が放った刹那の十三斬撃――危うくも、いなされかわされ当たらなかった。

「シィッ！」

「う……っ」

敵剣士が放った上下のフェイントを混ぜた突き――辛くも、逸らして回避し当たらなかった。

紙一重の読み合いによる剣の劇が、いつまで経っても終わらない。

早く仲間の下へ、大切な友達を助けにいかなければならないのに。

「どいてください！」

「断ル」

戦いは続く。

決着がつかない以上は続いていく。

このままいつまでも戦いが続き、いずれ大和と不死川が仕留められるのではという時。

蘇我が静かに言い放った。

「そろそろ、撤退といこうか」

「は、俺ぁまだ何もしてねぇんですが……」

「さすがに荒らしすぎだ。もっと早くしとめられると思ったんだがな。ここまで逃げ回られると周辺住民に被害が出る。処刑人たちに邪魔されるのは君も不本意だろう」

「まぁ、確かに面倒ですわなぁ」

巨大なクッキーもどき（正式名称はサイコクッキー）を一旦引かせ、蘇我はそう言って戦闘停止を決めた。

釈迦堂も嫌そうな顔を一瞬だけ浮かべたが、それに従って空へと声を響かせる。

「おーい、今日のところは引き上げだってよ！　降りて来い！」

未だそこら中に刀をぶつけ合う音を響き渡らせていた剣士は、その声に従って降りてきた。

ほんの一瞬遅れて、黛由紀江も大和と不死川の傍に降り立つ。

両者共に僅かな傷しか負っていないのは、互いの腕前が拮抗しているからこそだろう。

「どうだった？」

「まだ、本気を出し切っていない……気がする」

黛の方をじっと見て、剣士は同い年くらいの少女の声でそう言った。

戦いに未練があったのか、まだまだ戦い足りないというオーラが滲み出ている。

しかしそれを釈迦堂が押さえ込んだ。

「今日は撤退だ。次の楽しみにしとこうや」

「……わかりました」

剣士は頷き、大和たちに背を向けた。

それを皮切りに、蘇我のチームはすぐにその場から去っていった。

戦いが止まってすぐに近くまで戻ってきていた総理に、大和は言った。

「厄介なチームです」

「だな。釈迦堂もそうだし、あの剣士も相当だ」

総理は狙撃を行いながら、ある程度の観察も行っていたらしい。
ロボットは脅威だが、それ以上に異常なほどの腕前である釈迦堂という男と剣士の少女?の方がよほど危険。
それは近くにいた大和でも容易に想像が付いた。
かといって、あれら全部を相手にして勝てるかどうかと聞かれれば
……

「まだ1日目です。潰しあいも起きるでしょう」

そう、薄い可能性に賭ける言葉しか出てこなかった。

＝＝＝

「ようやっと見つけたぜ」

「どうするー?」

「どうするどうする?」

「どうする、の?」

「決まってらぁな。ばあさんの思い通りにするのも癪だが、かといって奴の思い通りにすんのはもっと嫌だ」

「「「つまりー?」」」

「まずは戦(ヤ)る。そんでもってから考える」

メキメキと腕の骨を鳴らして、手の上で弄んでいた小石を握り潰す。
背後から3人の幼女にのっかかられたミイラ男は、与えられた使命より、果たすべき意思の為に行動を開始した。

彼の狙いは――

第三十九話　戦うぜブシドォ（後書き）

あとがき

おいアニメ露出度高すぎだろマジで。十分近く裸だっつーか下ネタ全開じゃねえかコンチクショウ！

５話については諦めないハートが大事っていう……いつものことか。

６話についてもまー高貴っつっても踏んだり蹴ったりやな。

そして生徒会長にキた俺。

名瀬ちゃんがまったくピックアップされてなかった時期に目をつけてヒロインにした俺様がぁ！　見逃すわきゃねぇだろぅが！

リトバスでクロスした筋肉ネタとか、全キャラ性転換ネタとか色々あるけど実行が怖い。

「Ｆａｔｅ／ｅｖｅｎｔ　ｈｏｒｉｚｏｎ」の最新話が面白すぎた。

あとＦａｔｅ／Ｚｅｒｏ。

第四十話　月下ランデブー

ある街に一人の少女がいた。
その少女は子供のころからあまり言葉を話さない子だった。
しかし他の同世代の子が言葉を話す頃には、その少女もキチンと言葉を話す事が出来ていて、その子の両親はひどく安心した。

数年が経って、子供が勝手に外に遊びに行くようになった頃。
その少女は他の子供たちの輪から離れて、高台から海を眺めていた。
何を思ってそこにいるのか、何を思って海を眺めているのか、彼女自身にもわかっていなかった。
そしてそれに気付くものは、同じく海を眺めている彼女の祖父しかいなかった。

さらに数年。
少女の容姿は、若干キツめな雰囲気を持っていながらも、年相応の可愛い女の子の姿へと変わっていた。
しかし、あまり喋らないうえに儀式のような海を眺める行為も毎日のように続けているので、誰もその娘の近くには寄らなかった。
それでも彼女は何も言わずに、ただ毎日の日課としてその行為を続ける。
そうして彼女の祖父が声をかけたのは、果たしていつの事だったのか。

――今でも、その剣が描いた軌跡は少女の脳裏に焼きついている。
祖父の振るったその剣が、父が振るったその剣が、決して色褪せることなく残っている。
幼い頃から木刀を振らされてはいたが、真剣の輝きを見たのはその

日が初めてだった。
彼女はそれに魅せられた。
美しく、それでいて危険な、それでいて尊い、その剣を極めていく道というものに。
ただ惰性で、親に言われていたから続けていた剣ではなく。その日からやっと、自分で選択して剣を学んでいくことを決めることが出来た。
それを自分の誇りとして、生きていくことが出来ることが嬉しかった。
剣を振るという行為が、自分の剣がだんだんと鋭さと強さを増していく事が嬉しかった。
だから少女は、ただひたすらそれだけに没頭した。

それから一年。
少女は変わっていた。家の開いている道場の中に立ち、一本の木刀を握っていた。
毎日のように続けられる行為は修練へと変わり、海を眺めるという行為はそのまま精神統一へと繋がった。
彼女は祖父に教えられることを、スポンジに水を垂らすかのように吸収していく。
その姿はまるで、何かを求めているかのようだった。

その後、数年が経ち。
少女は女性と呼ばれるほどの年齢まで成長した。
生来の目元の鋭さや身に纏う独特の雰囲気、母に繕ってもらったらしい独特の刺繍が為された、裾が膝まである蒼い服。
その全てが合わさって、彼女は『美しい少女』と言うよりも『美しくて怖い少女』となっていた。
そんな彼女は今日も修練を続ける。

美しい黒髪は邪魔だが、切っては祖父が悲しむので後ろで一つに纏めている。
そして、その修練に最適な体を作るために日々努力も続けている。

しかし彼女は修練の時、常に思っていた。

――どうして。私は女性として生まれたんだろう。

女性である以上は力がつきにくい。
気で補うとかそういうものではなく、決定的に足りないものがいくつかある。

そのために頂点への到達を諦めた者はどれほどいただろうか。
それでも今、女性の身でありながらも修練を続けるのは未練なのか。

そう、未練。
祖父から一振りの刀を受け取った彼女は、しかし父親には認められなかった。

曰く、奥義の継承をするにも、彼女には足りないものがある。故に、継承は彼女の弟に行うと。

祖父が彼女を認めているのに、父には認めてもらえなかった。
いや、祖父も認めてくれていたのかどうか、刀を受け取っただけでは何もわからない。

様々な悩みを抱えつつ、彼女は父親によって川神学園へと転入させられた。

「どうした、嬢ちゃん」

「……いえ」

鞘に入った刀を抱え、壁に寄りかかるように座った少女は、釈迦堂に話しかけられて顔を上げた。
そして首を傾げて疑問を口にした。

「なんですか、それは？」

「いや、嬢ちゃん飯食ってないだろ？」

「そんな気を使う人だったとは驚きです」

「ひでぇな。とにかく食えよ。いざって時に腹ペコじゃ困っからな」

どこで買ってきたのか、それはプラスチック容器に入った牛丼だった。……まぁ、おそらくは某牛丼屋で間違いないだろうが。
別に嫌いと言うわけでもないのか、少女はそれを食すことにした。
そんな彼女の脇ではサイコクッキーが充電中で、蘇我はといえば釈迦堂と一緒に食事に行った後で眠りに憑いたようだ。
彼には特別優れた能力があるわけでもないので、夜の警戒は任せたという事らしい。

「つーかよ、戦いにくかったんじゃねぇのそれ」

「まぁ、少しは。しかし、既に顔を合わせたことがある以上は姿を隠すにこしたことはありません」

「そんなもんかねぇ」

「そんなもんです」

別に顔が割れようとどうということもない釈迦堂からしてみれば、戦いを阻害するような服装なんて意味不明だろう。というかむしろ彼には、知り合いの方が面白いとでも思っている節がある。

彼女とてやりたくてやっているわけではないが、こればっかりはどうにもならない。

元々は正々堂々とやりたかったのに、そういうわけにもいかなくなったのだ。後ろ暗いものがあることは、釈迦堂と行動を共にしていた時点で明白である。

もっと、それは彼女にとってそこまで悲観すべきことではないが。

そして少女は、周りを警戒しながら食事を始めた。

……釈迦堂が持ってきた牛丼はまだまだ熱を失っておらず、十分に美味しかったそうな。

＝＝＝

「よぅ」

「っあなたは！？」

所変わって、薄暗い路地を歩く冬馬たちは、１つのチームと遭遇していた。

どうやって参加することができたのかすらも謎な包帯男と幼女のチーム。
とある計画を早めるため、夜中に移動中だった冬馬たちのチームは突然現われた彼らに話しかけられたのだ。

「今日一日、雑魚を潰しながら面白いのがいないか確認してたんだが、お前らが一番いい感じだったからな」

両腕をジーンズのポケットに突っ込んだまま、男は冬馬たちに近づいた。
撃退することは可能なはずだと冬馬は考える。
戦闘は行ったとはいえ3チームのみ、それも格別に強い奴は計画の足しにするべく風太に戦わせてきたのだ。準やユキはほぼノーダメージと言っていい。
ならば勝てる、勝てるはずだと冬馬は考えた。
他の皆もそれを察しているのか、準もユキも風太もいつでも戦闘を行えるように身構えている。
しかし男は推しとどめるように右手を前に出して言った。

「待てよ。俺は話をしにきたんだ」

「ふむ……話ですか」

「そうとも。だから落ち着けよ」

「……わかりました。聞きましょう」

「若!?」

冬馬の言葉に、準が大声で驚愕の声を上げた。

彼の言いたいことは冬馬にもわかっている。こんな怪しすぎる連中を信用するなんてもってのほか、話し合いという提案だって怪しいものだと言いたいのだ。
しかし、まずは慎重に立ち回るべきだ。
立ち塞がる障害だと判明してから対処をしても遅くはない。冬馬は既にそれだけの戦力は持っているのだ。

「話が早くて助かるぜ」

「少し場所を変えませんか？」

「いや。できるだけ早く済ませたい。……全てを語るには、少しばかり時間がかかるからな」

男は『全て』を語り始めた。
そう――――『全て』を。

「ほれ、いくぞ」

全てを話し終えた男は、先ほどから言葉を発さず興味深げに冬馬たちを見ているだけの幼女達に声をかける。
冬馬たちが驚愕しながらも男の持ち出した『協定』に乗ったことで、彼の今日の目的は果たされたようだ。
しかし当然と言うべきか、納得いかないのは冬馬たちだ。
協定の内容には賛成もしよう。利があるのだから。しかし、それと

男についての情報を託されることとはまるで別問題だ。そもそも、信頼なんて者が存在しない相手に、どうしてそう簡単に素性を明かす気になったのか。

「なんでと言われてもなぁ。強いて言うなら、勘か」

「それが本当だとしたら、あなたは本当に大した人物ですね」

「ま、褒め言葉として受け取っておこう」

ニヤリと笑みを浮かべる男が去っていくのを見ながら、冬馬は考える。

結んだ協定、そのメリット、今後の計画への影響、そして……男の正体、それが周り全てに与えるだろう影響と、そんな男が口にした目的の事。

言わなくてもいい事まで言っていったあの男の事を、冬馬は考えずにはいられない。

彼の語ったその境遇が、余りにも酷すぎるものだからこそ。冬馬の知る不幸と重ね合わせずに入られなかったのだ。

（……まぁ、風太に火がついたのは予想外のメリットと言いましょうか）

彼自身がそんな男に共感してしまったのか。もしくはそんな不幸な男の願い、使命を手伝うことで、己の不幸を忘れたいのか。

どっちにしたってやる気になってくれるに越したことはない。

「準、あなたはどう思いますか？」

「……嘘じゃあないんだろうなって事くらいか。でも若、どうする

んだ？　あいつの言う事には『ＫＯＳのルールを守っている限りは邪魔しない』って事らしいが、つまり、ルールを犯せば敵に回るってことだろ？」

「そうですね……一先ずはルール内でやっておきましょう。いずれ敵が増えるにしても、初めは味方にしておくに越したことはありません」

「了解」

このＫＯＳの間はルールを違えないように、男がそんな条件を出したのは、片方のクライアントにそう頼まれているからだそうな。おそらく、大会運営側の人間。だから冬馬たちに釘を刺したのだろう。

……どうしてピンポイントで話しかけられたのかは謎だが、勘とか空気とかいうオカルト理論には風太で慣れている冬馬は動じなかった。

やっと取り戻した平穏にやれやれとため息をつき、僅かに漏れる眠気を押さえ込んで拠点へと足を進めた。

「そーいえばさー。準が女の子に反応しなかったねー」

「うるせぇよユキ！？　俺だって時と場合は考えるさ」

「あはは。シリアスなんだー」

頭をぺしぺし叩きながらユキが言った言葉に、準が少しだけ考え込んだ。

随分と長い道のりを進み、現在の位置は川神市内にあるチャイルドパレスと呼ばれる若者向け商業施設。そんな施設の一室である。

「――風太」

「っお、おう」

ユキと準がいる部屋から外に出て、冬馬は風太へと話しかける。なにやら黄昏ムードで夜の街を眺めていた風太は、慌てて冬馬の方を振り返った。
そんな彼に冬馬は問いかける。

「どうでしたか？　彼は」

彼、とはもちろん先ほどの包帯男の事を指す。
風太は既にこのＫＯＳでも何人もの猛者と戦い、それ以前にも板垣一家や釈迦堂形部と本気の戦いを行ってきた。現在の力量はおそらく、控えめに見ても川神院の師範代クラス。今後の計画通りに進めば、確実に更なる力を得ることができるはずだ。
そんな風太が包帯男たちの力量を把握していたからこそ、手を組む気にもなったのだ。
けれど今冬馬が聞いたのは、『力』ではなく『人』としての事。

「彼は――善い人だと思いますか？」

「わっかんねぇ。でも、たぶんそうなんだろうと思う」

「……私とは違いますね」

自嘲するように言った冬馬に、風太は言葉を続ける。

昔を思い出しながら、彼と出会った日を思い出しながら。

「そんな事ない。冬馬がいなかったら俺は――いや、違う。俺が助けられなかった大切なものを、冬馬が助けてくれたんだ。だから俺は、お前が善い人じゃないなんて思わない」

その昔、かけがえのない友達を助けられなかった風太。
代わりに助けてくれたとは言うが、冬馬自身はそんな風には思えない。
紛れもなく助けられなかった罪というものと相対すれば、そんな風に思ってなんかいられない。彼がしたのは、風太が助けられなかったそれにフォローをしていただけなのだ。
だというのに――

「やはり風太は優しいですねぇ。甘えてしまいそうになりますよ」

「……そっち系じゃないのだぜ？」

「ふふ、冗談ですよ。それより、中に入って休んでください。明日はもっと忙しいんですから」

優しい優しい友達に囲まれて、幸せであり不幸であり。
自らと共に進んでくれる友達を、ありがたいとも思い情けなくなって。
今日も、心の中の靄は晴れなかった。

第四十話　月下ランデブー（後書き）

あとがき

今回で判明事項が大分増えましたが、今後の展開が予想できたらそいつは予知能力者。
アニメの登場人物には予想的中過ぎて久しぶりに笑いが出たわ。カカカ。

ヒント：誰が天才で、誰が秀才で、誰が凡人か。

第四十一話　上る太陽遥かに遠し

「よう、バアさん。俺は死んだんじゃなかったか？」

「お前の助けがいるんだよ、■■」

「へぇ」

見覚えのある女の顔だ。
誰だったか。子供の頃に目にした気がする。
そいつだけじゃなく、俺も。

「お前の最も大切な者の為に、お前の命を捧げることはできる？」

「当然だ」

即答したはずだ。
そいつがそいつである以上、そうでなければありえない。
そうでなければ、そいつはそいつとして生きてきた価値を石ころのように変えてしまう。男として、人として、死にゆく人間として、そんな選択肢はありえなかった。

「躊躇う理由は無い。俺は、償わなければならないからだ」

「それが、そいつに辛い決別を強いる事になっても？」

「信じてるよ。あいつは、それくらい乗り越えられるはずだ」

そいつは女を見たままで、女よりも遠くの何かを見ていた。

いや、『遠く』ではなく、『近く』かもしれない。

「なんたって、あいつは俺の――」

＝＝＝

目を覚ますと、ちょうど朝日が昇るところだった。

そうだ。確か俺は、奇襲を防ぐ意味も込めてビルの屋上に潜り込んだ。

こういった場所を狙撃のためのポイントに使う奴らもいるだろうが、そいつらが来たら叩き出すだけだ。

……つーか、なんとも気分の悪い夢を見た。

俺が俺である前の、あいつ。

一時は誤解し、不和の元となったあいつ。

今はもう、二度と会うことは無いだろうあいつ。

「さて」

朝の光に目を細めつつも、俺は屋上の縁にあるフェンスまで歩いていった。

川神、七浜、どちらも懐かしい。

これを思うのは二度目か三度目か、懐古する気持ちは抑えられない。

「大丈夫か？」

「大丈夫だ。目的は忘れちゃいない」

いつの間にか、長らく世話になっていた奴が後ろに立っていた。
一度死んだに等しい俺を拾った、今の俺にとって一番大切な人物。
嘘をつくのはやめにしておこう。

「……あぁ、悪いな。今のは嘘だ。大丈夫なワケが無い」

「で、あろうな。胸を貸してやろうか？」

「馬鹿言え、女にそんな事されてたまるかよ。それより、あの大間抜けはどうした？」

「先ほど、三羽烏に連れていかれた」

そうか。まぁあの馬鹿は子供に人気ありそうだからな。精神が子供な設定の幼女どもにはおあつらえ向きだ。
しかしコイツはこんな所に来て大丈夫なのか。
他の運営側の奴らの目とかはどうなってるんだ？

「お前が気にすることではない。それに、他の者は選手達の罰則を課しに行っている。ここでお前と会っていることなど誰にもわかるまい」

「そうか。ならいいのさ」

「お前はいいのか？　あの二人をそのままにしておいて」
問われた意味を吟味して、俺は応えた。
「いいさ」
「本当に？」
「あぁ」
「神に誓えるか？」
「信じちゃいないが誓って言おう」
「では、我には誓えるか？」
「……」
「やれやれだな。こっちを見ろ」
ぐいと方を引っ張られて身体を逆転され、朝日を背にして女の方を向くことになった。
なんとか目を合わせないように努力したつもりだが、顔を両側から抑えられてはどうしようもない。
まぁ、仕方ないだろう。生まれついての君臨者、九鬼揚羽を相手に俺なんかが逆らえるわけが無い。
「全く、無理をしすぎだ」
「無理をするのは性分なんでな」

ニヤリと、不安など何も無いような不敵な笑みを見せつける。
しかし割と騙せると思っていたのだが、揚羽には通用しなかったようだ。

「だからお前は阿呆なのだ。少しは我や他の者を頼るがよい」

「あいつと戦ってもらったじゃないか。それで十分だよ」

「……どうする？　今のお前が、本当に勝てるとは思えない。どちらとも手合わせしたことがある我だからこそわかる事だ」

揚羽が珍しく見せた心配そうな顔。
こんな俺なんかの事で悩んで、そんな顔をさせちまうとは自身が情けない。
でも、たぶん揚羽だってわかってるんだろう。
なら俺だって、威勢よく言い切ってやろうじゃないか。

「心配するな。こういうのは理屈じゃないのさ。黙って背中を押してくれよ。俺を誰だと思ってやがる」

「……わかった。必ず我の前に、お前のままで帰ってきてくれ。絶対に、な」

心配そうな声をよそに、俺は自分の顔に包帯を巻いていく。
素顔を隠し、感情を殺し、前へと進む覚悟を胸に。
今ここに、動乱のＫＯＳ二日目が始まった。

＝＝＝

参加チームは既に４分の１以下。
制裁の結果やら激闘の結果やら、まぁ一番は銃火器を使うチームが序盤で一気に潰された事だろうが……
そんな中、なおも戦いは続く。
多馬川を上流へ遡り、少しはずれた場所にある草むら地帯。
そんな場所でクリスたち軍人チームとゲイル・ゲイツのカラカル兄弟チームが戦っていた。

「フィヨルド兄弟が邪魔ですが……排除しますか？」

「うむ。クリスの邪魔になるようならな」

「了解です」

クリスとゲイルの一騎打ち中、マルコがフランク中将に囁くように問いかけた。
フィヨルド兄弟というのは、戦闘力の無いゲイツの護衛を勤めている巨漢の二人組のことだ。フィンランド出身の護衛のエキスパートであるらしい。
ゲイル・ゲイツの兄弟は、ゲイツが相手のデータを収集しながら行動予測をしてゲイルに情報を与え、優れた戦闘力を持つゲイツがその情報を元に戦闘を行うといったスタイルだ。ちなみに、最近はゲイツが情報収集や行動予測に使うパソコンのＯＳをＭＥからＸＰに変え、更に強くなったそうだ。
彼らの戦闘スタイルからして、ゲイルがやられればそれでお終い。
ゲイツを倒しさえすればゲイルも情報が得られなくなって弱くなる

のだが、それを補うために護衛のフィヨルド兄弟がいるといった所だろう。

クリスがゲイルに吶喊し、そこからの連続突きをゲイルへと放った。ゲイルはゲイツによって予測されていたその攻撃をかわしていく。しかし、クリスの連打が止まることはない。

「メッシといい、君達といいレベルの高い戦いだ。しかし、私はそのレベルの高さに感謝しよう。私の娘もまた、上へと覚醒していく事ができるのだから」

「はあああああああっ！」

「W、WHAT!?　バカな！　どんどんスピードが上がっていく!?」

少佐の言うとおり、クリスの連射速度は天井知らずに上がっていく。驚きを隠せないカラカル兄弟。マルギッテもマルコも、誇らしいものを見るようにクリスを見ていた。

そしてクリスの攻撃がついにゲイルへとクリーンヒットし、ゲイルは大きく後退した。

しかしまだだ。勝負はまだついていない。ゲイルとてそれだけで終わりという事も無いだろう。

だがここで乱入が入ったことにより、勝負はお預けという事になる。

「なかなか面白い戦いをしているね……」

その場に現れたのは、巨大ロボと二名の人間を引き連れた蘇我という名の野党議員。
クッキーと同じ姿のロボに驚くクリスだったが、他の者はそちらよりも不気味な二人に目をやっていた。

「なんか参加者にべっぴんさん多いですな。あぁ、もちろんも嬢ちゃんも勘定に入れて――」

「斬るぞ」

「うへぇ、相変わらず冗談通じないね」

軽口叩く釈迦堂も、恐ろしく冷たい声の少女?も、どちらも強者であることに変わりはない。
マルコとマルギッテはすぐさま二人に対して臨戦態勢を取った。
そして、二名はそんな視線を受けたままで――

「こいつがゲイルか。やっちゃっていいですかね」

「すみやかに頼むよ」

「へいへい。嬢ちゃんはそっちのデカブツな」

「ふふ……斬ります、ふふ」

蘇我に許可を取るなり、釈迦堂は強者であるはずのゲイルが反応すらできない速度で宙へと投げ飛ばした。
そして未だ中空にいるゲイルへ向けて奥義を放つ。
川神流の禁じ手である奥義、『富士砕き』はゲイルへと炸裂し、彼を完全に戦闘不能へ追い込んだ。

ゲイツはそんな兄に向けて叫びを上げるが、そんな彼の目の前でも惨劇は起こる。

「ぐっ！」

「アァッ！」

ゲイツへ向かおうとした黒服剣士を止めようと近づいたフィヨルド兄弟が、苦悶の声を上げて地面へと倒れこんだのだ。

見れば、両腕と両足から血を流している。

掴みかかられるよりも早く、一瞬で手足の筋を切って戦闘不能にしたのだ。

なんと鮮やかな手際だっただろうか。ゲイツにはとても見切れる速度ではなかったが、マルギッテ達には横から見ていたおかげか速度もわかったが、空恐ろしくなるほどのものだった。

「さーて。んじゃ、残りもやっちまいますか」

そんな連中が、今度はクリス達に牙を向いた。

＝＝＝

「ははは、やっと来てくれたか」

大神宗介と川神百代は、ルー師範代や九鬼揚羽たちがいなかったため、2人揃ってとあるチームの処刑に動いていた。

そのチームは二日目になってからは昼を過ぎても他のチームに遭遇

せず、また昨夜は他チームに遭遇しながら戦闘を行わなかったため、処刑の対象となったようだ。
しかし、そのチームの様子はおかしかった。
処刑という名目の元、圧倒的な実力を持つ処刑メンバーによって強制的に排除されるというのに、全く悲観した様子が無いのだ。

「若も考えたよな。別に運営側の処刑メンバーと戦おうがルール違反にはならないし」

「大人しくやられないだけだもんねー」

「えぇ。少し計画は狂いましたが、狙い通りの人たちが来てくれました」

むしろ喜んでいる節すらある。
二人は怪訝に思った。目の前のチームは学校で何度も顔を合わせたことがある連中だ。
葵冬馬、井上準、榊原小雪、そして一条風太。
二年S組の仲良しチーム。S組から出るチームはいくつかあると聞いてはいたが、こうして対面するまでは特に意識していなかったチームだ。大和と同レベルの軍師がいるにしても、世界に通用するレベルの強者を抱えていないと思っていたのだから当然か。

しかしそんなチーム相手にでも、さすがに意図がわからないまでも馬鹿にされたような台詞を吐かれればイラッとくる。
そして宗介と百代の沸点は、生憎とそこまで高くないのだ。

「おいおい、これは私達が舐められてるって事で考えていいのか？」

「全くだな。俺たち最強夫婦に対抗できるのなんてのは――冗談だ

よ」

「ははは。別に怒っちゃいないぞ」

「ま、まぁアレだ。お前ら、大人しくボコられろ。手加減はしとくからよ」

しかし二人はもっと考えるべきだったのだ。

葵冬馬がそんな馬鹿なことをするはずが無いと。彼が全く勝算の無い状況で動くはずが無いと、考えておくべきだったのだ。

「それじゃー見せてやるぜ。最強ってのが如何に脆いかってのをよ！」

第四十一話　上る太陽遥かに遠し（後書き）

あとがき

着眼点を変えるのだ。さすれば答えは自然と見えるであろう。
今現在、伏線やら何やらを把握できている読者はどれだけいるのだろう。

ＳのＨＰ見たけどタッグ面白そうだなー。予想が全部的中すればいいが……第六感を働かせろ！　推理力を漲らせろ！　いける！　きっと！
ところで皆さんどこで予約しましたか？　私は現在ソフマップとげっちゅ屋ですね。できれば扇子欲しさにメディオとタオル欲しさにゲマズでも予約したいですね。１月２８日が誕生日なので、１日ずれてるけど誕生日プレゼント的な意味で。
とりあえず今日は町田で配布会に行ってきます。

そういえば、包帯巻いて素性を隠すのって流行ってるんですかね。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7216m/

真剣で若人に恋しなさい！

2011年11月26日01時55分発行